大和川・今池遺跡

Ⅲ

第6地区・「古道」発掘調査報告書

1981・3

大和川・今池遺跡調査会

大和川・今池遺跡

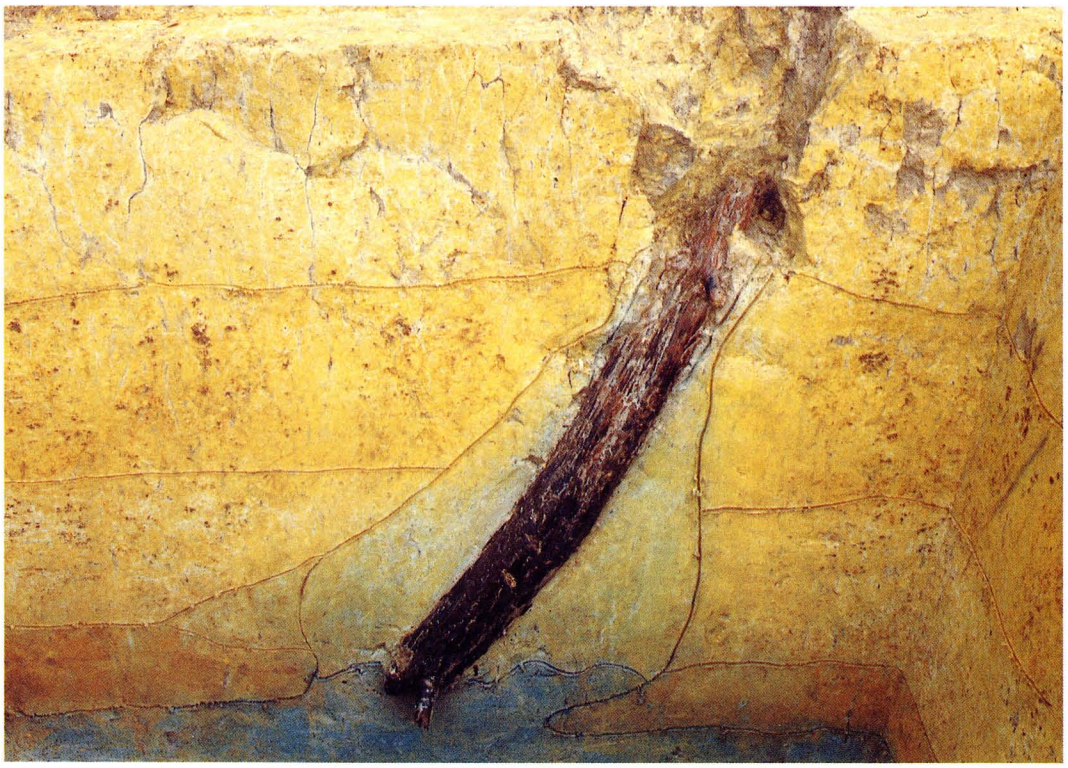
Ⅲ

第6地区・「古道」発掘調査報告書

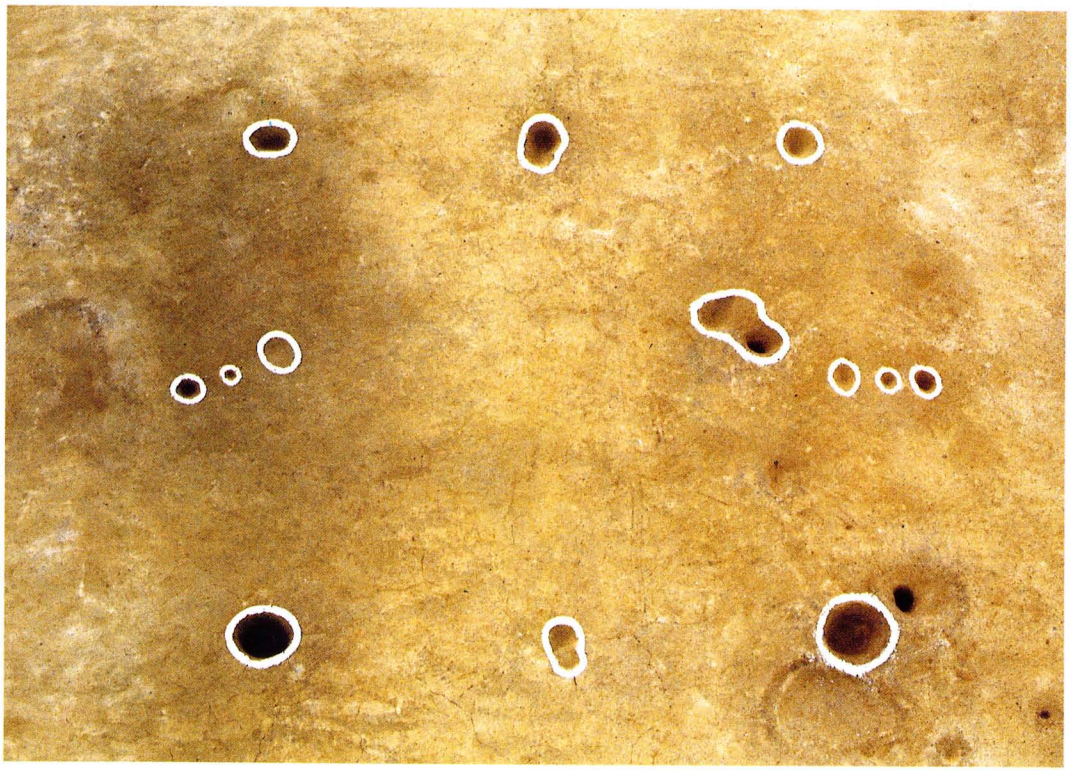
1981・3

大和川・今池遺跡調査会

難　波　大　道



第６地区　ＳＢ02柱痕



第6地区　ＳＢ03

序　　文

大和川・今池遺跡は、古墳時代の掘立柱建物群、水田址を中心とした弥生時代から中近世に至る復合遺跡である。洪積段丘中位と隣接する旧西除川の氾濫源によって形成された稜部に古代の人々は家を建て、低湿部では水田耕作を営んでいました。記紀にみられた「依網池」について調査研究が進められた結果、本遺跡の西側に宝永元年まで古代の姿を留めていました。新大和川の開鑿と同時に水田化が進みました。

本書で報告される内で注目される資料として棟持柱の掘立柱建物と井戸とのユニットが画一的に検出された事と日本書紀に記載された「古道跡」の検出と復元であります。これによって、古墳時代から奈良時代と長い期間にわたって歴史上重要な位置付けがなされていたことが明白となりました。

報告書としてⅠ・Ⅱと発掘調査報告書として成果を公表してきましたが本報告書は、昭和54年12月から昭和55年３月まで実施した発掘調査その後、昭和56年３月まで報告書作製作業を行ってきました。

本調査区域は、はからずも1000年以上も前に形成された重要な歴史的事実が20世紀の「下水処理場」というこれまた歴史的事実をきづき上げる為に、記録保存という処遇には心痛に耐えきれないものがあります。

本書には、発掘調査以降、長期間にわたって担当者と調査参加者には労苦をかけた。調査にあたっては、堺市教育委員会、松原市教育委員会、大阪府教育委員会、大阪府南部流域下水道事務所、堺市下水道部、松原市下水道部、共同企業体、地元各位には深厚なる感謝を申し上げます。

末筆になりましたが、梶山彦太郎、金子寿衛男、大沢正己の各氏から御玉稿をいただいた。ここに謝意を表わします。

昭和56年３月

大和川・今池遺跡調査会

理事長　高尾正二

例　　言

1．本書は、大和川下流西部流域下水道今池処理場建設に伴う大和川・今池遺跡・「難波大道・第6地区」発掘調査報告書である。

2．本調査は、大阪府（代表者　南部流域下水道事務所長）の委託を受けて大和川・今池遺跡調査会があたり、調査会事務局を堺市教育委員会社会教育部社会教育課文化財保護係内に置いた。

3．本調査は、大阪府教育委員会・石神　怡、堺市教育委員会・奥田　豊の指導の下に、堺市教育委員会技術職員・森村健一が担当し、事務関係は西野淳一、沢村定征が事にあたった。

4．本調査は、発掘調査を昭和54年12月1日～昭和55年3月31日まで、報告書作製昭和55年5月～昭和56年3月末日までの間に実施した。

5．本調査は、堺市教育委員会石田　修、北野俊明、十河稔郁、野田芳正、樋口吉文、大阪文化財センター小野久隆、関西大学網干善教、立命館大学日下雅義、同志社大学鈴木重治、松原市市史編さん室主査出水睦己氏の御教示を得た。又、大阪府南部流域下水道事務所、南部下水道、松原市下水道、小平　登自治会長、西野　正自治会長地元各位、飛鳥・奥村・鴻池・大末共同企業体から御協力に感謝する。

6．本書は、森村健一が編集・執筆を行った。尚、編集については、川口宏海、上野俊雄氏の手を煩わした。石製品については古園哲朗氏、貝については梶山彦太郎、金子寿衛男氏、鉄滓の科学分析については大澤正己氏より御玉稿をいただいた。

7．本調査会の発掘調査結果は次の通りである。

地区名	担当者	建設構造物	面積	調査期間
第1地区	森村健一	第一水処理棟	3,500㎡	昭和53年4月1日～6月14日
第2地区	森村健一	関電配電塔	400㎡	昭和53年5月20日～6月10日
第3地区	森村健一	汚泥消化タンク	4,500㎡	昭和53年12月1日～54年3月31日
第4地区	森村健一	管理棟・沈砂池	10,000㎡	昭和53年12月1日～54年3月31日
第5地区	大野　薫・足立俊彦	汚泥処理棟	3,850㎡	昭和54年6月25日～10月25日
第6地区	森村健一	ボイラー室ほか	4,000㎡	昭和54年12月1日～55年3月31日
試掘調査	森村健一	第5・6地区	700㎡	昭和53年12月1日～55年3月31日

8．土層・遺物等の色調は、農林省農林水産技術会議事務局『新版標準土色帖』（1967・日本色研事業）によった。基準高は、特に記さないかぎりO.P.＋10,000mに統一した。遺物には

Ｙ１－○○○（大和川・今池遺跡－○○○）、遺構は、ＳＫ（土壙）、ＳＥ（井戸）、ＳＢ（建物）、ＳＤ（溝）と略式記号で記した。又、本書の遺構実測図の方位は全て磁北を示す。

9．「難波大道」については、特に大阪市文化財協会、中尾芳治、大阪市教育委員会長山雅一氏から有益な御教示を受けた。

10．本調査に参加していただいた方々は次の通りである。

調査参加者（内・外業調査員、内・外調査補助員、内業作業員含む）

足立　寛　安藤　由里　青山　裕子　東　幸一　池田知栄子　井上　直子　井上　郁美
伊藤　洋子　伊藤　昇　乾　充子　岩本　静江　井上　憲生　池尻　祐典　市場　健次
石原　誠　池田　房子　石橋　恵子　石橋　保樹　石橋　航　池西　恵吾　石川　茂
植田　一正　上原ムツ子　上野　浩司　上野　久隆　宇那木隆司　上田　康孝　上野　俊雄
江木　渉　奥野　朋子　奥　斉　大谷　達彦　岡本　晶　尾崎　孝一　尾崎　光徳
大森　達夫　大岡　康之　川口　宏海　片木　伸栄　片山　孝子　笠井　隆　河合　隆次
勝田　幸枝　片山秀二郎　川田　邦則　河合　直文　加藤　芳樹　河合　洋子　菊川　晴之
木部　康夫　岸　詫男　木村　晃久　北尾真裕利　北田　邦夫　蔵城　生雄　小松　裕子
小谷　友二　古賀　彰　近藤　昌樹　小谷　利明　小谷　博司　榊原　香　佐藤　彰
佐村　紀子　佐野　都　佐々間順子　坂本　保友　坂上　覚　斉田　満　下川　昌一
島村　実位　重水利美子　下鶴　隆　紫田　久徳　島川　一郎　芝野　利江　島田　都
杉本　一浩　鈴木登記子　杉本　幸三　杉本　東　瀬崎　輝　積山　洋　高木場万里
高瀬　昭子　田中美世子　田村　直紀　滝本　律子　田中佐知子　田中　淳郎　田出　憲子
田中　晋作　恒岡　玲子　辻本記公子　津村　雅洋　鶴賀　清澄　東松　義郎　富田　和之
土佐　忠之　中井　宏志　西村　義男　野村　昌弘　西山　祐司　中村　泰子　西村　鉄男
中田久味子　中田　正之　中澤　明美　野々口　剛　原田　徹弥　原　須美子　長谷川　仁
長谷川豊蔵　平良　悦子　古園　哲郎　藤田　道子　藤田　順子　藤本さつき　伏木　克己
福永さつき　藤江　直美　前田　庄一　松本　浩　前村千鶴子　槙野　智美　松本　美穂
松川　京子　松本　徹　丸山知也子　松本　冨美　松下　元女　三好　唯義　宮西　佳彦
宮口真由美　三枝樹智栄　三木　満夫　水野　昌光　宮脇　敏子　都　悦子　向井さつき
森村　紀代　森本久美子　森　薫　森　康代　山本　薫　山本　良子　藪野　容子
安村　俊史　山口　俊樹　山中　竜一　山口　昌宏　矢野　正人　山口　里美　安田　洋子
山口　雅司　山口　淳　山口　卓也　山内　智里　吉野　実　横田　和美　横山　悟
吉田　聡　渡辺みどり　西岡　君雄　近岡　淳彦　前田　勉　上西　宏幸　増田　達彦

11．石製品の説明については、便宜上、左をＡ面に、右をＢ面とした。

12．第７地区は松原市教育委員会足立俊彦氏担当である。

本　文　目　次

巻頭原色写真図版　　第1～3図

序　文

例　言

第1章　遺跡の位置と環境……(森村)…… 1

第1節　地理的環境…… 1

第2節　歴史的環境…… 1

第2章　調査経過……12

第3章　第6地区・調査成果……(森村)……15

第1節　現状と調査方法……15

第2節　層序……16

第3節　溝……23

第4節　掘立柱建物……25

第5節　井戸……33

第6節　不明落ち込み……38

第7節　条里制畦畔……48

第8節　耕作用井戸……49

第9節　出土遺物……57

第10節　小結……81

第4章　「古道」調査成果……(森村)……82

第1節　現状と調査方法……82

第2節　道路……85

第3節　東・西側溝……85

第4節　出土遺物……87

第5章　「難波大道」の復元……(森村)…… 90

第6章　結　語……(森村)……104

第7章　研究編

第1節　大和川・今池遺跡の貝化石層……梶山彦太郎・金子寿衛男……106

第2節　大阪府所在土師遺跡27－1街区、大和川・今池遺跡、高師浜遺跡出土
鉄滓の調査……大澤正己……115

挿　図　目　次

第１図　上町台地周辺土地条件図……2
第２図　大和川・今池遺跡と周辺遺跡……3
第３図　四ツ池遺跡出土線刻土器・鹿……4
第４図　反正天皇陵古墳(上)、同古墳二重堀葺石(下)……5
第５図　大和川・今池遺跡第１地区掘立柱建物群……6
第６図　依網池復元図と古道(森村案1981)……9
第７図　大阪市阿麻美許曽神社、旧西除川河道……10
第８図　発掘調査風景……13
第９図　大和川・今池遺跡地区設定図……14
第10図　第６地区設定図……15
第11図　北壁面土層図……17～18
第12図　南壁面土層図……19～20
第13図　土層－８・９図……22
第14図　溝断面図……23
第15図　ＳＤ06遺構図……24
第16図　ＳＢ01遺構図……26
第17図　ＳＢ01各柱穴図……27
第18図　ＳＢ02遺構図……28
第19図　ＳＢ02　Ｐ２・３・４柱穴図……29
第20図　ＳＢ02柱穴１柱根検出図……29
第21図　ＳＢ03遺構図……30
第22図　ＳＢ03各柱穴図……31
第23図　ＳＢ03、Ｐ－８遺物出土状態図……32
第24図　ＳＢ03、Ｐ－８出土土器……32
第25図　ＳＥ08遺構図……33
第26図　ＳＥ09遺構図……34
第27図　ＳＥ17遺構図・遺物出土状態図……36
第28図　ＳＥ17出土土師器……37
第29図　ＳＫ15遺構図……38

第30図　ＳＫ30・31・32・33遺構図……39
第31図　ＳＫ38・40・41・56・57遺構図……41
第32図　ＳＫ42・43・44・45・46・47・65・66・76遺構図……43
第33図　ＳＫ50・53・54・73遺構図……44
第34図　ＳＫ88遺構図……45
第35図　条里制遺構土層図……48
第36図　ＳＥ01遺構図……49
第37図　ＳＥ01・02・03遺構図……50
第38図　ＳＥ02・06遺構図……51
第39図　ＳＥ06・07・08遺構図……52
第40図　ＳＥ07遺構図……53
第41図　ＳＥ11遺構図……54
第42図　ＳＥ11土層図……55
第43図　石製品……58
第44図　石製品……59
第45図　石製品……60
第46図　須恵器・杯身・蓋……66
第47図　須恵器・高杯・器台……67
第48図　須恵器・蛸壺・摺鉢……67
第49図　土師器・皿……68
第50図　土師器・甕……69
第51図　陶磁器……70
第52図　瓦器……71
第53図　瓦器……72
第54図　発掘調査風景……82
第55図　難波大道遺構図……83～84
第56図　難波大道東側溝断面図……86
第57図　難波大道西側溝道路断面図……87
第58図　石製品……88
第59図　難波大道東側溝内出土土器……89
第60図　大和・河内の古道「古代の日本」拠……91
第61図　大和川・今池遺跡内難波大道検出図……92

第62図　難波大道復元図…… 94
第63図　大和川・今池遺跡第２地区出土須恵器…… 95
第64図　難波大道と旧地形図(明治18年作製)…… 97
第65図　難波大道…… 98
第66図　難波大道…… 99
第67図　大和川・今池遺跡から難波宮へ……100
第68図　第７地区掘立柱建物遺構図・第８地区竪穴式住居……104
第69図　大和川・今池遺跡旧状図……106
第70図　大和川・今池の地質柱状図……107
第71図　大阪市長居地下鉄工事現場の上町層の柱状図……108
第72図　大阪市長居地下鉄工事現場の上町層の柱状図文献５による……109
第73図　大和川・今池の貝化石……114
第74図　土師遺跡27－１街区出土鉄滓の顕微鏡組織……143
第75図　土師遺跡27－１街区出土鉄滓の顕微鏡組織……144
第76図　大和川・今池遺跡出土鉄滓・小鉄塊の顕微鏡組織……145
第77図　大和川・今池遺跡出土小鉄塊の顕微鏡組織……146
第78図　大和川・今池遺跡出土鉄塊及び高師浜遺跡出土の顕微鏡組織……147

表　目　次

表－１　供試材の履歴及び調査項目……118
表－２　鉄滓の化学分析結果……119～120
表－３　発光分光、分析結果……119～120
表－４　小鉄塊の断面硬度測定結果……126
表－５　土師遺跡27－１街区出土鍛冶椀形滓と岡山県出土の鉄滓との成分比較……129
表－６　椀形滓出土土地名表……136～137
表－７　鉄塊の出土例……138

付　図　目　次

付図－１　第６地区北西部遺構配置図……
付図－２　第６地区西南部遺構全体図……
付図－３　第６地区北東部遺構図……
付図－４　大和川・今池遺跡地区設定基準図……

図　版　目　次

PL. 1　大和川・今池遺跡とその周辺垂直写真

PL. 2　第6地区垂直写真

PL. 3　南側垂直写真

PL. 4　北側垂直写真

PL. 5　(上)条里制遺構、畦畔断面南壁　(下)同西壁面

PL. 6　(上)ＳＤ04　(下)ＳＤ06

PL. 7　(上)ＳＤ05　(中下)ＳＤ05断面

PL. 8　(上)ＳＢ01西から　(中)Ｐ－２、Ｐ－３　(大)Ｐ－４、Ｐ－５

PL. 9　(上)ＳＢ01.2、ＳＥ17　(下)ＳＢ02西から

PL. 10　(上)左ＳＢ02・Ｐ－２、右Ｐ－２　(中)Ｐ－４、Ｐ－１　(下)Ｐ－１柱痕検出状態

PL. 11　(上)ＳＢ03と付近　(下)ＳＢ03

PL. 12　(上)ＳＢ03各柱穴　(下)Ｐ－８柱穴内遺物出土状態

PL. 13　(上)ＳＥ08上面　(下)ＳＥ08断面

PL. 14　(上)ＳＥ09上面　(下)ＳＥ09断面

PL. 15　(上)ＳＥ17上面　(下)ＳＥ17断面

PL. 16　(上)ＳＫ53、ＳＥ08・09　(下)ＳＫ73

PL. 17　(上)ＳＫ38・39　(下)ＳＫ40・41

PL. 18　(上)ＳＥ10・11・12・13・14　(下)ＳＥ13・14

PL. 19　(上)ＳＥ11上面写真　(下)ＳＥ11井戸枠

PL. 20　(上)ＳＥ11井戸枠　(下)ＳＥ11井戸枠側板

PL. 21　(上)ＳＥ06立割　(下)ＳＥ06南側・地質

PL. 22　石器遺物出土状態

PL. 23　難波大道検出状態(北から)

PL. 24　(上)難波大道西側溝　(下)同東側溝

PL. 25　(上)難波大道東側溝、第3セクション　(下)同第12セクション

PL. 26　(上)難波大道西側溝南側断面　(下)同北側断面

PL. 27　(上)難波大道東側溝出土須恵器　(下)同東側溝付近出土石器

PL. 28　1・2－ＳＥ17、3－難波大道東側溝、4－ＳＢ03・Ｐ－８、5－陶磁器・10、6・7－土師器4・5

PL. 29　須恵器

PL. 30　瓦器

PL. 31　石製品

PL. 32　石製品

第1章　遺跡の位置と環境

大和川・今池遺跡は、行政区画上で堺市常盤町と松原市天美西町7丁目の両市にまたがる。

約20万㎡に広がる大遺跡であることは周知のとおりである。新大和川をさかのぼること、数kmの水田耕作地と化して雑草の繁茂するところとなった。周辺は、大阪市のドーナツ現象のあおりを受けて宅地化が顕著にみられ、古代の旧地形や記録にみる「依網池」、大和川・今池遺跡を脳裏に写し出すことは不可能となりつつある怒濤的な開発が進展している。

第1節　地理的環境

上町台地と羽曳野丘陵にはさまれた信太山丘陵より北方にのびた洪積段丘中位と旧西除川の氾濫源及びその自然堤防上に展開された古墳時代を主体とした遺跡である。

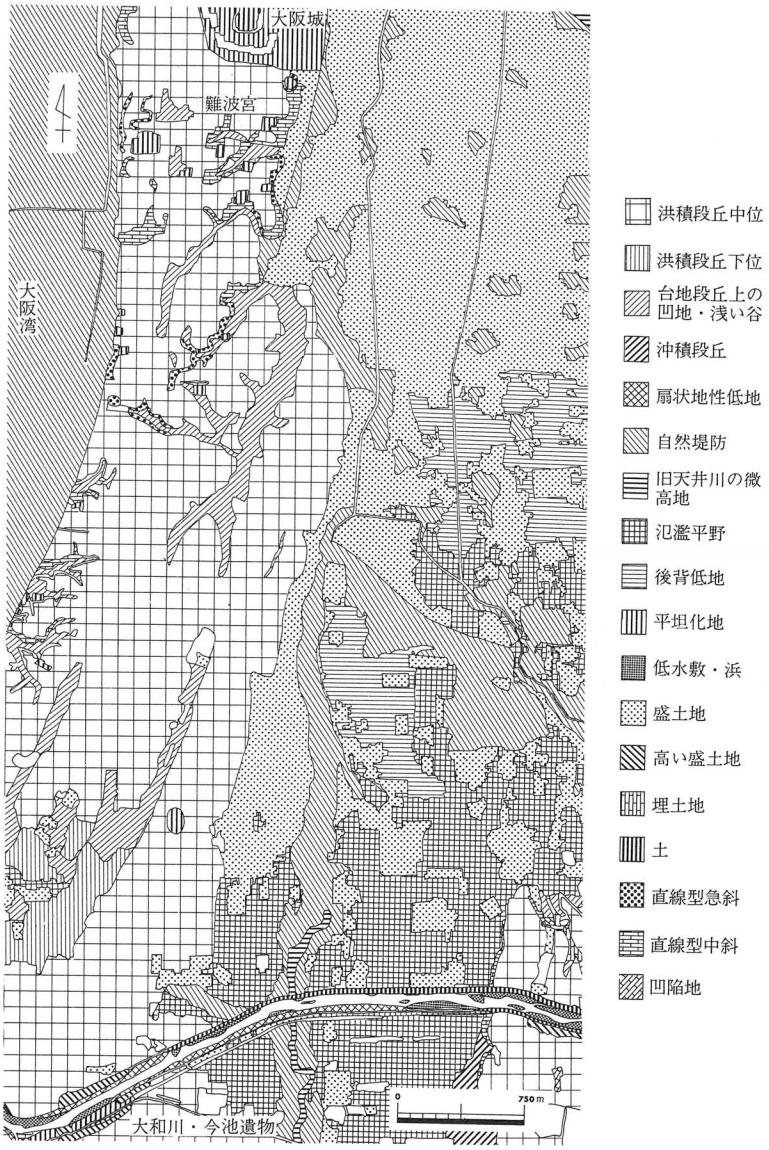
本遺跡は、新大和川左岸の標高、O.P.＝＋10m前後に立地し一見平坦化している。周辺には洪積段丘上に特有的な事象として数多くの溜池が存在する地質が広がる。狭山町のダム状に堰止められた狭山池より流れ出た東除川に対応する河川で、西除川と呼ばれている河川がある。松原市内を境に谷底平野が消滅し、下流域での氾濫源に広がり、蛇行が目立つと同時に小河川の支流を形成していた。その一部は、本遺跡の洪積段丘東北縁辺沿いと北流の2支流が土地条件図や考古学的な調査によって判明している。その小支流によって構成された微高地は、河川、自然堤防として遺存して遺構の撰択地となった経偉を有する。

一方、平滑にみえる洪積段丘上にも北流する小河川が数本知られ、その一つが光竜寺川であり段丘上の窪地を利用、開掘された「依網池」に流れ込んでいた。それに至る小谷間をダム状に堰止められた溜池が地図上に知られ条里施行後の坪単位に設定された溜池とは別途な形態を示している。又、洪積段丘上の小河川には、隣接して古代遺跡の存在が最近、認知されつつある。従来、洪積段丘上の後世における著しい削平によって遺跡の希薄していると判断しがちであるが前述の地理的環境を重視して考古学的な再検討が必要視される。

第2節　歴史的環境

旧石器時代

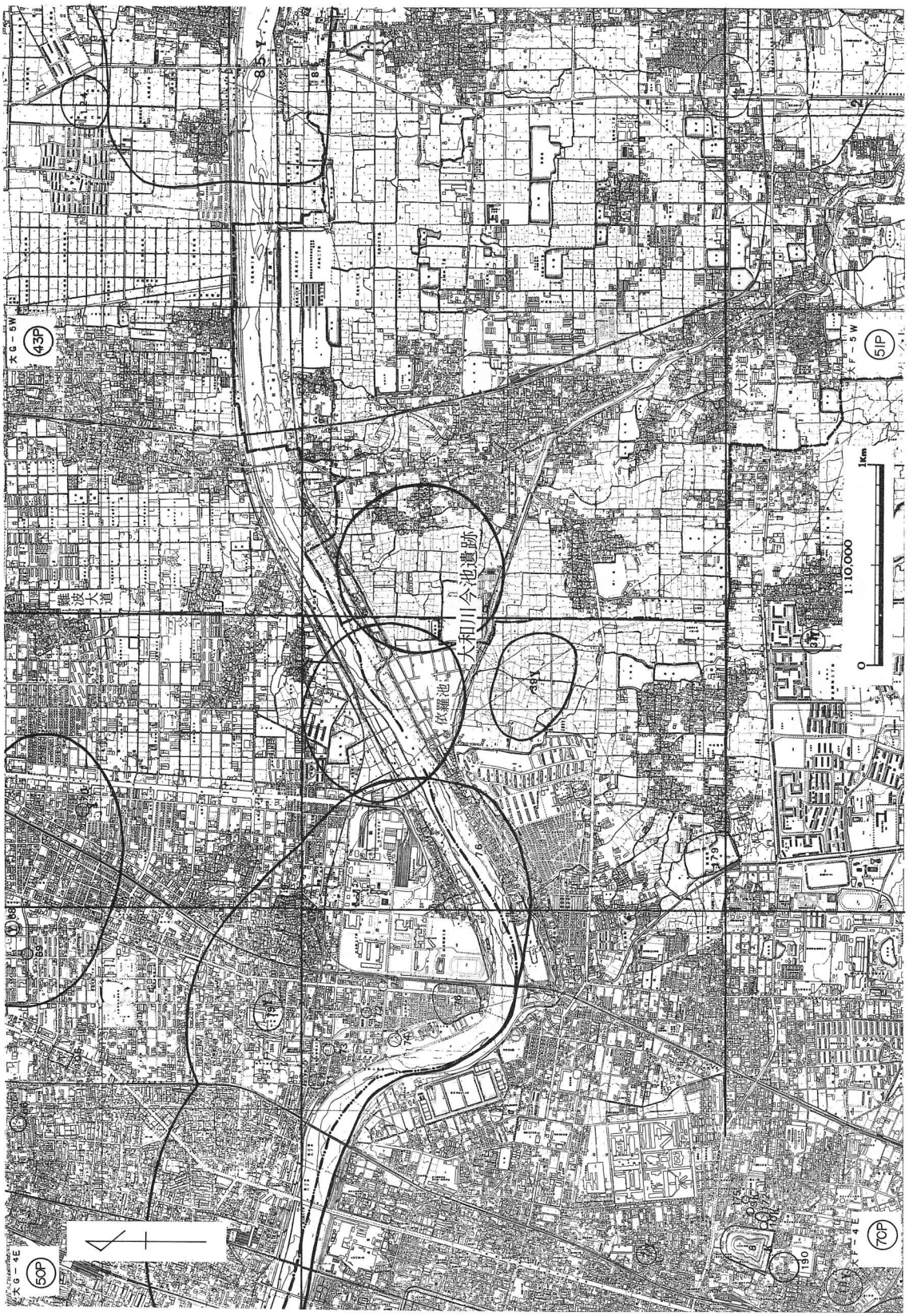
本遺跡より西側では、堺市百舌鳥本町出土の有舌尖頭器と思われるサヌカイト製品と向井神神跡遺跡のSE07より検出されたチョッピング・トゥールのチャート製[註－1]が知られる。後者のそ[註－2]



第1図　上町台地周辺土地条件図

れは、両端にプラットホームを有し刃部に刃つぶれの目立った優品である。一方、ナイフ形石器を検出した大阪市長原遺跡は、狭山池より端を発した東除川によって形成された微高地上に立地した遺跡で生駒山麓等以外のO.P.＝＋10mの台地上にも旧石器時代人が生活しはじめていた証である。尚、大和川・今池遺跡でも第6地区（本報告書）において「国府型ナイフ」に入れるべき石器を発掘している。

註－3



第2図　大和川・今池遺跡と周辺遺跡

第３図　四ツ池遺跡出土線刻土器・鹿

縄文時代

旧石器、縄文時代は、後世の流入出が過敏なためにその遺跡分布は希薄で遺構と伴出する例は少くない。しかし、明らかに生活空間が前代よりも他地域にも拡大し標高O.P.＝＋4～5.0mにも降下しているが微高地上の撰地には変容はない。これは、海岸線の後退と相関関係にあるものである。南では、堺市南榎町遺跡、浜寺石津遺跡の河川内[註－4]からの出土、福田２式に類似した土器を出した四ツ池遺跡、さらには、石津川中流域右岸に広がる鈴の宮遺跡では、遺構とデポ[註－5]関係を存する土器が見られた。これらの遺物は、縄文時代後晩期に位置付けられる。又、大阪市岸ノ里遺跡、長原遺跡でも前期～晩期の出土を見た。

弥生時代

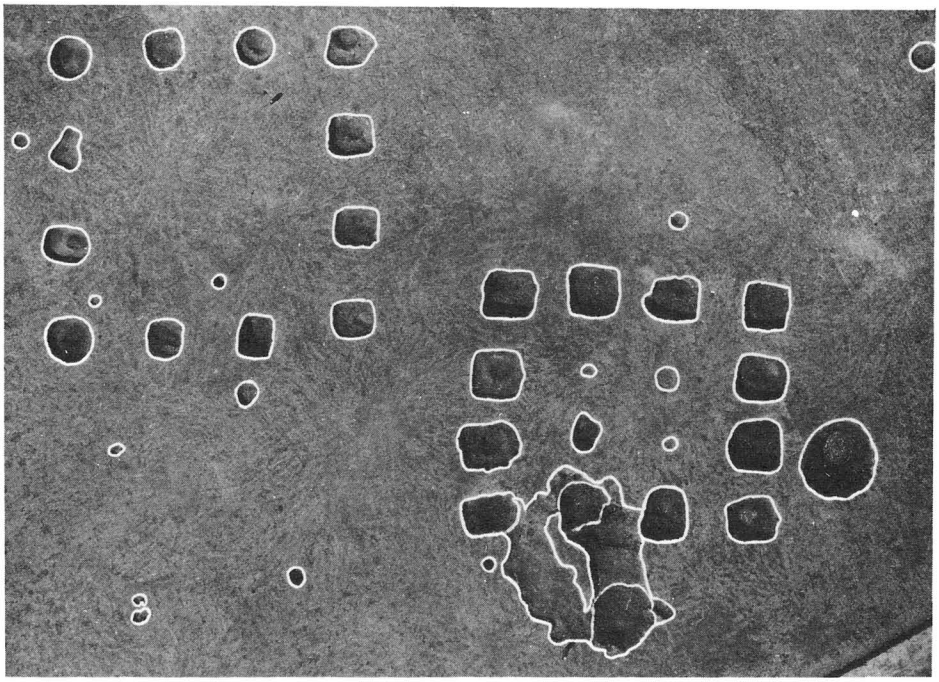
本遺跡では、第１～８地区において弥生式土器壺片、石鏃を検出されているが明白な遺構は検出されていないのは後世の削平が要因している。又、遺構の存在は、土地条件から考慮しても旧西除川に遍在していよう。西・南では田出井遺跡、三国ケ丘遺跡、北花田遺跡、南花田遺跡が上げられ、内でも土壙と多数の土器片を発掘した北花田遺跡は大和川・今池遺跡とも密接な関係にある。やや離れるが浜寺舟尾町四ツ池遺跡は、弥生時代を中心とした大遺跡であることは周知されている所である。この遺跡は、過去10数年来の本格的発掘調査によって２単位集団ともいうべく村が縄文時代に萌芽し、浜寺中学校の位置する三光丘陵をメインとした大集落と、５ケ所の小集落、いわゆる本村と分村という形態が成立していた。墓城も方形周溝墓を主流として４ブロックに区別、選地されている。前述の各集落と隣接しているもののエリア的空間や大溝によって両者を隔絶している。

西の遠里小野遺跡[註－6]は、上町台地から東に張り出した微高地に立地し前期の土器、石製品を多

第4図　反正天皇陵古墳(上)
同古墳二重堀葺石(下)

量に出土した。海岸線に近接する優位から蛸壺形土器は、おのずと漁業を中心とした生活であったと推察される。大阪市住吉遺跡は、数次の調査が試行されているが明瞭さに欠ける遺跡である。

北側では、河内湾にのぞんだ羽曳野丘陵又は、生駒山麓からの派生した低丘陵に乗った瓜破遺跡、長原遺跡、亀井遺跡が近年の発掘調査によって歴史的な組み立てが可能となってきた。[註—7] 西除川をさかのぼると弥生時代の石鏃、中・後期の土器に共伴して1×2間の高床式倉庫を確認した河合遺跡がある。北花田遺跡の水系となっていた光竜寺川の上流にいくと南花田遺跡は、弥生時代中期と



第5図　大和川・今池遺跡第1地区掘立柱建物群

判明している。特に周辺の洪積段丘中位に点在する遺跡は、河川に隣接して立地するという共通点を有した。

古墳時代

松原市の上田町遺跡は、上田式の標式にもなった古式土師器を出土した遺跡として注目をあつめた。樋野ケ池窯跡[註—8]は、陶邑Ⅱ型第2～4段階に搬入される須恵器窯であるが窯体は確認されていない。この遺跡[註—9]の生産品は、大和川・今池遺跡にまで需要されていたことが数次にわたる発掘調査によって確証付けている。その窯体内からはき出された須恵器は、陶邑の供給品の同時期のそれに比してやや厚手で、端部はシャープさに欠如、胎土中に含有する黒雲母がガラス状に多く憤出、色調もやや黒色系に類するという特徴がある。北流していた狭間川は、新堀町今池遺跡において5世紀後半～6世紀中葉にかけて水霊祭祀跡と考えられる遺構を検出した。この遺跡[註—10]は、この他に古市古墳群と百舌鳥古墳群を結んだであろう生活道路、後の「大津道」に発展した道路に隣接することにも特筆される。

周辺の墳墓にしては、百舌鳥古墳群中の北端に位置する反正陵古墳と天王古墳、鈴山古墳の2陪塚がもっとも近接している。反正陵古墳は、1981年の発掘調査によって新たに幅12mの二重掘が東側を中心に掘削されていたことが判明し、葺石と空掘に埋土された堆積状況が裏付けら

れた。[註—11]

東側では、旧大和川の氾濫によって長い歴史からさめた長原古墳群は顕名である。10数基の方墳と前方後円墳の2基は、微高地上に古墳群ともいうべきものを[註—12]構成している。その成立時期を5世紀後半から6世紀前半と2大古墳群に脈絡的性格を寄与している。大和川・今池遺跡は、丁度、2大古墳群の間隙に存在するように今後、洪積段丘上に繰り広げられたであろう古墳時代のより多くの生活遺跡が検出されるものと期待する。

歴史時代

中近世期の新田開発に伴って洪積段丘上の削平が目立つこの周辺では、さほど遺跡数は多くなく堺市新金岡町遺跡、北三国ケ丘遺跡、北花田遺跡等である。数棟の掘立柱建物と溝・井戸・土壙等の遺構に[註—13]加え数多くの中世遺物をデポしていた。反正陵古墳の陪塚として知られている鈴山古墳北側一帯に広がる瓦器を主体とした13世紀代の遺構がみられた。特記すべく遺物には、反正陵古墳出土の円筒埴輪と同一技法から成るB種ヨコハケが観察された。南の北花田遺跡からは、13～14世紀の瓦器片や土壙を見ているが遺跡の全容を知るに至っていない。松原市栄光寺跡と伝える地点は、1町方画状に微高地を形成し鎌倉時代の軒丸瓦、平瓦等が検出した。

本遺跡の南、約2kmには、岸俊男が推定した長尾街道とした大津道が縦断している。現に、幅10m前後の道路として遺存すると[註—14]同時に、松原市域内では推定道路に沿って「大道」と小字名を伝える田畑がつらなっている。又、同氏は、難波宮より大津道に至る官道、「難波大道」を推測していたが1981年の発掘調査によって、幅18mの道路と復元出来た。詳細は、後節で述べることにしたい。日本書紀に[註—15]記述されていた事象が考古学的に実証された。

本遺跡の西側には、大依羅神社に所蔵された「大和川開鑿前地方図」、「依羅池古図」さらには、数ケ所の試掘調査によって土層観察された結果、宝永元年(1704)に開鑿された新大和川を挟むような形で堺市常盤町から大阪市住吉区苅田町、我孫子町にまたがる洪積段丘中位の窪地を利用した人工的な溜池である「依網池」が認定された。その成立年代は、諸条件を推察すると場合によって古墳時代に朔る蓋然性をもつ。

本遺跡にも発掘前に遺存していた条里制遺構は、直下の下層部で畦畔とそれに伴う溝を[註—16]10数ケ所で把握した。ただし、下層の畦畔は、奈良時代以降に成立期を求める方が妥当性があろう。摂・河・泉の国境、現堺・松原市の市境線が前述の「難波大道」検出のラインに符合している。それに付加して、最近の松原市における「地籍調査」の成果によると現・市境が条里制の境として発表されている。これは、従来の『堺市史』の由井説、武藤直説を否定的とするもので今後の調査研究に期待したい。

本遺跡の周辺に関知される依羅氏に関する文献上の記述を列挙すると次のようになる。

史料１．『日本書記』仁徳天皇42年９月条

庚子朔、依羅屯倉阿弭古、捕異鳥、献於天皇日、臣毎張網捕鳥、未曽得是鳥之類、故奇而献之。天皇召酒君、示鳥日、是何鳥矣。酒君対言、比鳥之類、多在百済。得馴而能従人。亦捷飛之掠諸鳥。百済俗号比鳥日倶知、是今時鷹也乃授酒君令養馴。未幾時而得馴。酒君則以韋繞箸其足、以小鈴箸其尾、居腕上、献干天皇。是日、幸百舌鳥野而遊猟。時雌雉多起。乃放鷹令捕。忽獲十雉。

史料２．『日本書紀』皇極天皇元年（642）５月条

２未（壬日）、於河内国依羅屯倉前、召翹岐等、令観射獵。

史料３．『西琳寺縁起』養老６年（722）３月23日

一、僧宝等事

天平十五年帳之

僧沙弥並廿二口僧十六僧　見在口之中二僧借住
四不知去三死

僧行會　年五十四　摂津国住吉群大国里戸主津云々
臈卅三　戊申年四月廿八日飛鳥寺受戒受公験

（中略）

僧知蔵　年五十一　河内国丹比郡余戸郷□□戸主依（羅）□白波男廣鳥
臈十九　養老六年三月廿三日薬師寺受戒受公験

（後略）

右四僧不知去

史料４．『続日本紀』神護景雲元年（767）７月条

辛未(24日)、河内国志紀郡人正六位上山川造魚足等九人、賜姓山川連。同国同郡人従六位上依羅造五百世麻呂、丹比郡人従六位下依羅造里上等十一人、依羅連。

史料５．『新撰姓氏録』引仁６年（815）７月

河内国神別　起菅生朝臣。尽等禰直。六十三氏。

天神

（中略）

物部依羅連

神饒速日命之後也

矢田部首

同神六世孫伊香我色雄命之後也。

（中略）

襷多治比宿祢

火明命十一世孫殿諸足尼命之後也。男兄男庶。其心如女。故賜襷為御膳部。次第男庶。其心勇健。其力足制十千軍衆。故賜靱号四十千健彦。因負姓靱負。

丹比連

火明命之後也。

史料６．『新撰姓氏録』弘仁６年（815）７月

河内国諸蕃　起高宿禰。尽伏丸。五十五氏。

漢

（中略）

三宅史

山田宿禰同祖。忠意之後也。

（中略）

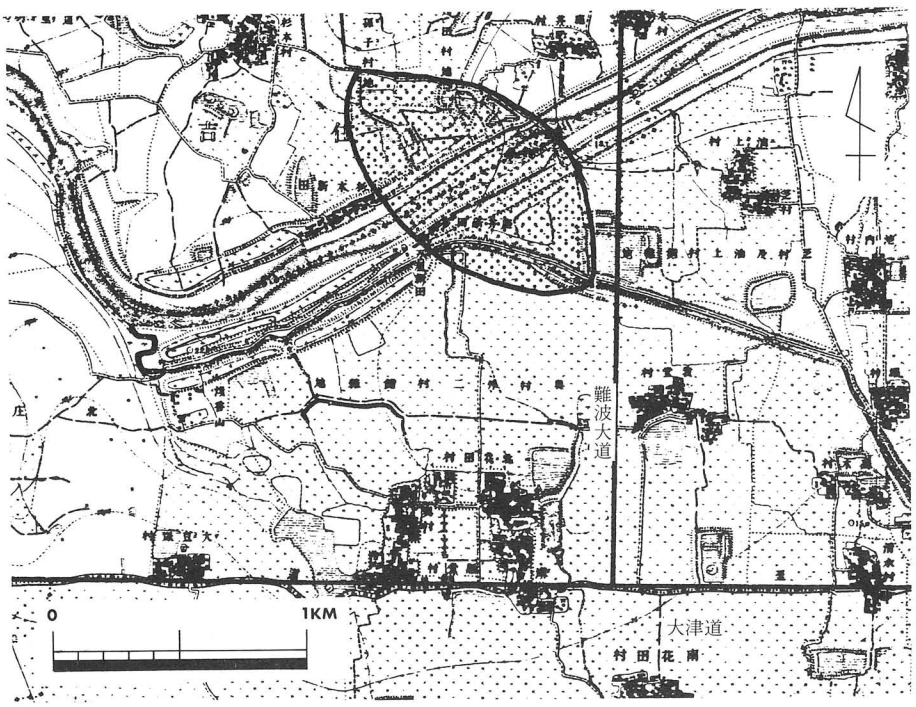
依羅連

出自百済国人素禰志夜麻美乃君也。

山河連

依羅連同祖。素禰夜麻美乃君之後也。

史料からみて依羅地方に屯倉が設置されて依羅氏が政治的、社会的管理下におかれていたと判続される。武藤氏も『堺市史』に図化している表現からは「依羅宿弥氏」がその地域に官職を保持していたこととなる。



第６図　依網池復元図と古道（森村案1981）

第７図　大阪市阿麻美許曽神社、旧西除川河道

古代氏族と密接な相互関係を持ち得たであろう式内社として本遺跡の東に鎮座する阿麻美許曽神社、西地方の大依羅神社がある。後者の神社は、前述の依網池に隣接し『摂津名所図会』にも描写されている。

〔式内社〕

式内神社は『延喜式』巻九　神祇に以下のように記されている。

神名上　宮中　宮中
五畿内　東海道

（中略）

畿内神六百五十八座　大二百卅一座
小四百廿七座

（中略）

河内国一百十三座

大廿三座　並月次新嘗。就中、
八座預相嘗

小九十座

（中略）

丹比郡十一座　大三座
小八座

丹比神社　鍬靱
狭山提神社　大。月次新嘗。
酒屋神社　鍬靱
田坐神社
阿麻美許曽神社　鍬靱
大津神社三座　鍬靱
菅生神社　大。月次新嘗
櫟本神社　鍬靱

註—1　『堺市史』第1巻　堺市史編さん委員会

註—2　堺市教育委員会「向井神社跡遺跡発掘調査報告書」—反正陵古墳二重堀—1981.3

註—3　『大阪府史』第1巻　大阪府史編集専門委員会　1977.3

註—4　中西弘光「堺市南榎町の縄文遺跡」『古代学研究』1号

註—5　堺市教育委員会　1980年発掘調査

註—6　『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12輯　大阪府

註—7　永島暉臣慎他『瓜破北遺跡』共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書、(財)大阪市文化財協会　1980.3

註—8　原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高等学校研究紀要』1968

註—9　松原市教育委員会『三宅遺跡』松原市埋蔵文化財発掘調査報告　第1輯　1980.3

註—10　今池遺跡調査会・堺市教育委員会『今池遺跡』—学校予定地内発掘調査報告書—　1976.3

註—11　註—2に同じ

註—12　大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター『長原』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1978.5

註—13　堺市教育委員会『新金岡町所在遺跡発掘調査抄報』　1978.3

註—14　岸　俊男「古道の歴史」『古代の日本』5　近畿　1970.1

註—15　大和川・今池遺跡調査会『難波大道』—大和川・今池遺跡—発掘調査資料　その6　1980.11

註—16　森村健一『記紀にみる「依羅池」について』「大和川・今池遺跡—第1地区　発掘調査報告—」1979.3　大和川・今池遺跡調査会

第2章　調査経過

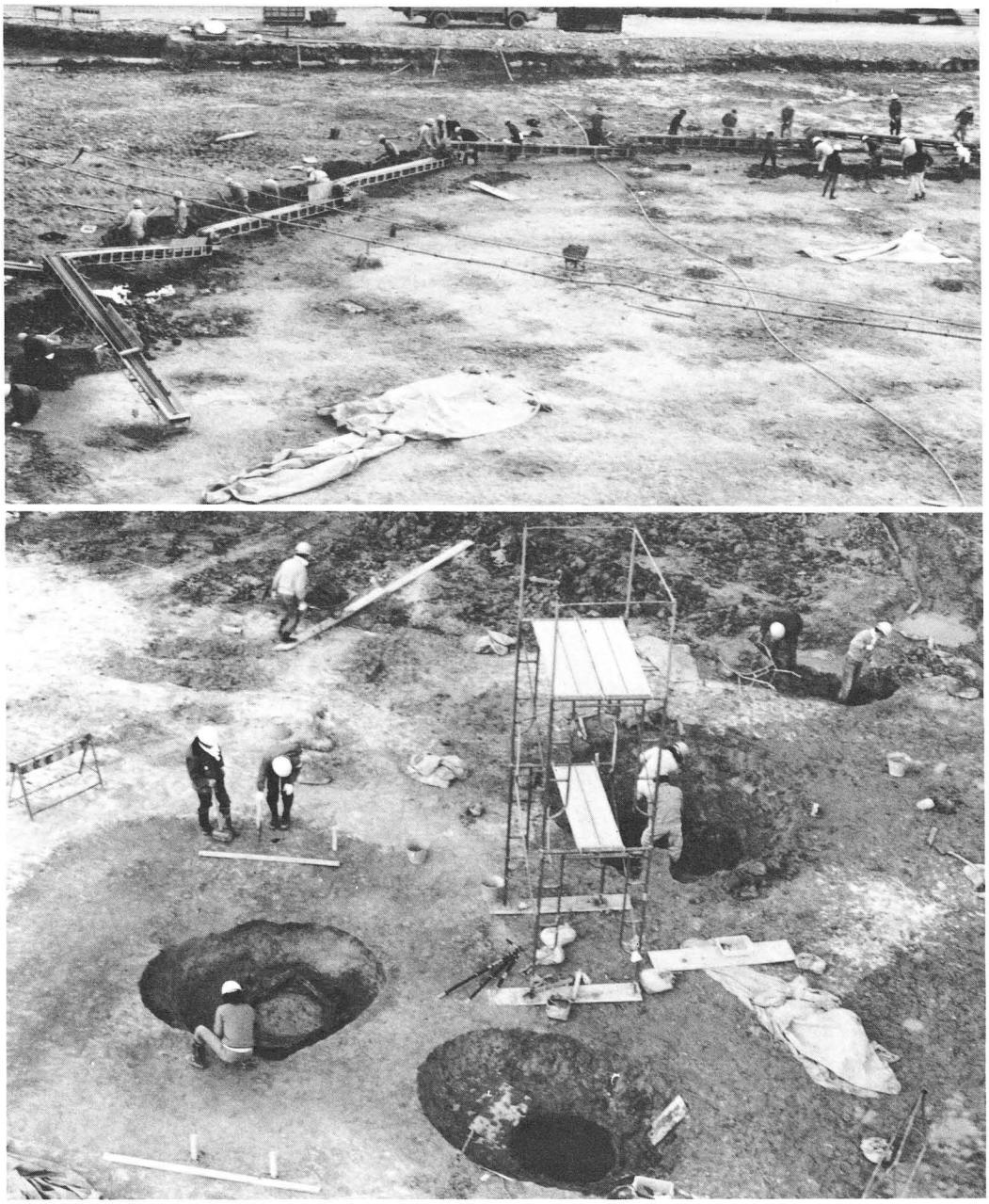
新大和川と新西除川に挟まれた一帯に周辺5市町の下水処理を実施すべく「大和川下流西部流域下水道今池処理場」建設計画が上がった。本来、当地は、堺市・大阪府の両者でも埋蔵文化財包蔵地としてはロットされていなかったが堺市教育委員会は「堺市宅地開発指導要綱」に基づき計3本の試掘溝を入れた。その結果、黄褐色粘質土（地山）上に約20～30cmの遺物包含層が検出され古墳時代を中心とした大集落が存在する、古市・百舌鳥両古墳群への歴史的な経緯を把握する必要が考えられた。事業者・堺市教育委員会・大阪府教育委員会と協議を重ねたが下水処理場の稀少面積にかかる代替地の不可、マスタープラン等の工事設計変更に支障をきたすとした判断から発掘調査を実施した。これに伴って、調査主体は、堺市・松原市・大阪府の3教育委員会からなる合同調査会体制の「大和川・今池遺跡調査会」が行い、調査会事務局を堺市教育委員会・社会教育課・文化財保護係内に設置した。

現在まで第1～8地区について発掘調査、内業を行い調査成果として「発掘調査資料」、「発掘調査報告書」という調査成果を世に送り出してきた。

本書にかかる第6地区は、各施設を連結すべき管廊とボイラ室等の工事計画が昭和54年下半期に提示され内業を含む報告書作製については次年度という計画で発掘調査のみ昭和54年12月より昭和55年3月末日まで施工した。発掘調査費用は、大阪府下水道部が全額負担した。

発掘調査地点の地質の軟弱さと多雨という天候異変によって本来計画していた発掘調査方法は昭和55年2月初旬において変更を余儀なくされた。調査員・調査補助員の労苦のおかげで難波大道とされる溝、古墳時代の掘立柱建物、井戸、土壙等の多数の遺構を検出したが工事期間が押し迫っている点を考慮して当地区については記録保存にとどめた。

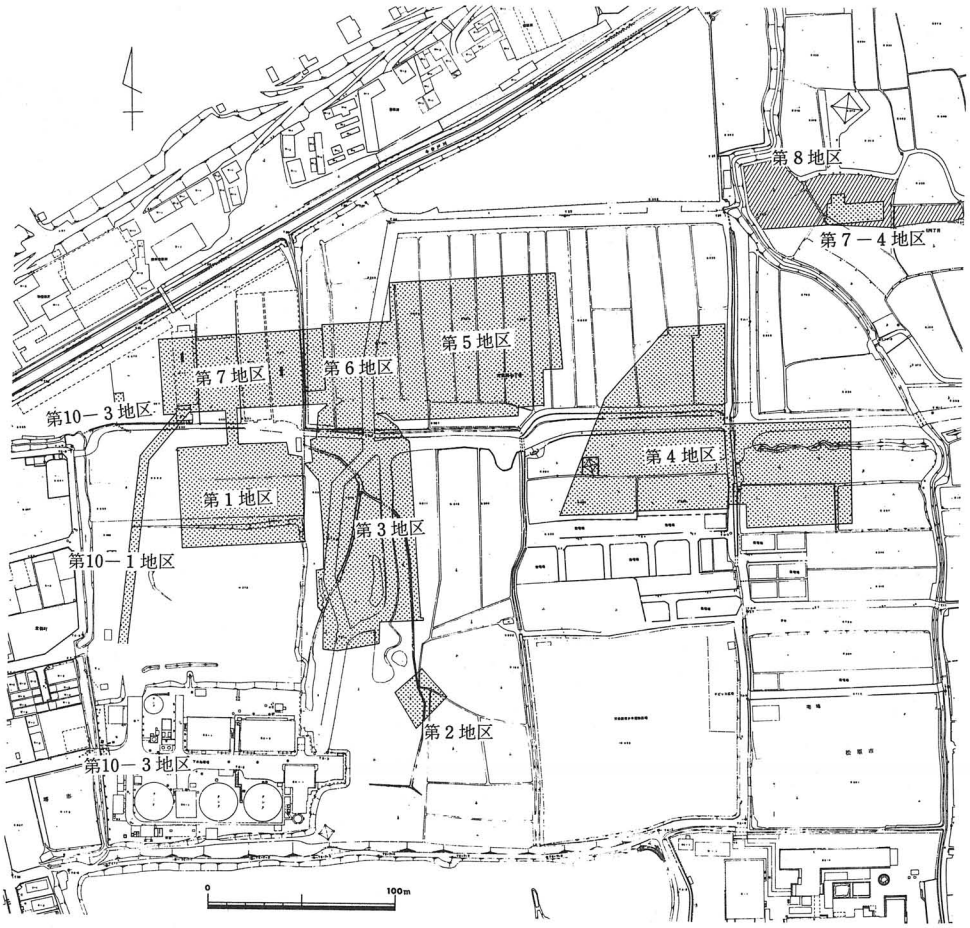
報告書作業にかかる内業を昭和55年6月から昭和56年3月末日まで実施し、それに必要な費用（調査費）は大阪府下水道部が全額負担した。内業整理と報告書刊行は、次の手順で行った。①同年3月末日まで行った発掘調査で作製した図面の補完作業。②作業整理の専門計画、整理方法について打合せ。③遺構内出土遺物のピックアップ、包含層出土遺物の内、実測可能な遺物を抽出する。（③の作業では、従来どおり他遺跡ではピックアップしない細片まで報告書作製用にしたのは、本遺跡の全体的な遺物の保存状況、数量に左右されたからである。）④実測には、調査員1人に対して調査補助員5～7人の割合で考古学的知識を修得しながら作業を進めたが考古学専攻学生が少ない事から生じるレベルダウンは否めない。⑤接合・実測を経た遺物は石膏入れ作業に移った。この場合、第1地区調査当時から従事していた近隣の主婦を中心



第8図　発掘調査風景

としたチームに依存した。ローリングないし剝離した土器の接合には、接合面を全てセメダインとシンナー等で熔材を作り土器断面に侵透させた上で常用セメダイン濃度での接合を行った。又、石膏入れの場合も物理的、間隙的接合を十分説明し両者の接合には注意をはらった。

後、石膏部の色ぬりには、出来るだけ土器と同色に近づけたのは写真撮影時のハレーションを防止するためである。色ぬりには、土色帖の採用が最適であった。⑥トレースは、元来トレーシングペーパーを使用していたがロットリングの線引に差異が生じていることからマイラー原紙に変えた。この採用は、レイアウト時の防湿面にも役立つ。⑦最終段階のレイアウトは、遺構には、⅓～¼、遺物は½として作製統一した。スケール、方位についても仕上がり段階のサイズを考慮して作製した。最後の問題として、工事地区の調査から全面調査へと変更したのは第6地区から実施した。又、考古学専攻学生の採用不足から調査体制の不備へとつながり今後、発掘調査への提言となった。



第9図　大和川・今池遺跡地区設定図

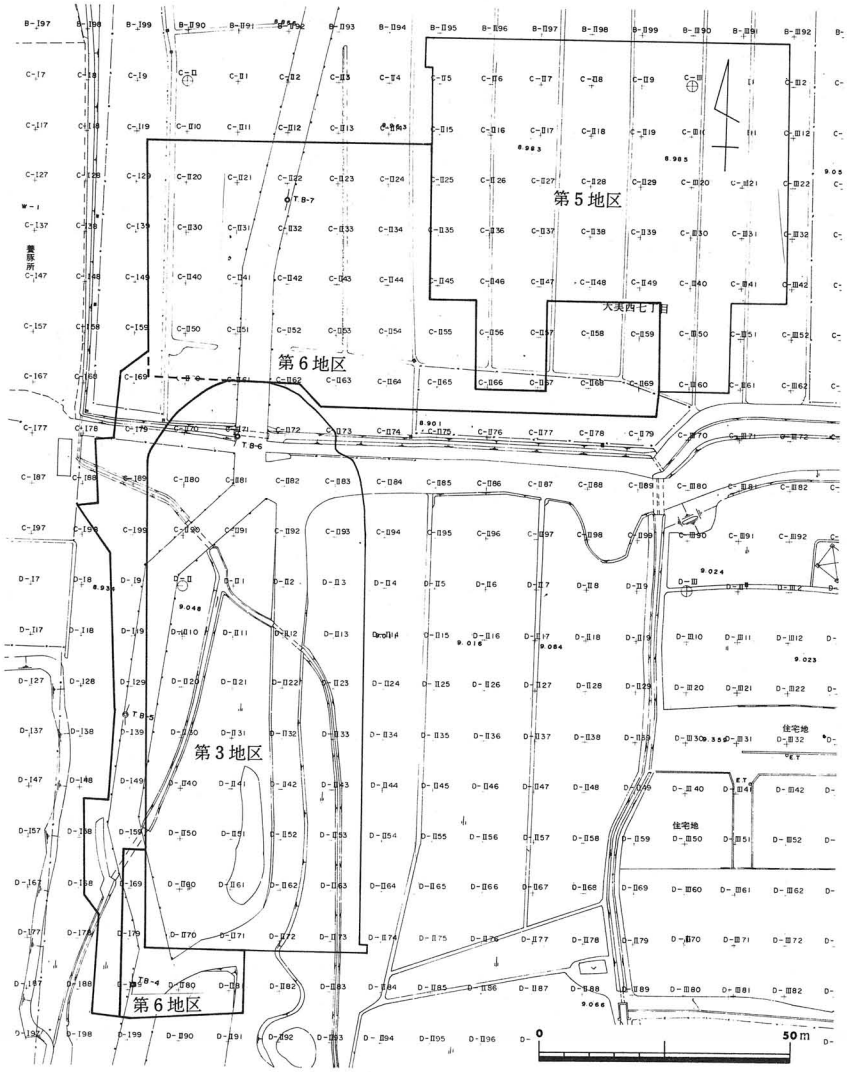
（第9地区は、今井戸川と大和川との合流地区）

第３章　第６地区・調査成果

第１節　現状と調査方法

現　状

中近世以降の水田耕作地化して古墳時代当時の旧地形は、現在知るよしもない。下水処理場として用地買収後、数年を経過しているため雑草の繁茂するところとなったのと既設の堺市下



第10図　第６地区設定図

水処理に搬入すべく設けられたバキューム車道が西側調査区に約1～1.8m前後の盛土をしていた。それに加えて同地区を東西に横断した工事用排水溝によって地山下約0.3～1.0m近く掘削・破壊されていた。同地区発掘開始の当時は、周辺の工事が進行していたのと周辺の土盛りに起因して湿地状となる。

調査方法

「大和川・今池遺跡」の全容を把握出来ていない現状では、下水処理場内の発掘調査対象地内にのみ100m方眼のメッシュ杭を基準として発掘調査地区内に10×10mを打つ。北からA～F、西からⅠ～Ⅴ、同じく西から東へ1～99と基準杭を呼称した。さらに、文化財調査済の区域を将来工作物建設後においても遺跡とも復元可能なように「堺市基準三角点標定点網図」(基準点7）昭和47年編集地図に重復可能としておいた。

さて、掘削方法に移ると耕作土と床土は、バックホー（ユンボ）のツメを除去して掘削したのは第5地区や試掘調査のデータから中近世の重要な遺構が存在しない事を得ているからである。機械掘削はもちろんのこと人力掘削についても埋蔵文化財調査の未経験者が多い事を考慮して調査員及び調査補助員を対象として掘削方法、検出状況について十分、勉強会を行って発掘調査に臨んだ。

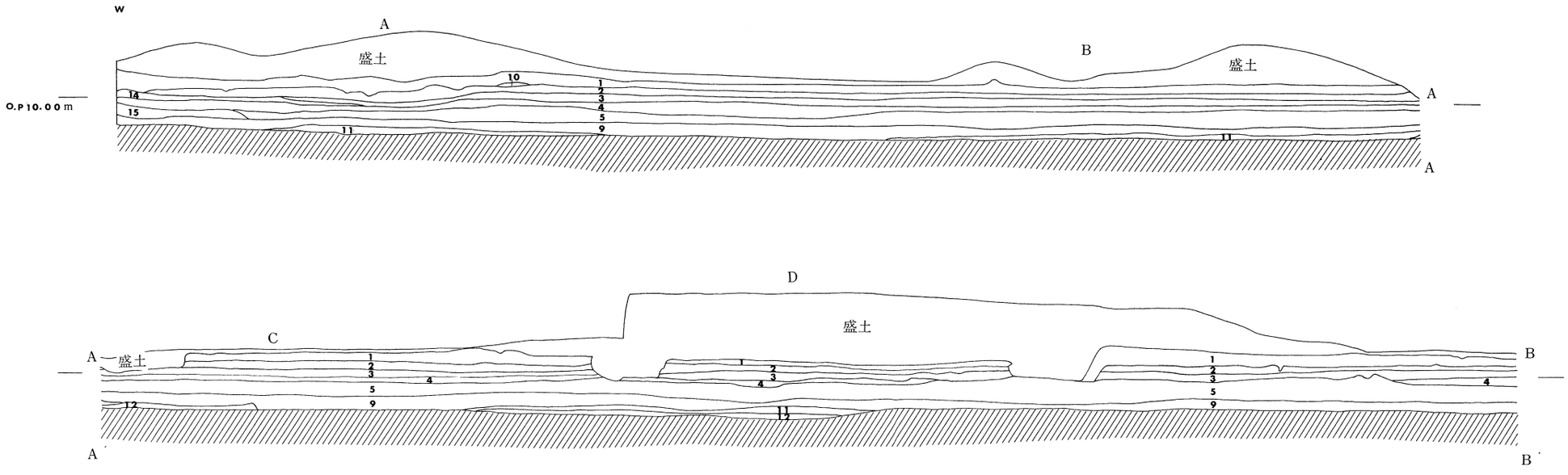
遺構検出作業の精査は、全体的に2回行い、微高地、すなわち、遺構の多数が検出されるエリアについてはさらに1回、計3回実施した。最終的には、古墳時代の遺構は包含層（黒褐色粘質土）中では発見出来ず地山上面に至って明白に線引きした。蛇足になるが精査回数を2回としたエリアは過去の大和川・今池遺跡の例証から包含層中の遺物が稀少が即、遺構検出数に直結していることと時間的制約さらには、雨天日数を考慮したので判断であった。

現場調査で作製した図面は、各々の遺構を1/10、遺物出土状態1/5を調査参加者の手にたより、クレーン撮影による 1/20、1/100 縮尺で作製した。土層名・質は、「例言」に述べた「土色帖」に統一表記した。

第2節　層　　序

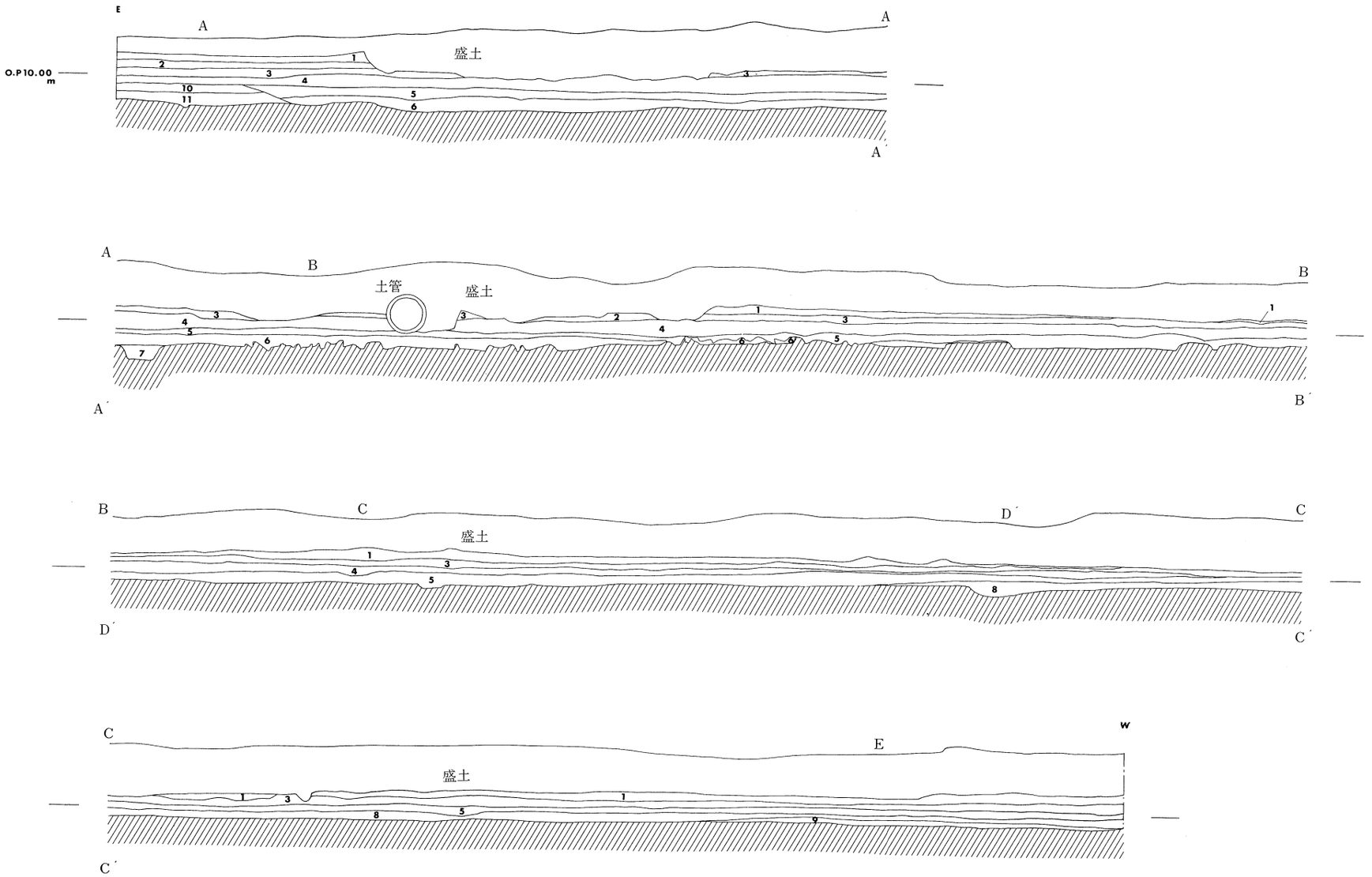
北壁面（第11図）

概ね6層から構成された水平な堆積層でにぶい黄褐色土(10YR5/3)―第5層、褐灰色土(7.5YR5/1）―第9層を除けば 0.2m 前後の厚さである。古墳時代の遺構が多数検出された微高地は、E地点付近で第9層の堆積と同時に消滅する。その高低差は 0.2m 強と極少であるが地山の構成層が変化する。微高地が旧河道の様相を示す黄褐色砂質土に対し鞍部のそれは黄褐色粘質土と極めて排水能力に欠如する。A地点では、D地点でさらに降下した地山部分からレンズ状に堆積しはじめる第11層が見られる。[註―2] D地点では、第1・2・3・4・5・9層の他に黄灰[註―1]



①（耕作土）オリーブ黒色土 5 Y 3/2
②（床土）灰黄褐色土 10YR 4/2
③（〃）暗灰黄色土 2.5Y 4/2
④（包含層）暗オリーブ褐色粘土質土 2.5Y 3/3
⑤ にぶい黄褐色土 10YR 5/3
⑥ 暗灰黄色土 2.5Y 5/2
⑦（包含層）褐色粘質土 10YR 4/6
⑧ ①にやや⑤が混入
⑨ 褐灰色土 7.5YR 5/1
⑩（床土）灰オリーブ砂質土 7.5Y 5/2
＋明褐色砂質土 7.5YR 5/8
⑪ 黄灰色土 2.5Y 5/1
⑫ 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2
⑬ にぶい黄褐色土 10YR 4/3
⑭ 暗オリーブ褐色粘質土 2.5YR 3/3
⑮ にぶい黄褐色土 10YR 5/4
⑯ 暗オリーブ灰色土 5 GY 5/1
⑰ 浅黄色砂土 2.5Y 7/3
⑱ 灰色土 7.5Y 5/1

第11図　北壁面土層図



①(耕作土)オリーブ黒色土5Y3/2
②(床土)灰黄褐色土10Y4/2
③(床土)暗灰黄色土25Y4/2
④にぶい黄褐色粘質土10YR4/3
⑤暗褐色粘質土10YR3/3
⑥黒褐色粘質土10YR2/3
⑦黒褐色粘質土10YR2/2
⑧暗褐色粘質土やや砂質ぽい10YR3/3
⑨　〃　10YR3/4
⑩暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
(にぶい黄褐色粘質土10YR5/4)
⑪暗褐色粘質土10YR3/3
(褐色粘質土10YR4/6)

第12図　南壁面土層図

色土、灰黄褐色粘質土がレンズ状堆積として観察される。E地点の手前には、近世以降の性格不明な土壙が重復していた。F地点では、第1～5層にプラスして第7層がレンズ状に割込み、東に移って東側のG地点での中間で第5層は消え、新たに第4層が分厚く水平層を成す。尚、東側には、工事用排水路が図化された。

南壁面（第12図）

W側の堆積層は、耕作土、床土、にぶい黄褐色粘質土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土の5層が基準となる。微高地部分は、耕作土、床土、暗褐色粘質土に大別出来るが厚さはない。A地点では、中世以前に形成された条里制畦畔が2層に別れて層位を成す。第10層—暗灰黄色粘質土、第11層—暗褐色粘質土に変化している土層は、おそらく、第5・6層が削り上げたと考えられる。第10・11層ともに、第5・6層よりも堅固にしまった傾向にみられた。B地点に移って、黄褐色粘質土（地山）がコブ状隆起が顕著でC地点の微高地に至るまで知られた。第7層は、遺構として取り上げられるもので埋土とした黒褐色粘質土（10YR⅔）があった。レンズ状堆積の全くみられないC地点付近の微高地は、4層を基盤とした水平層であった。地山の黄褐色砂質土のこの一帯（微高地）は、排水能力に富み古墳時代の生活基盤となった経緯がある。その高さは、標高9.80mでE側より0.2m弱の比高差を有する。D地点に至っては、第8層—暗褐色粘質土（やや砂質ぽい）がベルト状堆積が開始しW側に続く。W端のE地点では、暗褐色粘質土が細分されて3層となり上層の耕作土、床土を含めて5層が基準となる。しかし、第9層はレンズ状堆積かもしれない。W側の地山は、南から北に向けて僅かに低下していることも判明した。尚、A、B地点では、工事によって耕作土が削平され床土上に盛土が行われていた。

土層 8（第13図）

基本的には、盛土、耕作土、床土、オリーブ褐色土の4層に区別され、第3層の包含層を含めて水平層を構成する。一部、中央において最近の畦畔として利用された土層断面が黄灰色土をベースに築き上げていた。最終的に古墳時代の遺構を検出した地山は、砂質土でO.P＝0mジャストを計測した。

土層 9

E側は、土層—8の南側と接合しているため同一層序であるが攪乱部を境に第5層にして表示した褐灰色粘質土が進行した。W端では、第5層の下に第6層—にぶい黄褐色粘質土が当初に堆積した。

土層—8・9に共通してみられた盛土は、バキューム車道設置にからむものである。又、地山は、層位や遺構検出状況から判断して最近0.2～0.3mの削平が行われていよう。前述したように土層—8・9から南北壁中央にまたがる旧河道が微高地を形成し、それを中心に左右に鞍部が広がる。前者の旧河道は、砂質土、砂礫層を主体とした構成から派生して排水能力の利点

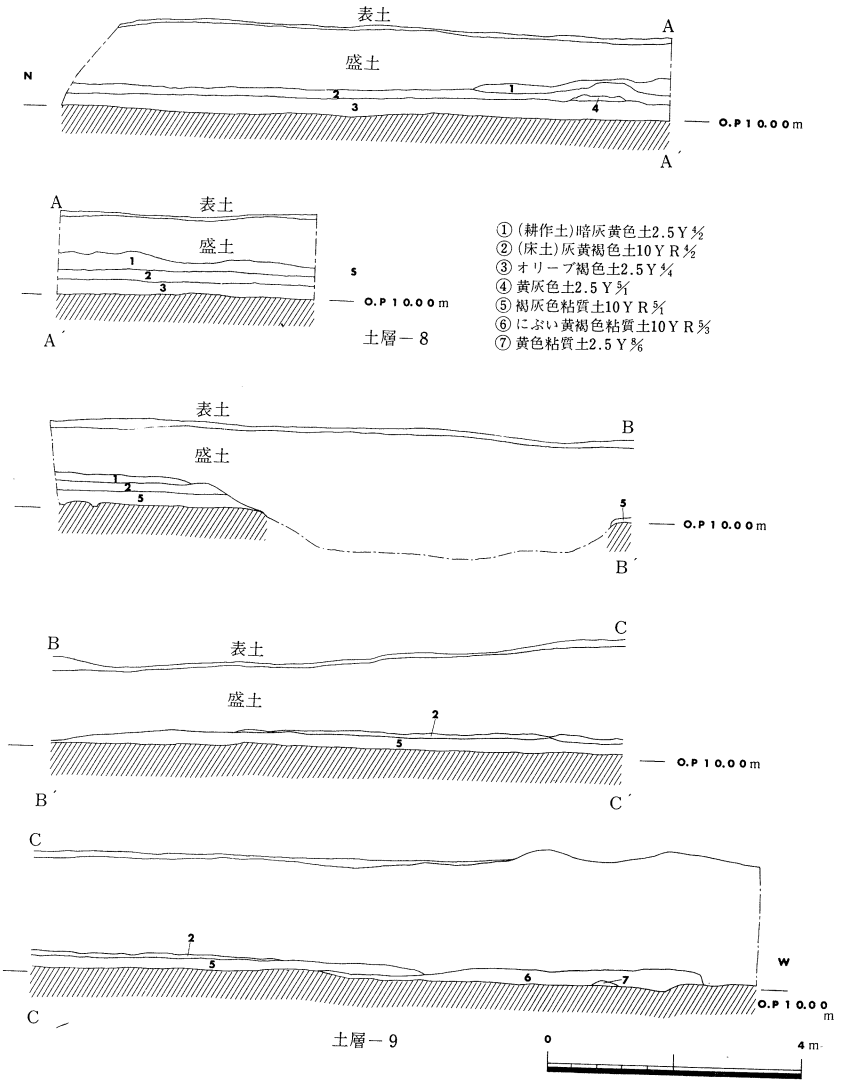
を最大限に活用して古墳時代の生活遺構面を造り上げている。他方、鞍部は、黄褐色粘質土から成る地山には近世の耕作用井戸が数ケ所において検出したにもかかわらず生活関連遺構は皆無であった。

註－1　土性（Tex ture）粒径の区分（Particle sige）

2㎜礫（gravel）、0.02㎜～0.002㎜シルト（silt）

0.002㎜粘土（clay）、0.05㎜～0.02㎜微砂（very fine sand）

註－2　任意地点を表す。



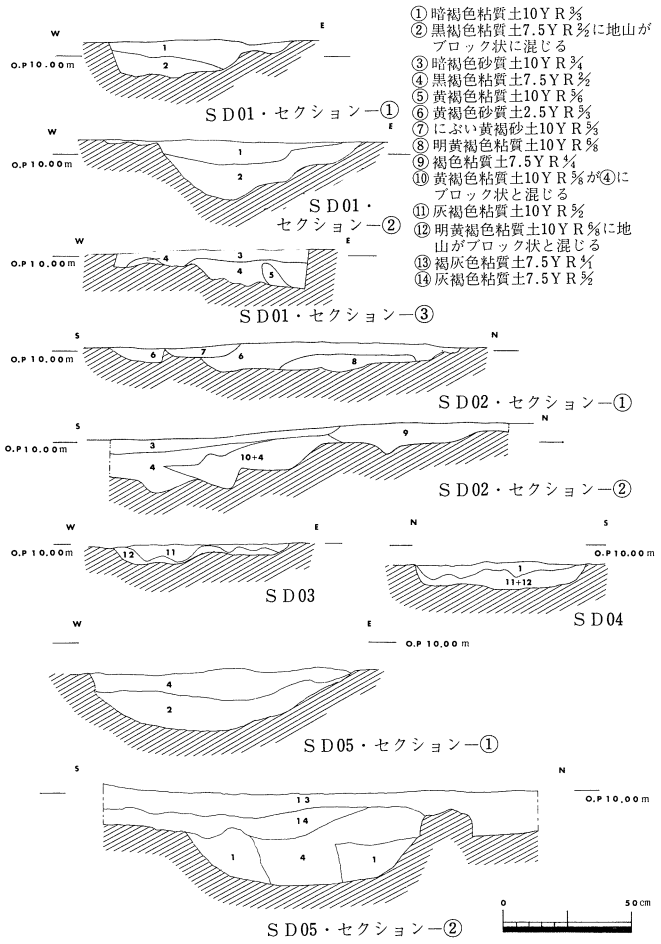
第13図　土層8・9図

第3節　溝

本調査区域内において検出された溝（ＳＤ）は、６本検出されたが一見、土壙や溝状遺構としての範疇に入れるべきであるが地山の削平や本遺跡における過去のデータから判断して溝として一連にしておくべきものである。

ＳＤ01（第14図）

西南端に位置するこの溝は、ＳＤ02と連結しており磁北に向く。全長は、南端が調査区域外にあたるため不明であるが現長 7.0m、幅 0.72～1.0m、深さ0.15～0.25m を測る。幅広く深いのは、ＳＤ02との連結部であるが、溝底部の凹凸が目立ち水平層としての暗褐色砂質土、黒褐色粘質土にブロック状の堆積が知られる。他方、Ｕ字形な断面には、第１・２層の整美な埋土状況が見られた。出土遺物は、須恵器、土師器片が見い出しているが直接的に成立期を提示するものはないが埋土から推察して古墳時代以降とした。



第14図　溝断面図

ＳＤ02（第15図）

ＳＤ01より東へ約 3.2m の地点で消滅しており、ＳＤ01と直交関係にある。前述の第３・４層以外に４層がレンズ状に流れ込んだ層序関係が著しく、又、底部の起伏もはげしい。最大幅 1.35m、深さ 0.1m強と比較的浅いこの溝からは、ＳＤ01と同一の出土遺物、性格付けが可能といえる。

ＳＤ03（第15図）

ＳＤ01の直線上、北側に定る溝で本来的にはＳＤ01と連結しており全長約 3.9

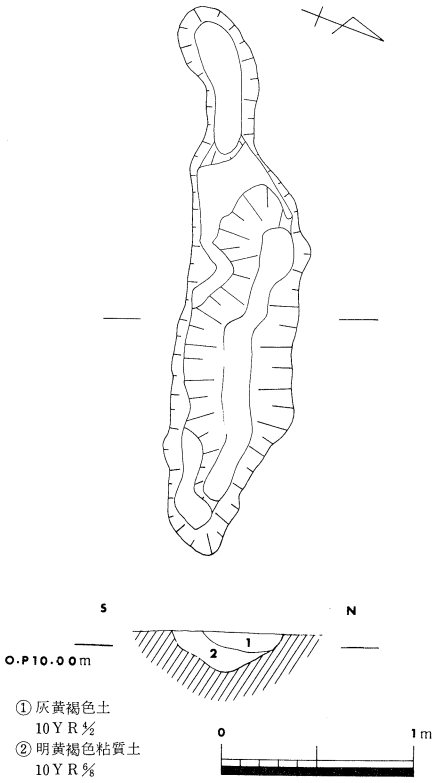
m、幅 0.8m、深さ0.08～0.1mを計測した。溝中は、灰褐色粘質土、明黄褐色粘質土の2層に限定された埋土であった。出土遺物もＳＤ01と同類で、流路方向をＳＤ02からＳＤ01、すなわち北から南へと考えられるが溝の検出状態からは断定出来ない。これらの溝は、後述する「難波大道」ともいうべき古道に伴う「東側溝」の底部分の残欠と確定した。註—1

ＳＤ04（第14図）

第6地区、西部中央に位置する現長約 4.5mの溝は、北東方向に伸びるが全容は不明である。幅 0.4～0.65m、深さ 0.1m程度のこの溝は、古墳時代後期（6世紀中葉）の須恵器の細片を含有する暗褐色粘質土下に第11＋12層が堆積する。

ＳＤ05（第14図）

ほぼＳＤ04と同一方向だがやや北に振るこの溝は、同地区で5m前後を検出した。幅0.9～1.0m、深さ 0.25m前後でU字形の断面には、黒褐色粘質土を基調として第1・2層がレンズ状、又はブロック状に入り込む。人工的な掘削が明白なこの溝は、ＳＤ04と同期に営まれたことが出土遺物から判明した。さらに、この溝は、先般の第3地区にも伸びる。



第15図　ＳＤ06遺構図

尚、溝・肩部は、中世以降の堆積(灰褐色粘質土、褐灰色粘質土)、削平によって特に、西側が破損している。

ＳＤ06（第15図）

全長5m弱のこの溝は、Ｖ字形の断面に灰黄褐色土、明黄褐色粘質土が堆積する。幅 0.6m深さ 0.4mを計る溝内からローリングを受けた瓦器片を検出したが詳細は、不明である。

註—1　後述する『「難波大道」の復元』の根拠によるもので周辺地区での関連工事等に十分注意におく必要がある。
ＳＤ02は、「東側溝」に直交する施設で、条里制遺構に伴う側溝ではない事が旧状図でも把握された。

第4節　掘立柱建物

ＳＢ01（第16・17図）

第6地区、南端部に立地するこの掘立柱建物は、排水能力に優れた黄褐色砂質土（地山）から穿たれＮ21°Ｅの主軸をもつ。桁行2間×梁間1間の細長い建物で東桁行間の柱穴は、欠如していた。これは、後世の地山そのものの削平に付加して東側の攪乱に要因する。

桁行長4.05ｍ、梁間長1.70ｍ、床面積 6.9㎡を測る。柱穴間距離についてみるとＰ１－Ｐ２ 2.15ｍ、Ｐ２－Ｐ３ 1.90ｍ、Ｐ３－Ｐ４ 1.70ｍ、Ｐ１－Ｐ４の対角線上、4.35ｍとなる。地山の標高は、Ｏ.Ｐ.＝10.08ｍと微高地上に所在する。

柱穴５・６は、その所在位置から判断して柱の支柱又は、補助柱とも考えられるが確証はない。出土遺物としては、従来通り掘方内から検出品は細片・ローリングが著しいが布留式土器2式に位置付けられる土師器甕口縁端部の出土をみた。この掘立柱建物の性格付けには、平面プランや柱穴状況から把握して「納屋」という作業場的な建物が妥当視される。[註—1] 当建物は、隣接するＳＥ17の井戸、棟持柱のＳＢ02と相互関係に存在する。

そして、ＳＥ17、ＳＢ01・02は、共にユニット関係を構成しつつ南東、南西に広がるであろうし同時期の北端に位置することは過去に発掘調査された第2地区（桁行3間×梁間3間の掘立柱建物、径約2ｍを測る井戸が対として組み合さって検出された。）が立証している。その可能性は、土地条件図や航空写真、地質調査から得た資料で判断される旧河道に存在するからであることを追記したい。

各柱穴は、次の通りとなる。

柱穴1は、不整円形で長軸長0.26ｍ×短軸長0.20ｍ×深さ0.09ｍと浅い。底部は、2段底を成し埋土は黒色土の単一層に限定されているがそこが柱痕と思われる。

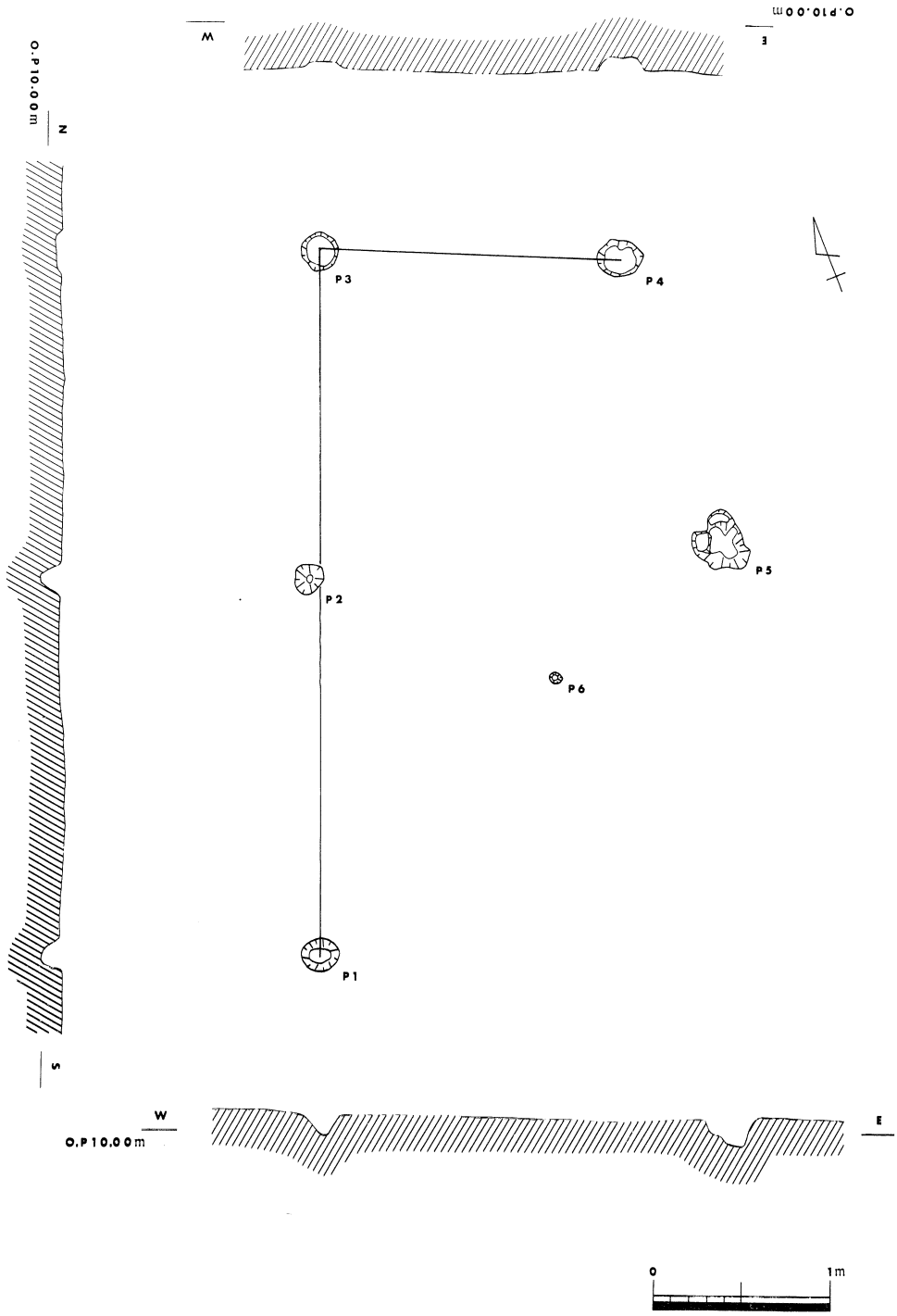
柱穴2は、長軸長0.22ｍ×短軸長0.18ｍ×深さ0.12ｍのＵ字形の断面を呈する。埋土の黒色土が柱痕を示し第2層が掘方内の埋め戻し用埋土である。

柱穴3は、径0.20ｍ前後の不整円形でＰ２同様にＵ字形の掘方である。柱痕の第1層を第4層である黒褐色土を埋め戻し、Ｗ側には第3層の小ブロック的な流れ込みを見た。

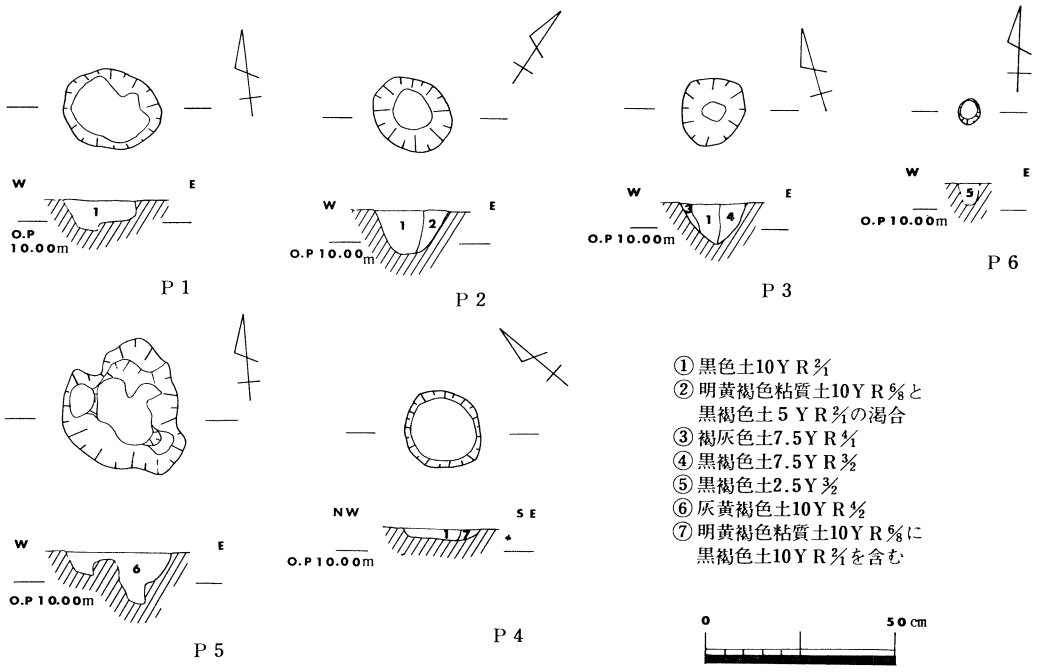
柱穴4は、本建物中で最も浅くわずか0.03ｍで四隅柱として不適当の感を与えているが掘方は円形で約 0.2ｍを計測した。他の柱が 10㎝前後に対しこの掘穴に入れられた柱は 15㎝を越す。

柱穴5は、補助的な柱と考えられる最小の柱穴であって径0.06ｍにすぎないが断面はＵ字形に掘削していた。

柱穴6は、アメーバ状の平面ではあるものの中央部には柱痕を暗示する二段底を形作る。



第16図　ＳＢ01遺構図



第17図　ＳＢ01各柱穴図

ＳＢ02（第18図）

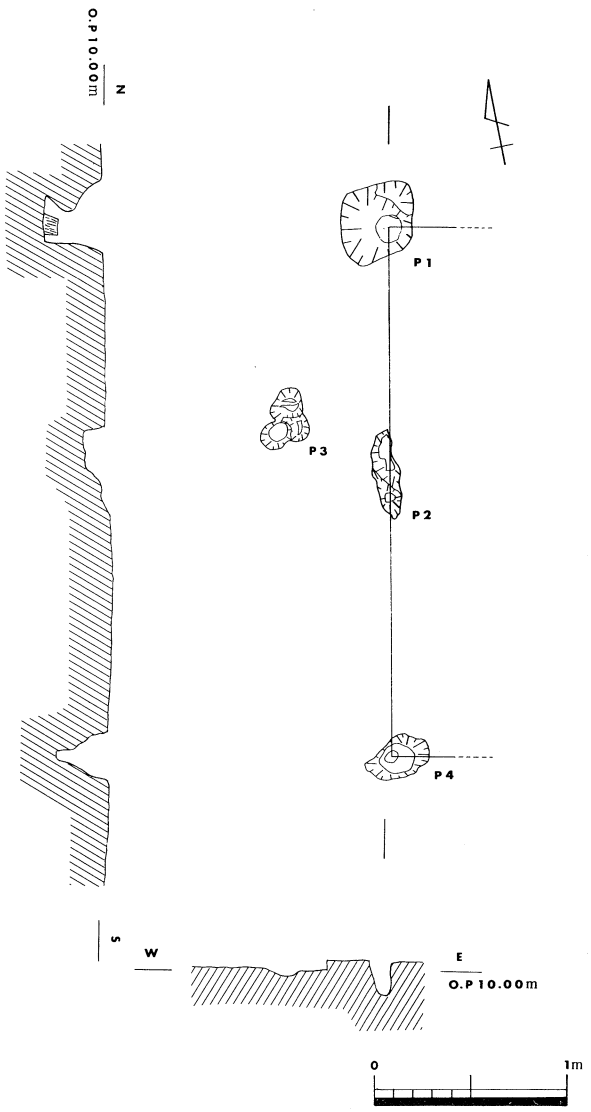
本調査区東南端に位置しＳＢ01、ＳＥ17と一群を構成する棟持柱の掘立柱建物である。西梁通りと棟持柱の柱穴が確認されただけで桁行間は、不明といえる。梁間２間から主軸を復元すると主軸は、N80°Wを向き前述のＳＢ01とは直交関係の配列位置に建てられている。梁間長は、2.75ｍの数値が得られたが桁行不明の点から床面積も不明である。

棟持柱は、妻通りより外へ0.55ｍ張り出しやや棟通りより北に寄っており使用された柱が多少、曲がっている様な粗雑な材料が採用されていたと考えられるのは、柱穴に切り合って存在した２ケ所の小ピットが証明している。曲線材の使用は、後述のＰ１底部から検出された柱痕が物語っていた。

各柱穴間は、Ｐ１－Ｐ２　1.15ｍ、Ｐ２－Ｐ４　1.60ｍ、Ｐ２－Ｐ３　0.55ｍであった。

各柱穴の説明をするとＰ１は長軸長 0.5ｍ、短軸長0.41ｍ、深さ0.16ｍで検出された柱穴内では大型の部類に入れられよう。ブロックの入り込みである黄橙色土を除けば多半は、暗赤褐色土の単一層であった。そして、柱痕部分のみ二段底を形成していて上面平面形が不整形に対し柱痕部はほぼ円形である。Ｐ２は、南北に細長い柱穴で本来の柱痕は北側に存在したであろう。南側に伸びた部分は、柱抜きとり、又は補助柱にかかる掘方かもしれないが共に確証はない。埋土は、暗赤褐色が大部分を被うが下層部では第１層と第２層の明黄褐色粘質土が混入し

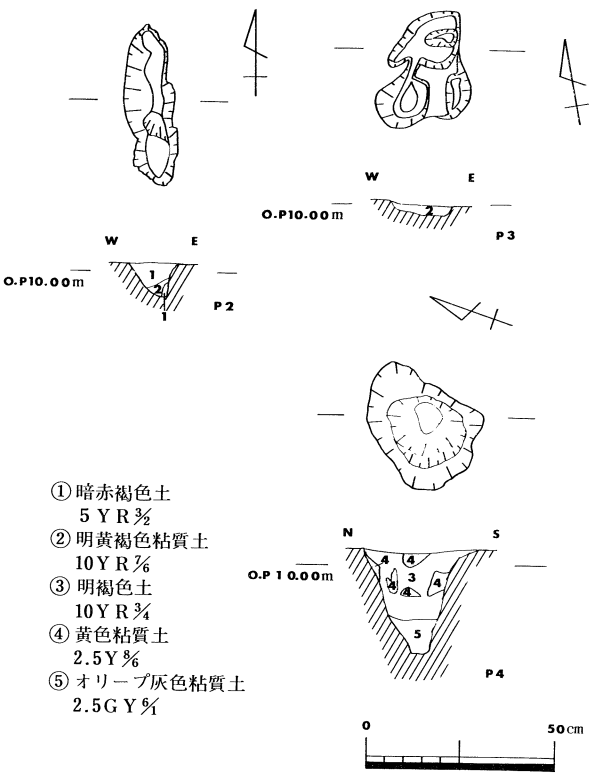
ている。ここで言う、第2層は地山の掘削時と同質が埋め戻されたからである。P3の棟持柱の掘方は、アメーバ状平面形で特に浅く0.04mにすぎない。柱痕は、南側に遍在しているが深さはさほど変化ない。柱痕周辺のPitも補助的な役目を果した柱に伴う掘方と考えられる。長軸長0.36m×短軸長0.29mを計測した。長軸長0.34m×短軸長0.26m×深さ0.27mを測るしっかりした柱穴で本建物で最も深い不整円形の平面形を呈するP4の柱穴内は、暗褐色土とオリーブ灰色粘質土に2分され、上層には地山の掘削土が混入していることがブロック状に図化された。柱は、径5～10cmの曲線材の採用が目立っていたのは補助材の存在を促すピットが隣接する。柱穴の底部高は、P1・4の四隅柱は深く一定に対しP2の棟木を支えた浅く棟持柱用の重量の依頼が知られる。遺構面は、O.P.10.05m、柱穴底は、O.P.9.80m前後が最深数値で南から北に向って地山の傾斜がみられた。



第18図　SB02遺構図

P1・柱痕（第20図）

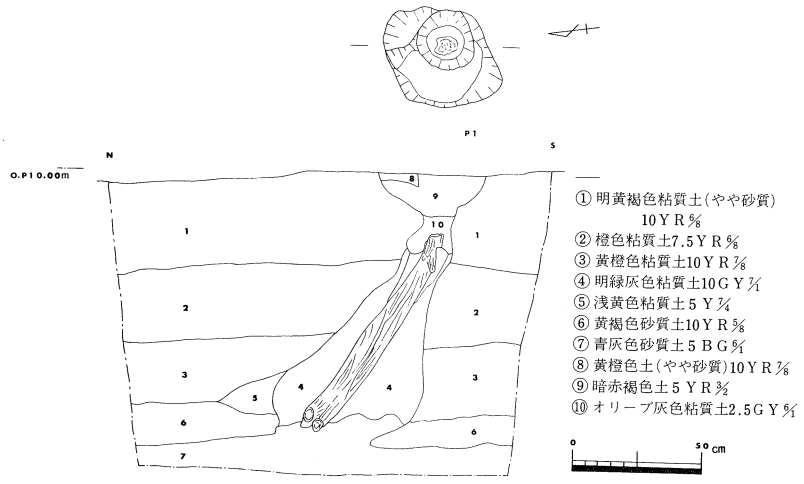
妻通り北西隅の四本柱の1本にあたる柱穴より径12cm、長さ95cmの柱痕を検出した。柱は、工具等でカットされた痕跡は全くなく自然木を裂いた建築当時とさほど差のない状態で出土した。それは、水分と明黄褐色粘質土、橙色粘質土、黄橙色粘質土という土質が優良な保存状態



第19図　SB02・P2・3・4柱穴図

としたのであろう。第10層は、柱痕の腐食土で、明緑灰色粘質土は柱痕の影響を受けて変色したものではなく柱痕が毛管現象の役目を果し検出した最下層の青灰色砂質土（5BG6/1）が第1～3層に左右されて形成された土層である。この柱が遺構より1m強も掘方も存在しない状態で検出された理由には、建物が倒壊時に生じた力と曲線用材の使用が当を得ていよう。[註—2]

出土遺物にしては、布留2式の甕片が知られSB01、SE17とユニット関係に組み込まれると堆測される。建物の性格は、全容の判明しない現在では断定し難いがSB03の例から住居の蓋然性がある。[註—3]

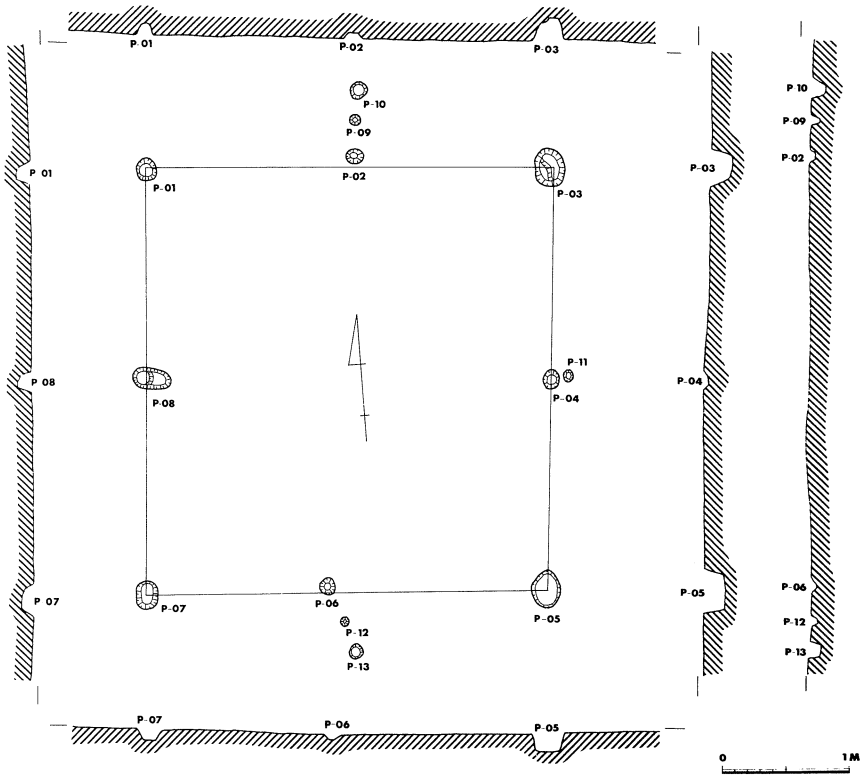


第20図　SB02・柱穴1・柱痕検出図

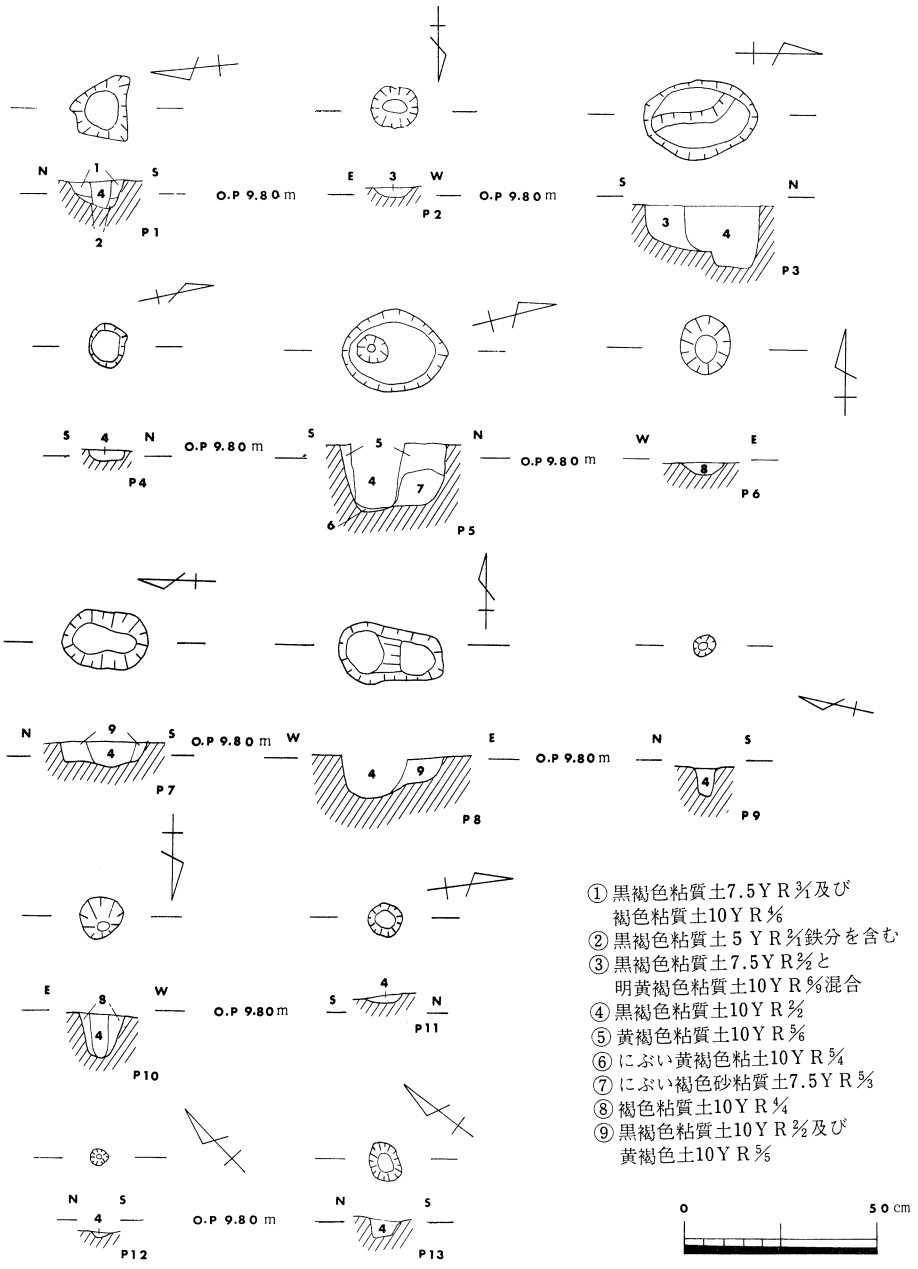
ＳＢ03（第21図）

当調査区北部に位置しＳＥ08より東南へ約３ｍと隣接した棟持柱を有する梁間２間×桁行２間の掘立柱建物である。ＳＢ01・２、ＳＥ17といった南端部の古墳時代[註－4]の遺構から北方に伸びた旧河道上に選地しており黄褐色砂質土（地山）を基盤とする。その立地した標高は、Ｏ．Ｐ．＝9.80ｍと南側のＳＢ01・２に比して 0.2ｍの微高地そのものの低下が示された。Ｎ4°Ｅの主軸になるこの建物は、桁行長3.35ｍ×梁間長3.20ｍ、妻通り長4.42ｍ、床面積10.7㎡と中程度の規模である。梁間は南より北側が、桁行は西よりも東側が幅広いがその誤差は 0.5ｍ位いの正方形に近い建物である。棟持柱は、南北の出は両方とも妻通りから0.55ｍに立地しているが第３地区ＳＢ01、第６地区ＳＢ02との相異点として２本の棟持柱である。内側に建てた補助的な役目の棟持柱は、外側のそれよりも小さい柱を使用していた。特に、棟木が多少、曲っていた用材を活用していたことが柱穴の配列から推し測れる。

四隅柱は、柱穴中で大きく深いに対して桁行、梁間の中間柱は小さく浅い。又、棟持柱の２



第21図　ＳＢ03遺構図（Ｏ．Ｐ．＝9.80ｍ）

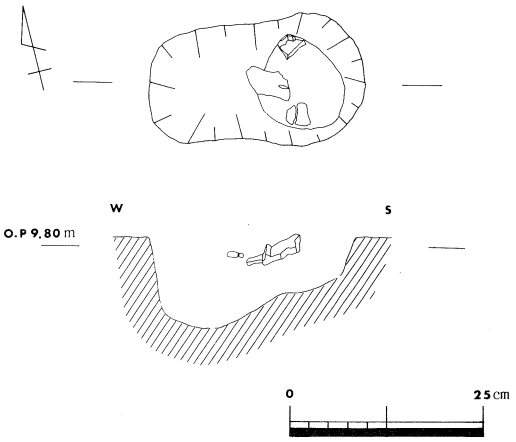


第22図　ＳＢ03各柱穴図

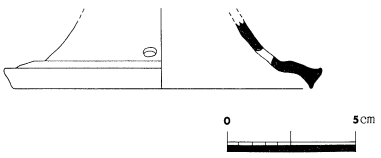
本の内、外側は構造的にも重要性を十分加味していたことが柱穴の形態から判明出来る。各柱穴間は次の様な距離にある。Ｐ１－Ｐ２　1.60m、Ｐ２－Ｐ３　1.60m、Ｐ３－Ｐ４　1.65m、Ｐ４－Ｐ５　1.65m、Ｐ５－Ｐ６　1.75m、Ｐ６－Ｐ７　1.40m、Ｐ７－Ｐ８　1.70m、Ｐ８

－Ｐ１　1.65ｍ、建物の歪みの目安にもなる対角線上の柱穴間は、Ｐ１－Ｐ５　4.58ｍ、Ｐ３－Ｐ７　4.63ｍとさほど気になる数値でもない。

柱穴の平面形は、不整円形が大半を占有する。規模はＰ３・５・７・８の類、Ｐ２・４・６・10・11・13の類、Ｐ９・12の類という３タイプに分類出来、それが即、深さの分類にも直結しさらにこの建物内での柱の使用箇所にもなる。傾向として、二段底を呈した柱穴には４隅柱が目に入る。埋土について見ると単一層のＰ２は、第３層、Ｐ４・９・11・12・13は黒褐色粘質土（第４層）、Ｐ６は第８層の褐色粘質土であった。これは、おそらく後世の地山の削平に起因して柱痕部分のみ残存したことと解したい。柱穴内に２・３層が存在する場合には、柱痕を復元出来る垂直型の埋土が見い出された。それから本建物に使用された用材の太さは、棟持柱の径10cm、４隅柱の径10cm強にし、ただしＰ１の径５cmは細い。しかし、この場合には、Ｐ８が太い柱の使用が考えられ全体的なバランスは保持されている。



第23図　ＳＢ03・Ｐ８遺物出土状態



第24図　ＳＢ03・Ｐ８出土土器

この掘立柱建物も他と同様に柱穴内の出土遺物は、細片でローリングを受け資料的に欠如する中でＰ８出土の須恵器・高杯・布留２式（新）の甕・口縁片は十分耐える。

須恵器・高杯（第24図）

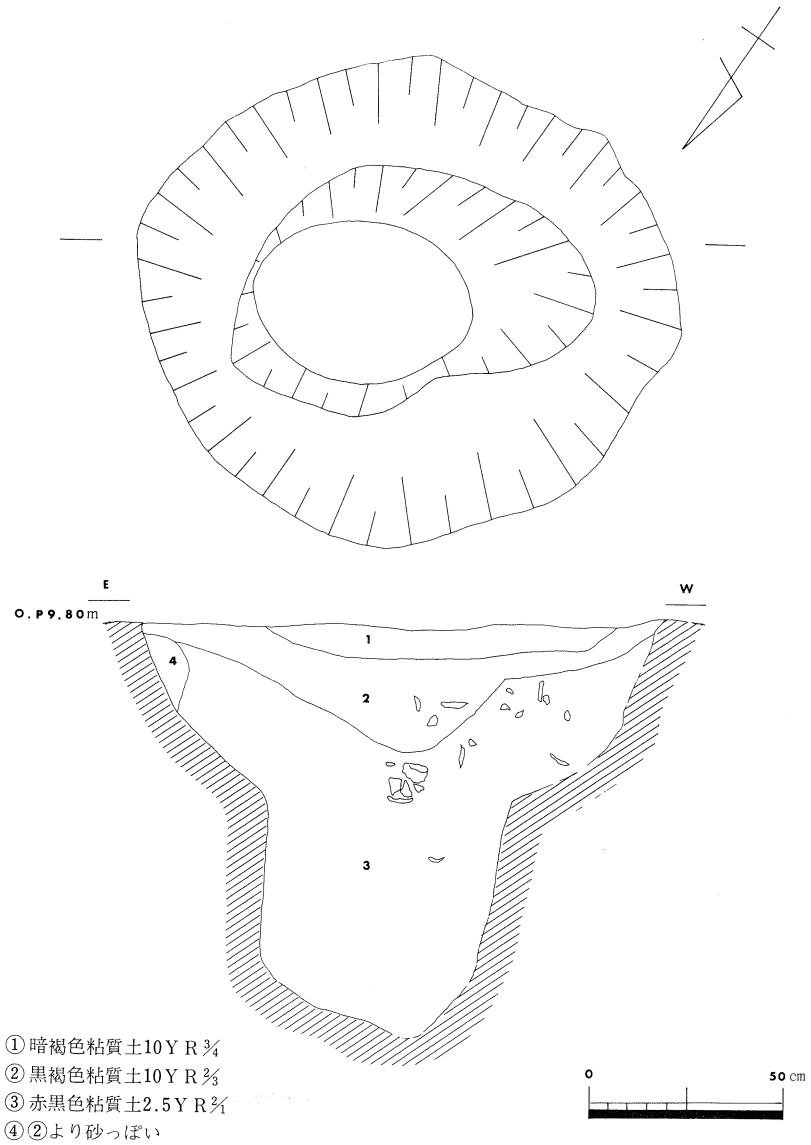
脚部のみの遺存で全体は、判明しないがラッパ状に広がって端部でさらに広がり上方にふくらみシャープにふんぼる。焼成がやや不良のため詳細な技法は、不明である。円形透しや形態から陶邑Ⅰ型式第３段階に比定される。内外共に、ベニガラ朱を塗る。胎土―0.2～3㎜の石英礫を含みガラス状の吹き出しあり。色調―赤褐色（10ＹＲ5/4）。

この掘立柱建物は、隣接のＳＥ08の立地関係、柱穴内の出土土器から推して布留２式段階（新）とどめたい。

第5節　井　戸

ＳＥ08（第25図）

本調査区、北・中央部すなわち棟持柱という特異な掘立柱建物の北西３ｍに掘削されている長軸長1.44ｍ×短軸長1.30ｍ×深さ1.18ｍを計測する遺構である。上辺から摺鉢形に一端掘り込みさらに径0.65ｍの垂重ぎみに掘削するが底部は斜目に傾斜している。上辺は、Ｏ．Ｐ．9.75



第25図　ＳＥ08遺構図

m、下辺はO．P．8.65mの不整円形のこの井戸には、上から暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、赤黒色粘質土の埋土を確認した。その内、第2・3層は井戸廃棄時に人為的に埋め戻された状態であった。一部に、第4層のブロック層が知られたが流れ込みによると思われる。

出土遺物は、祭祀的な色合を示す出土遺物はなく第2と第3層上層に破片化の著しい布留2式の土師器片を出土した他に、第3層中位付近で弥生式時代の石鏃と時期不明の自然木（長さ54cm×径3cm）も見い出した。この井戸の掘削時期は、土師器に指標を求め隣接するＳＢ03と相互関係にある。

ＳＥ09（第26図）

当地区、北地点で前述のＳＥ08の北東、ＳＢ03の北数m地点に所在した。上辺付近が浅鉢状から下半部にかけてＶ字形の断面を有するこの井戸は、長軸長1.35m×短軸長1.18m×深さ0.92mを測る。二段底の不整円形なこの井戸の埋土は、概ね、次の5層であった。黒褐色粘質土、暗褐色

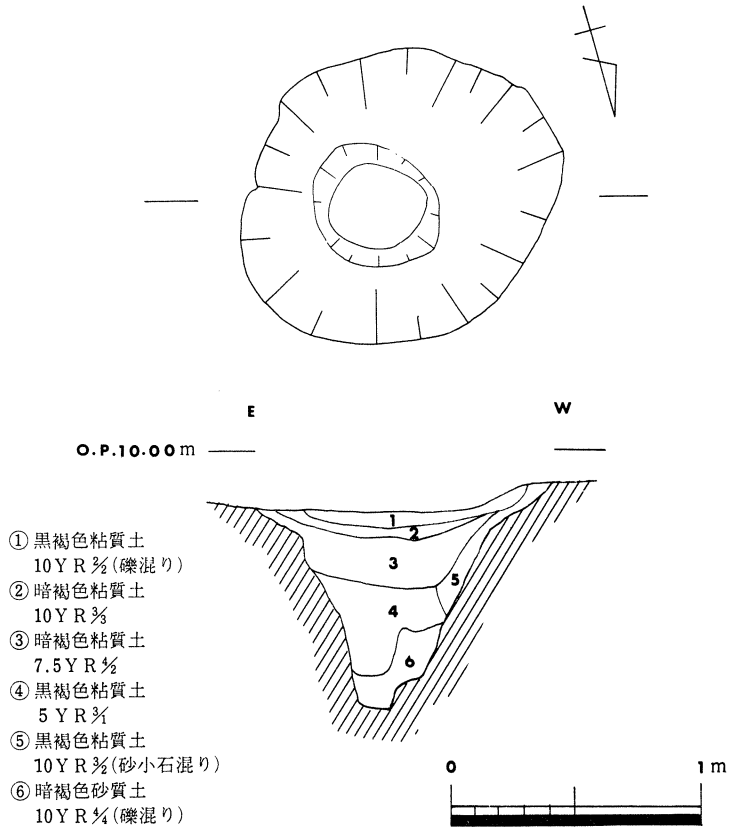


図26図　ＳＥ09遺構図

粘質土(10YR⅔)、暗褐色粘質土（7.5YR½)、黒褐色粘質土、暗褐色砂質土のベルト状堆積に対し西壁面に流入土の性格をもつ第5層が入る。湧水層は、底部から約30cmまで達していた灰褐色砂礫層が確認されて完掘後、わずか30分程度で30cm高の水位を成した。

出土遺物は、底部付近の第6層にのみで検出したがローリング、細片が気になる。それらの遺物は、SE08と同様であり自ずとこの井戸の成立時期が分る。

使用当時の堆積と考えられる第6層上層に第1・2・3・4層を人為的に埋め戻されたSE09は、当井戸の北側に存在したであろう掘立柱建物とユニットを組織したであろうが地山の低下（後世の削平）に起因して未確認である。ただし、掘立柱建物の柱穴にあたるSK55は近接する。

SE17（第27図）

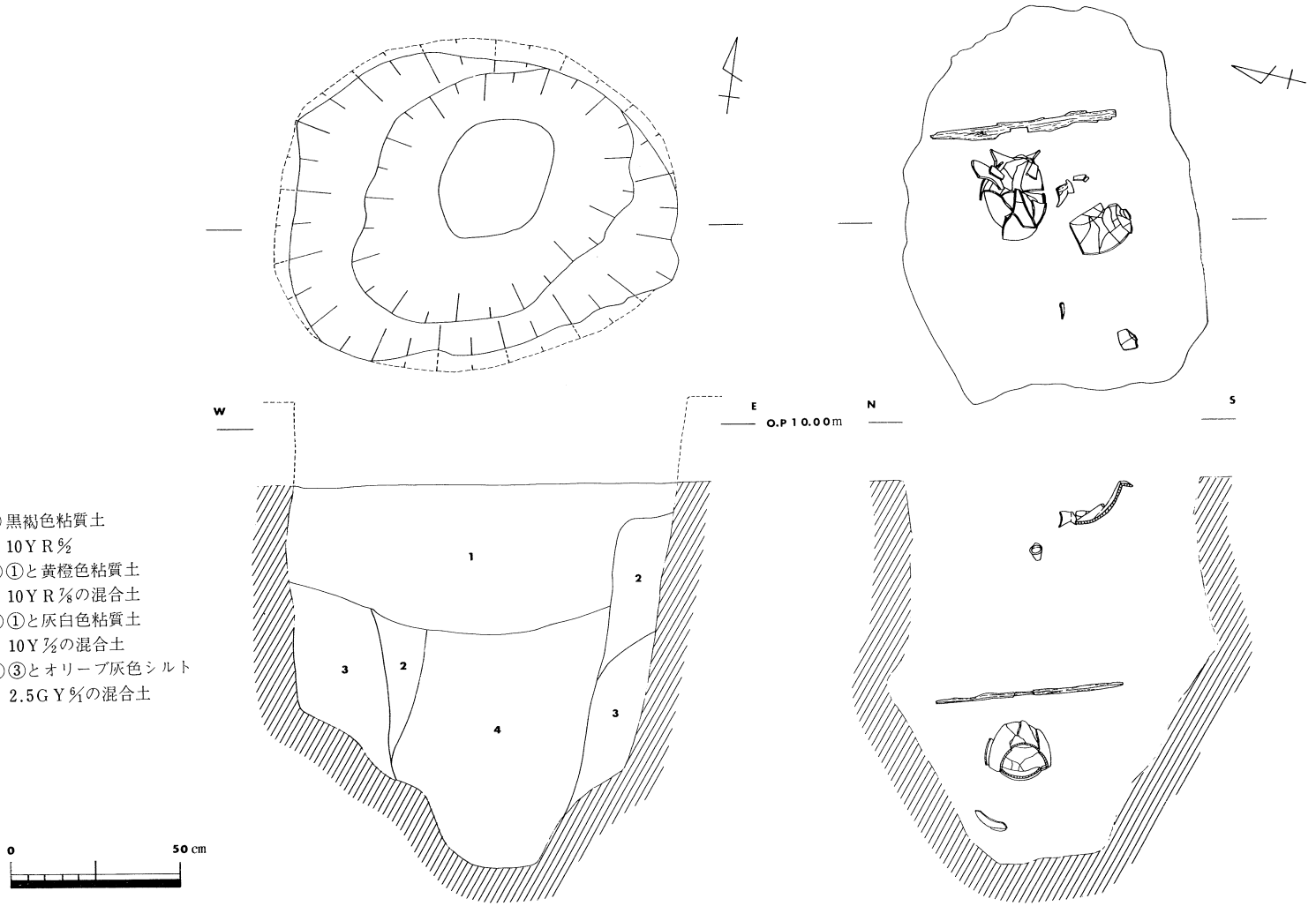
本調査区南地点、SB01・2の中間地点に穿たれた不整円形の長軸長1.14m×短軸長0.91m×深さ1.13m（復元数値—約1.30m）の井戸は、ほぼ垂直ぎみに掘削した後、二段座に成形している。最深底部は約0.4×0.3mの隋円形を呈する。上辺は、最近の攪乱で0.2m程度削平されているが標高O.P.10.10m、下辺はO.P.8.70mの数値を得た。又、南北壁の中位での抉れは使用段階による崩壊と理解してよい。当遺跡で検出された古墳時代の井戸とは構造を異にする例でSE08と比較される。これは、どうも次に説明する井戸内の埋土から説明付けられる。埋土は、人為的かつ一時期に黒褐色粘質土、黒褐色粘質＋灰白色粘質土＋オリーブ灰色シルトによる混合土が埋め戻されたことが観察された。この井戸で特異な埋土が構造にもつながっている要因には、垂直壁に0.15～0.25mの厚さでデコレェーションを行い壁面保護を積極的に採用している。その保護壁の土層は、2段に積み上げており上層は黒褐色粘質土＋黄橙色粘質土で、下層は黒褐色粘質土＋灰白色粘質土であった。しかし、西側は部分的に第4層埋め戻し時に落ち込んでいた。この井戸は、上から黄褐色・灰白色粘質土・オリーブ灰色シルト層の地山を掘削し湧水層の最下層は灰色砂礫層に達していた。完掘後、ただちに湧水によって二段底上面に至る。

検出された土師器・高杯(杯部のみ)が復元遺構面より0.2m下、0.9m下に全長0.57m径0.02mの自然木、1.0m下に土師器・甕を見た。高杯は口縁部を上向け下層の甕は完形品のまま口縁部を横向けておりその両者はあたかも人為的に埋設しながら第1・4層をもって埋め戻していった感を与える。

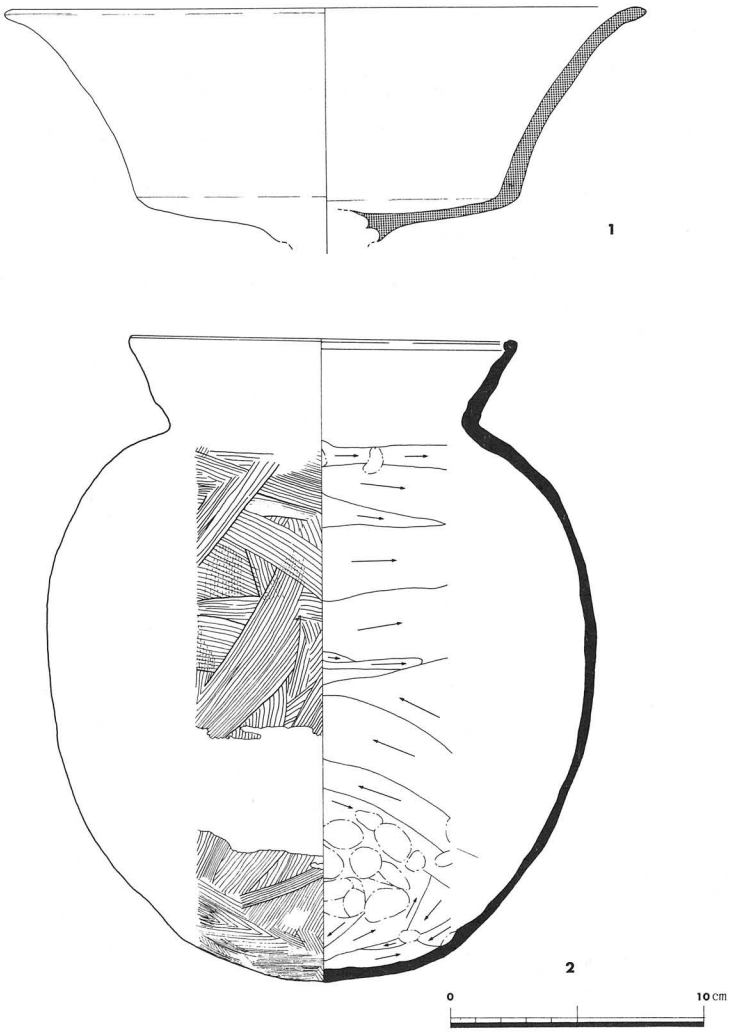
出土遺物

土師器・高杯（第28図・1）註—5

表面剝離が顕著のためテクニックは不明。平滑な底部から明瞭な段の後、内湾しながら外上方に大きくのびる。口径(推)24.8cm、残存9.2cmのこの高杯は、胎土が粗く、焼成も不良であ



第27図　ＳＥ17遺構図・遺物出土状態図



第28図　ＳＥ17出土土師器

った。色調―浅黄橙色(10ＹＲ⅞)。

土師器・甕（第28図・２）

口径15.0cm、全高25.3cm、頸部径12.2cm、最大胴径21.6cmのこの土器は、緻密な交互のハケ調整が基調として頸部のみヨコナデ仕上げ、内面は底部付近の指頭圧以外はヘラ削り仕上げである。やや胴長に直線的な口縁部が外上方にのび端部には、明白な段を有する。器壁は薄く、下半部での凹凸が目立つ。

外面全体に炭素付着、下半部に剝離痕あり、胎土―良好、焼成―良好、色調―黒褐色(7.5ＹＲ⅜)。

第6節　不明落ち込み

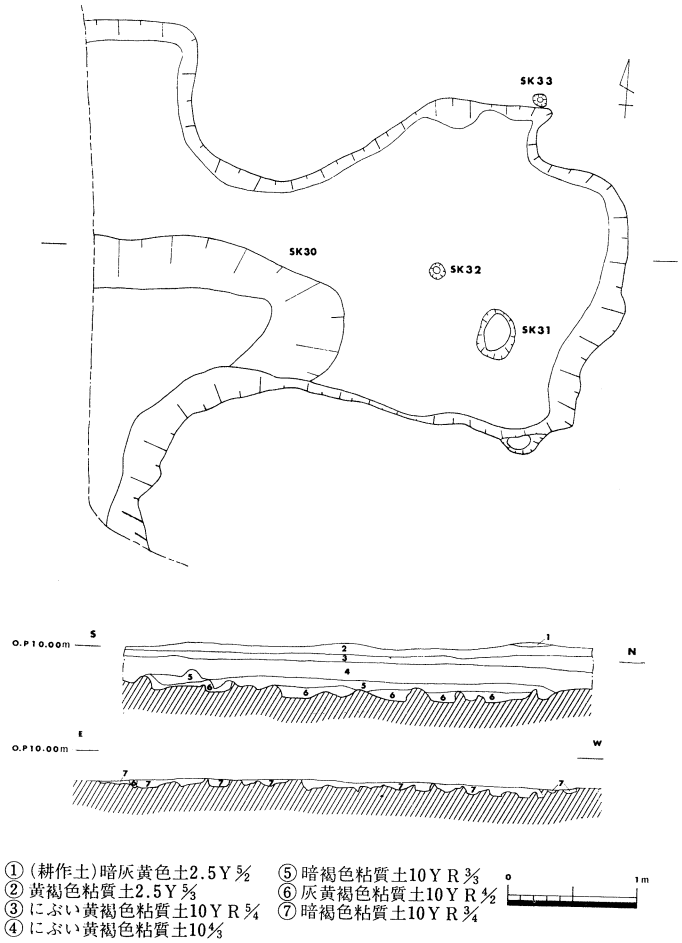
ＳＫ15（第29図）

当調査区西中央部に位置するが北側と東側は、隣接地区によってカットされ不明である。当初、竪穴式住居跡との可能性を有したが欠損部分や底部状況から決定出来なかった。南側は東西にやや深く、３ケ所に径0.3～0.6mの柱穴状の土壙が知られた。黄褐色粘質土の地山に掘削されている為か排水能力は全くない。埋土は、５層から成る土層で形成されているが赤黒色土、黄色土、黄褐色土が基調となっている。出土遺物には、須恵器の細片が知られたが6世紀代と判るだけで詳細は不明である。

① 赤黒色土2.5ＹＲ3/1(明黄褐色土10ＹＲ6/8系統を含む)
② 赤黒色土2.5ＹＲ3/1(明黄褐色土10ＹＲ6/8＝4：6)
③ 鈍い黄色土10ＹＲ6/4＋鈍い黄色土10ＹＲ7/2含
④ 鈍い黄褐色土10ＹＲ5/4
⑤ 黄褐色土10ＹＲ5/6：褐灰色土10ＹＲ5/1少々含む

0　2m

第29図　ＳＫ15遺構図



第30図　ＳＫ30・31・32・33遺構図

ＳＫ30・31・32・33（第30図）

北部中央に立地するが西側にのびるこの土壙には、3ケ所に柱穴状のピットが確認された。まさに不明土壙の形態で西南側においてさらに深くなる。底部は、粘質土の地山に掘り込まれコブ状隆起が著しい。灰黄褐色粘質土、暗褐色粘質土が主流を占める埋土をもつ。径 0.2m強の円形土壙のＳＫ32・33は、ＳＫ30の底部より約 0.3mに達し層位からＳＫ31とともにＳＫ30に付随した遺構である。ＳＫ33からは、径 0.1 mの木質をみた。出土遺物の多くは、須恵器の細片で6世紀前半期に存する。

ＳＫ38（第31図）

ＳＫ38・40・41は、北・中央部に位置しそれらはほぼ一直線に並ぶ。小判形に似るが北側の一部にえぐれあり。断面はU字形で平らな底部上面には、黒褐色粘質土を主体として黄褐色粘質土、オリーブ黒色砂質土の2層がブロックとして入り込む。出土遺物に、6世紀代の須恵器・杯身片を検出したが詳しくは不明である。尚、サイズは、長軸長 0.7m×短軸長0.52m×深さ0.08mを計測した。

ＳＫ40（第31図）

この土壙は、前述の土壙、ＳＫ38の西側に掘削された楕円形の平面を呈する。底部の凹凸を気にしなければ半円形の断面には、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土が流れ込むが西側上辺におい

てＳＫ41によって切り込まれている。規模は、長軸長0.89ｍ×短軸長0.56ｍ×深さ0.12ｍを測る。出土遺物には、６世紀中葉に比定される須恵器・杯蓋片を検出した。

ＳＫ41（第31図）

ＳＫ40に東側肩部を接するＳＫ40をひと回り小型化した平面形であり長軸長0.62ｍ×短軸長0.48ｍ×深さ0.12ｍを測る。黒褐色粘質土の堆積後、第４層である暗褐色粘質土が埋土として入り込む。この２層には、ＳＫ40と同類の須恵器片を出土しているが段階的にはＳＫ41の方が後に所在する。前述のＳＫ40とともに遺構上面は、O.P.＝9.75ｍで黄褐色砂質土（地山）の微高地に掘削されていた。

ＳＫ56（第31図）

長軸長約1.20ｍ×短軸長0.62ｍ×深さ0.17ｍを測るこの土壙は、ＳＥ09の東側に位置した。摺鉢状の断面には、中央部が最深で東西両端は極めて浅く黄褐色粘質土の分厚い層位に比して下層の黒褐色粘質土は薄い。完掘後において、10cm程度の湧水がみられ井戸状遺構として把握出来るものかもしれない。

ＳＫ57（第31図）

同地区北部のＳＢ03とＳＢ04の間に掘削された長軸長0.72ｍ×短軸長0.63ｍ×深さ0.09ｍの不整円形である。ＳＫ40に類似した埋土は、浅い半月型の断面に充填されていたが一部明黄褐色粘質土（地山）がブロック状に入り込む。南側掘方上辺には、径0.08ｍ程度の杭が斜目に打ち込まれた状態で検出された。出土遺物、成立時期は、ＳＫ40・41に類似する。

ＳＫ42（第32図）

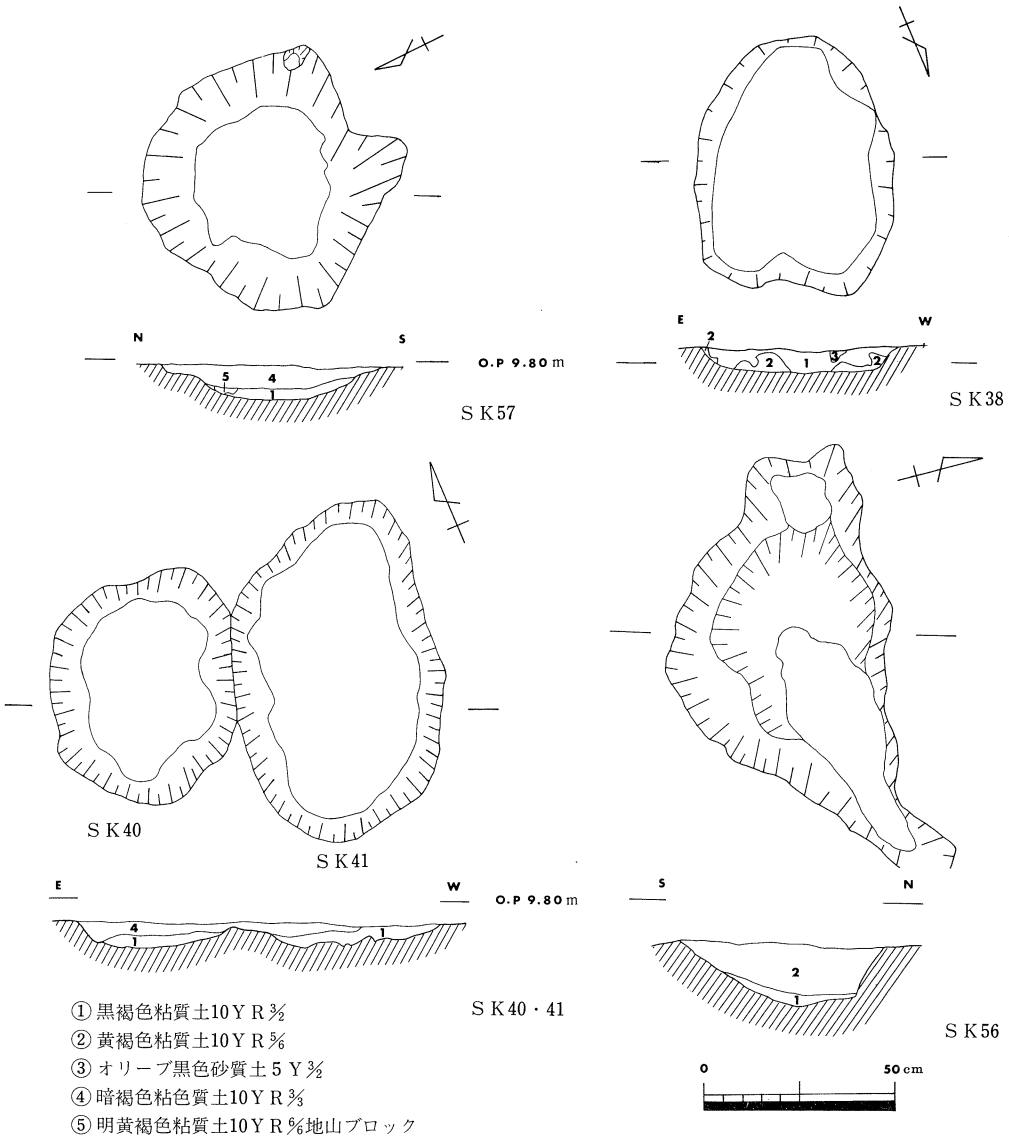
ＳＫ41の西方に位置しＳＫ42・43・44が一列を成す。アメーバ状の長軸長0.32ｍ×短軸長0.21ｍを測る0.05ｍ前後と極めて浅い。本遺跡内での古墳時代の遺構に普遍的な傾向として知られる暗褐色粘質土が埋土として知られた。浅いため出土遺物はない。尚、遺構上辺は、O.P.＝9.80ｍ前後。

ＳＫ43（第32図）

他の土壙と列を形成するもので南北に長い不整形な土壙でにぶい黄褐色粘質土の埋土が確認された。ＳＫ42と同様に遺物は出土していない。規模は、長軸長0.32ｍ×短軸長0.14ｍ×深さ0.04ｍの計測値を得た。

ＳＫ44（第32図）

前述の列を成した土壙の内、北端に位置し最も小さく長軸長0.17ｍ×短軸長0.13ｍ×深さ0.03ｍであった。灰黄褐色粘質土の入り込んだ半月型の断面中には、出土遺物はない。ＳＫ42・43・44は、共通して黄褐色砂質土（地山）に掘削されている。



第31図　SK38・40・41・56・57遺構図

SK45（第32図）

SK42～44の土壙群より北面に掘削された長軸長0.34m×短軸長0.30m×深さ0.11mの小土壙である。不整形の平面形内には、黒褐色粘質土・褐灰色粘質土の2層が堆積している。出土遺物としては、6世代に所在する杯身片が検出されただけであった。

SK46（第32図）

長軸長0.81m×短軸長0.31m×深さ0.03mの南北に細長いこの土壙は、SK42～44の北方、

1.5m地点に掘削されていた。埋土は、細分すると明褐色粘質土、にぶい褐色粘質土になるがおそらく共にブロック状堆積としておきたい。又、出土遺物として須恵器杯片の細片で時期決定資料には至らない。

ＳＫ47（第32図）

大形不明土壙であるＳＫ50の南側に立地する。規模は長軸長0.13m×短軸長0.12m×深さ0.04mを測る。不整円形でU字形断面には、暗褐色粘質土が流入する。時期決定に値いする資料は、検出されていない。

ＳＫ65（第32図）

長軸長0.27m×短軸長0.08m×深さ0.05mの不整形な土壙で底部は、凹凸が著しい。削平がなされてか出土遺物はない。

ＳＫ66（第32図）

ＳＢ03の南側に隣接した深さ0.07mと浅い。長軸長1.05m×短軸長0.50mの不整形の平面形内には、埋土として暗灰黄色粘質土、浅黄色粘質土の2層に限定された。凹凸のはげしい底部上面から須恵器・杯蓋片が見い出されたが時期決定は、出来ない。その他に、上層から土師器の細片でローリングを受けていた。

ＳＫ76（第32図）

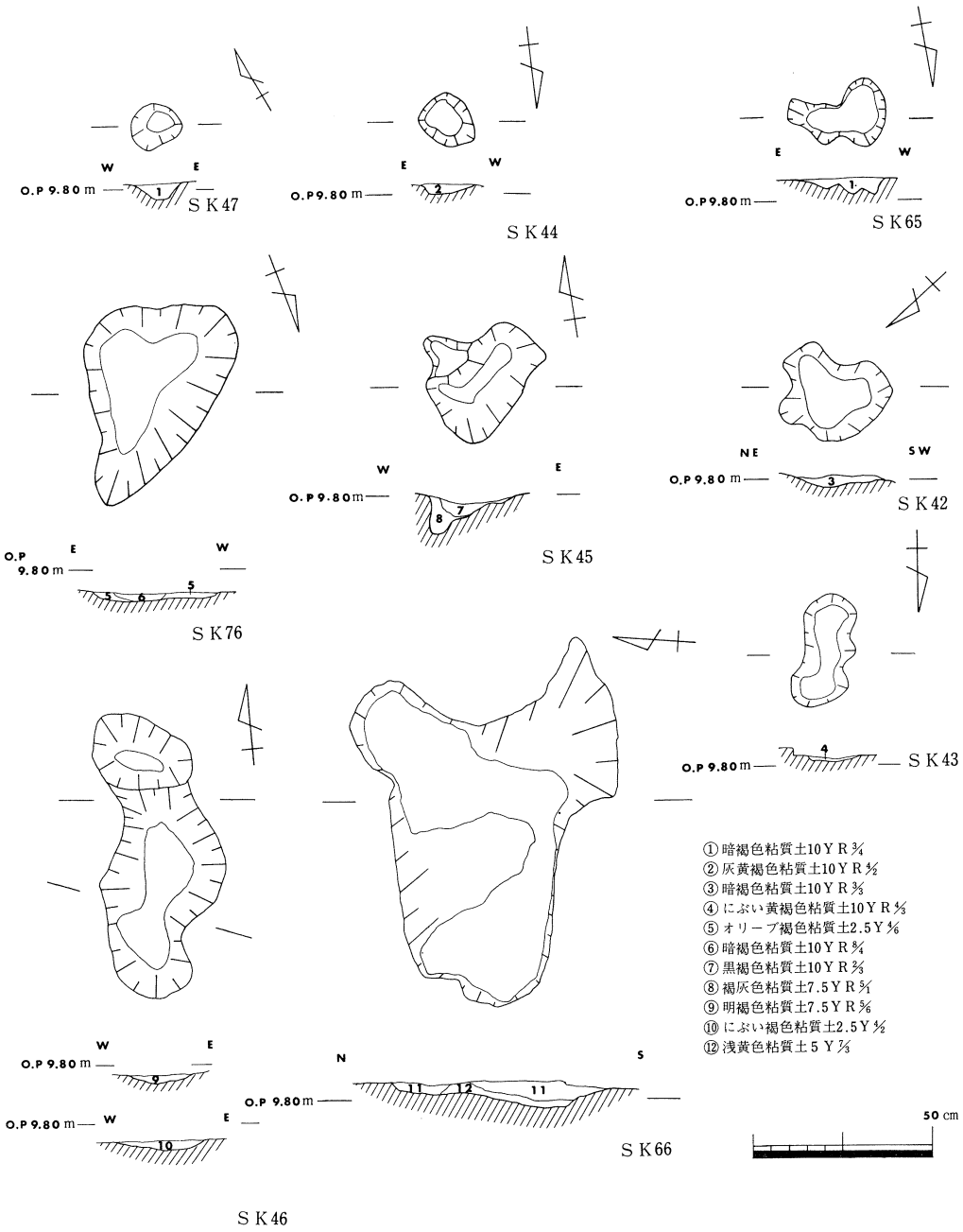
オリーブ褐色粘質土を主体に暗褐色粘質土がレンズ状に堆積したこの土壙は、長軸長0.62m×短軸長0.39m×深さ0.03mを計測した。極めて浅いため出土遺物はない。

ＳＫ50（第33図）

本地区北部にあってＳＥ07の南に隣接する土壙の底部のみ検出された遺構である。大型でアメーバ状を呈し長軸長3.35m×短軸長1.75mに達する須恵器片を黒褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗褐色粘質＋褐色粘質土に含有する土壙であった。底部は、大小合せ計4ケ所の土壙が見受け、特に小さいピットは北側に群を成して検出した。遺構上面は、O.P.＝9.80m前後で黄褐色砂質土(地山)の微高地に構成している為、削平が顕著であるがＳＫ53に類する性格付けされるものであろう。

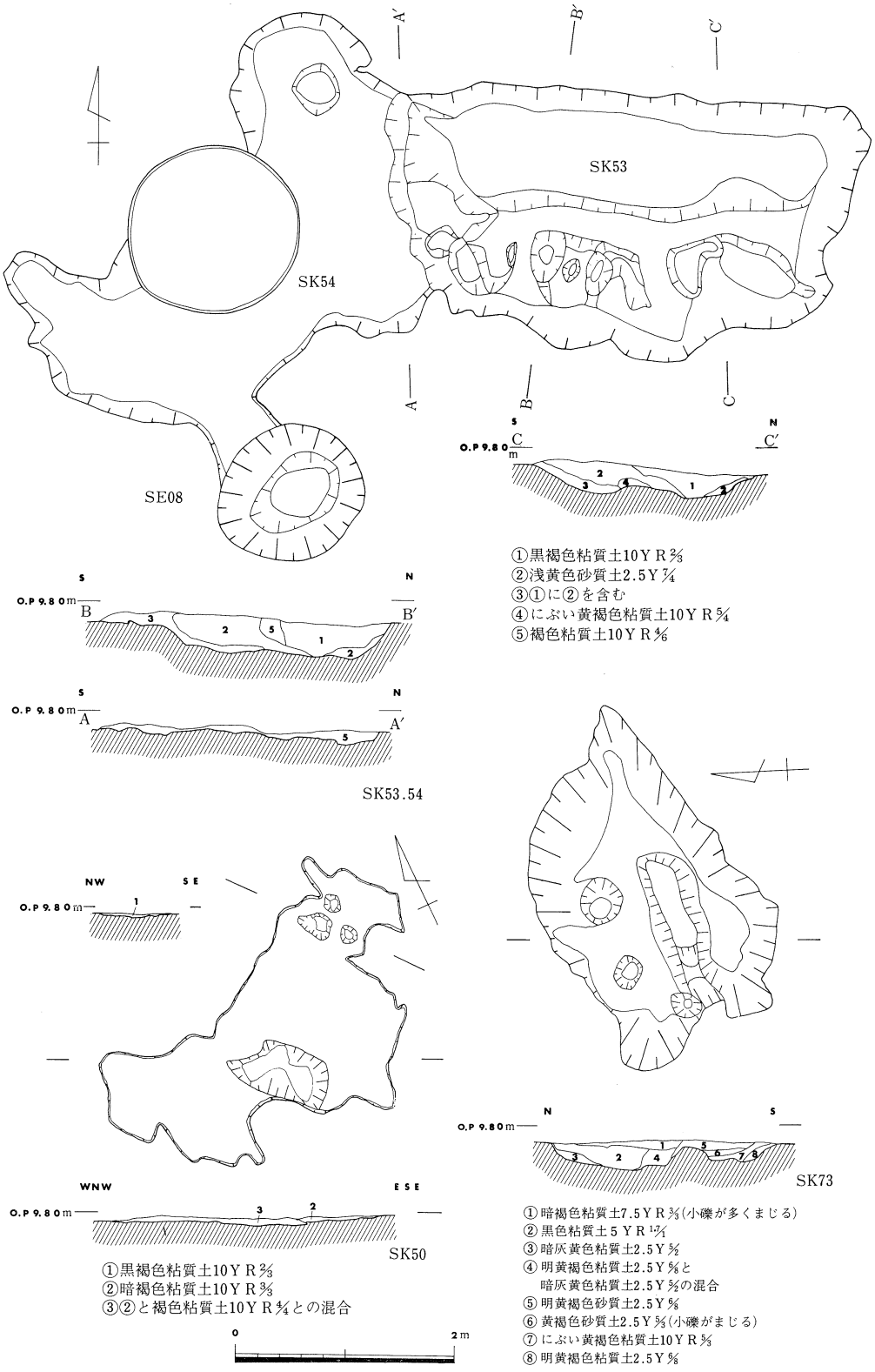
ＳＫ53（第33図）

6地区北中央部にＳＫ54とも隣接しＳＥ08へと一連的な遺構群が図示された比較的大形な土壙である。ＳＫ54との境界を便宜上、又は、構造上、埋土から判断してA－A′のラインとした。この土壙は、主軸を東西におき長軸長4.25m×短軸長2.25m×深さ 0.3mの長方形の不整形で北側は底部の凹凸が少くない。これは、埋土やこの土壙の性格に直結するものと考えられ南側は凹凸が激しい傾向にあり北側の整美な掘削後、浅黄色砂質土、黒褐色粘質土＋浅黄色砂質土の順に埋め戻された。北側の黒褐色粘質土を主体として南側は褐色粘質土、北側は浅黄色砂質

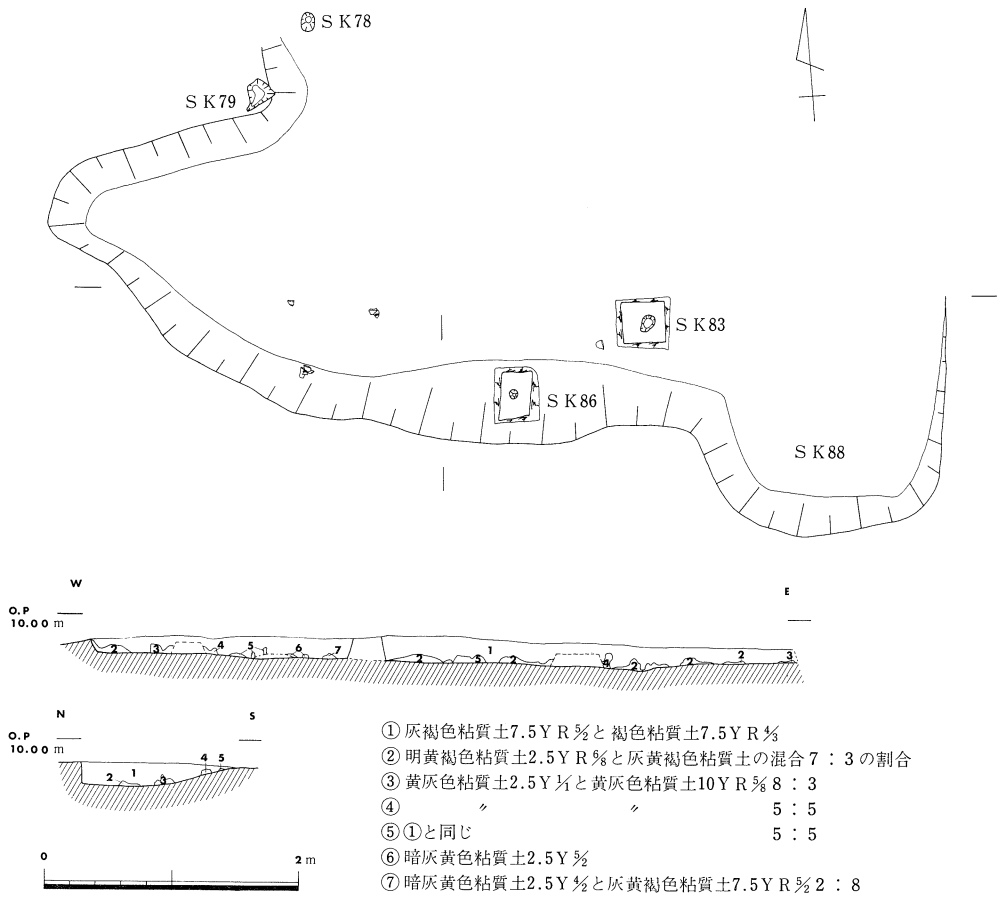


第32図　SK42・43・44・45・46・47・65・66・76遺構図

土によってあたかも埋葬用に使用された様相を呈するが確証はない。出土遺物としては、土師器片が知られるが図化出来ない。



第33図　SK50・53・54・73遺構図



第34図　SK78・79・86・87・88遺構図

SK54（第33図）

この土壙は、前述のSK53とSE08と連結する極めて浅い不整形な土壙ではあるが西側の口径約 1.5mの「糞溜め」によって欠損していた。又、北側には、長軸長0.46m×短軸長0.43m×深さ0.01mの小土壙が付加された土師器甕片が埋設された状態で検出されたが上半分の欠如と風化が顕著で取り上げと同時に土と化した。しかし、破片から判断してSK53、SE08とほぼ同時期の布留2式に属する。埋土は、褐色粘質土で底部には凹凸あり。尚、長軸長約 4.5m×短軸長1.75m×深さ0.15mの値を得た。蛇足になるが黄褐色粘質土(地山)に掘り込まれ微高地上でもさらにやや一段高い位置に存在した。

SK73（第33図）

SB04の南方で東西に主軸をおき長軸長3.35m×短軸長1.75m×深さ0.27mのアメーバ状に

掘削された土壙である。やや南側よりに地山を削り出した堤状の部分と北側には径0.30～0.45mの小土壙が底部に確認された。北側は、明黄褐色砂質土、黄褐色砂質土、にぶい黄褐色粘質土、明黄褐色粘質土がレンズ状に流れ込み南側は黒色粘質土を基調として第3・4層がブロック状に両壁面をはい上層に包含層と類似した暗褐色粘質土が被っいた。出土遺物量は、希少であるが布留2式に存在しよう甕・口縁端部を数点見い出した。

SK78・79・86・87・88（第34図）

SK73の東方に掘削された不整形な土壙で北側と東側の一部が第5地区の発掘によって削平、消滅していた。須恵器・土師器片を含んだ土壙内は、主として灰褐色粘質土＋褐色粘質土が埋土としてみられ第2～7層の6層が小ブロック状に底部上面へ堆積していた。SK78・79は、SK88と同様に黄褐色粘質土(地山)に掘り込まれ排水能力がない。埋土は、共に黒褐色粘質土が入り、SK78は長軸長0.15m×短軸長0.09m×深さ0.15m、SK79は長軸長0.27m×短軸長0.18m×深さ0.21mを計測した。層位から判断してSK88と同期に切り込まれSK86・87は包含層中位より掘り込んでいることからみてその後の営みである。後の2ピットは、0.08～0.10mの径を測り深さ0.25mとほぼ一定数値である。

不明土壙と名称付けられる遺構について少し要約すると本調査区については、次のようになる。

遺構全体図に図化されている遺構は、合計90ケ所に達するが元来、発掘調査初期にあってはもう少しカウントされていたが雨天と再精査の繰り返しから浅い遺構は消滅したものさえ存在する。

それらは、2～3例を除けば微高地に掘削され大群を構成している事は指摘されると同時に数ケ所単位の小群にもさらに群的な細分がなされよう。これは、各土壙が何らかの因果関係上に所在する事を意味している。

形態上に分類してみると、大方、アメーバ状、不整円形、隋円形、正円形の4タイプになろうが際立った相互関係はない。ただ、微高地の両サイド、すなわち、鞍部又はそれに移行するエリアに大形の不整形な土壙が見受けられる点が上げられる。

各土壙の規模は、大小様々で分類して説明出来る状況にはない。その中で、遺構の深さは、0.05m前後から0.30mと比較的浅いのは微高地、地山そのものの後世の幾多にわたる耕作行為が原因しているもので復元高は約O.P.10m前後で鞍部との差は 0.5mに及んでいたと相像される。

遺構に入り込んだ埋土は、古墳時代に属する土層として黒色粘質土、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土が大部分を占有し特に布留2式の土器を伴出する土層は黒色粘質土、6世紀前半期の須

恵器・土師器片が見い出される土層は黒褐色粘質土というデータ化が可能であった。

他遺構にも充当される現象ではあるが黄褐色粘質土(地山)で被れた旧河道上に形成されている点、微高地上に選地している事に注目したい。

性格付けは、保存状態等の諸条件を考慮しても保留にとどめたい。それらの土壙は、概ね、出土遺物から布留2式、6世紀前半期、中世期の3時期に看守されている点は埋土状態でも触れた。

註—1　大和川・今池遺跡、第1地区ＳＢ07にも類似の建物が検出されている。構造、規模から住居、倉庫以外の施設が考えられ、前者の建物以外として、簡易な建物が相定されることから一応「納屋」とした。必ずしも名称に固執してはおらず住居、倉庫と組み合せられるべき「作業場」としての「納屋」を呼称したにすぎない。従ってむしろ、ユニット関係を重視した考えによる。

註—2　場合によって、建物廃棄時、人為的に打ち込まれた可能性も所在するが上部の腐食で知るすべはない。

註—3　藤井利章『大和郡山市・発志院遺跡』「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　給41冊」奈良県立橿原考古学研究所　昭和55年3月

註—4　森村健一『棟持柱を有する掘立柱建物』「大和川・今池遺跡　Ⅱ　第3・4・5地区発掘調査報告書」大和川・今池遺跡調査会　1980.3

岡山県下での古墳時代に営まれた同種の建物はないが、次の類例が上げられる。

小中遺跡（岡崎県勝田郡勝央町岡）奈良～平安時代？

岡山県教育委員会「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(7)』

中国縦貫自動車建設に伴う発掘調査』1975.3　4区ＳＢ92　2間×2間

土井遺跡（岡山県阿哲郡哲西町矢田）中世

岡山県教育委員会「土井遺跡」『同上(20)、同上(10)』1977.6　ＳＢ01　2間×6間

二宮遺跡（岡山県津山市二宮）中世

岡山県教育委員会『二宮遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(28)」1978.9　2間×3間

岡山県類例は、岡山大学考古学教室、秋山浩三氏より御教示を得た。

註—5　胎土、焼成差から断面表示をした。

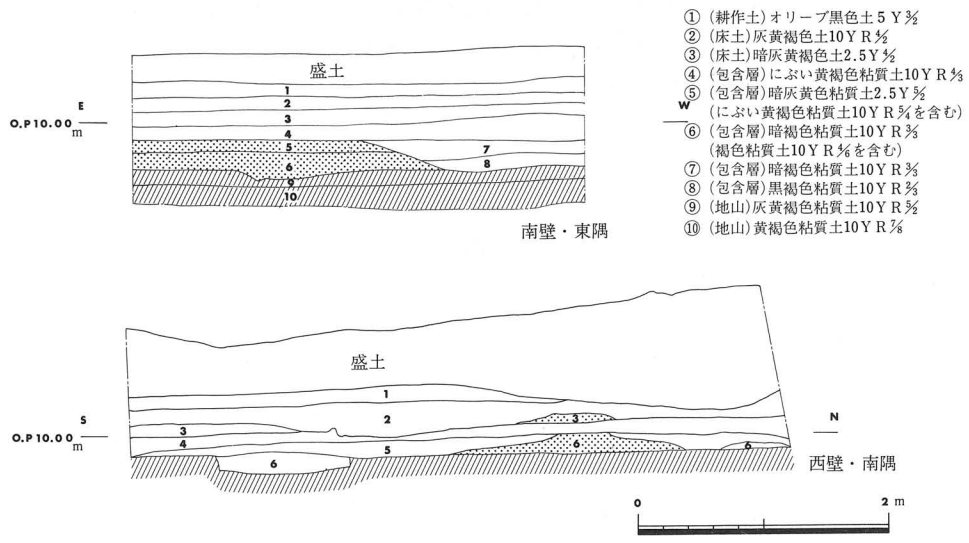
第7節　条里制遺構

南壁面・東隅

里境より東へ1町分の大畦の交差点で幅広く大畦東端は、検出されていない。畦は、第5・6層の2層から積み上げ下層の方が分厚く合計高は0.25mに達する。上面が後世の削平によって水平化したこの畦は、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土の2種類を利用して層序を作り西側に溝状遺構の検出があった。地山の灰黄褐色粘質土をある程度、整地して畦を築き上げ、にぶい黄褐色粘質土、床土、耕作土によって保護されていた。尚、畦畔部分は、他の土層より堅くしまる。

西壁・南隅

条1里にあたる大畦畔で2時期の築造が観察された。下層の畦畔は、下端幅1.90m、現存高0.15mと比較的低く第5層を積み上げ第6層に変化している。第2期の畦畔は、床土の暗灰黄褐色土と類似するが堅さに相違する。後の畦畔は、最近までの耕作によって下端幅 0.8m×現高0.07mが測れたにすぎず破損が目立つ。又、条里制復元の根拠にもなろう現存の畦畔との重復関係についてみると前者は直下に、後者は4～5mの誤差がある。しかし、その他の断面における畦畔の10数ケ所におよぶ条里制畦畔から復元線上に符合する。従って、後者の畦畔の移動は、層位から江戸時代中期以降で下層のそれは中世期（10～11世紀）まで朔れることが出土遺物、層位から判明した。



第35図　条里制遺構土層図

第８節　耕作用井戸

ＳＥ01（第36・37図）

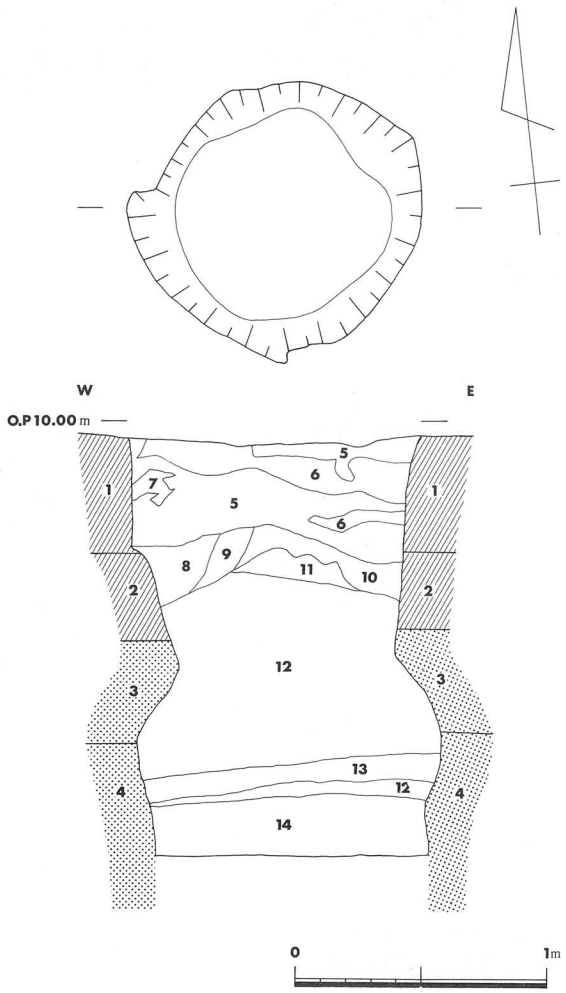
同地区南側に位置しＳＫ01・02・03が取り囲む。長軸長1.15m×短軸長1.10m×深さ 2.5mと耕作用井戸としては浅い部類に属する。不整円形の平面形からＧＬ0.85m下まで摺鉢形の断面から抉れた後、垂直ぎみに掘り込む。その抉れた場所は、丁度、地山の青灰色・明黄褐色砂礫層に当り湧水も多少認められるがメインは最下層付近であろう。この井戸の埋め戻し状況は、ＧＬより 0.7m下まではベルト状堆積に比して上層は７層のブロックが含まれる。

ＳＥ02（第37・38図）

北西部に位置するこの耕作用井戸は、長軸長3.28m×短軸長3.10m×深さ 7.4mに達する極めて深い。地山上面から −1.4mまで摺鉢形を呈し暗青灰色砂質土（地山）で多少抉れた後、最底部まで垂直に降下する。井戸内の埋土は、人力掘削の範囲では５層が水平層を構成する。最下層の地山は、青灰色砂礫層が最大の湧水層である。

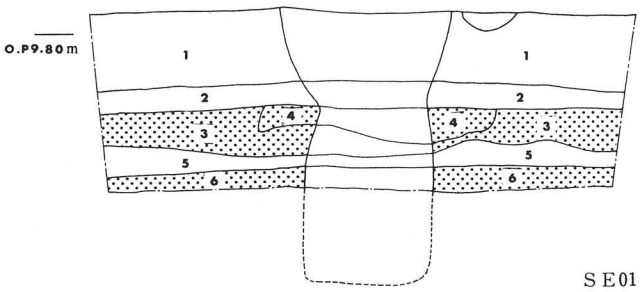
ＳＥ03（第37図）

北部最北端に掘削されたこの井戸は、他の井戸と異なりＶ字形の断面が特長である。長軸長2.10m



①明黄褐色粘質土(10ＹＲ5/8)
②①と灰白色粘質土(10ＹＲ7/1)の混合
③明褐色砂質土(7.5ＹＲ5/8)
④灰色砂質土(10Ｙ5/1)
⑤明黄褐色粘質土(10ＹＲ5/8)(鈍い黄褐色砂質土(10ＹＲ5/4)を含む)
⑥鈍い黄褐色砂質土(10ＹＲ5/4)と灰黄褐色粘質土(10ＹＲ4/2)の混合
⑦⑤に砂礫を含む
⑧褐灰色砂質土(7.5ＹＲ4/1
⑨明黄褐色粘質土(10ＹＲ5/8)(褐灰色砂質土(7.5ＹＲ4/1)が混入と明黄褐色砂質土(10ＹＲ5/8)
⑩　〃　
及び鈍い黄褐色粘質土(10ＹＲ5/3)の混合
⑪明黄褐色砂質土(10ＹＲ5/8)(暗青灰色砂質土(５ＢＧ3/1)を含む)
⑫灰色砂質土(礫を含む)(明黄褐色(10ＹＲ5/8)を含む明褐色砂質土(7.5ＹＲ5/6)を含む)
⑬オリーブ色粘質土(５Ｙ5/4)とオリーブ黄色粘質土(５Ｙ5/3)とオリーブ黒色粘質土(５Ｙ3/2)を含む
⑭青灰色粘質土(10ＢＧ5/1)(褐灰色粘質土(7.5ＹＲ4/1)

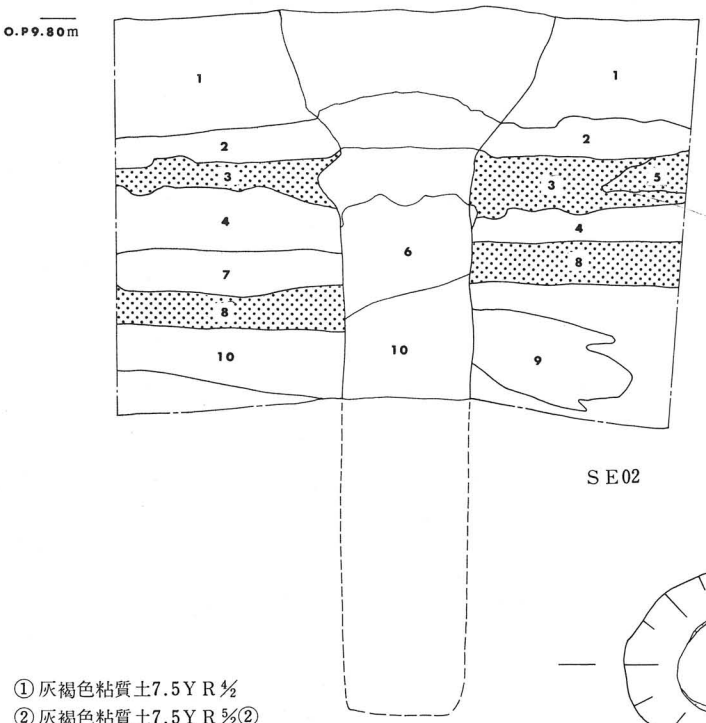
第36図　ＳＥ01遺構図



SE01

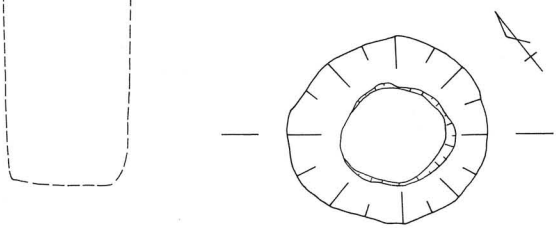
① 明黄褐色粘質土2.5Y⅚
② 明褐色砂礫層7.5YR⅝
③ 青灰色砂礫層5BG⅕
④ 明黄褐色砂礫層10YR⅚
(③に鉄分が浸透している)
⑤ 灰色粘土10Y⅕
⑥ 暗オリーブ灰色砂礫層5GY⅘

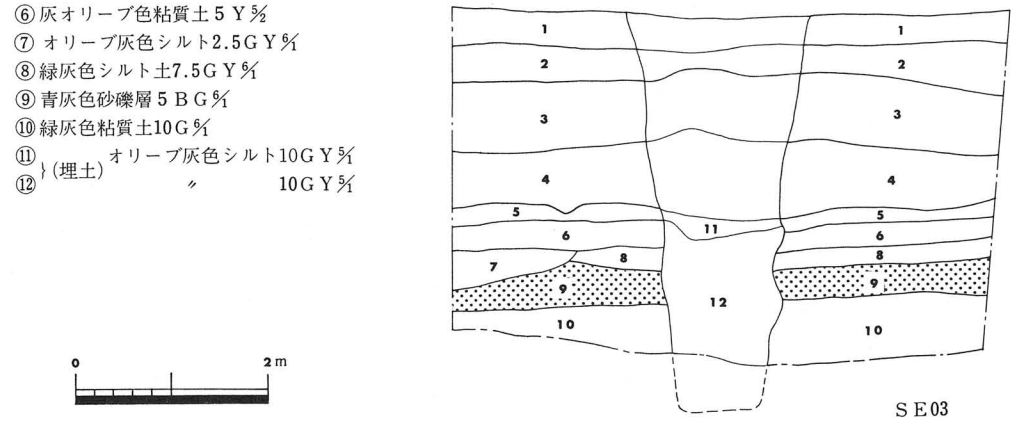
SE01　SE02　SE03



SE02

① 明黄褐色粘質土10YR⅚
② 灰オリーブ色粘質土7.5Y⅔
(明黄褐色土10YR⅝を含む)
③ 暗青灰色砂質土5BG⅘
(井戸の中のみ灰オリーブ色
砂質土5Y⅔を含む)
④ 暗オリーブ灰色粘質土2.5GY⅘
⑤ 青灰色砂質土5BG⅕と
明黄褐色砂質土10YR⅝の混合
⑥ (埋土)
黄橙色砂質土と粘質土の混合
10YR⅝
⑦ 黒褐色粘質土10YR⅜
⑧ 緑灰色砂質土10G⅕
⑨ オリーブ灰色砂質土と粘質の
混合10Y⅝
⑩ (埋土)
オリーブ黒色粘質土5Y⅜と
緑灰色粘質土10G⅕

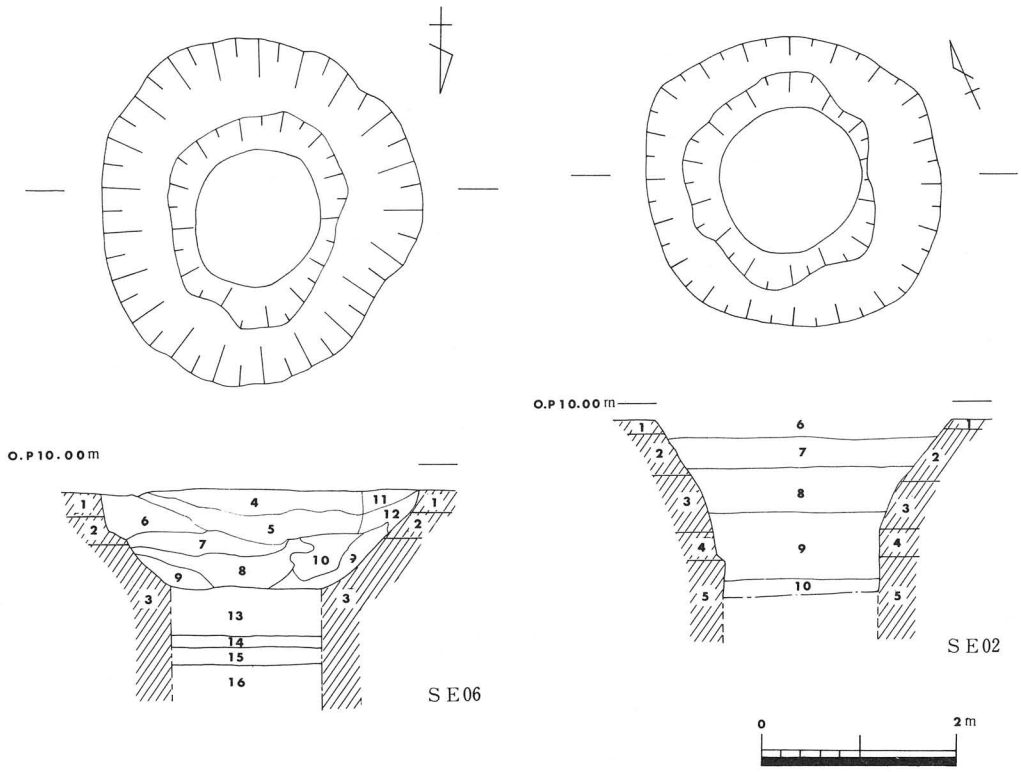




① 灰褐色粘質土7.5YR½
② 灰褐色粘質土7.5YR⅝②
③ 黄褐色土2.5Y⅚
④ 緑灰色シルト7.5GY⅕
⑤ 黒褐色粘質土7.5YR⅔
⑥ 灰オリーブ色粘質土5Y⅝
⑦ オリーブ灰色シルト2.5GY⅚
⑧ 緑灰色シルト土7.5GY⅙
⑨ 青灰色砂礫層5BG⅙
⑩ 緑灰色粘質土10G⅕
⑪ (埋土) オリーブ灰色シルト10GY⅝
⑫ 〃 10GY⅝

SE03

第37図　SE01・02・03遺構図



①灰黄褐色粘質土10YR5/2
②明黄褐色粘質土10YR6/6
③緑灰色粘質土5G5/1
④オリーブ褐色土2.5Y5/6
（ブロックで暗褐色粘質土10YR3/3を含む）
⑤黄褐色土2.5Y5/6
（ブロックで暗褐色粘質土10YR3/3を含む）
⑥暗灰色黄色土2.5Y5/2と②の混合
⑦緑灰色粘質土5G5/1
⑧緑灰色粘質土5G5/1
⑨灰色粘質土10Y5/1
⑩灰色粘質土7.5Y5/1
⑪黄褐色土2.5Y5/4
⑫暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
⑬暗緑灰色粘質土10GY5/1
⑭暗緑灰色粘質土10G5/1と
黒褐色粘質土2.5Y3/2
⑮緑灰色粘質土5G5/1と
暗オリーブ色粘質土2.5GY5/1
⑯灰オリーブ色粘質土7.5Y5/2と
緑灰色粘質土5G5/1

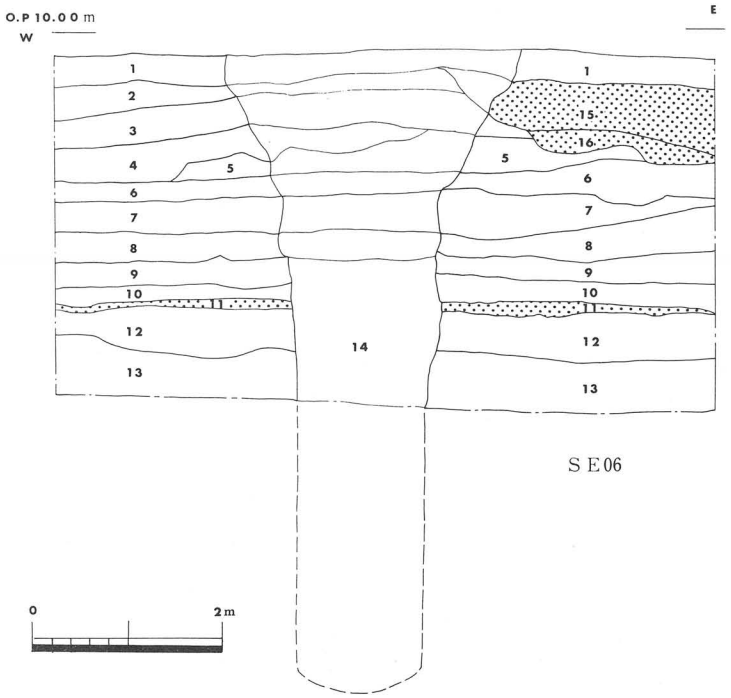
①暗オリーブ褐色粘質土2.5Y3/3
②明黄褐色粘質土10YR6/6
③明黄褐色粘質土2.5Y6/6
④緑灰色粘質土5G5/1
⑤灰オリーブ色土5Y5/2
⑥暗オリーブ褐色粘質土2.5Y3/3
（砂混り）
⑦暗緑灰色砂質土7.5GY5/1と
赤褐色砂質土2.5Y5/6
⑧明黄褐色粘質土10YR6/6
⑨黄褐色砂質土2.5Y5/4と
明褐色粘質土7.5YR5/6
⑩緑灰色砂質土7.5GY5/1

第38図　ＳＥ02・06遺構図

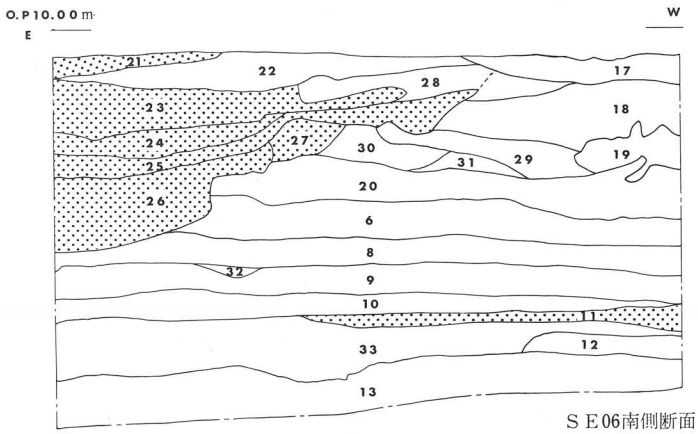
×短軸長1.92ｍ×深さ 4.2ｍを測った井戸の埋土は、概ねブロック状の堆積が見られたが第11・12層のオリーブ灰色シルトのみ水平層であった。この様な埋土下層の堆積が水平層を成しているのは、本調査区域内で検出された井戸の共通点ともいえる。湧水層は、青灰色砂礫層の一層に限定されよう。

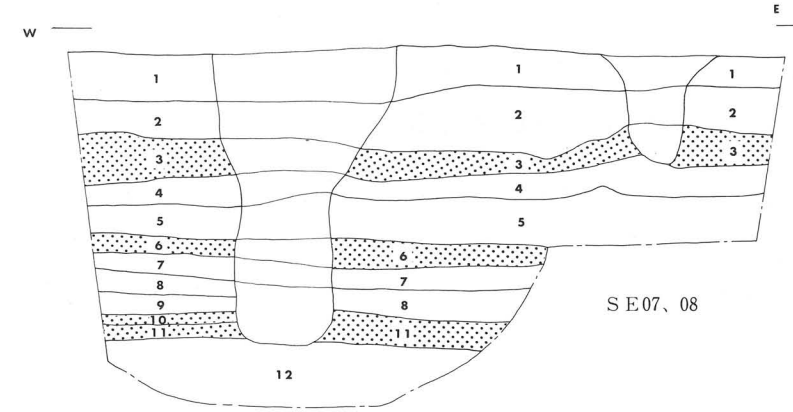
ＳＥ04

径 0.9ｍ、深さ 2.1ｍの摺鉢から垂直に移行する断面をもつ井戸である。この井戸よりも後



① 褐灰色粘質土10YR4/1(②を含む)
② 明黄褐色粘質土10YR6/6
③ 黄褐色粘質土10YR5/6
④ 緑灰色粘質土7.5GY5/1
(明褐色粘質土7.5YR5/6を含む)
⑤ 緑灰色粘質土5G5/1
(明褐色粘質土7.5YR5/6を含む)
⑥ 緑灰色粘質土10GY5/1
⑦ 灰色粘質土10G5/1
⑧ 黄灰色粘質土2.5Y4/1
⑨ 黒褐色粘質土7.5YR3/2
⑩ 黒褐色粘質土10YR3/3
⑪ オリーブ灰色砂質土5GY5/1
⑫ 緑灰色粘質土砂質土10GY5/1
⑬ 緑灰色粘質土砂質土5G5/1
⑭ (埋土)
暗緑灰色粘質土5G4/1
オリーブ灰色粘質土10Y5/2
⑮ 明黄褐色砂質土10YR6/6
⑯ 青灰色砂質土5BG5/1
⑰ 褐色粘質土10YR4/4
⑱ 灰黄色鋳質土2.5Y7/2
⑲ 明黄褐色粘質土10YR6/6
(褐色砂質土7.5YR4/3を含む)
⑳ 灰色粘質土10Y5/1
㉑ 褐灰色砂質土10YR5/1
㉒ 明褐灰色粘質＋砂質土7.5YR7/1
㉓ 橙色砂質土7.5YR6/6 ｝2×5cm
㉔ 灰褐色砂質土7.5YR5/2 ｝礫多く
㉕ 明黄褐色砂質土10YR7/6 ｝含む
㉖ 紫灰色砂質土5RP5/1
㉗ 緑灰色砂質土10G5/1
㉘ 明黄灰色粘質土10YR6/1
㉙ 明オリーブ灰色粘質土5GY7/1
㉚ 明青灰色粘質土5BG7/1
(㉗を含む)
㉛ 青灰色粘質土10BG5/1
㉜ 灰色粘質土7.5YR5/2





① 黄橙色砂質土10YR7/8
② 灰黄褐色砂礫層10YR5/2
③ 灰色砂礫層N5/1
④ 灰黄褐色粘質土10YR5/2
⑤ 緑灰色シルト層5G5/1
⑥ 暗オリーブ灰色
砂質土5GY4/1
⑦ 黒褐色粘質土10YR3/2
⑧ 灰オリーブ色粘質土5Y5/2
⑨ オリーブ灰色
砂粘質土2.5GY5/1
⑩ 灰色砂質土5Y5/1
⑪ 緑灰色砂質土10G5/1
⑫ 緑灰色粘質土5G5/1
⑬ (埋土)灰色粘質土5Y4/1

第39図　SE06・07・08遺構図

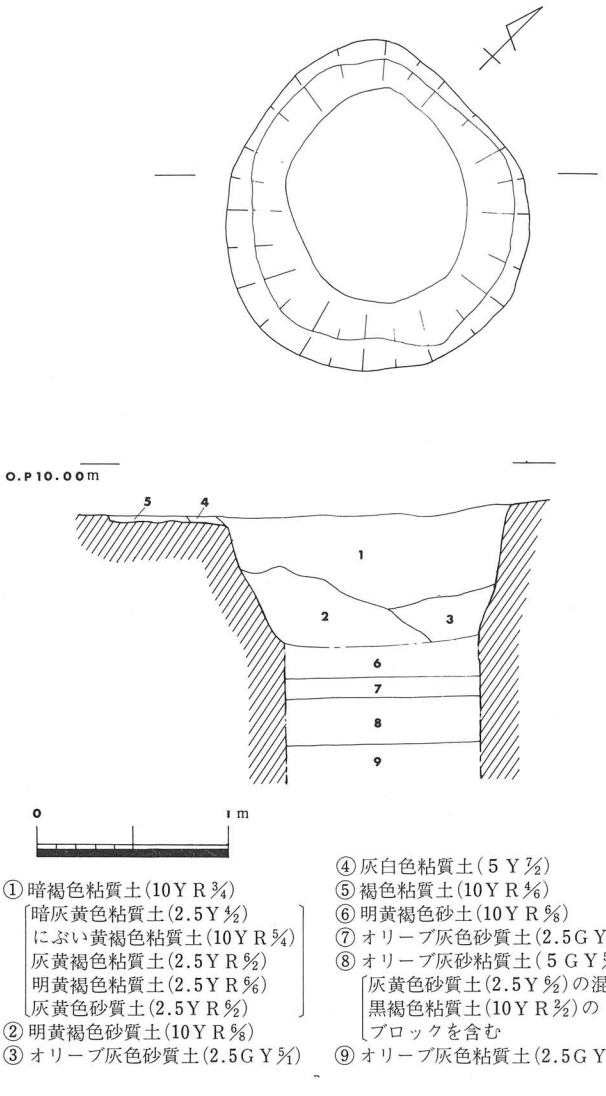
に開鑿されたＳＥ03によって南側が欠如する。湧水層は、ＧＬより 1.1ｍ下と最大層の地山(砂礫層)であったがその水量は少くない。場合によっては、ＳＥ04の掘削直後にＳＥ03が存在した可能性がある。

ＳＥ05

ＳＫ30の北、数ｍに位置するこの井戸は、長軸長 2.2ｍ×短軸長 1.9ｍ×深さ 4.5ｍの数値を求められた。構造的には、ＳＥ04に類似し湧水層も青灰色砂礫層の一層のみであった。

ＳＥ06（第38・39図）

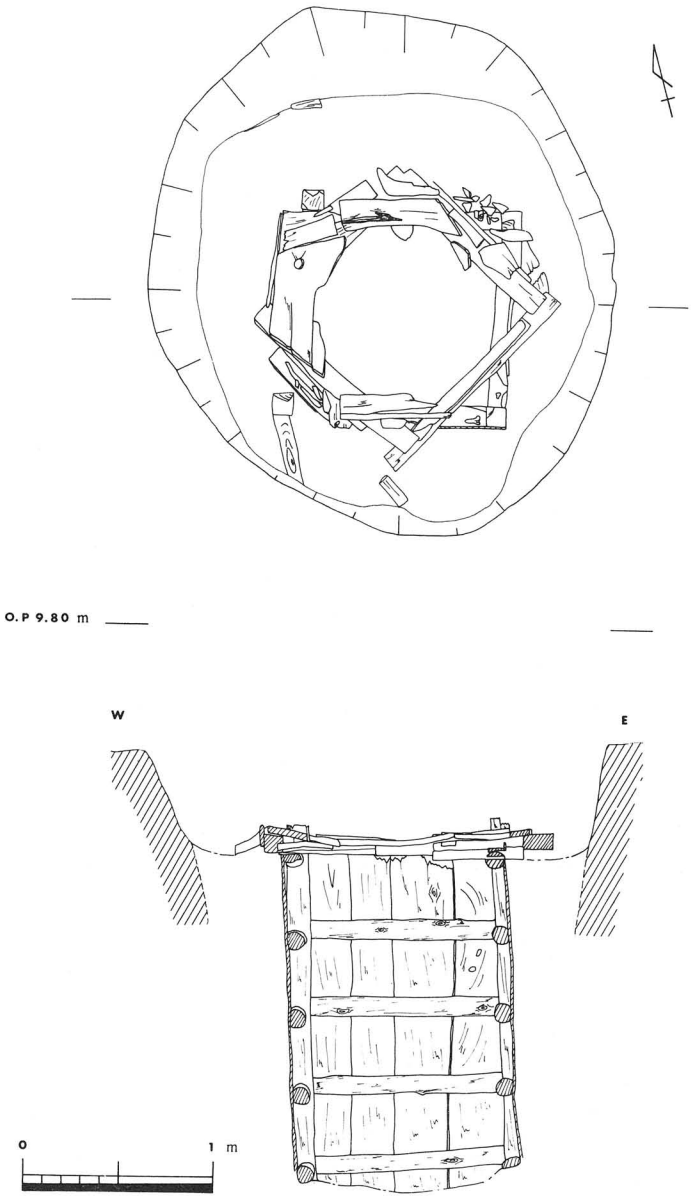
北地区中央の北端で長軸長3.64ｍ×短軸長3.15ｍ×深さ6.8ｍに及ぶ大形の井戸である。上辺より約１ｍ下まで摺鉢形の断面に垂直の径1.55ｍ程度の井筒が存在し、最下層の湧水まで至る。埋土としては、９種のレンズ、又はブロック状の堆積が段部分まで確認され、下層は水平層として埋め戻されている。湧水層は、中位のオリーブ灰色砂質土と最下層の青灰色砂礫層に限られその水量からして最下層の地層に対する依存度が大である。隣接するＳＫ92は、この井戸のはねつるべに使用された支柱の掘方と考えられる位置・埋土であった。



第40図　ＳＥ07遺構図

ＳＥ07（第39・40図）

ＳＫ50の北に近接している井戸で、いわゆる古墳時代の遺構をのせた微高地に掘削された長軸長1.75ｍ×短軸長1.60ｍ×深さ 3.1ｍと比較的浅い。不整円形のこの井戸の断面は、約 0.7

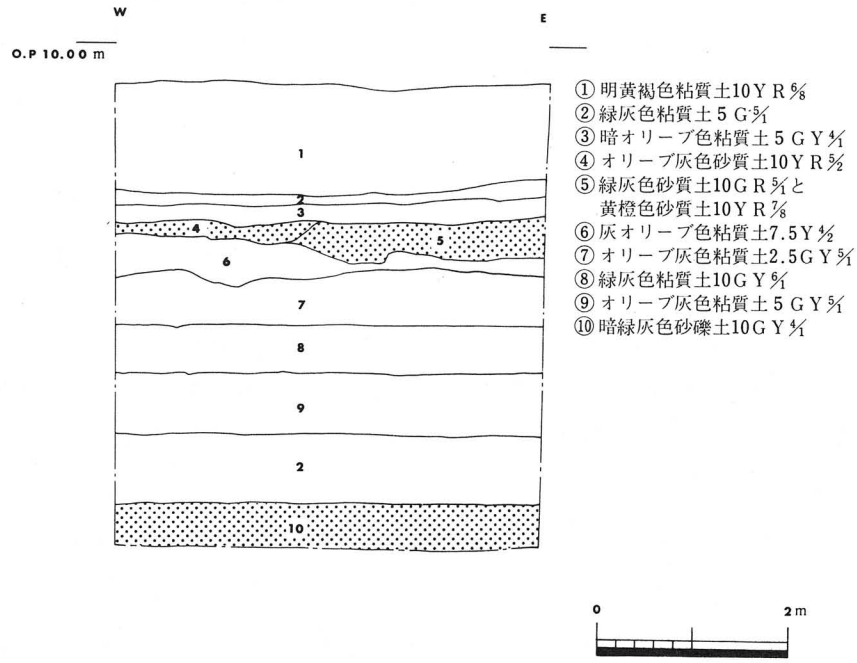


第41図　ＳＥ11遺構図

m下まで摺鉢状を呈し下半は垂直ぎみに底部に至る。段部分で埋土状況に変化が生じている。上層は大きなブロック状に暗褐色粘質土、黄褐色砂質土、オリーブ灰色砂質土が、下層は径１ｍ強の井側内にオリーブ灰色系統の土層がベルト状に埋め戻されていた。この井戸の湧水層は４層で灰色砂礫層、暗オリーブ灰色砂質土、緑灰色砂質土から摂取していた。尚、東側に隣接した古墳時代の井戸（ＳＥ03）は、その内の灰色砂礫層から水を汲み上げていた事になる。尚、遺構上辺高は、Ｏ．Ｐ．＝9.75ｍであった。

ＳＥ10

この井戸を含めＳＥ16までの７ケ所は、密集している中で最西端に位置する。長軸長 3.3ｍ×短軸長 2.7ｍ×深さ 5.2ｍの計測値を得たこの井戸は、上部をラッパ状に、下部は円筒状に窄たれている。上辺径に比して小さい径0.9ｍの円筒状内には水平層の埋土が、その上層は他の井戸と同様のブロック状堆積が知られた。



第42図　ＳＥ11土層図

素掘りのこの井戸は、ＧＬより−4.5ｍで顔を出した暗緑灰色砂礫層が湧水層と言える。

ＳＥ11（第41・42図）

ＳＥ10の北側において井側を木枠組したこの井戸は、長軸長2.9ｍ×短軸長2.45ｍ×深さ5.15ｍの規模であった。ＧＬよりマイナス 1.5ｍまで摺鉢状に掘削し以下は垂直ぎみに径 1.5ｍ位いであった。従って、段以下は井側に掘方の間瞭は 0.2ｍにすぎない。

井側構造について触れると 1.8ｍ前後の隅柱を３段重ねにして井側全体を支えている。各１段各に20cmの角材を使用して隅柱とし0.4ｍ各に丸太（φ8 cm）材を用いて横桟に組み立てる。各段とも幅21～32cm、厚さ0.5～1.0cmの杉材から各面に４枚の縦板によって間瞭のない様に嵌込む。１段目と２段目との継手は、縦板間を保持する意味もあって縦板と同規模の添板と添木となる角材（５×６cm）、丸太（φ5 ～10cm）を打ち込んでいた。井桁部分は、井側枠の0.95ｍ（内寸）方形より多少大きいサイズの規模で井側と交差する格好で使用材（10cm）の角材分だけ行い。さらに、その上部には井側枠と同一形態となるようにヒノキ材（２～３cm）を並べていたが南半分は欠損していた。この板材の外側は直線に切断されているのに対し内側は径 0.7ｍ程度の円形に削られていたが地表までの汲み上げ最上部は、甕又は、桶がのせられていたと考えられる。尚、井側西南の隅材は、一方を掘方につけた固定材が検出された。

埋土は、青灰色砂質土、粘質土がヘドロ状態となっており最下層から瀬戸焼・大皿片が出土遺物として見られた。付言になるが、井筒に使用された施設はなかった。

湧水層は、ＧＬより 1.5ｍ下と最大の水量を摂取したのは約 4.5ｍ下の暗緑灰色砂礫土であった。

ＳＥ12

1.5ｍの不整円形でラッパ状に開いた上部に径0.8ｍの垂直壁の円筒部で底部に至る。深さは2.5ｍと浅く湧水はほとんどなく掘削段階での廃棄と思われる節がある。

ＳＥ13

上辺長軸長が 2.1ｍを測る不整円形を呈するが東側は、後に掘削されたＳＥ14によって破壊されていた。６段の桶側井戸で井側を構成し約 5.1ｍに及び井桁に13板を１周とした瓦積みしていたと考えられる。又、井側径は 0.9ｍであり埋土は青緑色粘質土で出土遺物はない。

ＳＥ14

大きくラッパ状にひらいた上辺は 3.9ｍ、素掘りの井側は 1.5ｍ、深さ6.75ｍに達する。

ＳＥ15・16

共にＳＥ11の南東に位置しＳＥ15は、上辺径 2.7ｍの素掘り井戸で約5.85ｍで底部を検出した。ＳＥ16は、ＳＥ15より小回り小さくＳＥ11と同様の井側構造が検出されたが東側は調査区域外のため全容は不明であった。

耕作用井戸は、南側、北西部、北中央、北東側に位置していたが群を構成する北東部以外は散在的であった。上辺径は、概ね１ｍ、２ｍ、３ｍ台の分類が出来て最大はＳＥ14で最小はＳＥ12である。埋土は、ラッパ部がブロック状に、円筒部は数種の水平層によって確認された。図示した様に各井戸の湧水層は下層部の砂礫層が重要性を占めしている。その湧水層の深さが耕作用井戸の掘削深さにもつながっている。検出された井戸について構造的にみると素掘り井戸、桶側井戸、木組井戸に限定されるが主流を占めるのは、素掘り井戸である。この種の井戸が本来的に桶側井戸であった可能性は、下層での地山の抉れ、崩壊がない事から窺うことが出来よう。本遺跡第３地区ＳＥ08では、上部桶側の抜き取りが知り得られた。１段づつ、桶側のまま、掘削して積み重ねる桶側井戸の上部は、必ず瓦で一周する井側施設で３～４段の積み上げによって地表に至っている。第６地区ＳＥ11は、本遺跡内でも今まで１基しか検出されておらず、素掘り井戸→桶側井戸に継続する新方法の井戸構造である。

第9節　出土遺物

再三再四の記述したごとく洪積段丘中位上に位置した宿命であろうか遺構の削平に伴って遺物の細片化、ローリング状況が顕著で図化出来るものが少くない。特に、保存状態の良好な遺物も遺構内のは少くない。遺物の密度は、古墳時代の遺構上面に多く鞍部の希薄部分においては遺物も同様の状態であった。尚、出土遺物の総量は、コンテナにして約150杯分である。

石製品

出土した石製品は、石鏃－7、尖頭器－4、ナイフ形石器－1、不定形刃器－3、砥石－2、不明－2で総数19点になる。砥石・不明の5点は砂岩を用い、他はサヌカイトに石材を求めた打製石器である。この製品以外に、石材であるサヌカイトの石核・剝片等も6点の出土をみている。

これらの石器・サヌカイトはいずれも包含層中、それも地山直上からの検出例に限定され、遺構に固定されることはもちろん、他の遺物との共伴はない。それらは自然堆積の様相を呈し、遺構を伴わないことが決定的な致命傷で、当地区に本来的に定着していた遺物であるか否かは基本的に判断しがたく、他の地域からの自然流失の可能性もある。同時にその所属にしても、少なくとも古墳時代をさかのぼることはまちがいないにせよ、決定的資料に欠ける現在、原則としては不明である。

このように当地区の生活空間・時代に直結するにはやや消極な要因を有する遺物ではあるが、以下、その観察結果を中心にまとめておく。各個体の詳細は一覧表を参照していただきたい。

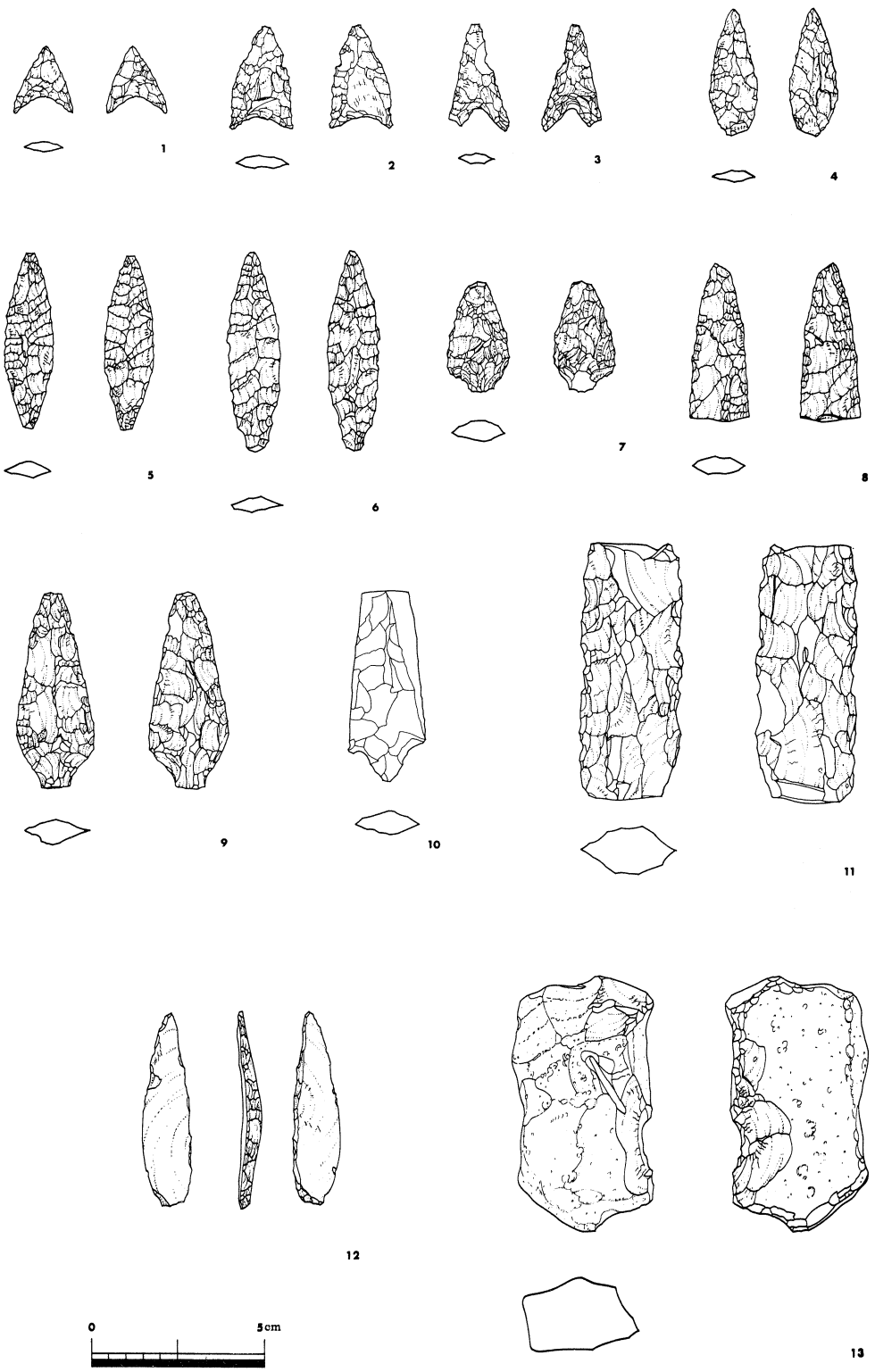
石鏃

凹基式－3例(1・2・3)、凸基式－4例(4・5・6・7)に区別でき、平基式はない。凹基式では全体的に調整がややあらいが、(1)の端部の鋭を、(3)の深い「わたくり」が目立つ。特にこの3例は、隣接した第4調査地区において検出された石鏃との関連性が今後の問題として注目される。凸基式は(4)が有茎である他は、無茎の形態に入る。とりわけ(6・7)は端正な柳葉形で、規則正しい押圧剝離の調整テクニックは同一のものと考えられる。

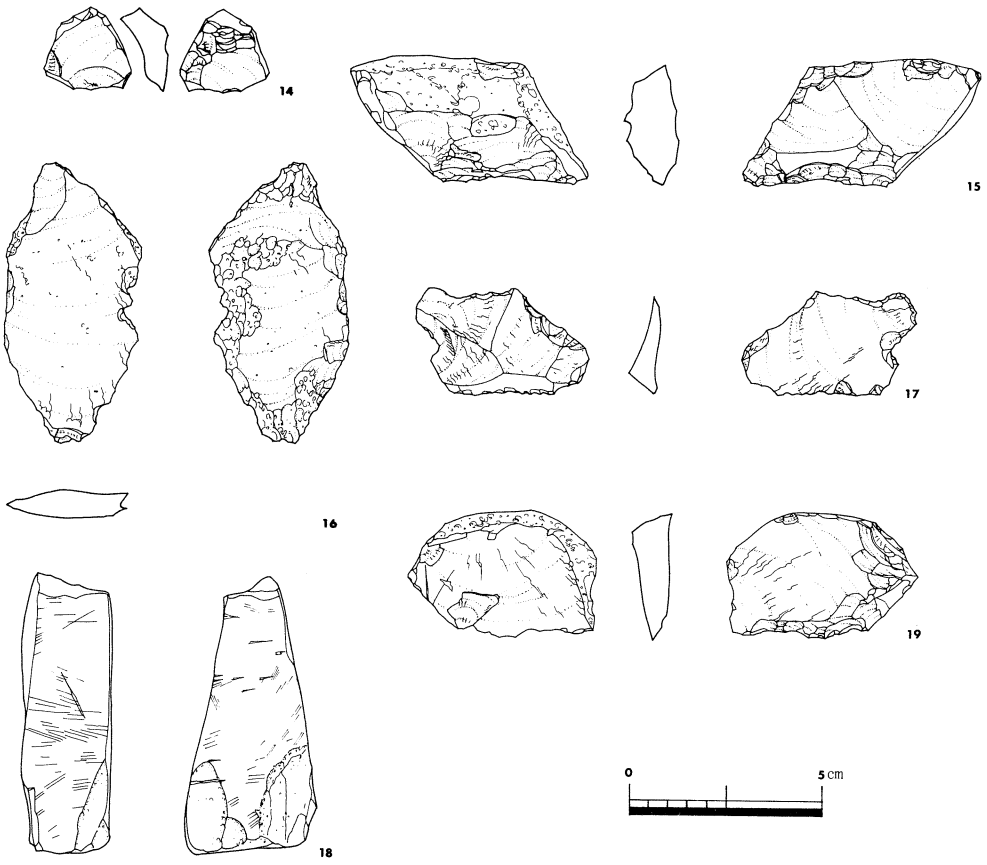
尖頭器

(8・9・10)は有舌尖頭器であり、少なくとも縄文期までさかのぼると考えてよいであろう。完形品はなく、いずれも欠損部分がありおしまれる。(8・9)では側縁における2次的な細かい剝離の調整が認められる。(10)は風化が著しいが、特徴的な舌部と逆刺を残存させている。(11)は石鏃型の尖頭器で大型。基端部の磨滅は著しい使用を示すものである。

ナイフ形石器



第43図　石製品



第44図　石製品

当遺跡においてはこれまでの調査を通じて検出例はなく、唯一の出土石器である。いわゆる「国府型ナイフ形石器」の範疇に入るもので、打面部が整形加工されている。刃縁には使用による細かな剝離痕をとどめる。

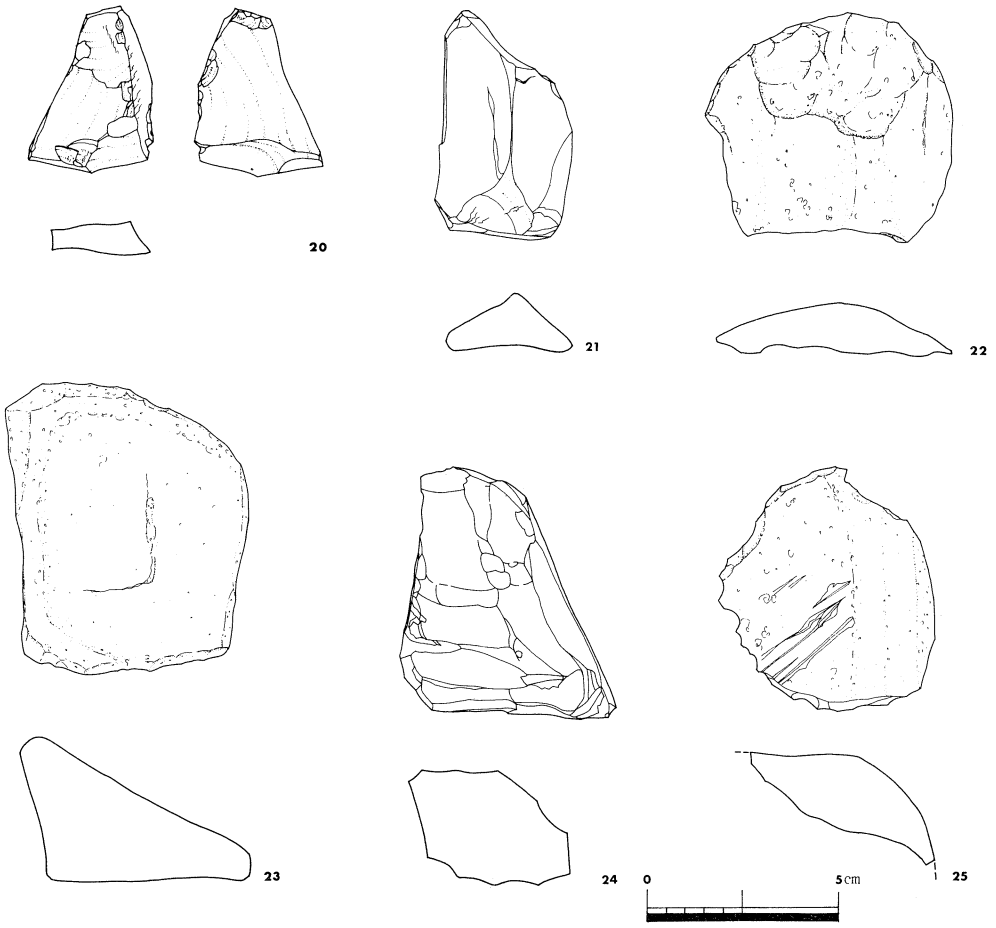
不定形刃器

剝片の末端ないしは側縁としたものである。(15)で周縁を整形加工してつまみ状の突起をつくりだす程度で、他の石製品にみられる様な入念な調整はあまりなく、剝片素材を最大限に利用する。(13・15)は片刃状、(14)は刃縁を剝離して薄く加工した両刃状をなす。

砥石

(16)は柱状形、(17)は砂岩の自然礫を利用したと思われるものの破片。両者とも磨滅と共に擦り減っており、線条痕が認められる。

不明



第45図　石製品

(18・19)ともに砂岩礫が素材で、磨滅痕・打撃痕を残す。砥石ないしは叩石的な利用方法が想定される。

剝片・石核

剝片(20・21・22)は大剝離面とともに頂部に打撃痕を残す。特に(20)は大型の縦長剝片で、側縁を刃縁にした可能性がある。(23・24・25)はサヌカイトの自然礫で、(23)の周縁には著しく打撃痕が残る。これらの存在で、即、当地での石器製作の有無を判断するにはやや早計で、可能性にとどめおく。

これまでの数次にわたる発掘調査の結果、当遺跡が5～6世紀代を中心とした広大な集落・水田址であることが明らかにされつつある。しかし前時代へさかのぼる、とりわけ石器類の出土がなかった訳ではないが、その数は他の遺物に比較して極端に少ない。第6地区もその例外にもれず、出土比率は低い。ただサヌカイト片・礫も含めた25点の検出は、他の先行した調査地区のそれをやや上回るものであった。そして、「国府型ナイフ形石器」の時代にまでさかのぼれる遺物を検出したことは、大きな成果でありまた重要であった。合わせて、隣接する第4地区の石鏃とほぼ同一グループと判断してよい石鏃をみたことは、説明するまでもないが時代の幅と連続する生活空間(地域)の拡大を示すものである。このことはまた、各地区毎の考察ではなく、密接な関連性に注目した、そして資料の累積にともなう遺構や他の遺物も含めた統合した検討が必要になってきたことを認識させるものであった。もちろん近接する周辺遺跡との総合的な視点も忘れてはならない。石器を媒介とした当遺跡へのアプローチには、今後の発掘調査に期待する部分も大きいが、その経過を踏えた上で、資料の累積と統合的な分析を命題としなければならないであろう。この問題に留意しつつ、第6地区の石器は全体の中のあくまでもひとつの区切りとして報告しておきたい。

大和川・今池遺跡の場合（第1～8地区）弥生式土器、石製品が総数 100点近く出土しているが古墳時代の遺構内であったり、地山直上、又は包含層、内には中近世期の遺構内において検出されている。段丘上の地山が削平され本来の遺構面も同時に消滅しているには残存遺構、遺物から判断して不可解である。本遺跡の弥生時代は、後にひかえている北花田遺跡（現在、新西除川によって一見、地形上の切断と誤解している向がある）脈絡している。従って、第1～8地区の調査区よりも、むしろ北花田遺跡よりの発掘調査に期待出来る。

それは、旧石器縄文・弥生時代の石器の出土は、直接的には本遺跡にかかる可能性はないが南に位置する北花田遺跡が古墳時代の生活空間につながる地理的環境の拡大が要因している。古墳時代を中心とした本遺跡よりも標高の高い立地条件に前代の撰地を余儀なくされていたのは、おそらく旧西除川の氾濫、河川の管理の不備、河内潟の環境に左右されていたと考えられる。最近、特に洪積段丘上の遺跡が河川との関連に於いて注目されて発掘されている例証に大阪市難波宮、向井神社跡—反正天皇陵古墳—が報告されている。

石製品観察表

名称	挿図	図版	• 出土地点 • 出土層位 • 遺構名	法量 (cm) (g) 現長 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
石鏃	43－6	PL.31 6	SE08 赤黒色粘質 土層	1.98 1.85 0.25 0.70	サヌカイト	凹基式。ゆるく外弯気味のカーブを描く三角形基部は比較的浅く丸く抉られる。脚は鋭くのびるが、先端を内側へやや入り込む。風化のため剝離調整の残存は良好ではない。	
石鏃	43－7	PL.31 8	D－I－48 黒褐色粘質 土層	3.10 1.40 0.30 2.15	サヌカイト	凹基式。先端近くと基部の側縁をこころもち抉ることにより、身部中央は外側へはりだしたようにややふくらみをもつ。基部の抉りは浅いが側縁の内弯のために外側へていた短い脚を突出させる。A面は厚味を有するためにステップ・フレイキングが目立ち、数次にわたる剝離調整がみられるのに対し、B面は側縁に一次の調整で終了しており、大剝離面を残す。	先端をやや欠く
石鏃	43－3	PL.31 3	D－II－48 黒褐色粘質 土層	3.22 1.83 0.35 1.60	サヌカイト	凹基式。細身の二等辺三角形。側縁に変化はなく直線的に調整されている。わたくりは深い。身部の剝離は大きく中軸までとどくほどであるが、先端、脚部のそれは比較的細かい。	先端と片脚を欠く。右側縁の上方に新しい損傷をうける。
石鏃	43－4	PL.31 4	C－II－54 黒褐色粘質 土層	3.80 1.50 0.40 2.30	サヌカイト	凸基式無茎。丸味をもつ身部から細身の先端がのびる。調整はやや荒いが、基部は極めて薄くつくられる。先端はB面側へ反っている。身部のやや下方に最大幅をもち、そこからが着柄にあたると思われ、A面の左側縁に、そこを境として先端にかけて刃こぼれと考えられる細かな剝離が観察できる。	
石鏃	43－5	PL.31 5	C－II－54 黒褐色粘質 土層	5.21 1.45 0.49 3.60	サヌカイト	凸基式。端正な柳葉形。剝離は中軸にまでとどく深いもので、両面とも一側縁ごとに調整され規則正しい。両側縁からの剝離は斜方向に交差する関係にあり、中軸にゆるい稜をもつ。	先端をやや欠損
石鏃	43－6	PL.31 6	C－II－34 黒褐色粘質 土層	5.99 1.50 0.46 4.60	サヌカイト	凸基式。柳葉形。基本的な剝離調整のあり方については石鏃一(6)に準じる。ただ、剝離の面積が比較的大きく粗雑な密があり、やや端正さに欠ける。また基部の両側縁を少々抉りとり内弯のカーブをもたせ、有茎に近い基部をつくりだしている。	先端を欠損させる。
石鏃	43－7	PL.31 8	D－I－89 黒褐色粘質 土層	3.30 1.79 0.78 4.55	サヌカイト	凸基式有茎。左右非対称で、左側縁が若干はりだす。茎部近くに最大厚をもち、全体的にぶ厚い感じをうける。そのために剝離調整は細かく数次におよぶ。	基部の欠損は新しい。
尖頭器	43－8	PL.31 7	D－II－71 黒褐色粘質 土層	4.68 1.72 0.70 6.10	サヌカイト	有舌尖頭器の基部欠損と考えられる。全面にいたる大きな剝離と側縁に集中する極めて細かな剝離の組合わせによる調整。側縁の細かな剝離は両面からの交互剝離である。	先端は斜方向に欠損する。
有舌尖頭器	43－9	PL.31 9	C－II－10 黒褐色粘質 土層、地山 直上	5.82 2.31 0.93 9.65	サヌカイト	基部がやや非対称にはりだしており、ここに最大幅、厚さもつ。中央にとどく大きな剝離をほどこして後、側縁を細かくさらに剝離して全体形を整える二次にわたる加工である。舌部は短いが明確に突出しており、下端はA面側から折られている。	先端はB面からの加撃により欠損する。
有舌尖頭器	43－10	PL.32 20	C－I－69 黒褐色粘質 土層	5.70 2.21 0.78 10.95	サヌカイト	風化が著しく灰白色に変色するとともに、剝離面の稜は極めて不明瞭で、細部にいたる観察が困難である。舌部は逆三角形の突出がきれいに残る。逆刺は左右非対称であるが、左側のものが本来に近い形状をとどめている。	風化による摩滅がはげしく、原形はほんの少々大き目になるであろう。

名称	挿図	図版	• 出土地点 • 出土層位 • 遺構名	法量 現長 幅 (cm) 厚 (g) 重量	石材	特徴	備考
尖頭器 (石槍)	43－11	PL.31 11	C－Ⅱ－58 黒褐色粘質 土層	7.65 2.95 1.50 51.30	サヌカイト	先端を欠損するが、出土例の中で最大の尖頭器基端部で若干せばまる以外は、部分的に凹凸が少々あるもののほぼ平行を保った側縁といえる石材が他より硬質のため、剝離にやや困難をともなったと思われ、かなり粗雑な剝離である。	全体に摩滅するが、特にB面―基部右側は着柄ためか著しく表面が「ツルツル」である。
ナイフ 形石器	43－12	PL.32 16	C－Ⅱ－54 黒褐色粘質 土層	5.78 1.42 0.48 4.15	サヌカイト	柳葉形状の翼状剝片を素材とする。両面はA面でネガティブ、B面でポジティブな剝離面に占有される。打面部から、基端にかけてA面からの細かな調整をうける。刃縁は外弯しており、部分的に剝離する。	先端をやや欠く
石核	43－13	PL.31 12	C－Ⅱ－71 黒褐色粘質 土層	7.56 3.90 2.89 107.25	サヌカイト	小形のサヌカイト礫。B面の右側縁以外の全ての縁に打撃痕をおびただしく残す。有効な剝離にはいずれも失敗している。	
剝片	44－14	PL.32 14	C－Ⅱ－71 黒褐色粘質 土層	2.35 2.23 1.30 5.35	サヌカイト	B面の縁にとりわけ著しい打撃による細かな剝離が多くある。	
不定形 刃器	44－15	PL.32 15	C－Ⅱ－55 黒褐色粘質 土層	6.29 3.40 1.43 33.25	サヌカイト	平行四辺形状。刃部は一側辺のみで、中央がやや内弯気味であるがほぼ直線。刃縁は厚みのある剝片のために、数次にわたるステップ・フレイキングの結果、急角度につくり出される。B面―上縁にはこの剝片をさらに剝離しようと試みた加撃痕を残す。	
剝片	44－16	PL.31 13	C－Ⅰ－48 黒褐色粘質 土層	7.48 3.60 0.80 25.20	サヌカイト	縦長剝片。A面―頂部のバルブは除かれている右側図から、B面にかけて自然面を残す。	B面―右側縁に細かな剝離があり、刃縁とした可能性がある。
不定形 刃器	44－17	PL.32 17	C－Ⅱ－45 黒褐色粘質 土層	4.80 2.87 0.75 8.80	サヌカイト	縦長剝片の側縁を直線の刃部としている。概形整形に手を加えており、細かな剝離を周縁に残し、特に「つまみ状」に突起させた部分がある刃縁はA面側に急角度をもち、刃こぼれが認められる。	
砥石	44－18	PL.32 18	C－Ⅱ－59 黒褐色粘質 土層	7.48 3.60 2.43 53.45	サヌカイト	柱状の石材の連続する2側面を使用している。両面ともに研磨の方向は長軸であり、特にA面側は擦り減りがはげしく、面が弯曲している。研磨方向に直交ないしは斜交する線条痕がいたる所にある。	
不定形 刃器	44－19	PL.32 19	C－Ⅱ－55 黒褐色粘質 土層	5.19 3.40 1.35 24.30	サヌカイト	楕円形状の横長剝片の末端にほぼ直線の刃部をもつ。上の側縁は自然面に囲まれており、剝離調整は全くない。B面の刃縁は使用痕と思われる剝離を残し、片刃状をなす。これはおそらく対象物に刃縁が一定して接していたためではないか。	
剝片	45－20	PL.31 10	C－Ⅱ－54 黒褐色粘質 土層	4.54 3.20 0.91 15.80	サヌカイト	横長剝片。上端は自然面を残す。B面―上端に再剝離を試みたと思われる打撃痕が認められる	

名称	挿図	図版	• 出土地点 • 出土層位 • 遺構名	法量 (cm) (g) 現長 幅 厚 重量	石材	特徴	備考
自然礫	45－21	PL.32 21	C－Ⅱ－58 黒褐色粘質 土層	5.90 3.60 1.54 40.55	サヌカイト	下方に剝離痕が唯一認められ、灰白色の風化からみて当時のものである。	
不明	45－22	PL.32 22	C－Ⅱ－57 黒褐色粘質 土層	6.48 5.73 1.42 74.95	砂岩	半円状の一面が擦ったように摩滅した礫の破片上方の一部は破壊されて剝離する。	砥石の砂片か。
不明	45－23	PL.32 23	C－Ⅰ－68 黒褐色粘質 土層	7.70 6.70 3.68 232.10	砂岩	断面が三角形の自然礫の最も広い面が擦り減っている。同じ面の上方の縁は面取りされたように斜目のゆるい角度をもって擦っている。そして上側面にいたっては、打撃による破損をうける。	砥石、擦石、叩石の機能が考えられるが、明らかでない。
自然礫	45－24	PL.32 24	C－Ⅱ－58 黒褐色粘質 土層	6.55 5.70 2.80 115.00	サヌカイト	上方に新しい剝離痕を2ケ所残す。	
砥石	45－25	PL.32 25	C－Ⅱ－10 黒褐色粘質 土層	6.48 5.60 2.00 88.30	砂岩	自然礫を利用した砥石の破片と思われる。研摩の方向は明確ではないが、長軸方向に抵抗のない擦り減りが感じられる。斜方向に走る数条の線刻を思わせる条痕がある。	

須恵器

杯蓋（第46図）

時期的に大きく分類して陶邑Ⅱ・Ⅲ型式に限定される。（6）は、腰高くやや丸い天井部に移行するプロポーションでシャープな稜、口縁端部の段を有する。（7）は、（6）のやや退した型式で口縁から天井部の傾斜が低い。（5）は、（6）に類似するがまだ口縁端部の段が凸帯ぎみにめぐる。（4）の口縁部は、ほぼ直線的に内傾し低い天井部に作りつける。（7）は、直立した口縁からやや腰高い天井部を成形。（1）と（9）は、同段階に帰属する。（1）は、宝珠つまみ部において落ち込む。極めて低く口縁端部を引き出した後、内側に力を加えて面取り風した（2）は、径も小さい。（3）は、その形態とテクニックから有蓋杯・蓋部かもしれない。Ⅱ型式の土器には、粗砂、礫がⅢ型式の土器には単発的な礫混入が引き立つ。

杯身（第46図）

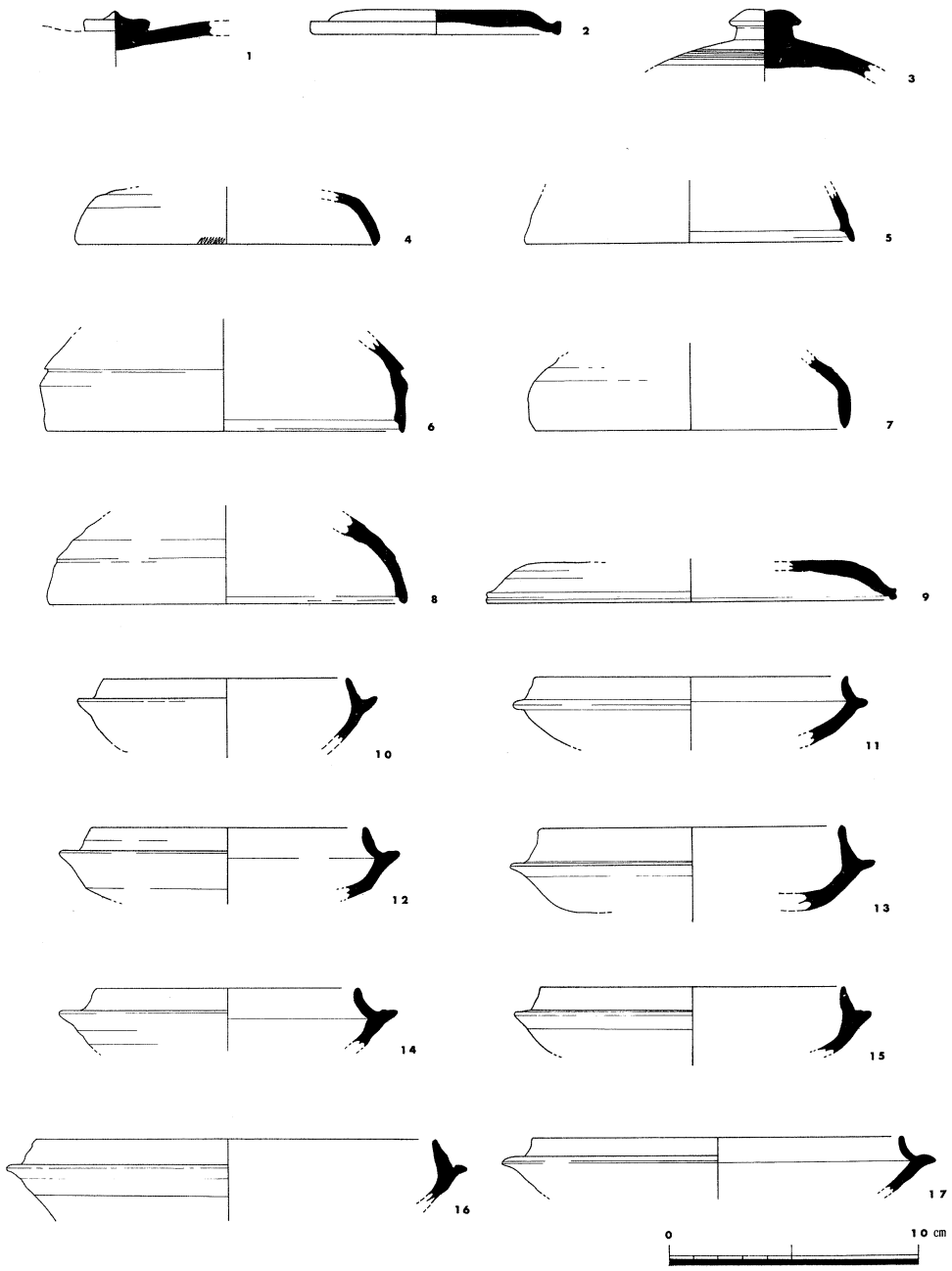
(10・13)は、陶邑Ⅱ型式2段階に属する特長をそなえるものである。(10)は、やや口径が小さく丸底につながる。(13)は、平底ぎみで大形化の傾向が知られ立上がりが著しい。そのプロポーションから陶邑Ⅱ型式3段階に比定される(11・12・14・15)は、出土遺物量からしても多い。(11)は、水平ぎみの受部に外反ぎみの立ち上がり浅いながらも丸味の底へ接続する。体部から受部にかけて一体として外上方に成形し回転ヘラ削りも明白な(12)は、内傾ぎみの舌状の立ち上がりをもつ。(14)は、受部を水平に強く引き出し口縁部を外弯させ端部を上方に引っぱり丸味をつける。やや小径な口縁は(12)と共通する。(15)の受部は分厚く短い直立した立ち上がり全体的なプロポーション、器壁にシャープさが欠ける。器高の低さ、口径の最大化、さらには、立ち上がり部の短かい(16・17)は、陶邑Ⅱ型式5段階である。(16)は、尖頭形に内傾した立ち上がりと比較的薄い受部、(17)は、水平方向にのばした受部に比して外反した立ち上がりは薄い。

高杯（第47図1）

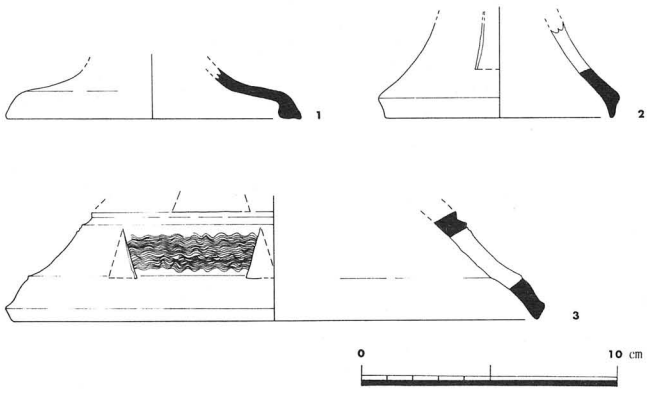
短脚でラッパ状にひらき裾部でしっかり踏ん張る。端部は、底面に対し面すら作られ内側に粘土の張り出し状態となる。これは、端部を一旦下方に引き出した後、上方に押えたためで内外ともに回転ナデが顕著である。尚、透しは、破片のためか不明である。底部径11.6cm、胎土―金雲母を含む密、焼成―良好、色調、内面、N8/、外面N8/。

高杯（第47図2）

脚部下半部のみで「ハ」の字形にひらき端部で内弯ぎみに直下させる陶邑Ⅰ型式4段階に類似しよう。直下させた端部は、下方に引き出した行為によって特にていねいな回転ナデが見い出される。四方長方形透しの高杯・底部径は、（推）8.6cmを測り、胎土は密である。焼成は、良好で色調は灰白色（N7/）を呈する。



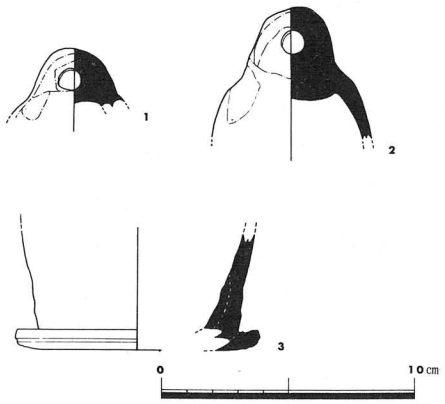
第46図　須恵器・杯身・蓋



第47図　須恵器・高杯・器台

器台（第47図３）

裾部の残存ではあったが三角形透し間に28本を単位とする波状文が緻密に施されていた。径21.0cmを計測した底部は、ラッパ状にいらいてきて端部を「く」字形なシャープの断面にまとめる。陶邑Ⅰ型式３段階らしく胎土・焼成ともに良好で色調は内面―暗緑色10ＧＹ3/1、灰白色Ｎ8/、青灰色５ＰＢ5/1、外面―黄灰色 2.5Ｙ6/1に発色していた。外面の一部に自然釉被る。ＳＢ03付近出土、黒褐色粘質土層。



第48図　須恵器・蛸壺・摺鉢

蛸壺（第48図１・２）

共に６世紀代の普遍的な形態を成し（１）よりも（２）の方が紐部分が尖出して大きい。テクニックとしては、指圧とナデのみで仕上げる。紐孔は、８～９mmと比較的小さい。（１）胎土―１～２mmの粗砂含む。焼成―良好、色調―内・外、青灰色５Ｂ6/1、断面―灰赤色 7.5Ｒ6/2、（２）Ｃ－Ⅱ－22出土、胎土－礫含む、焼成－良好、色調－灰白色Ｎ8/。

摺鉢（第48図３）

平らな一条の沈線をめぐらした基部に外上方へ直線的に作り上げる。厚み７mmの底部粘土板を含めて横ナデ仕上げ。精良な胎土の中に砂礫含む。色調―灰白色Ｎ8/。

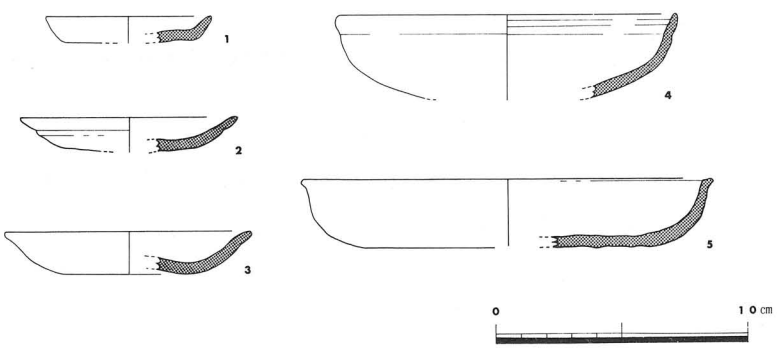
土師器（第49図）

奈良・平安時代の皿は、僅か2例にすぎない。やや丸味の底部から外上方に引き出した後、口縁端部を丸くまとめている。それによると思われる粘土紐痕が知られたのは、(4)である。(5)は、平滑な底部から内弯する口縁部に立ち上がり端部はほぼ水平につまみ出す。(4・5)には、暗文等の施文は剝離によって不明である。

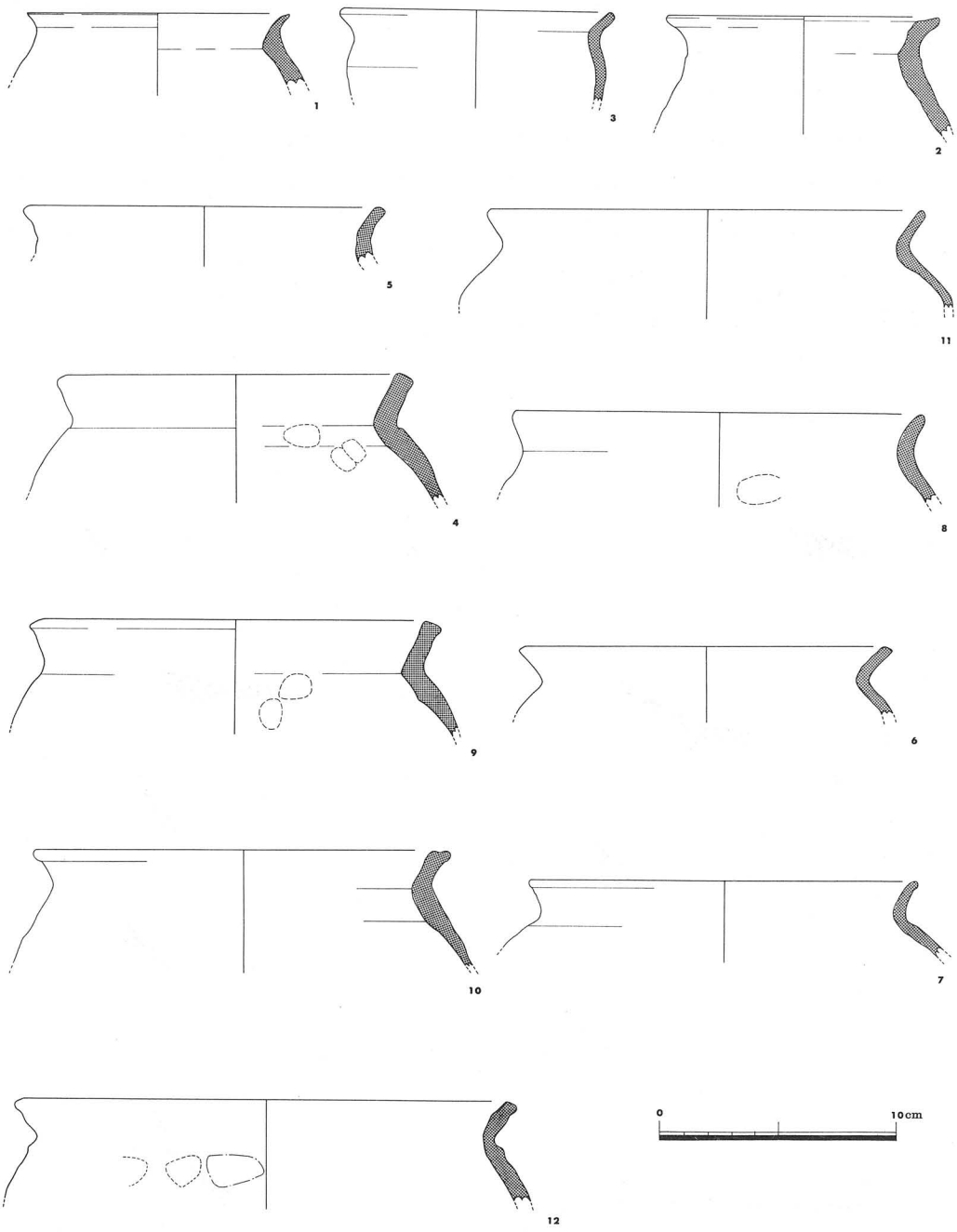
中世期の皿は、3例をレイアウトしたが3タイプに分類したもので総類 102点に及び決して良好な保存状態とは言えない。

口径 6.5m前後、器高1cm前後の小皿類とすべき土器で平らな底部から外上方にのばした短い口縁を作り出す。底部はナデ、口縁部は2～3回転ナデで調整しているがいわゆる「回転台」を利用しての技法ではなく「肘」、「膝」を活用した簡単な手法である。この(1)の形態を呈する比率は、3者の内で50%近く保有する。技法的には、(1)と同類視される(2)は口径 8.5m程度、器高 1.5cm程度とやや大型化し後述の(3)との中間サイズ的な生産品である。最後に、口径10cm弱、器高2cm弱の大型品となり(2)の半円形から「ヘソ皿」風・口縁端部の引き出しへとやや変遷が見受けられる。これらは、主として13世紀後半～14世紀前半に位置付けられるが詳細は伴出遺物の不足から避けたい。

甕の内、古墳時代の土器は、(3・5・6・7・8・11・12)の7個体について文章化すると次の様になる。(3)は、明らかに最大径を口径に求められる小型品。(5・8)は、同一型態に属すると思われる技法を有する分厚い器壁あり。(6・7・11)の口縁部は、外反し全体的にヨコナデを施し薄く仕上げる。(12)は、肩部から口縁にかけてヨコナデが不十分で粘土紐痕が明白に残る粗雑感を与える土器である。胎土や内面頸部の稜から9～10世紀代の土器には、(1・2・4・9・10)があり、(1・2)は壺かもしれない。又、全体に分厚く指圧がはげしい。



第49図　土師器・皿

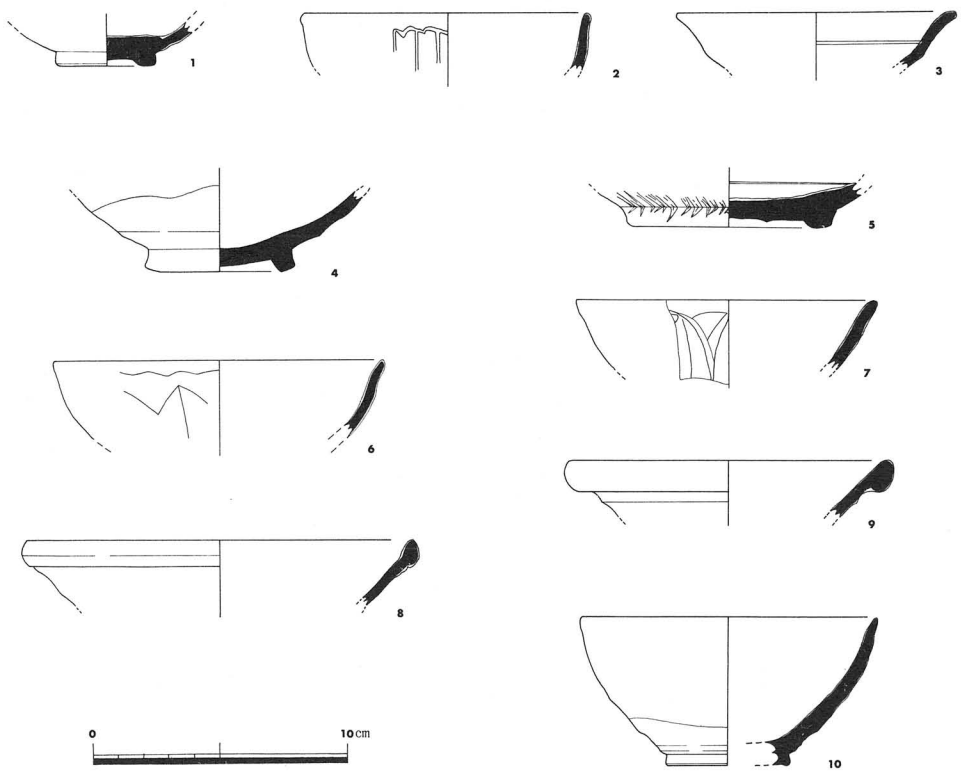


第50図　土師器・甕

陶磁器（第51図）

(10)は、瀬戸焼の鉄釉天目茶椀で後貫入が観察される比較的厚い釉調である。口縁部に段を残す室町時代中期の作風を示す。内面の段、口縁端部の外反から11世紀後半に位置付けられる（3）の白磁には、外面にも段を持つ。（3）とほぼ同期に所属される（5・8・9）の内、（5・8）は前段階の要素をもちそなえる。（9）は、釉薬が分厚く流れ、玉縁も（8）より大きく下半部のヘラ削りが荒くなって（5）よりも高く削り出した高台にしたものと接合する椀である。

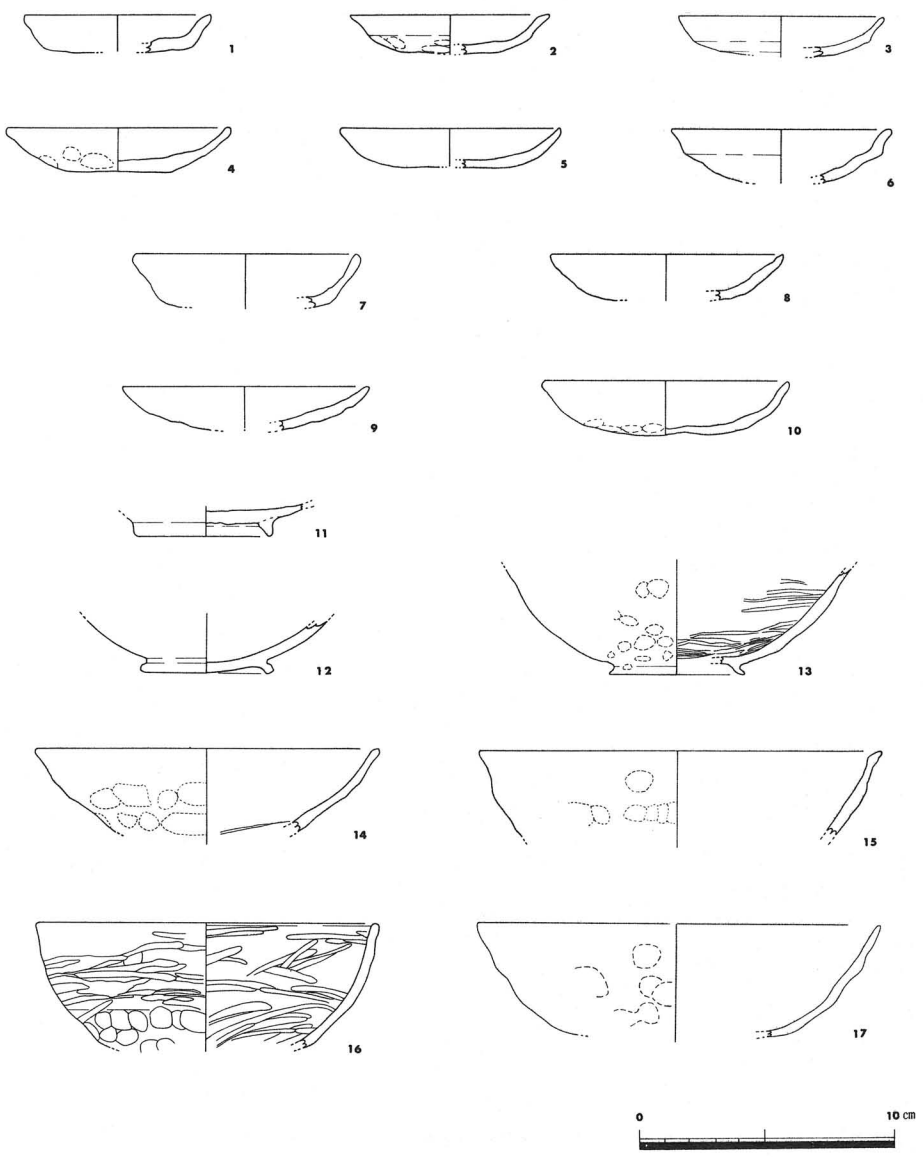
（1・2・6・7）の4個体は、龍泉窯素で（6）は鎬蓮弁の未発達な蓮弁の文様を有する12世紀後半に把握される土器である。鎬蓮弁が明白で文様の削り出しも深い（7）は、（1）に付加される。釉薬も分厚い（7）は、13世紀中葉の時期が与えられる。（1・6）は、（7）よりはるかに粉青が多い。（2）は、13世紀後半～14世紀中葉の作品で線刻による退化した蓮弁を施す後貫入が目立った椀である。尚、胎土も前者の3片に比して粗い。



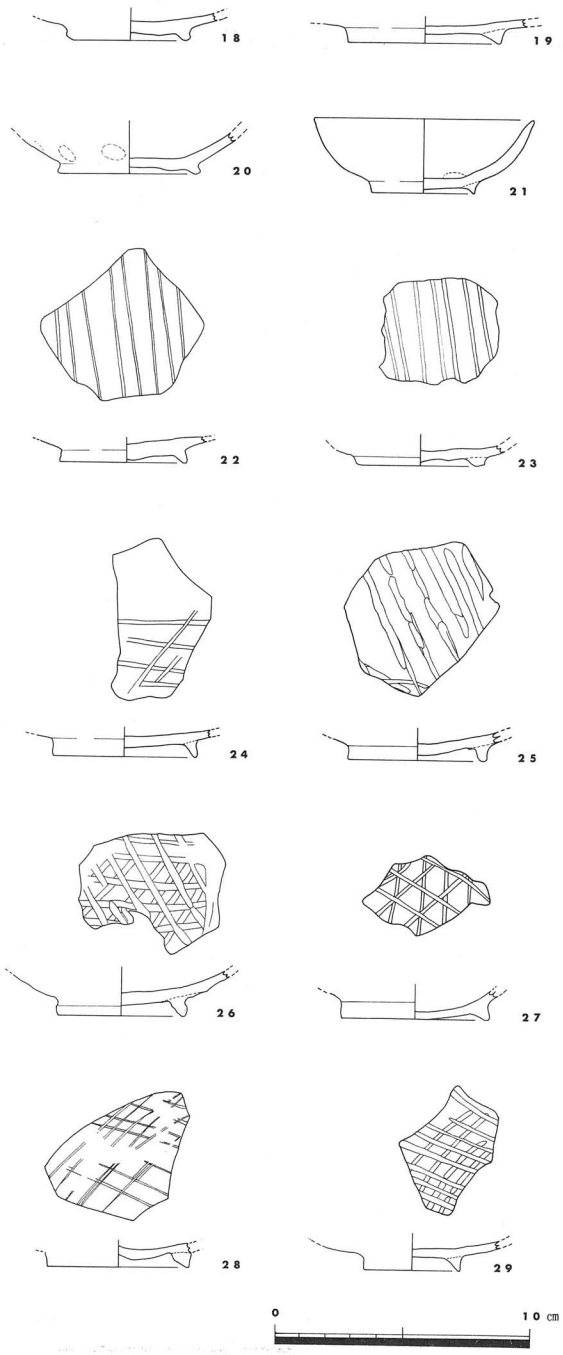
第51図　陶磁器

瓦器

その使用時期順にみると小皿(2・3・4・7)は、口径8cm前後で体部まで丸味をもたせその後、外反ぎみの口縁部化する。(1)は、底部がフラット、(5・6・8・9)は、底部から口縁部にかけてゆるいカーブをもつ。(10)に至っては、器壁の凹凸が指圧成形による未調整のままである。



第52図　瓦　器



第53図　瓦　器

小椀(21)は、(16)の椀と大差のない段階と考えられるが詳細な技法は不明である。椀(16)は、粗いながらも円弧状暗文を内外に認められ、(11・12・13)は、外にふんばった高台と内面の粗い円弧状暗文、外面は口縁付近に限られる。平底で全体に指頭圧が著しい(17)は、外面にまったく暗文が見当らない。(14)は、見込みに一部、平行暗文を施すだけで外方上へ直線的に引き出し器高も低くなる。見込みの暗文について触れると(26・27)の平行＋斜格子暗文、(24・28・29)の斜格子―(28は、ヘラ先端で施され線刻状の暗文)―(22・23)の2本を1単位とした平行暗文、(25)平行暗文だが太く断続的な暗文である。

(16)は、(26・27)に、(12・13)は、(28・29)に、(14)は、(22・23)に対応すると考えられ(16)はその相対年代を12世紀中葉としておきたい。

須恵器・杯蓋・杯身観察表

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器 杯蓋	46－1		C－Ⅰ－39 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.6 つまみ 径 2.7 つまみ 高 0.8	口縁部は破損のため不明 天井部は低く、平らで、中央部には扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り調整。内面は、回転ナデ調整。つまみは、はりつけ。ロクロ回転は、右回転。	密 2㎜くらいの礫を含む。	良好	外面：灰色 N⅝ 内面：灰白色 N⅞	
須恵器 杯蓋	46－2	PL. 29 2	D－Ⅰ－20 黒褐色粘質土層	口径(推)10.0 器高(残) 1.1	口縁部は、外下方にのび端部は丸い。天井部は、低く平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は、回転ヘラ削り調整。内面は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、左回転。	密	良好	外面：灰白色 N⅞ 内面：灰白色 N⅞	
須恵器 杯蓋	46－3		D－Ⅱ－71 黒褐色粘質土層	器高(残) 2.7 つまみ 径 2.9 つまみ 高 1 1.2	口縁部は破損のため不明 天井部は、やや丸く、中央部には、つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は、回転ナデ調整した後、回転カキ目調整をしている。内面は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密 1㎜くらいの粗砂を含む。	良好	外面：灰色 N⅝ 外面：灰色 7.5Y⅝	
須恵器 杯蓋	46－4		D－Ⅱ－70 黒褐色粘質土層	口径(推)11.9 器高(残) 2.1	口縁部は、やや内弯気味に外下方へ下り、端部は丸い。端部外面にヘラによる線刻がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密 0.5㎜くらいの粗砂を含む	良好	外面：灰色 N⅝ 内面：灰色 N⅝ 断面：赤褐色 10R⅝	
須恵器 杯蓋	46－5		C－Ⅱ－63 黒褐色粘質土層	口径(推)13.1 器高(残)2.05	口縁部は、外下方にのび、端部付近でより外反する。端部先端は、丸く端部内面に内傾する浅い凹面を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部は、破損のため不明他は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密 0.5㎜くらいの粗砂を含む	良好	外面：灰色 N⅝ 内面：灰色 N⅝	
須恵器 杯蓋	46－6	PL. 29 6	C－Ⅱ－13 黒褐色粘質土層	口径(推) 14.25 器高(残)3.75	口縁部は、垂直にのび、端部先端はやや鋭く、端部内面に内傾する浅い凹面を成す。稜はやや鋭い。天井部はやや丸いと思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部は破損のため不明。他は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、不明。	密 0.5㎜くらいの粗砂を含む	良好	外面：灰色 N⅝ 内面：灰色 N⅝	
須恵器 杯蓋	46－7		C－Ⅰ－68 黒褐色粘質土層	口径(推)12.5 器高(残) 3.0	口縁部は垂直にのび、端部は丸い。天井部は丸いと思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	やや粗 2㎜～3.5㎜くらいの礫を含む。	良好	外面：灰色 N⅝ 内面：灰色 N⅝	
須恵器 杯蓋	46－8	PL. 29 8	C－Ⅱ－20 黒褐色粘質土層	口径(推) 14.25 器高(残) 3.5	口縁部は、やや下外方にのび、端部は丸い。端部内面の凹線を有す。稜は鈍い。天井部は丸いと思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部は、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密	良好	外面：灰白色 N⅝ 内面：明青灰色 5B⅞	
須恵器 杯蓋	46－9	PL. 29 9	C－Ⅱ－47 黒褐色粘質土層	口径(推)16.3 器高(残) 1.5	口縁部は短く端部近くで屈曲し凹線を有し垂直に下る。端部は丸い。口縁部内面の近くで凹面を有す。天井部は低く平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面は、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整ロクロ回転は、右回転。	密	良好	外面：青灰色 5B⅝ 内面：灰色 N⅝	
須恵器 杯身	46－10	PL. 29 10	D－Ⅱ－70 黒褐色粘質土層	口径(推) 9.8 器高(残) 2.6	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は、上外方にのび、やや鋭い。底部は、浅く丸いと思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り調整。ロクロ回転は、右回転。	密 3㎜くらいの礫を含む。	良好	外面：灰白色 N⅞ 内面：灰色 N⅝ 断面：灰白色 N⅞	セット焼成
須恵器 杯身	46－11		D－Ⅱ－70 黒褐色粘質土層	口径(推)11.2 器高(残) 2.9	たちあがりは、内傾してのび、端部近くで垂直に立つ、端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は、浅く丸いと思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り調整。ロクロ回転は、右回転。	密 5㎜くらいの粗砂を含む。少量の金雲母を含む。	良好	外面：灰白色 7.5Y⅞ 内面：灰白色 7.5Y⅞	セット焼成
須恵器 杯身	46－12	PL. 29 12	C－Ⅰ－69 黒褐色粘質土層	口径(推)11.0 器高(残) 3.0	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、浅く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り調整。ロクロ回転は、右回転。	密 1㎜～5㎜の粗砂、礫を含む。	良好	外面：明青灰色 5B⅞ 内面：青灰色 5B⅝	

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器 杯身	46－13	PL.29 13	D－Ⅰ－58 黒褐色粘質土層	口径(推)12.2 器高(残) 3.4	たちあがりは、やや外弯しながらのびる。端部はほぼ丸い。受部は、水平にのび、端部に至る。端部はほぼ丸い。底部は浅く丸い。	マキアゲ・ミズビキ調整。回転ナデ調整。底部は、回転ヘラ削り調整。ロクロ回転は、左回転。	密	やや不良	外面：灰色 N5/ 内面：灰白色 N7/	セット焼成 底体部、灰かぶり。
須恵器 杯身	46－14	PL.29 14	C－Ⅰ－59 黒褐色粘質土層	口径(推)10.6 器高(残) 2.4	たちあがりは、内弯気味に上外方へのびる。端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。たちあがりと受け部の外面の境に凹線を有す。底部は、浅く丸いと思われる	マキアゲ・ミズビキ調整。回転ナデ調整。底部は、破損のため不明。ロクロ回転は、右回転。	微密	良好	外面：灰白色 N5/ 内面：灰白色 N7/	
須恵器 杯身	46－15	PL.29 15	D－Ⅱ－70 黒褐色粘質土層	口径(推)12.2 器高(残) 2.3	たちあがりは、内傾してのびる。端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび断面三角形を呈し、端部は丸い。底部は、浅く丸いと思われる。	マキアゲ・ミズビキ調整。回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密	良好	外面：灰白色 N7/ 内面：灰白色 N7/	
須恵器 杯身	46－16	PL.29 16	C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	口径(推)16.0 器高(残) 2.6	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。たちあがりと受け部の境、外面に鋭い凹線を有す。	マキアゲ・ミズビキ調整。回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密	良好	外面：灰白色 N7/ 内面：灰白色 7.5Y7/1	
須恵器 杯身	46－17	PL.29 17	C－Ⅱ－22 黒褐色粘質土層	口径(推)14.8 器高(残) 2.2	たちあがりは、内弯気味にのびる。端部は丸い。受部は、水平にのび、上面は山形である。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。底体部は、回転ヘラ削り調整。	密	良好	外面：灰色 N7/ 内面：灰色 N7/	セット焼成

須恵器・高杯・器台

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器 高杯	47－1		D－Ⅰ－79 黒褐色粘質土層	脚部径 (推) 11.5 器高(残) 2.1	脚部は、やや内弯気味に下外方へ下り、さらに端部付近で、内傾して下外方へ下る。端部は、肥厚していて、ほぼ平坦である。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	緻密	良好	外面：灰白色 N8/ 内面：灰白色 N8/	
須恵器 高杯	47－2		C－Ⅱ－12 黒褐色粘質土層	脚部径 (推) 8.6 器高(残) 3.9	脚部は、内弯気味に下外方へ下る。端部は、外面は少し内弯していて、浅い凹面を成す。端部先端はほぼ丸い。4方向、長方形の透しを有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密	良好	外面：灰色色 N7/ 内面：灰白色 N7/	
須恵器 器台	47－3		D－Ⅰ 北壁面	脚部径 (推) 20.4 器高(残) 4.3	脚部は、下外方に下り、端部近くで屈曲して端部に至る。端部は丸い。透し下部で鋭い凹線を有す三角形の透しを有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。波状文は、約1.5cmはばのものを下半分を先に施文した後、その上から上半分を調整している。他は、回転ナデ調整。ロクロ回転は、右回転。	密	良好	外面：黄灰色 2.5Y5/1 内面： 上、暗緑色 10GY3/1 中、灰白色 N8/ 下、青灰色 5PB5/1	波状文、ハケ目、28本

（ロクロ回転方向は、調整時とした）

須恵器・蛸壺・摺鉢

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器 蛸壺	48－1		溝1 黒褐色粘質土層	器高(残) 2.7 釣手 高 1.8 紐穴径 0.9	体部は破損のため不明であるが、釣鐘形を成していたと思われる。上部に厚い釣手を付し、中央に細紐穴を有する。	指による、不整方向のナデ調整。 釣手部は指圧調整。紐穴は両側突孔。	密 1mm～0.2mmくらいの粗砂を含む。小量の雲母を含む。	良好	外面：青灰色 5B5/1 内面：青灰色 5B5/1 断面：灰赤色 7.5R5/2	
須恵器 蛸壺	48－2		C－Ⅱ－22 黒褐色粘質土層	器高(残) 5.2 釣手 高 2.1 紐穴径 0.85	体部は、全体的に釣鐘形と考えられる。上部に厚い釣手を付し、中央に紐穴を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部内面は、回転ナデ調整 外面は、不整方向のナデ調整。 釣手部は、指圧調整。紐穴は、片側突孔。	密	良好	外面：灰白色 N5/ 内面：灰白色 N5/	
須恵器 摺鉢	48－3	PL.29 3	C－Ⅱ－55 黒褐色粘質土層	器高(残)4.65 基部径(推) 9.6	基部は、上外方へ突出し端部は、丸みをもち、一条の凹線を有する。体部はやや外傾してのびる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。 ロクロ回転は、右回転。	密 5mm～3mmの礫を含む。	良好	外面：灰白色 N5/ 内面：灰白色 N5/	

土師器・皿

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
土師器 皿	49－1		C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	口径(推) 6.6 器高(残) 1.0	口縁部は、屈曲して外上方にのび、端部は丸い。底部は、ほぼ平坦。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は指圧調整。内面はナデ調整。	密	良好	外面：橙色 7.5YR7/6 内面：橙色 7.5YR7/6	
土師器 皿	49－3		C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.6 器高(残) 1.3	口縁部は、ゆるやかに外上方にのび、端部は丸い底部は浅く、ほぼ平坦。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は指圧調整。内面は摩耗激しく不明。	密 0.2～2mmの白色粗砂を含む	良好	外面：浅黄橙色 10YR8/4 内面：灰白色 10YR8/2	
土師器 皿	49－3		C－Ⅱ－64 黒褐色粘質土層	口径(推) 9.8 器高(残) 1.5	口縁部は、ゆるやかに外上方にのび、僅かに外反して終る。底部はやや深く、中央が凸となる。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は指圧調整。内面はナデ調整。	密 1.5mmの黒色粗砂を含む。	良好	外面：にぶい橙色 7.5YR7/4 内面：にぶい黄橙色 10YR8/4	
土師器 皿	49－4	PL.28 6	C－Ⅱ－49 黒褐色粘質土層	口径(推)13.4 器高(残) 3.3	口縁部は、外上方にのび端部内側に一条の沈線を巡らす。底部は、深くゆるやかに内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は、指圧調整の後ナデ調整。内面はナデ調整。	密	良好	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：橙色 7.5YR8/6 断面：浅黄橙色 10YR8/3	
土師器 皿	49－5	PL.28 7	C－Ⅱ－30 黒褐色粘質土層	口径(推)16.0 器高(残) 2.8	口縁部は上方にのび、端部で外反する。底部は平坦。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は指圧調整後、ナデ調整。内面はナデ調整。	密 0.1～0.5mmの礫を含む。	良好	外面：橙色 5YR6/8 内面：橙色 5YR7/6	

土師器・甕

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
土師器 甕	50－1		C－Ⅱ－13 黒褐色粘質土層	口径(推)11.5 器高(残) 2.9	口縁部は浅く、短かく外反する。肩部は肥厚し、なだらかに外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。肩部は外・内面共摩耗激しく不明。	密 0.2～2mmの白色粗砂を含む	良好	外面：橙色 5YR6/6 内面：橙色 2.5YR6/8 断面：橙色 5YR6/6	

種類	番号		出土場所	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
	挿図	図版	土層							
土師器甕	50－2		C－Ⅱ－53 黒褐色粘質土層	口径(推)11.4 器高(残) 5.0	口縁部は、上方にのびた後、短かく強く外反する肩部は肥厚し、張りをみせずに、外下方にのびる	口縁部は、横ナデ調整。他は、摩耗激しく不明。	密 0.1～0.15mmの白色細砂を多く含む。	良好	外面：橙色 5YR6/6 内面：橙色 5YR6/6 断面：橙色 5YR6/6	
土師器甕	50－3		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	口径(推)10.6 器高(残) 3.6	口縁部は、僅かに外反し端部で面をなす。肩部は口径より小さく、張りをみせずに下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。他は摩耗激しく不明。	密 1mm大の白色粗砂を含む。	良好	外面： にぶい赤褐色 5YR5/4 内面： にぶい赤褐色 2.5YR5/4 断面： にぶい赤褐色 5YR5/4	
土師器甕	50－4		C－Ⅱ－42 黒褐色粘質土層	口径(推)14.0 器高(残) 5.2	口縁部は、肥厚して外上方に開き、端部で面をなす。肩部は、内弯しつつ外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。肩部内面は指圧調整。他は不明。	やや粗 0.1～2mmの白色粗砂及び黒雲母を多く含む。	良好	外面： にぶい黄橙色 10YR7/3 内面： にぶい黄橙色 10YR6/4 断面： にぶい黄橙色 10YR6/4	
土師器甕	50－5		C－Ⅱ－44 黒褐色粘質土層	口径(推)14.8 器高(残) 2.0	口縁部は、僅かに外反する。端部は丸い。	口縁部は、横ナデ調整。	密 1mm程度の白色粗砂を含む	良好	外面：明赤褐色 5Y5/6 内面：黄橙色 7.5YR7/8 断面：明赤褐色 5Y5/6	
土師器甕	50－6		C－Ⅱ－40 黒褐色粘質土層	口径(推)15.8 器高(残) 2.8	口縁部は、外反し、端部は面をなす。肩部は内弯しつつ外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。他は剝離激しく不明。	密	良好	外面：明赤褐色 5YR5/8 内面：明赤褐色 5YR5/6 断面：明赤褐色 5YR5/6	
土師器甕	50－7		C－Ⅱ－34 黒褐色粘質土層	口径(推)16.3 器高(残) 3.5	口縁部は、外反し、端部外面で僅かに肥厚する。肩部は内弯しつつ、外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。他は摩耗激しく不明。	密	良好	外面：明黄褐色 10YR6/6 内面：橙色 7.5YR6/6 断面：明黄褐色 10YR6/8	
土師器甕	50－8		C－Ⅱ－42 黒褐色粘質土層	口径(推)17.4 器高(残) 3.7	口縁部は、外反し、端部は丸い。肩部は内弯しつつ、外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。肩部内面に指圧痕が残る。他は摩耗激しく不明。	密 1～3mmの白色粗砂及び礫を多く含む。	良好	外面：橙色 7.5YR6/6 内面：明黄褐色 10YR6/6 断面：明黄褐色 10YR6/6	
土師器甕	50－9		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	口径(推)17.4 器高(残) 4.9	口縁部は肥厚し、外上方にのびる。端部は面をなす。肩部は内弯しつつ外下方にのびる。(4)と極似する。	口縁部は、横ナデ調整。肩部内面は、指圧調整。他は摩耗激しく不明。	密 0.1～0.15mmの白色細砂を含む。	良好	外面：明黄褐色 10YR6/6 内面：明黄褐色 10YR7/6 断面：明黄褐色 10YR7/6	
土師器甕	50－10		D－Ⅰ－89 黒褐色粘質土層	口径(推)17.4 器高(残) 4.8	口縁部は肥厚し、端部上面に凹面を有する。肩部は、接合部で肥厚し、外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。肩部内面は指圧調整。外面は摩耗激しく不明。	密 1～2mmの白色粗砂を含む	良好	外面： にぶい橙色 7.5YR6/4 内面：明赤褐色 5YR5/6 断面：明赤褐色 5YR5/6	
土師器甕	50－11		C－Ⅱ－40 黒褐色粘質土層	口径(推)18.2 器高(残) 4.1	口縁部は、外反し、端部は丸い。肩部は、内弯しつつ外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。肩部は、摩耗激しく不明。	密 0.1～2mmの白色粗砂を含む	良好	外面：浅黄橙色 7.5YR8/6 内面：浅黄橙色 7.5YR8/6 断面： にぶい橙色 5YR7/4	

種類	番号 挿図	番号 図版		法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土 焼成 色調	備考
土師器甕	50－12		D－Ⅰ－58	口径(推)20.5 器高(残) 4.3	口縁部は、肥厚し、短かく外反する。端部は面をなす。肩部との境は強い横なで調整の為、凹む。肩部は、内弯しつつ、外下方にのびる。	口縁部は、横ナデ調整。肩部は、内・外面共摩耗激しく不明。	密　良好　外面： 0.1～2㎜の白色粗砂及び金雲母を含む。　にぶい黄橙色 10YR7/4 内面：橙色 2.5YR6/6 断面： にぶい黄橙色 10YR7/4	

陶磁器

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・釉薬・文様等	備考
青磁碗	51－1		D－Ⅰ－58 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.8 高台径(推) 4.0 高台高 0.5	底部は平坦。体部は内弯しつつ、外上方にのびる底部との境に削りこみによる一条の沈線を巡らす高台は、やや低めで、丁寧なつくり。	ロクロ成形。体部・底部は回転ナデ調整。高台は削り出し。	色調：外面(釉薬) 灰味黄緑色 7.5GY、6.5/2.0 内面(釉薬) 灰味黄緑色 7.5GY、6.5/2.0 断面 にぶい橙色 7.5YR7/4 胎土：緻密 焼成：良好	
青磁碗	51－2		C－Ⅱ－40 黒褐色粘質土層	口径(推)11.1 器高(残) 2.2	体部は弱く内弯した後、弱く外反し口縁端部に至る。端部は丸い。	ロクロ成形。口縁部・体部共回転ナデ調整。文様は削り込みによる陰刻。内外面に貫入が見られる。	色調：外面(釉薬) 灰味黄緑色 7.5GY、6.5/2.0 内面(釉薬) 灰味黄緑色 7.5GY、6.5/2.0 断面 明るいオリーブ灰 6.0YR、7.5/1.0 文様：蓮華文 胎土：緻密 焼成：良好	
白磁皿	51－3		D－Ⅱ－70 黒褐色粘質土層	口径(推)10.9 器高(残) 2.2	口縁部は短かく外反し、端部は丸い。体部は内弯する。内面体部中央に削りこみによる一条の沈線を巡らす。	ロクロ成形。口縁部・体部共回転ナデ調整。釉薬は薄め。	色調：外面(釉薬) 灰白色、N8/ 内面(釉薬) 灰白色、N8/ 断面 灰白色、N8/ 胎土：緻密 焼成：良好	
瀬戸焼碗	51－4		D－Ⅰ－68 黒褐色粘質土層	体部径(残) 11.1 器高(残) 3.1 高台径(推) 5.8 高台高 0.9	体部・底部はゆるやかに内弯する。高台は高く、高台内にカンナによる削り痕をよく残す。	ロクロ成形。体部・底部内面共回転ナデ調整。高台は削り出し。底部は露胎。	色調：外面(釉薬) 灰白色、10YR7/ 内面 灰白色、7.5YR8/ 断面 灰白色、7.5YR8/ 胎土：密 焼成：良好	2次焼成を受けたものか、釉薬が変質している。ロクロ回転は左回転。
白磁碗	51－5		D－Ⅰ－59 黒褐色粘質土層	器高(残) 2.0 高台径(推) 4.0 高台高 0.8	底部は、ゆるやかに内弯する。高台は低く削り出され、畳付は広い。高台内中央は、より深く削られ凹む。底部と体部の境に一条の鋭い沈線を巡らす。体部外面に退化した蓮華文を陰刻する。	ロクロ成形。底部内面は回転ナデ調整。高台は削り出し。底部外面は露胎。	色調：外面 灰白色、2.5Y7/ 内面(釉薬) うすオリーブ色 6.5Y7/ 断面 灰白色、10Y8/ 文様：外面に陰刻蓮華文 胎土：密 焼成：良好	
青磁碗	51－6		C－Ⅱ－63 黒褐色粘質土層	口径(推)12.8 器高(残)	口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。体部は、ゆるやかに内弯する。外面に蓮華文を陽刻する。	ロクロ成形。回転ナデ調整釉薬は厚く、粉青が多く見られる。	色調：外面(釉薬) 灰味黄緑色 2.0G5/ 内面(釉薬) 灰味黄緑色 2.0G5/ 文様：外面に陽刻蓮華文 胎土：密 焼成：良好	
青磁碗	51－7		D－Ⅰ－78 黒褐色粘質土層	口径(推)12.0 器高(残) 3.1	口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。体部は、内弯し内下方にのびる。外面に蓮華文を陽刻する。	ロクロ成形。回転ナデ調整釉薬は厚く、黄味がかる。	色調：外面(釉薬) 灰味オリーブ色 6.5Y5/ 内面(釉薬) 灰味オリーブ色 6.5Y5/ 断面 灰白色、7.5Y8/ 文様：外面に陽刻蓮華文 胎土：密 焼成：良好	

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・釉薬・文様等	備考
白磁碗	51－8		D－Ⅰ－78 黒褐色粘質土層	口径(推)15.2 器高(残) 2.6	口縁部は僅かに内弯し、玉縁をなす。体部は、やや直線的に内下方にのびる。	ロクロ成形。口転ナデ調整外面玉縁下までヘラ削りを行なう。釉薬はやや薄目。僅かに貫入がみられる。	色調：外面(釉薬) うすオリーブ色 6.5Y 5/2 内面(釉薬) うすオリーブ色 6.5Y 5/2 断面 灰白色、7.5Y 8/1 胎土：やや粗 0.1mm程の黒色細砂含む。 焼成：良好	
白磁碗	51－9		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	口径(推)12.1 器高(残) 2.2	口縁部は、玉縁となり、厚手である。体部は、直線的に内下方にのびる。	ロクロ成形。回転ナデ調整外面玉縁下までヘラ削りを行なう。	色調：外面(釉薬) 灰白色、7.5Y 7/1 内面(釉薬) 灰白色、7.5Y 7/1 断面 灰白色、N 8/1 胎土：やや粗 焼成：良好	
瀬戸焼天目茶碗	51－10		D－Ⅰ－88 黒褐色粘質土層	口径(推)11.7 器高 5.9	口縁部は、僅かに外反し端部はやや鋭い。体部は僅かに内弯する。底部は平坦になるものと思われる。	ロクロ成形。回転ナデ調整底部は、糸切りで、高台脇は、カンナによる削り出し釉薬は2回掛けで鉄釉を用い、底部は露胎。	色調：外面 第1次釉 暗赤色、5YR 3/4 第2次釉 黒色10YR 1.7/1 内面 〃 〃 断面 灰白色、7.5Y 8/1 胎土：やや粗 焼成：良好	

瓦器・皿・椀

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
瓦器皿	52－1	PL.30 1	D－Ⅰ－79 黒褐色粘質土層	口径(推) 7.4 器高(残) 1.5	口縁部は、外反しつつのび、端部でより外反する底部は、平担。	口縁部は、横ナデ調整。底部は外・内面共指圧後、ナデ調整。	密 0.2mm以下の白色細砂を含む。	良好	外面：灰色 N 4/1 内面：灰色 N 4/1 断面：浅黄橙色 10YR 8/3	
瓦器皿	52－2	PL.30 2	C－Ⅱ－14 黒褐色粘質土層	口径(推) 7.8 器高(残) 1.5	口縁部は、外反しつつ外上方にのび、端部でより外反する。底部は、ほぼ平坦。口縁部との境に横なで調整による稜をもつ	口縁部は、横ナデ調整。底部は外・内面共指圧後、ナデ調整。	密 0.3～1mmの白色粗砂を含む	やや不良	外面：灰白色 7.5Y 7/1 内面：灰白色 10Y 7/1	
瓦器皿	52－3	PL.30 3	C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.0 器高(残) 1.6	口縁部は、外反しつつ外上方にのびる。底部は、僅かに内弯し、口縁部との境に稜をもつ。	口縁部は、横ナデ調整。底部は外・内面共指圧後、ナデ調整。	密 0.2～1mmの白色粗砂を含む	やや不良	外面：灰白色 7.5YR 8/2 内面：淡黄色 2.5Y 8/4 断面：灰白色 7.5YR 8/2	
瓦器皿	52－4	PL.30 4	C－Ⅱ－32 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.8 器高 1.7	口縁部は、外反しつつ外上方にのびる。底部は内弯し、中央で平坦となる	口縁部は、横ナデ調整。底部は外・内面共指圧後、ナデ調整。指圧痕明瞭。	密 0.1～0.2mmの白色粗砂を含む。	良好	外面：灰色 N 5/0 内面：灰色 N 5/0 断面：にぶい褐色 7.5YR 5/3	外面に円形で灰白色(7.5Y 8/0)の変色部分あり。
瓦器皿	52－5	PL.30 5	C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.6 器高(残) 1.5	口縁部は、僅かに外反しつつ外上方にのびる。底部は浅く内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は、指圧調整。内面は丁寧なナデ調整。	密 0.1～0.2mmの白色細砂を含む。	良好	外面：灰色 N 5/0 内面：灰色 N 5/0 断面：灰白色 7.5YR 8/2	
瓦器皿	52－6	PL.30 6	C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.6 器高(残) 2.1	口縁部は、強く外反し、外上方にのびる。底部は深く内弯する。	口縁部は、強い横ナデ調整底部外面は指圧調整。内面は指圧後ナデ調整。	密 0.1～0.2mmの白色細砂を含む。	やや不良	外面：灰色 7.5Y 5/1 内面：黄褐色 2.5Y 5/3 断面：浅黄橙色 10YR 8/3	

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
瓦器 皿	52－7		C－Ⅱ－33 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.8 器高(残) 2.1	口縁部は、外反しつつのび、端部は丸い。底部はほぼ平坦に続くものと思われる。	口縁部、横ナデ調整。他は摩耗激しく不明。	密	やや不良	外面：灰白色 2.5Y 8/1 内面：灰白色 2.5Y 8/1 断面：灰白色 2.5Y 8/1	
瓦器 皿	52－8	PL. 30 7	D－Ⅱ－70 黒褐色粘質土層	口径(推) 9.1 器高(残) 1.8	口縁部は、斜外上方に広がり、端部はやや鋭い。底部は、平坦に続くものと思われる。	口縁部は、横ナデ調整。他は、指圧調整。	密	やや不良	外面：灰色 N 5/ 内面：灰色 N 5/ 断面：浅黄橙色 10YR 8/3	
瓦器 皿	52－9	PL. 30 9	C－Ⅱ－14 黒褐色粘質土層	口径(推) 9.5 器高(残) 1.7	口縁部より底部にかけてゆるやかに内弯し、浅い	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は指圧調整。内面は指圧調整後ナデ調整。	密 0.01～0.2mmの白色細砂を含む。	やや不良	外面：灰白色 5Y 7/ 内面： 灰オリーブ色 5Y 5/2 断面：灰白色 5Y 7/	
瓦器 皿	52－10	PL. 30 10	D－Ⅰ－68 黒褐色粘質土層	口径 9.7 器高 2.2	口縁部は、外反しつつ、外上方にのび、端部は丸い。底部は、やや深く内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。底部外面は、指圧調整。内面は指圧調整後ナデ調整。	密	良好	外面：灰色 N 5/ 内面：灰色 N 4/ 断面：灰白色 N 8/	
瓦器 椀	52－11		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.3 高台径 5.2 高台高 0.6	底部は、ほぼ平坦。高台は、高くしっかりし、断面三角形を呈す。	底部外面は、指圧調整。内面は、磨耗激しく不明。高台は貼り付けで、後横ナデ調整。	密	やや不良	外面：灰白色 5Y 7/1 内面：灰色 5Y 5/1 断面：淡黄色 5Y 8/3	
瓦器 椀	52－12		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	器高(残) 2.1 高台径 5.2 高台高 0.5	底部は内弯し、体部に続く。高台は外傾し、断面台形を呈す。	底部外面は、指圧調整。内面は不明。高台は貼り付けで、後横ナデ調整。	密 0.1～0.2mmの白細砂を含含む。	やや不良	外面： オリーブ黄色 7.5Y 6/3 内面：浅黄色 5Y 7/3 断面： オリーブ黄色 7.5Y 6/3	
瓦器 椀	52－13		C－Ⅱ－14 黒褐色粘質土層	体部径(残) 13.5 器高(残) 4.2 高台径 5.4 高台高 0.4	体部は、ゆるやかに内弯する。底部は、ほぼ平坦高台はやや高く、外傾し断面三角形を呈す。	体部・底部外面は、指圧調整、内面は、細く密な暗文を施す。高台は貼り付けで横ナデ調整。	優良	良好	外面：灰白色 N 8/ 内面：灰色 N 4/ 断面：灰白色 7.5Y 8/1	
瓦器 椀	52－14		C－Ⅱ－44 黒褐色粘質土層	口径(推)13.6 器高(残) 3.3	口縁部は、僅かに外反し端部は丸い。体部は、ゆるく内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。体部外面は指圧調整。内面はナデ調整。暗文は摩耗し不明。下半にヘラによる線刻がみられる。	優良	良好	外面：灰白色 N 8/ 内面：灰白色 N 4/ 断面：灰白色 7.5Y 8/1	外面体部下半に灰白色部分有り
瓦器 椀	52－15	PL. 30 15	C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	口径(推)15.7 器高(残) 3.4	口縁部は内弯した後、端部で小さく外反する。体部は、ゆるやかに内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。体部外面は指圧調整。内面はナデ調整。暗文は摩耗し不明。	良好	良好	外面：灰色 N 4/ 内面：灰色 N 5/ 断面：灰白色 7.5Y 8/1	
瓦器 椀	52－16		C－Ⅱ－55 黒褐色粘質土層	口径(推)13.2 器高(残) 4.9	口縁部は、わずかに外反し、端部は丸い。体部は内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。体部外面上半はナデ調整後、細く密な暗文を施す。下半は指圧調整。内面はナデ調整後、密だが不鮮明な暗文を施す。	良好	良好	外面：灰白色 2.5Y 7/1 内面：灰色 7.5Y 5/1 断面：灰白色 2.5Y 8/1	
瓦器 椀	52－17		C－Ⅱ－69 黒褐色粘質土層	口径(推)15.8 器高(残) 4.4	口縁部は、僅かに外反し端部はやや鋭い。体部はゆるやかに内弯する。	口縁部は、横ナデ調整。体部外面は指圧調整。内面はナデ調整。暗文は摩耗激しく不明。	密 0.2～1mmの白色粗砂を含む	やや不良	外面：明黄褐色 2.5Y 6/ 内面：黄褐色 2.5Y 5/4 断面：明黄褐色 10YR 7/6	

瓦器・椀

種類	番号 挿図	番号 図版	出土場所 土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
瓦器 椀	53－22		C－Ⅱ－69 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.1 高台径 5.0 高台高 0.5	底部は厚く平坦。高台は断面三角形で、やや高くしっかりしている。	外面底部は、指圧調整。高台は貼り付け。後横ナデ調整。内面底部ナデ調整の後細めで2本単位の平行暗文を施す。	密	良好	外面：灰色 N5/ 内面：灰色 7.5Y5/1 断面：灰白色 10YR8/1	
瓦器 椀	53－23		C－Ⅱ－55 黒褐色粘質土層	器高(残) 0.8 高台径 2.5 高台高 0.4	底部は平坦。高台は楕円で低く、断面台形を呈す	外面底部は、指圧調整。高台は、貼り付けで、後横ナデ調整。内面底部は、2本単位の細めの平行暗文を施す。	密	やや不良	外面：暗灰色 N3/ 内面：暗灰色 N3/ 断面：灰白色 10YR7/1	
瓦器 椀	53－24		C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.1 高台径 5.8 高台高 0.7	底部はほぼ平坦。高台は高くしっかりし、断面三角形を呈す。	外面底部は指圧調整。高台は貼り付け。後横ナデ調整内面底部に斜格子暗文を施す。	密	良好	外面：灰色 N5/ 内面： 暗オリーブ灰色 N4/ 断面：灰白色 10YR7/1	
瓦器 椀	53－25		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.2 高台径 5.4 高台高 0.6	底部は弯曲する。高台は高くて厚く、丁寧な造りである。	外面底部は、指圧調整。高台は貼り付け、後横ナデ調整。内面底部に太く、やや不連続の平行暗文を施す。	密	良好	外面：灰色 N5/ 内面：灰色 N5/ 断面：灰白色 7.5Y8/1	
瓦器 椀	53－18		C－Ⅱ－34 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.1 高台径 4.4 高台高 0.4	底部は、僅かに弯曲する高台は、断面台形に近くやや外方に踏んばる。	外面底部は、指圧調整。高台は貼り付けで、後横ナデ調整。内面は、摩耗激しく不明。	密	良好	外面：灰白色 7.5Y7/1 内面： うす黄茶色 1.0Y7.5/2.0	
瓦器 椀	53－19		C－Ⅱ－54 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.0 高台径 6.0 高台高 0.6	底部は、ほぼ平坦。高台は、断面三角形を呈す。	外面底部は、指圧調整。高台は貼り付けで、後横ナデ調整。内面底部ナデ調整。斜格子暗文がかすかに残る	密	良好	外面：灰白色 10YR8/1 内面：灰色 5Y5/1	
瓦器 椀	53－20		D－Ⅰ－68 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.5 高台径 5.6 高台高 0.4	底部は、平坦。内弯しつつ体部に続く。高台は低く、断面台形に近い。	外面底部・体部は、指圧調整。高台は貼り付け。後横ナデ調整。内面、摩耗激しく不明。	密	不良	外面：黄色 2.5Y7/6 内面：灰白色 7.5Y8/2 断面：灰白色 2.5Y8/2	
瓦器 椀	53－21		C－Ⅱ－52 黒褐色粘質土層	口径(推) 8.6 器高 3.0 高台径 4.0 高台高 0.5	口縁部は僅かに外反する体部・底部は厚く、ゆるやかに内弯する。高台は断面三角形で、しっかりしている。	口縁部は横ナデ調整。内面底部に指圧痕が残る。高台は丁寧な貼り付け。他は不明。	やや粗 0.02～0.2㎜の細砂を含む	良好	外面： 暗オリーブ色 2.5GY4/1 内面：暗緑灰色 10GY3/1	
瓦器 椀	53－26		C－Ⅱ－51 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.8 高台径 5.5 高台高 0.8	底部は、ほぼ平坦。高台は、整円に近く、高く厚味のあるしっかりしたもの。	外面底部、指圧調整。高台は、貼り付けで、周辺まで丁寧な横ナデ調整。内面底部、平行暗文に斜格子暗文を重ねる。	緻密	優良 堅緻	外面：灰色 N5/ 内面：灰色 N5/ 断面：灰白色 7.5Y8/1	丁寧な造りである。
瓦器 椀	53－27		C－Ⅱ－51 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.0 高台径(推) 5.6 高台高 0.6	底部は僅かに弯曲する。高台は高く、厚味のあるしっかりしたもの。	外面底部、指圧調整。高台は、貼り付けで、横ナデ調整。内面底部暗文は、細めで平行暗文に斜格子暗文を重ねる。	緻密	良好	外面：浅黄色 7.5Y7/3 内面：灰白色 7.5Y7/1	
瓦器 椀	53－28		C－Ⅱ－50 黒褐色粘質土層	器高(残) 1.0 高台径 5.7 高台高 0.6	底部はやや弯曲する。高台はやや低く、断面台形を呈す。	外面底部、指圧調整。高台は、貼り付けで、横ナデ調整。内面底部に細く、2本単位の平行暗文を施す。	密	良好	外面：緑味灰色 10G 4.5/0.5 内面：緑味灰色 5G 5.0/5.0 断面：黄味白色 5Y 8.5/1.0	
瓦器 椀	53－29		P－6 暗赤褐色土層	器高(残) 1.2 高台径 3.8 高台高 0.5	底部はほぼ平坦。高台はやや低く断面三角形を呈す。	外面底部、指圧調整。高台は貼り付けで、横ナデ調整内面底部に斜格子暗文を施す。	密	良好	外面：灰色 N5/ 内面：灰色 N5/ 断面：灰白色 2.5Y8/1	

第10節　小　　結

本調査区の事実関係については、前述した通りである。既調査区である第3地区に伸びると復元された溝2本は、その伴出遺物から第1、3地区の溝と同一使用時期あった。大和川・今池遺跡の場合、溝、掘立柱建物、井戸が相互関係を遊離した状態で検出されてはおらずユニット関係が明瞭に所在する例である。6地区ＳＢ01、02とＳＥ17が布留2式(古)を構成しているが1978年発掘の第2地区、いわゆる東、又は、南側に広がると推測される。[註－1] 棟持柱建物であった6地区ＳＢ03とＳＥ08、09は、布留2式新段階に帰属されるが単一的な存在で群を構成する余地はない。ＳＢ03と同期の単位集団構成は、北方の第5地区において検出されたＳＢ01、02、03とＳＥ01、02、03、井戸状遺構と考察されるＳＫ10、29で、第2地区から続く微高地上、すなわち、西除川より西方に支流した旧河道上に形成されていることが特徴付けられる。本遺跡に関する限り、「時期別による生活空間の移動が顕著に例証された遺跡でもある。第2地区、第6地区(南)→第6地区(北)及び第5地区が、[註－2] 布留2式段階に砂礫層で形成された地山－旧河道となった微高地が南北に脈絡した。その後、第7、8地区の旧西除川によって形成された自然提防上、約4.000㎡の微高地に陶色土型式5段階～2型式1段階の溝(3)、井戸(2)、掘立柱建物約50棟(独立した第7、8地区につながる微高地を復元すれば約100棟に達するであろう)は、大和川・今池遺跡の隆盛期とも換言出来る時期である。その後は、記紀にみる「依網池」の東縁辺で6世紀前～中葉にわたり集団共同井戸、掘立柱建物(14)に対する個有の井戸がユニットとして検出された第1地区に空間を得ていた。この時期に至ると、区画された溝と首長格の建物を中心にして円形配列に心がけた建物配置、共同井戸を中心として「広場」の存在は、暗に、同期以降の集団構成の変化、社会構造の推移が如実に表出された例でもある。終焉期は、第2地区上層の陶邑Ⅲ型式1段階の住居跡群、さらには「難波大道」建設へと歴史の足跡を刻み込む。本遺物において不可解な事実として出土遺物の量にある。洪積段丘中位といろ地形的制約に起因する希少さは単に物量的な範囲を越える。特に、50棟前後の掘立柱建物群の検出にもかかわらず土器の出土量は、村の廃棄に伴う人、物量的な移動を考えねばならず当遺跡での移動は従来の調査範囲内では考えらず、その消滅時期が百舌鳥古墳群終末期と合致することの方が重要視される。

註－1　藤井利章『大和郡山市　発志院遺跡』「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第41冊」
奈良県立橿原考古学研究所　　昭和55年3月

註－2　大和川・今池遺跡調査会「大和川・今池遺跡。Ⅱ。第3、4、5地区発掘調査報告書」
1980・3
大和川・今池遺跡調査会「大和川・今池遺物－第1地区　発掘調査報告－」1979・3

第4章 「古道」・調査成果

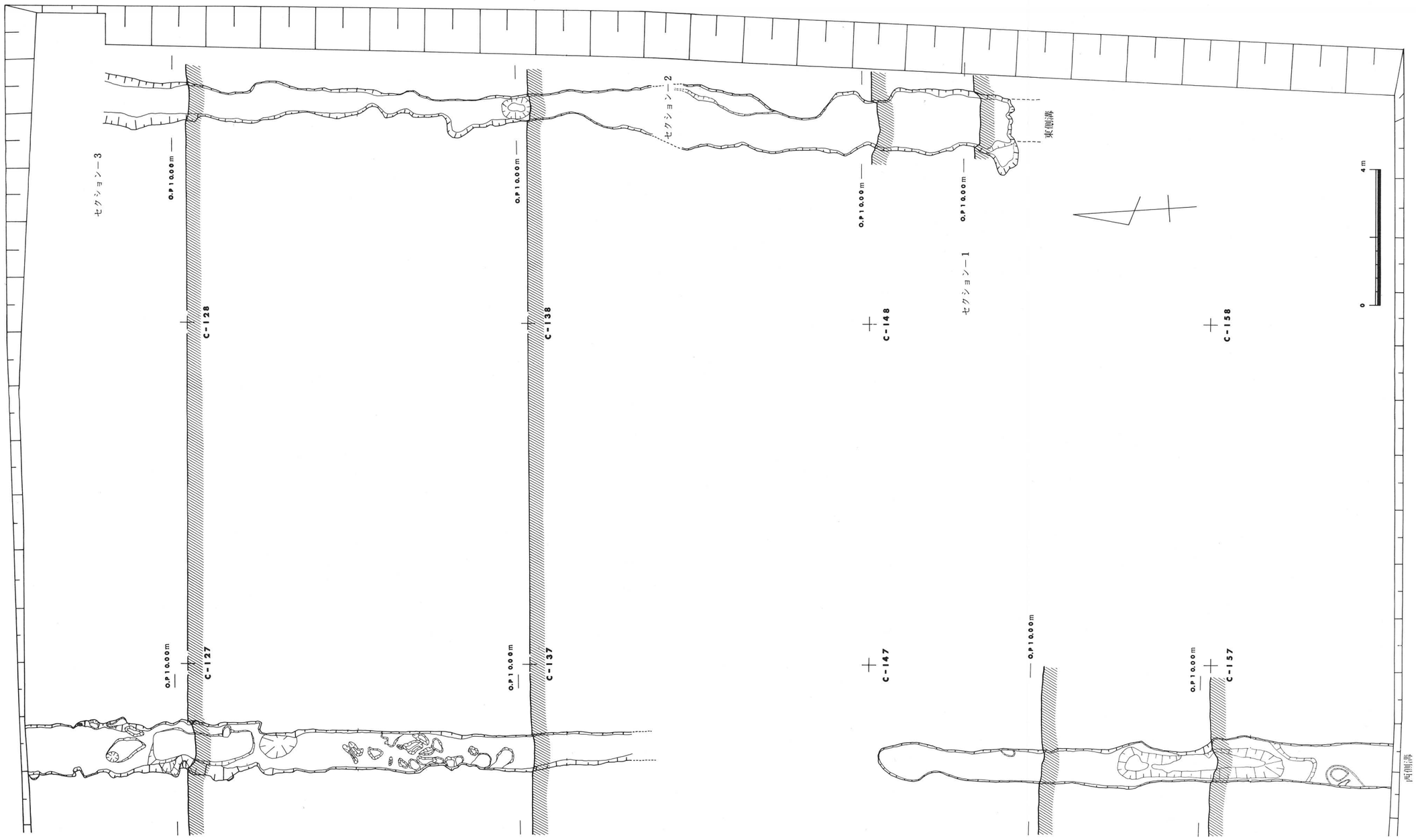
いわゆる「難波大道」に関する疑義は、文献に依存している限り脱出し得るものではない。日本書紀の記述された内容から大和川・今池遺跡発掘着手当時から蓋然性を含んでいたが1978年の第1地区、1980年の第6地区、1980年夏の第7地区において、それぞれ両側溝が断続的な片側のみの側溝検出であったため「古道」としての認定には勇気を必要としていた。ところが、1980年秋、排水工事に伴って、現、市境（堺市・松原市）でもあり「古道」上に復元していた箇所に第7－1地区の西側溝に対応する東側溝が3セクションにおいて観察されました。直に、十分な発掘調査体制を組織し「古道」の検出に当った。

第1節　現状と調査方法

西側溝と道路部分は、盛土を含め0.5～0.7m下で地山（黄褐色粘質土）が顔を出し削平度が著しい。東側溝は、市境、条里制遺構の大畦、バギーム車道として0.5～0.9mの盛によって後世まで保護され優良な保存状態であった。だが、東側溝より数m西寄りには、幅 2.5m、深さ 1.5mにおよぶ大規模な排水路が設定されており悪臭を放っていた。従って、旧耕作土までの盛土、排水路は、機械掘削にたよった。市境の道路（幅、約8m）を挟んだ両側は、周辺工事の影響を受けて湿地化が進んでおり雨天の多さともからんでベースの地山の粘質さが増大し発掘調査に苦慮した。

第54図　発掘調査風景

実測調査に際しては、本遺跡のメッシュ杭を採用しO.P.＝10.00.0mに統一して各10m方眼杭を打ち込み、全遺構を1/20で作製した。発掘調査にあっても、地山そのままのものの削平は当初から考えられたが「轍」跡道路上の「たたきしめ」の施設行為、側溝肩に打たれた可能性のある杭跡について精査を繰り返したが考古学的にはその3点は、検出不可能であった。



第55図　難波大道遺構図

第2節　道　　路

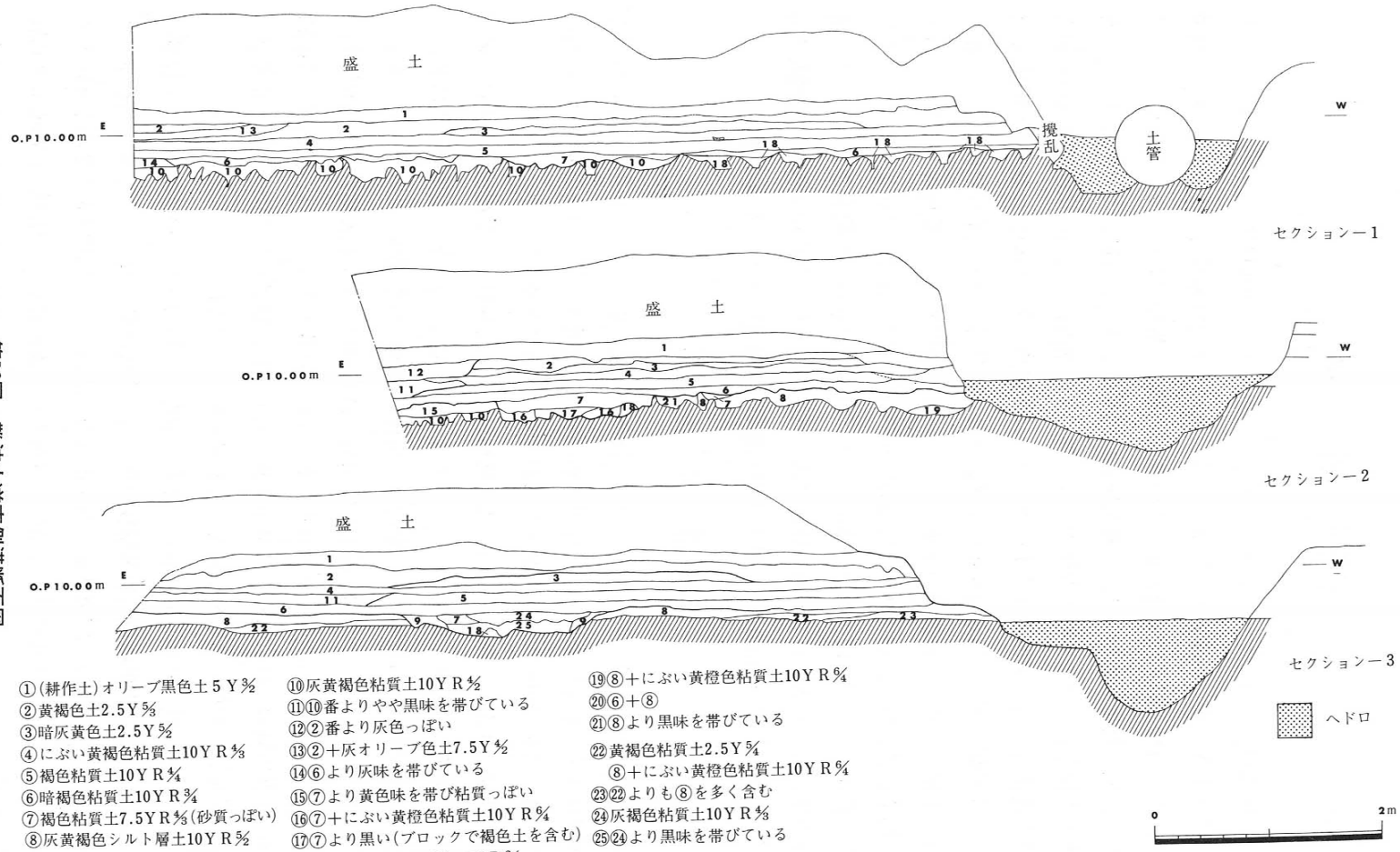
北壁面・西側溝付近にあっては、耕作土、床土、褐色粘質土・暗褐色粘質土の4層がベルト状堆積として図化された。側溝より東側は、一端、地山（黄褐色粘質土）を本来の小ゴブ状隆起について削平、整地して灰黄褐色粘質土を敷きつめ側溝の掘削にかかっている。従って、それより西側は、地山整地も不十分でかつ整地層（8）も希薄である。南壁においては、にぶい黄褐色粘質土が追加されているが地山全体の上昇に伴ってか地山ととも（8）は削平されたと考えられる凹凸が認められた。東側溝・第1セクションは、凹凸の激しい地山に整地層が変質した土層で直上には南壁と同じく第6層が層位を構成する。西側溝よりも低地に位置しているため地山の粘質土が変化しやすく未整地のまま主として第8、15層をもって整地層とする。その下地として、第7、10、19、21がブロック的に層序を形成させていることが第2セクションより観察された。第3セクションは、第22、23層のレンズ状堆積によって下地をこしらえシルト層（整地層）を水平にひきしめている状態が顕著であった。検出された全長40m程度の区間内では、整地層上面は、概ねO.P.＝9.80mを計測し水平状態のまま保存されていた事になる。

第3節　東・西側溝

両側溝は、掘り込まれた地山の性質上、肩部の凹凸が目立ち相当な幅がある。深さについても0.05～ 0.2mと差を有し中央にあっては両側溝の中央で消滅さえしている部分が知られた。尚、本調査では、全長約40mについて確認したがさらに南北に継続している。

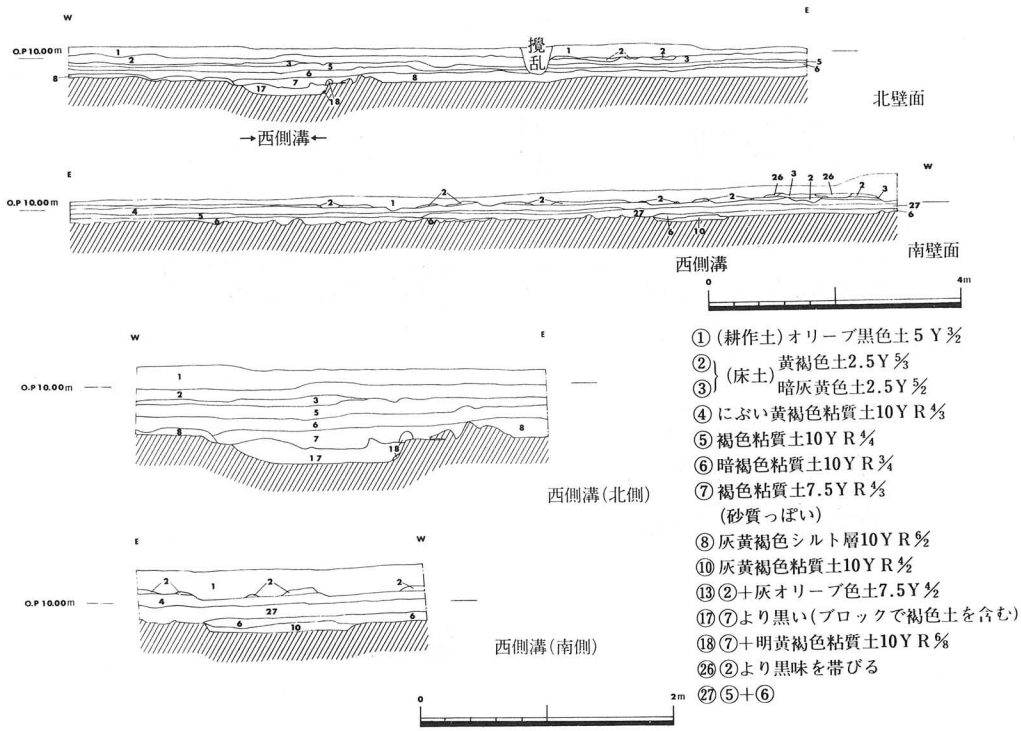
東側溝上層には、耕作土、床土、にぶい黄褐色粘質土、褐色粘質土、暗褐色粘質土の5層が基準層位として堆積している。第1セクションでは、灰黄褐色シルト層（整地層）の流れ込んだ灰黄褐色粘質土が単一的に見られる。整地層（第15、8層）から掘削した第2セクションには、底部の第16、18層のブロック状の流れ込み上層には水平層として褐色粘質土が入り込む。第1、2セクションでの溝底部は、地山の凹凸が大きい。第3セクションは、整地層から0.25m近く掘り込んだ側溝内には、第24、25層が基調に第7、9、18層が小ブロックとして埋土になり第9層は両肩部に対称的な堆積が見受けられ両肩部からの流れ込みと考えられる。

西側溝（北壁面）では、同じく第8層と呼ばれる整地より掘削され、褐色粘質土と第17層の2層だけの堆積で一部、東側法面での第18層の微々たる土層は気にならない。又、同断面では、東肩部に於いて、幅約0.7m、高さ0.1m強の堤状遺構が認められたが北壁面より約2m地点までで削滅していた。その堤状遺構は、道路側に存在する。溝底部高は、O.P.＝9.40mの計測値を得た比較的底部のフラットな溝部分であった。西側溝（南壁面）は、残存した深さが 0.1



第56図　難波大道東側溝断面図

①(耕作土)オリーブ黒色土５Ｙ３/２
②黄褐色土2.5Ｙ５/３
③暗灰黄色土2.5Ｙ５/２
④にぶい黄褐色粘質土10ＹＲ５/３
⑤褐色粘質土10ＹＲ４/４
⑥暗褐色粘質土10ＹＲ３/４
⑦褐色粘質土7.5ＹＲ５/３(砂質っぽい)
⑧灰黄褐色シルト層土10ＹＲ５/２
⑨⑧に黒味を帯びやや粘質
⑩灰黄褐色粘質土10ＹＲ５/２
⑪⑩番よりやや黒味を帯びている
⑫②番より灰色っぽい
⑬②＋灰オリーブ色土7.5Ｙ５/２
⑭⑥より灰味を帯びている
⑮⑦より黄色味を帯び粘質っぽい
⑯⑦＋にぶい黄橙色粘質土10ＹＲ６/４
⑰⑦より黒い(ブロックで褐色土を含む)
⑱⑦＋明黄褐色粘質土10ＹＲ６/８
⑲⑧＋にぶい黄橙色粘質土10ＹＲ６/４
⑳⑥＋⑧
㉑⑧より黒味を帯びている
㉒黄褐色粘質土2.5Ｙ５/４
　⑧＋にぶい黄橙色粘質土10ＹＲ６/４
㉓㉒よりも⑧を多く含む
㉔灰褐色粘質土10ＹＲ５/３
㉕㉔より黒味を帯びている



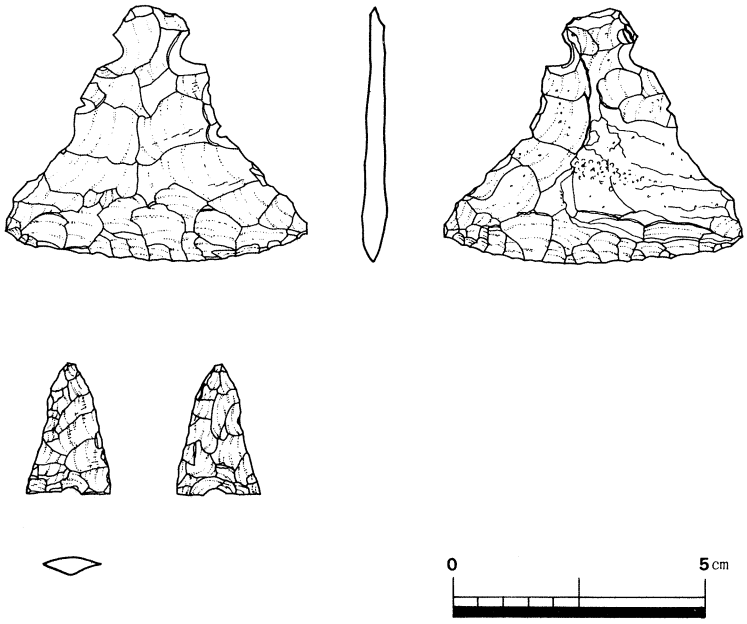
第57図　難波大道西側溝道路断面図

mと極めて浅く埋土も上層の暗褐色粘質土下層の灰黄褐色粘質土（10YR4/2）だけであった。底部は、使用時の平滑な掘削をそのまま遺存して、O.P.＝9.82mを測り前者の数値や地形から判断して南→北への流れが考えられるが中央部での検出状態ではやや非観的な見方は否めず、むしろ、道路上の雨水等の排水という水量を考えての掘削、設定であろう。

第4節　出土遺物

両側溝の立地条件が鞍部に位置することは、暗に古墳時代等の遺構の存在が否定的なエリアであって出土遺物の皆無状態を思い浮べても差支えのない。微高地から流入は、多少なりともあるが細片、ローリングが進化し器種・時期復元にはほど遠い。

その中にあって、本調査報告書に記載した石器は地山直上にへばりつくような格好で出土し、須恵器は、東側溝（南側）内の埋土中より見い出され同地区出土の土器片に比しては正に、大形の残存状況にあった。側溝使用時に投げこまれた遺物と解釈している。



第58図　石製品

石製品（第58図）

石堤（第58図１）

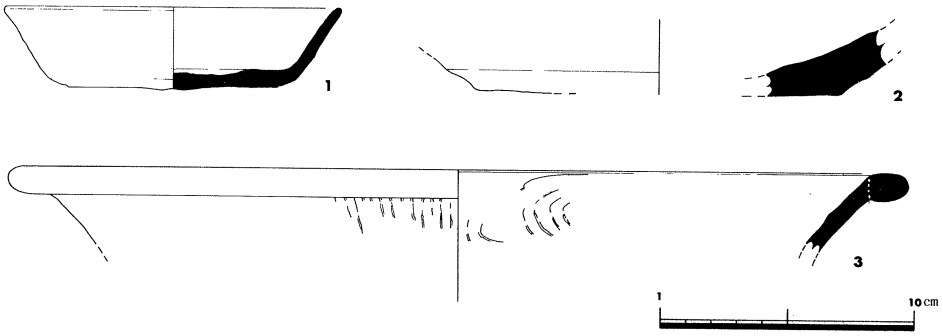
東側溝（C－Ⅰ38）肩付近、灰黄褐色シルト層

今長 5.1cm、幅 6.0cm、厚み 0.5cm、重量13.0ｇの正三角形の平面形を呈する整美な調整である。背頂のつまみは、両面からのステップフレーキングで形づくる。A面は、周縁部分からフリー・フリーキングで中央部に達し左下・右上に再調整を行う。外彎した両刃の内、この面は、B面ほど顕著な細かな調整はなく磨摩がある。大剝離面を中央に遺存させプラットホーム状になる程度の押圧剝離し刃部につけてステップ・フレーキングによる細かいトリミングあり。

石鏃（第58図２）

西側溝・東肩部（南壁浴）、C－Ⅰ56、褐色粘質土＋暗褐色粘質土層

現長2.6cm、幅（現）1.7cm、厚み0.3cm、重量（現）1.6ｇの凹基無茎式。逆刺は、欠損するこの石鏃のA面は側辺からフリ・フレーキング、B面はステップ・フレーキングで鏑を通らすように調整剝離をおよんでいた。基辺は、両面よりステップ状に剝離する。



第59図　難波大道東側溝内出土土器

須恵器

杯身（第59図１）

平滑な底部から外上方に直線的な引き上げを行い端部はさらにかるく引き出し丸くおさめる。内面底部は、粘土組痕がうねりとして残存する。内面は、回転ナデ調整後、底部中央の一方向のナデ仕上げ。口縁部の回転ナデより下半は、一端ヘラを入れた水平にヘラによる切り離しを施し不整方向のナデ。そのため、底部に段状を成す。胎土ー 0.5～4㎜長石礫含むが密、焼成ー堅緻、色調ー内面、灰白色（N7/0）外面、灰色N6/0 断面、紫灰色5 R P5/1、口径13.3cm 器高 3.2cm、ロクロ方向は、左回転。東側溝内・南端、灰黄褐色粘質土出土したこの土器は、杯身だけの重ね焼き痕が見られた。陶色Ⅲ型式２段階に属する。

器種不明（第59図２）

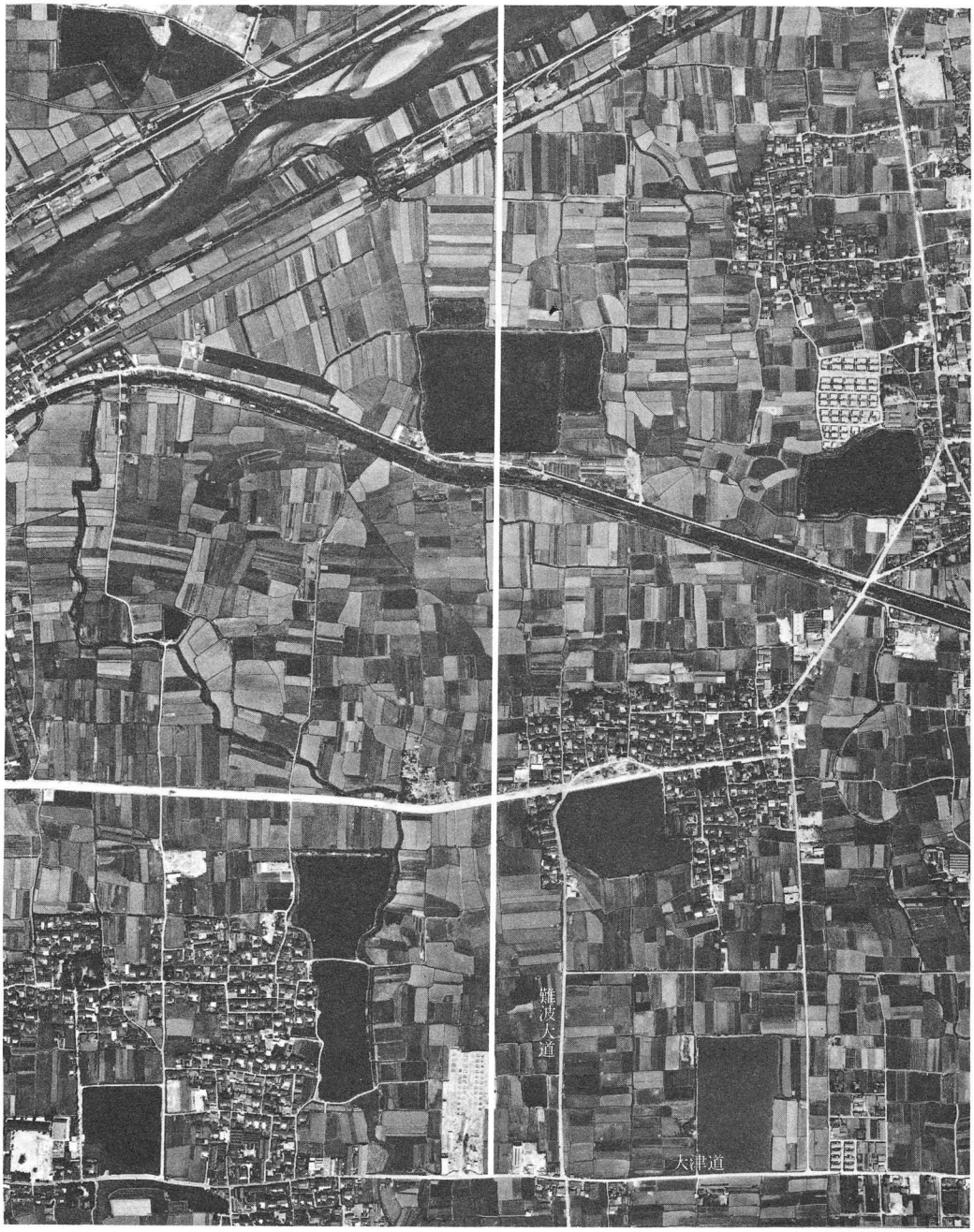
底部と体部との屈曲部の破片で全容は、不明である。底部のヘラ削り以外は、回転ナデ仕上げ。胎土ーやや粗、焼成ー良好、色調ー灰色N6/0 底部径（堆）14.2cm、東側溝（北端）褐色粘質土。

甕（第59図３）

口径（堆）34.0cmを計測する口縁部のみで大きく外反した後、端部で粘土を貼り付け分厚く丸く成形する。外面は、タテ方向のタタキ目を、内面の同心円文をそれぞれ回転ナデで不完全ながら消す。胎土ー密、焼成ー良好、色調ー灰色N6/0 出土場所、層位は、（第59図２）と同じ。

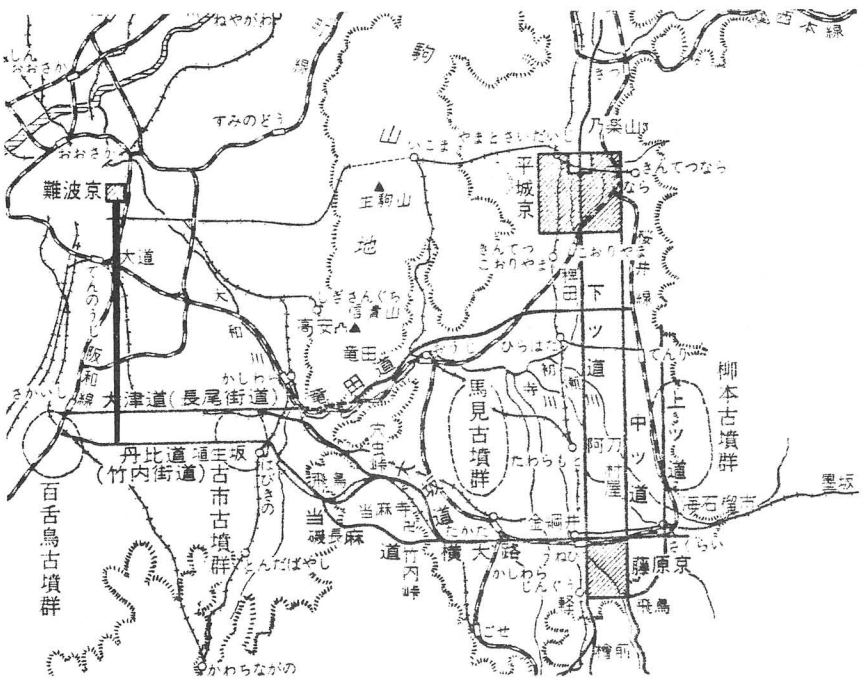
東側溝内からは、他に陶色Ⅲ型式２段階の高杯、東側溝下層からは５世紀後半期に編年される提瓶片が検出されている。

第５章　「難波大道」の復元



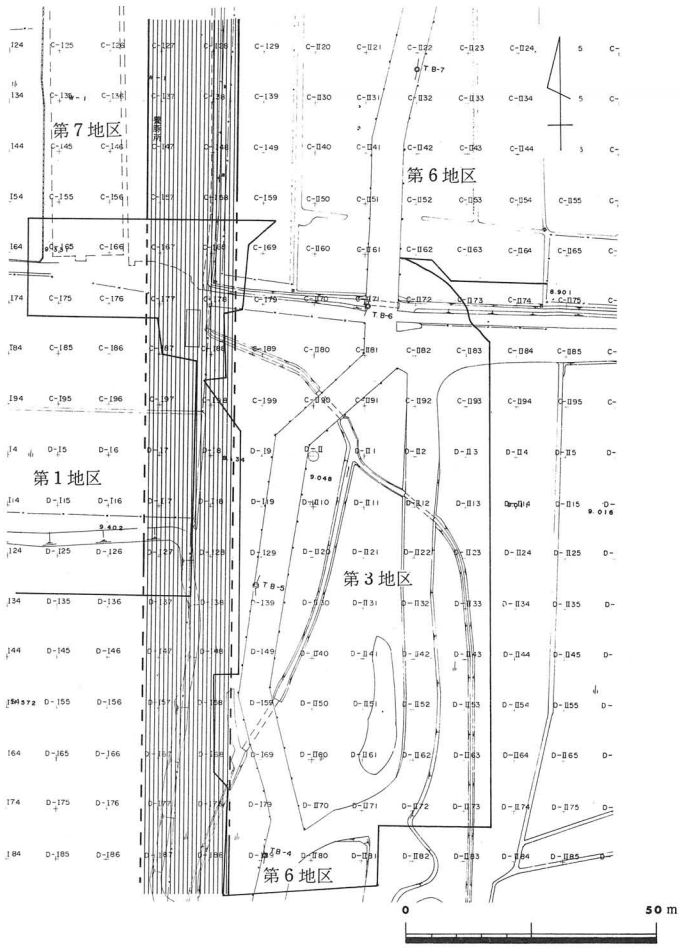
古道が古代の日本の中で萌芽し古代歴史の中で人的、物的移動に大きな役割を果していたかは、紀記等に傍証される所である。古墳時代以降、河川の舟運、傾斜変換線上の生活道路という自然地形に大いに左右されていたに対して社会的・政治的・経済的という要因に組み込まれて古代国家体制下で移動が大和・河内・海上へと拡大していく手立となった。古道の設置が京域の設定、方格地割又は、条里制の基盤となったことは、周知の事実です。これが、上ツ道、中ツ道、下ツ道、横大路、竜田道、円比道（竹内街道）であり大津道（長尾街道）、「難波大道」の設置が企画されると呼応して藤原京、平城京、難波京の遷都へと継続されるにしたがい古代国家体制が大和、河内を中心に躍動していく起因に古道建設に対する古代国家の威信がうかがえる。その上で、本調査で検出された古道は「難波大道」の比定に重要な意義を投げ掛けるものである。次の項目に従い確認された古道について確定付けることによって考証学的な復元にメリットを持ちこたえている「難波大道」を古代の古道地図に明確な表示へとしたい。

前章において「古道」について事実報告を行ったがここで今一度、要約し本調査での発掘成果が「単なる溝の並行した検出」ではなく「古道」すなわち「難波大道」の蓋然性へと換言出来る。



第60図　大和・河内の古道「古代の日本」拠

灰黄褐色シルト層を黄褐色粘質土の地山上に敷きつけめた後、幅0.5～1.5mと差の多い両岸が検出された。両岸には、護岸施設は検出されなかったのは後世の幾多な削平ではなく本来的に存在しなかったと考えてよい。両側溝は、側溝底部しか検出されておらず南側では整地層と地山の一部、北側では整地層の一部が削平されていた。従って、側溝深さや道路幅は左右されてはいるものの現状では約18mとの数値を記述出来る。溝の心心幅は、19m前後である。全長40mにわたって検出された両側溝は、概ね北流して 0.4mの高低差が生じていたもので洪積段丘中位の自然低下である。今回、検出された両側溝の南延長上には、2ケ所において検出されて、その総延長距離は、170m程度であった。1978年発掘調査された第1地区（D－Ⅰ26とD－Ⅰ36）[註－1]



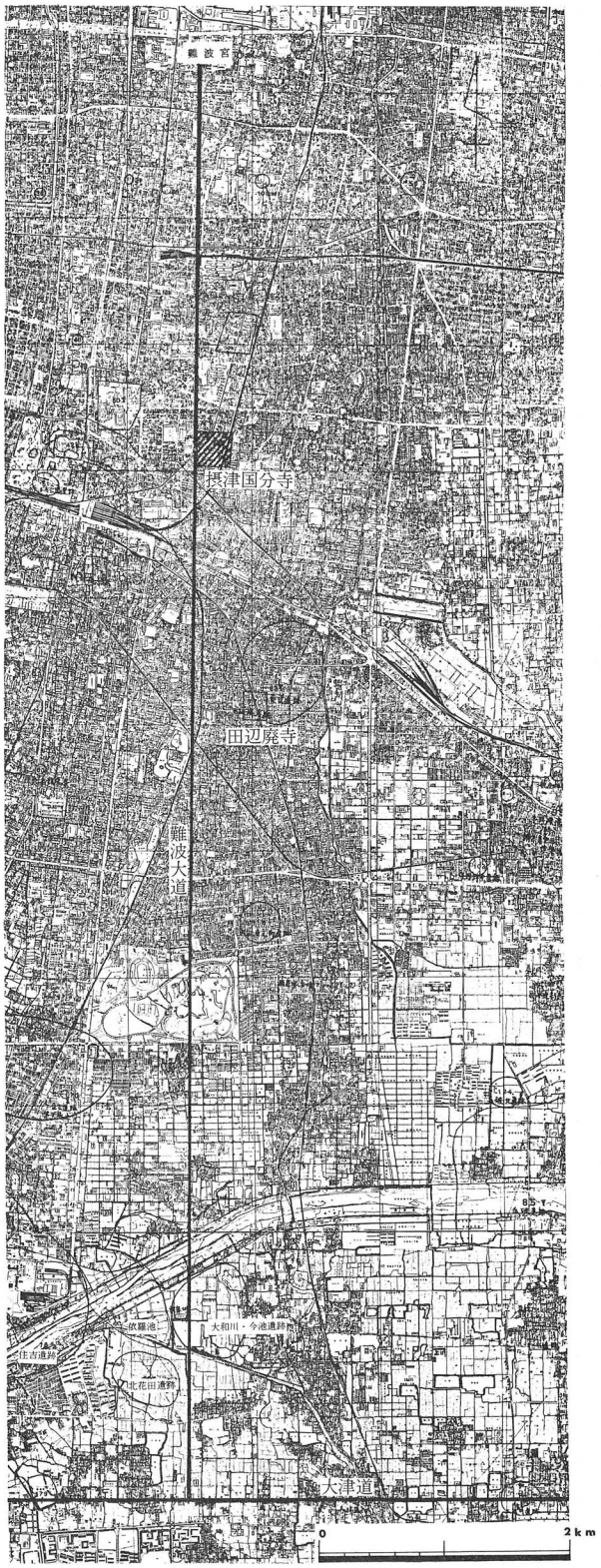
第61図　大和川今池遺跡内難波大道検出図

ＳＤ06、07、08と断続的に一直線上に乗った西側溝底部と確認された溝である。この溝の長さは約10ｍ、幅0.45ｍ、深さ 0.1ｍと極めて浅く須恵器・土師器の細片がローリング現象によって時期不明のものが多い。他方、本報告書でも記載した第６地区、ＳＤ01・ＳＤ03の長さ18.5ｍ以上幅0.7～1.0ｍ、深さ平均 0.2ｍと比較的深い。この東側溝に該当する溝は、Ｄ－Ｉ79とＤ－Ｉ89のラインより西寄５ｍ地点で検出されその主軸を磁北に置いていることは今まで述べた溝とも共通する。これらの第１・６地区の両側溝は、地山すら削平されて整地層も残存しない状態であった。

上記のような考古学的な事実を把握した上で検出した「古道」が「難波大道」として歴史的環境内に包括する作業を進行したい。

難波京の中央を南北に歩る朱雀大路から南へ延長された難波大道に関する論文は、文献や考古学的な調査不足、大阪市内の開発という悪条件下で数点について発表されているにすぎない。

戦前において既に、竹山眞次氏がその著書『難波大道の研究』で論及がなされ大道を南の三国ケ丘台地から端部の大阪城に至る上町台地稜線部に設置されたと解釈されているが[註－2]最近の発掘調査、難波京条坊復元の研究成果から判断して同氏の指摘は、朱雀大路の延長上に線引きされた難波大道として賛同しがたい。むしろ、縄文～古墳時代にかけて大阪湾の海岸線に展開された自然道、生活道路であろうと考える。足利健亮氏は、難波宮を南下し大津道、丹比道を越えて草部、信太山丘陵の西方を南下して和泉国府へのルートが想定され[註－3]摂津、河内から和泉に伸びた主要幹線道路と考えられた。この「和泉の古道」に見られた難波宮への大道は、正しく大和川、今池遺跡の南方に位置する〝今池〟を通過し本調査において検出された「古道」と位置的にも合致する。その後、間もなく、岸俊男は、「近時発掘調査の進んだ難波宮の内裏、朝堂中軸線を試みに真南に延長してみると、国鉄大阪環状線寺田町駅付近に「大道」の地名を存し[註－4]、さらに長居公園南ではその延長線が大阪市の東住吉区と住吉区の境界、また大和川の南では松原市と堺市の境界となっており……」と具体的に想定すると同時に線引きもされた。この岸案は、足利案と同様に要を得ている。藤岡謙二郎は、昭和43年の論及では『大道何丁目といった町名の「大道」があるいは朱雀大路にあたる……』[註－5]と述べ難波と一致するとしながら昭和50年発表論文中で触れている「堆定新旧難波京城と地割および小字名」を見る限り検出した古道より一町東に図示されている点が理解し難い。この大道ラインの説を掲げるのは、梶山彦太郎氏であり大阪文化財協会である。[註－6]後者の根拠の一つに本遺跡内の小字名に「今池下」が残存しているがこれは条里制遺構[註－7]にみられる長地型と誤解している節がある。沢村仁氏は、難波宮の造営と関係してつくられ小道、地境、町村境として残すとした難波大道が「仁徳朝の京関係の事[註－8]



第62図　難波大道復元図

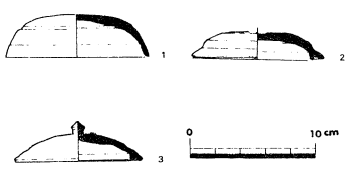
業は、同じ十二支の年にあたる年にあたる孝徳朝のことを遡って造作した可能性がつよく……」としていると論及した。古墳、古道の設定に対して5尺一歩制が採用されたのを河内三道にみられるような真向道路の設置外にあるとした秋山日出男氏は、難波大道ルート[註－9]を検出された古道にのせている。

さて、難波大道の関係記事がみえるのは、日本書紀に3ケ所記されている。仁徳14年丙戌条「是歳作大道於京中、自南門直指之、至丹比邑」

堆古21年11月条「自難波至京置大道」

孝徳　白雉4年発丑「修治処々大道」

まず最初に、「京中大道」の南門、朱雀大路を経て直線的に丹比邑に至ると解釈されるが日本書紀そのものの信憑性、沢村説からしても難波大道の存在はともかく設置年代には疑問の余地がある。堆古21年条は、難波



第63図　大和川・今池遺跡
第2地区出土須恵器

大道―竹内街道(丹比道)―横大路のルートが定説化している。前代の大和川を溯り京に至った船便にとってかわり官道の整備が国家的事業として大土木事業が考えられる。前期難波宮造営後の白雉4年間には、百済、新羅人の入朝に際して大道整備をうかがわせるばかりか難波京そのものが同時期には京として機能を果していた裏付けにもなる。灘波大道そのものの存在に限るかぎり『古事記』履中段の墨江中王が難波宮から南下して多遅比野に向っている記事も参考になる。まだ存在論のこの段階では、日本書記仁徳元年、4年、7年、10年条に記された高津宮が「明治19年内務省地理局」の高津村としても差しつかえないなら仁徳14年条と継続的である。

難波大道の復元には、検出された古道の点と難波宮を一直線で結ぶ必要がある。難波京条坊復元の基準ともなる中軸線の線引きは、近年の発掘調査地区、第17次（大安殿)、第18次（大安殿・前殿)、第33・34次（小安殿)、大極殿の考古学的調査の結果、その中軸線を前・後期難波宮とも共通している。現況図のＮＨＫ大阪放送会館交差より東へ 170ｍ前後と大和川・今池遺跡の古道とを地図上に引けば無理なく二点は接続される。[註―10] この二点を現地形図で難波宮から追うと次のようになる。木谷町―真田山町―北山町―真法院町―北生野町―三明町1丁目―美章園三丁目―文の里4丁目―桃ケ池町1丁目―田辺西之町4丁目―田辺本町8丁目―長居町東7丁目―苅田町4丁目―大和川を越えて堺市と松原市境のまま長尾街道まで達する―竹内街道との交点の堺市金岡町大道。こうしてみると区、市、町境線上に合致している。例えば堺市と松原市住吉区と東住吉区、庭井町、苅田町、長居町と南矢田町、寺田町と国分寺町、真法院町と鳥ケ辻町、北山町と松鼻町、石ケ辻町と筆ケ崎町、東高津町と味原本町、小橋町である。明治18年作製地図から境界又は道路として難波大道復元線と不可思議なぐらい符合した。[註―11] その区間は南花田村から掘村、南田辺村の西側、国分寺から難波宮付近までの全長約$\frac{2}{3}$が一直線として遺存していた。これは、周辺の条里制の復元された地域にはこのような現象は検証出来ない。中近世期の例証として、河内国丹北郡と摂津国住吉郡境にも成り難波京条坊・条里制と相互関係で現在に経緯している印象を与えた。

区・市・町・道路界の原因とも成り得た中に条里制がある。そこで、条里制と難波大道のかかわり合いとなると2説に区別される。堺市側の条里復元作業の基礎となった「摂津国住吉郡朴津郷1条1里33坪」(開口神社文書尼妙恵寄進状―文治3年）からの復元図を記載した堺市史[註―12]では検出の古道より東2町に里境を置く。同じく古道跡と東1町ずれの里界説は、由井喜多郎

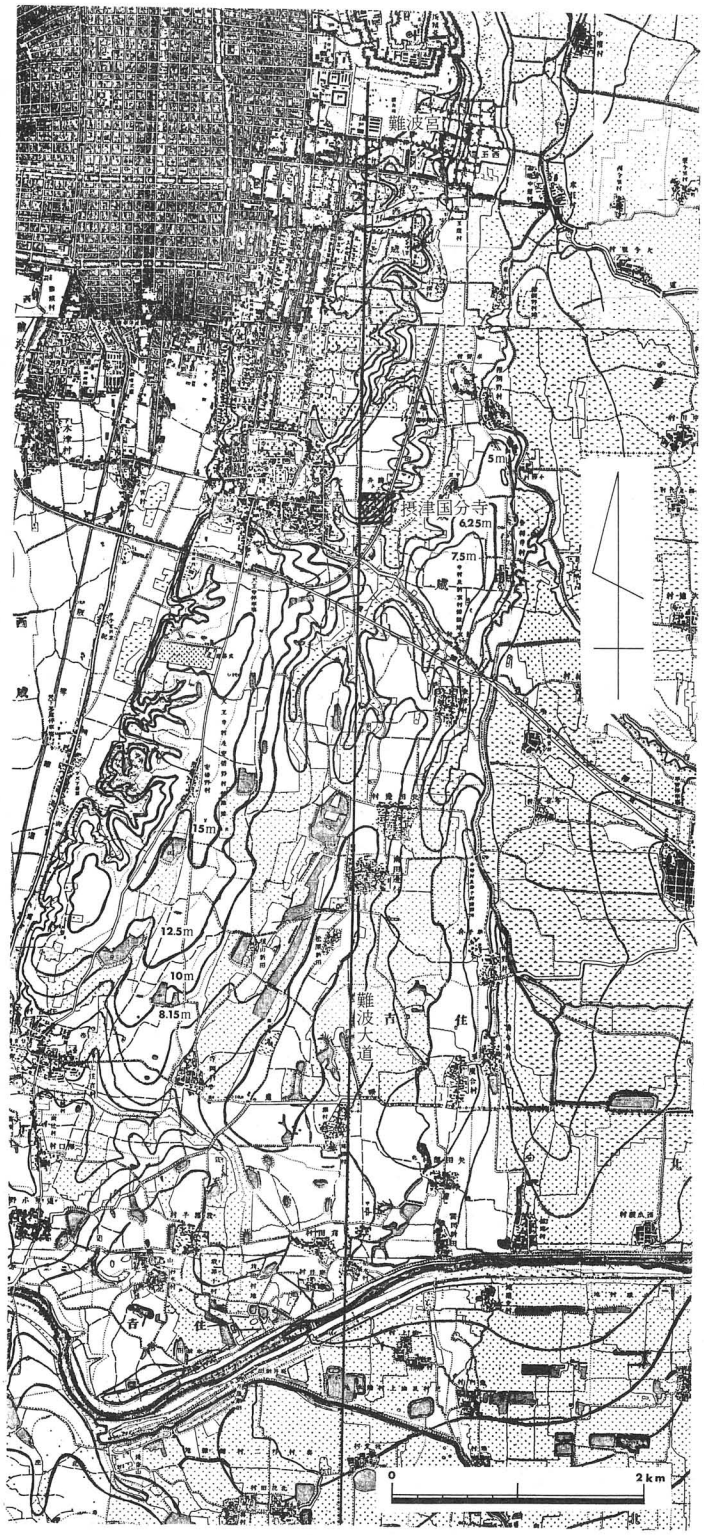
氏がいる。これらに対し、古道跡を里の基点とした桑原公徳、足利健亮、出水睦已氏の論説は[註—13] [註—14]地籍調査、石清水文書、太政官符（延久4年）に基盤としており前者の1町幅に変則性が認められることも考え合せれば後者に優越性が感受される。ただしこの場合も、南方の入下郡条里[註—15]制とは多少とも変則する。蛇足になるが、大和川・今池遺跡において10数ケ所の地点で条里制遺構を確認し1町幅を108～109mに復元でき現地形に観察される畦畔直下に存在した。

このように復元した難波大道ルートの歴史的偶然性は、旧地形からはいかなる設定にあるかをみたい。上町台地の最先端に立地させた難波宮に向う大道は、一見台地上の平担地を通過しているように現状では誤解されやすい。T.P.＝8.60～22.42mと相当な差が生じているばかりか洪積段丘中位を切り込むような旧西除川・旧大和川の氾濫を物語る起伏、谷底が形成され中・急斜型の地形に設置されたものである。そのルートの旧地形を詳細にみると一部旧西除川の氾濫源をさければ洪積段丘中位東縁辺沿いに長居町、美章園付近まで続いてきた段丘上も大道4、5丁目では小さな起伏が繰りかえされる（高低差1～2m前後）入りくんだ谷底をさけて台地上に営まれた摂津国分寺より以北は難波大道より約50～100東で約2m強の段差をもつ縁辺状態で細工谷町に入る。東高津町で谷口、城南寺町では大道ルートのわずか巾20m前後だけが馬背状を呈する。空清町の谷、清水谷町の隆起後、上町一丁目付近の数m差に達する幅広い谷底後、上町台地上の最高所に位置した難波宮へと通じる。これらの地形をうかがわせる小字名に次のようなものがある。「寺山」「清水谷」「ヨク谷」「松ノ鼻」「谷」。難波より飛鳥京に至るには、距離的には大和川沿いが近道とされるが旧西除川、旧東除川、旧大和川の氾濫によって形成された自然堤防もその氾濫によってルート設定には不可能といえ大部分を占有する後背低地、氾濫平野は歩行には困難な上、三河川の氾濫は今日の想像を超越するものである。自然道の発達・整備された生活道路としては役目を果し得るが政治的色彩の強い官道には、旧大和川沿いの道路は適当とは考えられない。

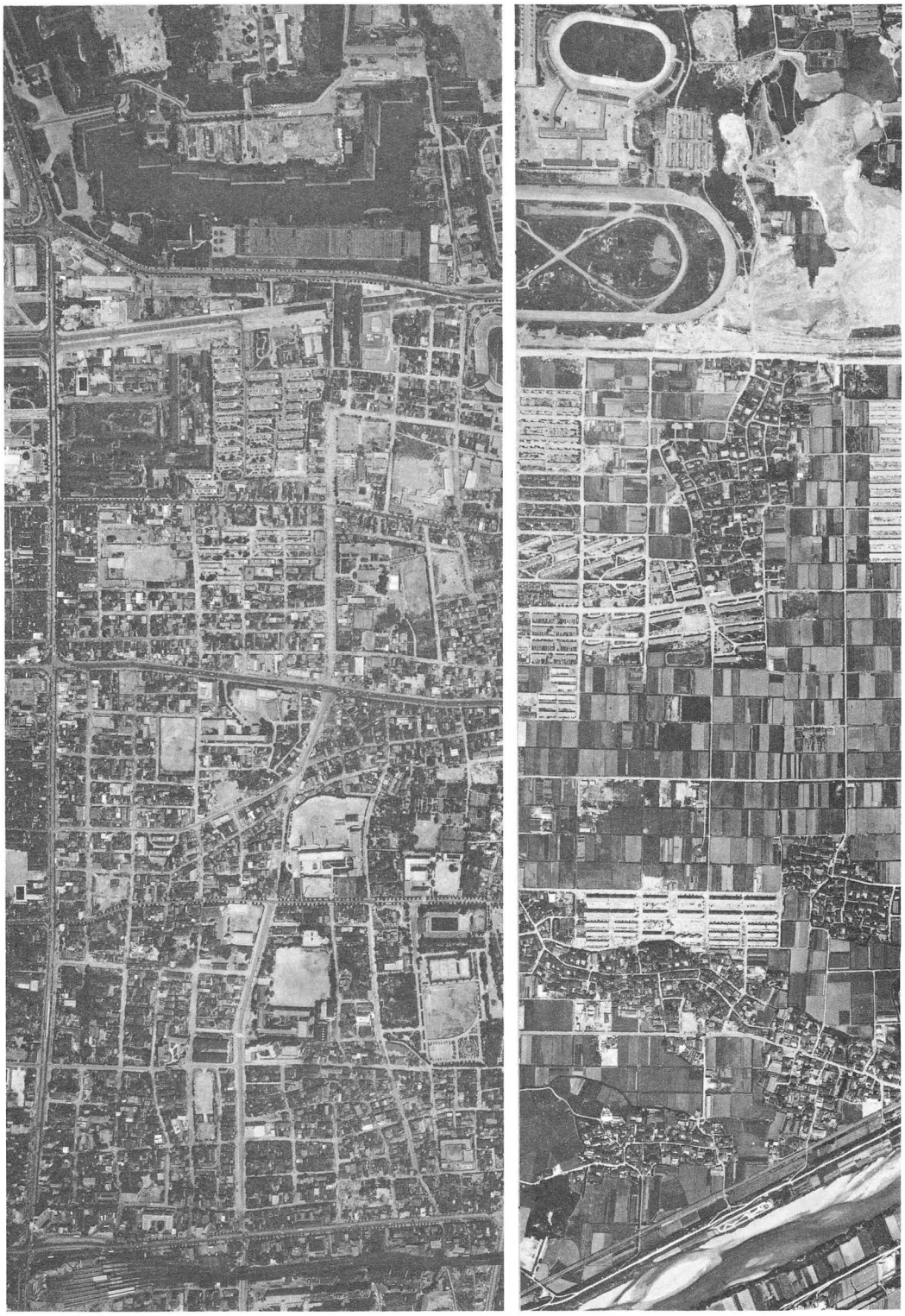
本遺跡で検出された古道は、復元ルートからしても「難波大道」と肯定しても不自然でないことは前述した通りである。この古道の設定時期は、第16・17・18・21・31次発掘調査のSB1685、SB1883、SD1682、SD2181～84、SX2185の難波宮下層遺跡群に属する遺構で前期難波宮、後期難波宮の建物群とは明白にその主軸を異にすることは既に指摘されていたことから孝徳期の前期難波宮造営と同時期に中軸延長線上に「難波大道」[註—16]なる道路を大津道、竹内街道に接続していたと考えられる。これを裏付ける資料に本遺跡、東側溝内より検出された須恵器・杯身が上げられる。その製作時期は、陶色Ⅲ型式3段階のサンプル窯として知られるKM117窯、TK217窯に類似品を見い出すことが出来、陶邑Ⅲ型式1段階[註—17]から須恵器、瓦の併用窯

として又、川原寺創建の瓦窯跡である奈良県五条市荒坂瓦窯跡に同形式が生産されている。その創建が600～670年より先行した時期に所定した場合、自ずと「難波大道」の設定時期を想定出来る。[註一18]この場合、資料不足は否めないので「難波大道」設定時期は、前期難波宮造営期に相前後して建設されたとする説に賛同したい。

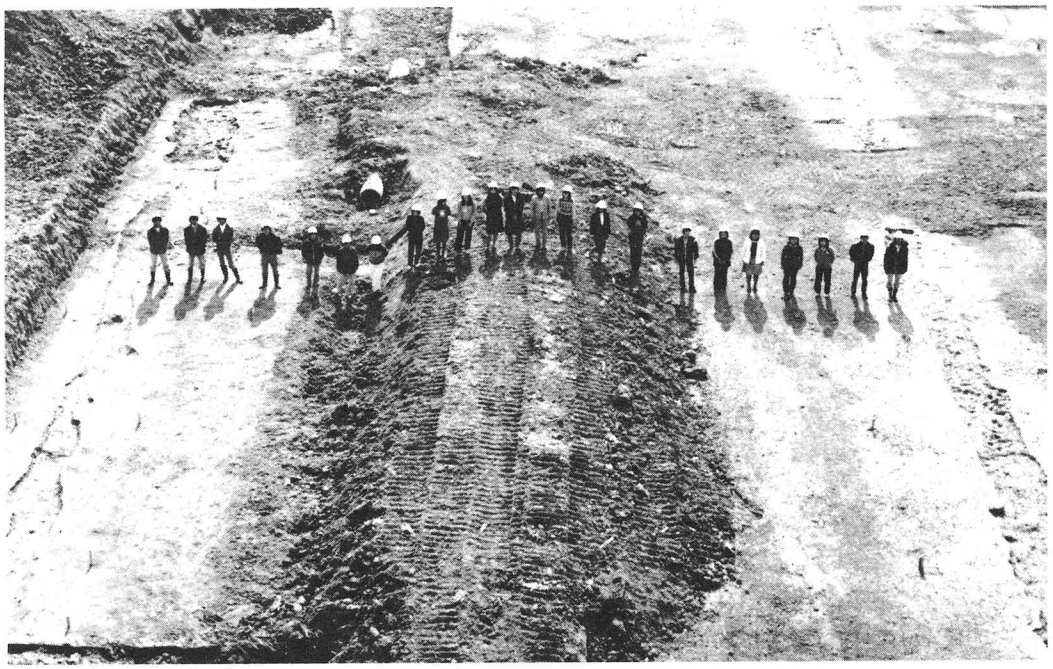
字「下ノ大道」「大道口」「往大道」の地名を残す復元、「難波大道」は、難波京条坊の基準ともなり、復元8葉蓮花文軒丸瓦を出土した摂津国分寺の寺域設定にも大きな決めてとなって西寺域線が古道と合い接する。大和川・今池遺跡でも第2地区で多量の陶邑Ⅲ型式1段階の杯蓋身を、第5地区ではＳＢ04掘立柱建物が検出され古道隣接地での相前後した時期の生活様相が知られつつある。「日本書紀」仁徳天皇42年9月条皇極天皇元年5月条に記された依羅屯倉阿弭古の捕鳥伝説は、



第64図　難波大道と旧地形図



第65図　難波大道(難波宮・長居付近)垂直写真



第66図　難波大道

推古天皇15条[註—19]に「依羅池」の築造記事とも考え合[註—20]せると天皇献上物の捕鳥、養魚場として京延長上すなわち[註—21]難波大道よりわずか 100m 西地区は自然地形を最大限に利用し[註—22]「依網池」の存在がクローズアップされる。この「依網池」は、深さは洪積段丘の窪地利用のためか水深 2.0以下と浅いが現存の狭山池を凌駕する広大な面積を有し上町台地上の耕作地の増大も「難波大道」設定後に当地における条里制施行がより安定した経済的基盤形成に役立ち難波京を維持したと考えられる。

飛鳥京への物資の搬入は、大阪湾から大和川を溯る舟運搬が主流であったことは「日本書紀」推古16年8月条、推古18年10月条に史実としてみられるが推古21年の難波大道設置は官道の整備が必要視[註—24]されつつ外交的[註—25]、軍事的色彩の強い国家的威信をかけた旧地形を無視した事業といえる。中尾芳治氏は狩野久氏の難波宮造営前の官大道を妥当性を否定して「この古道が上町台地の地形的中軸線(N20～E)に一致せず、侵食谷の入りくんだ台地東斜面の複雑な地形の上にほぼ真南北に設定されていることは、前期難波宮の中軸線をそのまま南に延長させて人為的に作られたものであることを示しており、難波宮に先行するものとは認め難い[註—26]」としているが都城制や政治的色彩の強い官大道は「難波大道」にも妥当するし旧地形の制約を超越して大津道も設定している。洪積段丘中位上の挟間川、光竜寺川、西除川、東除川、大乗川、石川、大和川の氾濫源の事情を考慮すれば「難波大道」の通過する上町台地上の侵食谷を陵駕する。しか

第67図　大和川・今池遺跡から難波宮へ

し、交通の中心はやはり舟運であったことは後の平城京に通じる下ツ道の中央に運河を設定していたことが最近の発掘調査として得られた。大阪湾、大和川、その支流である佐保川、そして下ツ道中央の運河を物用して羅城門に至っていた。反対にこのような事情が「難波大道」の重要性の欠如に繋がっていたと思われるが[註—27]「難波大道」の存在意義は先に述べた方にポイントを保有する。「難波大道」も平城京終焉と同時に官道から生活道路としての性格に推移していたと考えられ大阪市内の乱開の犠牲となり十分な難波宮の復元が考古学的に不十分なままとどまっている。今後、朱雀大路、大津道付近での数多くの発掘調査成果に期待して未筆としたい。

大和川、今池遺跡から難波宮へ歩いて

「難波大道」を歩く会

日時　昭和56年１月11日

距離　大和川・今池遺跡事務所～難波宮、大極殿　約 9.9m

スタッフ　リーダー　森村健一　地図班　川口宏海(仏教大学・大学院) 安村俊史(大阪市立大学学生) 撮影班　足立　寛　上野浩司（関西大学学生）

記録班　北尾真裕利（花園大学ＯＢ）藤田道子（大阪市立大学学生）

食糧班　吉野　実　大森達夫　斉田　溝（仏教大学学生）

オブザバー　武内雅人（和歌山県文化財研究会技術員）積山　洋（大阪市立大学学生）

天　候　晴　風強く寒い

経　過

9時15分　現場事務所　出発

9時55分　保利神社到着

10時25分　山坂神社到着（6,300歩）

10時55分　法楽寺　到着（7,350歩）

11時20分　榎神社到着（9,220歩）

文の里中学校の南側交差点で西へ200～300ｍわたり下る。同中学校をすぎたあたりから北方向へ下り坂となる。この坂は、多少小さな起伏がある。

12時00分　摂津国分寺到着（13,500歩）

丁度、一町四方強のエリアで微高地となる。

13時15分　出発

14時26分　難波宮・大極殿到着（18,240歩）

所要時間と旧地形の復元と遺跡のかね合いを目的として歩いてみた。

我々が今、目にする地形上に存在する遺跡は、一見にして平担地のような地形を無視して形成されているような誤解を描えている向がある。前述のように、「難波大道」「難波宮」「上町台地上の古墳」「四天王寺」「摂津国分寺」「大和川・今池遺跡」も旧地形上で好地を選択している事等にも注目し考古学な調査に充実させたい。その意味で、〝歩く〟ことの重要性はあると信ずる。

註１　大和川・今池遺跡調査会『大和川・今池遺跡―第１地区発掘調査報告―』1979.3.

註２　竹山眞次『難波古道の研究』昭和10年３月

註3　足利健亮「恭仁京の京極および和泉・近江の古道に関する若干の覚え書き」(『社会科学論集』第13号) 昭和45年3月

註4　岸　俊男「古道の歴史」『古代の日本』5　近畿　昭和45年1月

註5　藤岡謙二郎「上町台地と治水事業」『地形図に歴史を読む』—続日本歴史ハンドブック—
昭和43年
「古代の難波京城を中心とした若干の歴史地理学的考察」『織田武雄先生退官記念人文地理学論叢』昭和46年6月
「畿内とその周辺」—古代編—『日本歴史地理総説』昭和50年

註6　梶山彦太郎　「難波古京考」昭和56年1月

註7　中尾芳治氏他10人の方々に現地において御教示を得た。謝意申し上げます。

註8　沢村　仁　「難波京について」『難波宮址の研究』研究予察報告第6　大阪市教育委員会内難波宮址顕彰会　大阪市立大学　難波宮址研究会　昭和45年

註9　秋山日出男　「日本古代古道と一歩の制」『橿原考古学研究所論集』(創立35周年記念)
昭和51年6月

註10　中尾芳治　「難波宮址第16、17、18、21、31次遺跡調査報告」—難波宮内裏地域の調査—『難波宮址の研究』研究予察報告第6　大阪市教育委員会内難波宮址顕彰会、大阪市立大学難波宮址研究会

註11　大日本帝国参謀本部陸軍部測量局　明治18年測量同20年　製版『大阪』

註12　『堺市史』第1巻、武藤　直「古代2」『堺市史』続編第6巻付図　昭和51年3月

註13　由井喜多郎　「河内国条里の研究」『ヒストリア』第13号
「河内国における条里制捕遺」『社会科研究』第9～13号　昭和33年

註14　出水睦巳　「松原市域における条里」『大和川・今池遺跡Ⅱ　第3・4・5地区発掘調査報告書』大和川・今池遺跡調査会　1980.3

註15　松原市史編北室　「松原市における小字名と小字図」『松原市史資料集』第4号　松原市役所
昭和50年3月

註16　前掲書

註17　大阪府教育委員会　「陶邑Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」『大阪府文化財調査報告書　第28輯』
1976、1977、1978、1979

註18　奈良国立文化財研究所「川原寺発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報』第9開
昭和35年

註19　『日本書記』仁徳天皇42年9月条

庚子朔、依羅屯倉阿弭古、捕異鳥、献於天皇日、臣毎張網鳥、未曽得是鳥之類、故奇而献之。天皇召酒君、示鳥日、是何鳥矣。酒君対言、比鳥之類、多在百済。得馴而能従人。亦捷飛之掠諸鳥。諸鳥。百済俗号比鳥日倶知、是今時鷹也乃授酒君令養馴。未幾時而得馴。酒君以韋緒著其足、以小

鈴著其尾、居腕上、献干天皇。是日、幸百舌鳥野而遊猟。時雌雉多起。乃放鷹令捕。忽獲数十雉。

註20　『日本書紀』皇極天皇元年（642）5月条

2未（壬日）、於河内国依羅屯倉前、召翹岐等、令観射獵。

註21　日本書紀・推古天皇15年冬条には「是歳冬、於二倭国一、作二高市池・藤原池・肩岡池・菅原池一。山背国、掘二大溝於栗隈一。且河内国、作二戸苅池・依網池一。亦毎レ国置二屯倉一。

註22　森　浩一　「対談・古代の池をめぐって」『池』日本古代文化の探究　昭和53年2月

註23　森村健一　「記紀にみる依網池について」『大和川・今池遺跡―第1地区　発掘調査報告』大和川・今池遺跡調査会（1979.3）

註24　日本書紀　推古16年8月

秋8月辛丑朔癸卯、唐客入レ京。是日、遣二飾騎75匹一、而迎二唐客於海石榴市[5]術一。額田[6]部連比羅夫、以告二禮辭一焉。

註25　日本書紀　推古18年10月

冬10月

己丑朔丙申、新羅任那使人臻二於京一。是日、命二額田部連比羅夫一、爲下迎二新羅客一莊馬之長上。[a]以二膳臣大伴一爲下迎二任那客一莊馬之長上。卽安二置阿斗河邊館一。

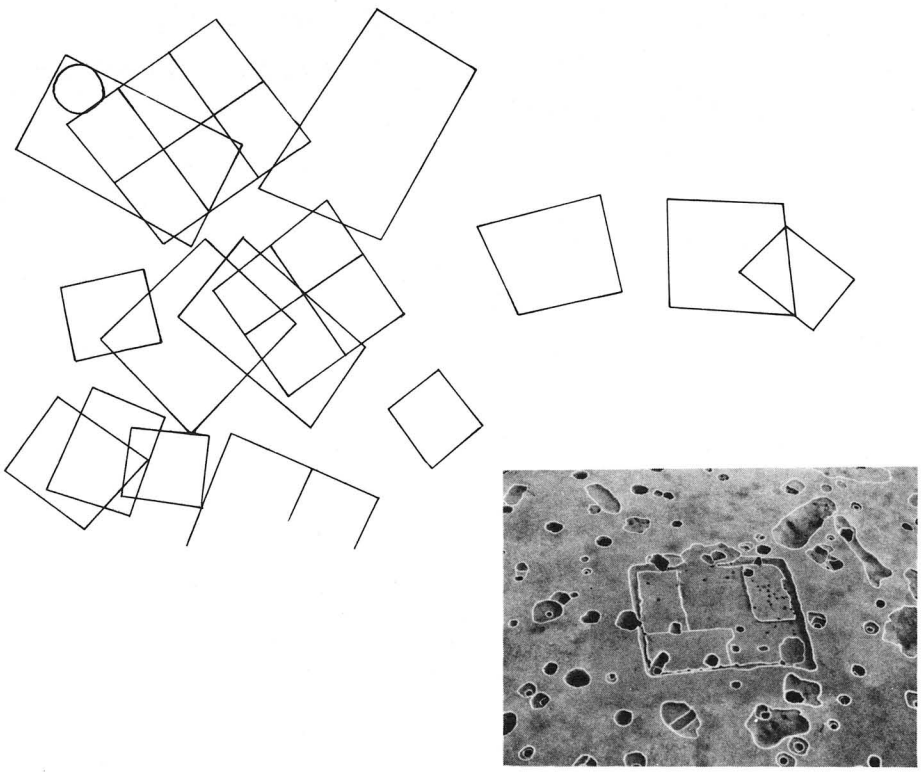
註26　中尾芳治「難波宮と難波京」『都城』日本古代文化の探究　昭和51年5月

註27　中井一夫・泉　武　「大和郡山市稗田　下ツ道発掘調査概要」発掘調査現地説明会資料　奈良県橿原考古学研究所　1980.12.21

第6章　結　　語

本調査区は、巨視的には洪積段丘中位東縁辺に営まれた古墳時代、中世、近世の生活遺跡である。古墳時代の溝は、東側の低地に向って流れ既掘の溝と企画性を含有して掘削されていると考えられるが第3地区の30数ヶ所に及ぶ近世耕作用井戸によってその大半が削平された。

井戸は、掘戸柱建物3棟とユニット関係に構成されたことが出土遺物、その相互位置から判別可能である。ＳＢ01(住居)、02(倉庫・棟持柱有)の掘立柱建物は、ＳＥ17とＳＢ03はＳＥ08、09に組み込まれていた。今回のエリア内には、ＳＢ02、ＳＢ03、第3地区のＳＢ01と棟持柱をもつ掘立柱建物が群在している。これらの棟持柱建物は、他の同時期の掘立柱建物群とは位置的に隔絶され概して「空間」利用に配慮している事から「特別な倉庫又は、住居」と解釈しても
註－1



第68図　第7地圧掘立柱建物遺構図、第8地区竪穴式住居

よかろう。遺構と伴出した遺物の内、ＳＢ03柱穴内出土の須恵器高杯の内外面とも朱塗り痕が認められたことと布留２・３式土器は、全て河内系統に把握される土器群であることは興味深い。中世期の遺構は、検出されていないが瓦器等の遺物は多い。中でも瓦器は、和泉出土瓦器とは暗文、口縁部等に相異点が知られこれも又、河内地方の出土品に類例を求める方が早い。耕作用井戸は、素掘り井戸・木組桶側型井戸・木組隅柱横機型井戸の３種類で素掘り井戸が大半を占める。井戸の所在位置は、旧田畑１枚に対し必ず１ヶ所開鑿[註－2]され畦畔に沿っているのが原則的なのに対して東側の群在は旧河道に立地した耕作用井戸群に比して異常ともいえる。湧水量のの不足から数回の開鑿した結果で、現に発掘当時も大した水量が得られず現地表から５ｍ下まで湧水層が存在しなかったことからこの現象も必然的なものであろう。

古墳時代の遺構が微高地として形成された旧河道上の砂質土、砂礫土上に構成されている自然地形を最大限に活用している様子が近世耕作用井戸の所在にも共通性が見い出される。

今回の発掘調査に於いて最大の成果は、難波宮より南下した「古道」である。その歴史的背景から考察して日本書紀に記述されていた「難波大道」として確証された。文献に見られた推古21年条以前は、舟運だけの記述に宮道の存在を明記され孝徳期難波宮造営期には「難波大道」設置を必要とした政治的、軍事的、外交的な宮道の建設が古代国家体制下での重要事業として浮き上がられた。平城京廃絶期まで宮道としての役目を果し、宮道を基準として摂津国分寺起立、条里制施行とその与えた歴史的影響も絶大である。

大和川・今池遺跡は、今年まで約50.000㎡に達する発掘調査を完了したが南半分の未調査区域の発掘調査、又は、周辺の洪積段丘上に所在する遺跡、自然地形を吟味され歴史的事実として組み込まれることを期持したい。

註－１　大和川・今池遺跡調査会　「棟持柱を有する掘立柱建物」『大和川・今池遺跡　Ⅲ　第３・４・５地区発掘調査報告書』　1980・３

註－２　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島県文化財協会　『草戸千軒町遺跡－第18～20次発掘調査概要－』　1976

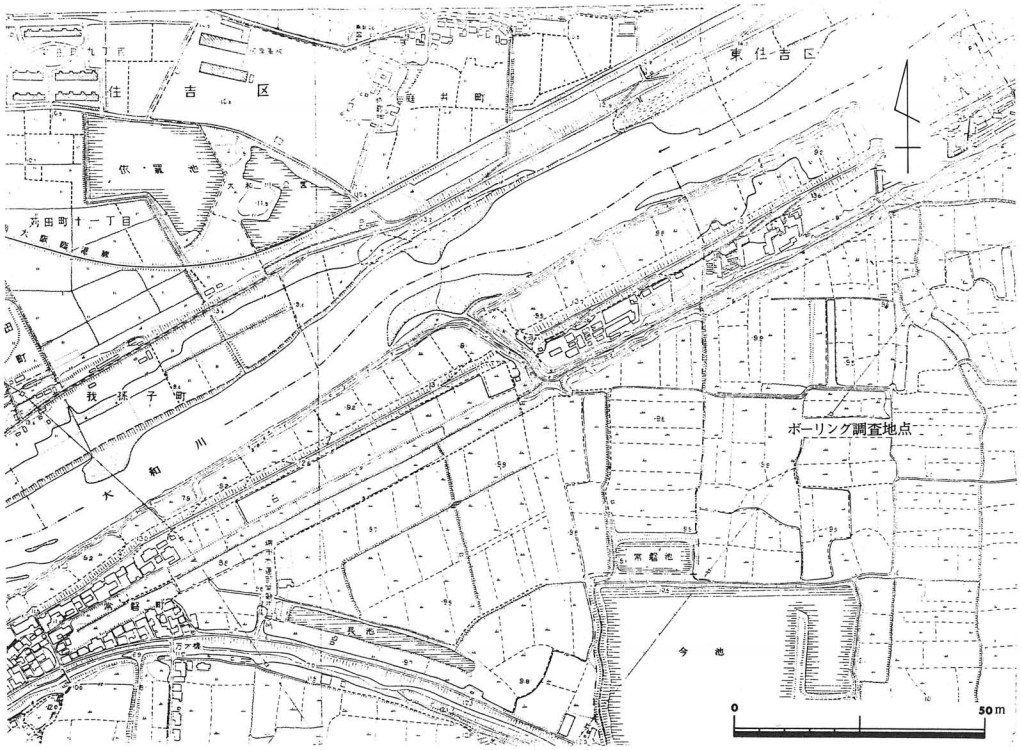
第7章　研　究　編

第1節　大和川・今池遺跡の貝化石層

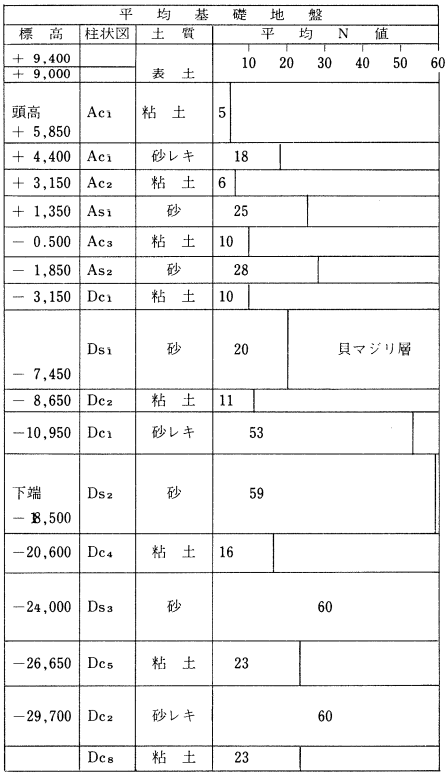
梶　山　彦　太　郎
金　子　寿　衛　男
（桂浜貝類博物館々長）

1．位　置

大阪市や堺市の地盤は、大阪層群の上を上町層（洪積層）や沖積層（完新統）が、薄くおおって構成されている。それは丁度横臥した人（大阪層群）の上にふとんがかけられているようである。否そのほとんどは薄く腹部のみに毛布がかけられているとも言える。そのかけられた毛布の内、上町層は大阪城のある地点を北端として南に走り、東西に巾をひろげて台地を形成している。この台地が大和川に達したところの大和川南岸に、大和川・今池遺跡がある。遺



第69図　大和川・今池遺跡旧状図とボーリング調査地点（貝化石層発見地）



第70図　大和川・今池遺跡の地質柱状図

跡地で掘り下げられた工事穴のＴＰ−3.15～7.45ｍの青灰色砂層から、ここに述べようとする貝化石層は発見された(第70図)。当然この貝化石層は洪積層（＝更新統）の一員である。上町台地をのぞく。大阪市全域や堺市の海岸には沖積層がひろがり、この沖積層には到る所に、広範囲に貝化石を産する。しかし洪積層の貝化石は、それに比して少ない。かつて大阪城桜門付近、および地下鉄西田辺駅、国鉄天王寺駅およびその東、等に相当量の貝化石を産[1)2)]したが、その他の場所では小規模の化石層が散見されることが多く、又化石がとけ去って痕跡を残すのみといったものが多く、保存のよい化石を発見する機会にはあまり恵まれていなかった[4)]。今回発見された遺跡内の貝層は、今迄のものに比して量も多く、保存状態もよく、この層の成生されたころの堆積状況を知るには、この上もない好資料となった。

2．堆積実年代の考察

本貝層を含む上町層は、今から何年程前に堆積した地層であろうか。興味ある問題であるが、現在の学術水準ではその実年代は、あまりはっきりしたことは判明していない。

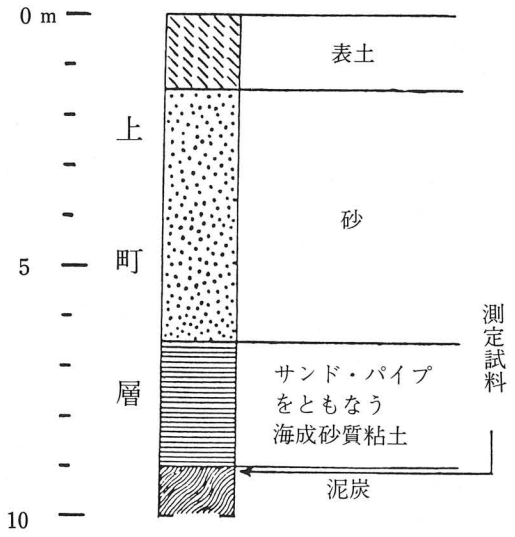
この層は大阪平野を構成する地層の中で、層序的位置として中位段丘であるということは、ほぼ通説となっている。その実年代として、かつては５万年～15万年といった年代を用いたころもあった[3)]。しかし近年では38,000年(第71図)といった表現をされたものが多い[5)6)13)]。これはかつて地下鉄建設工事の時、長居駅の工事現場で採集された木材の放射性同位原素^{14}Cによる年代が、次のように測定されたことによるためと思われる。$37,600\,^{+3,400}_{-2,400}$years B. Pしかし著者市原実氏は±の多いことから次のように、つけ加えている[11)]。

“この値は、中位段丘堆積層が50,000～100,000 years*/ B. P. の地層といわれているのにくらべると若すぎるようである。……この程度古い試料では、測定の誤差がひじょうに大きくなり、また、もし試料に recent carbon** がごく微量混入していても、測定値から推定した絶対年代値は実際の絶対年代値よりずっと若くなる。したがって、ここでは、上町層下部の木材は $37,600\,^{+3,400}_{-2,400}$ years / B. P. より古いというにとどめておく。”

これは^{14}C測定の限界近い測定値が、あまり信用の置けないことを明記されたものであると思われる。

＊　50,000～100,000 yers / B. P. とは、1950年を起点として5万年から10万年前との意。

＊＊ recent carbonとは年代の新しい炭素。



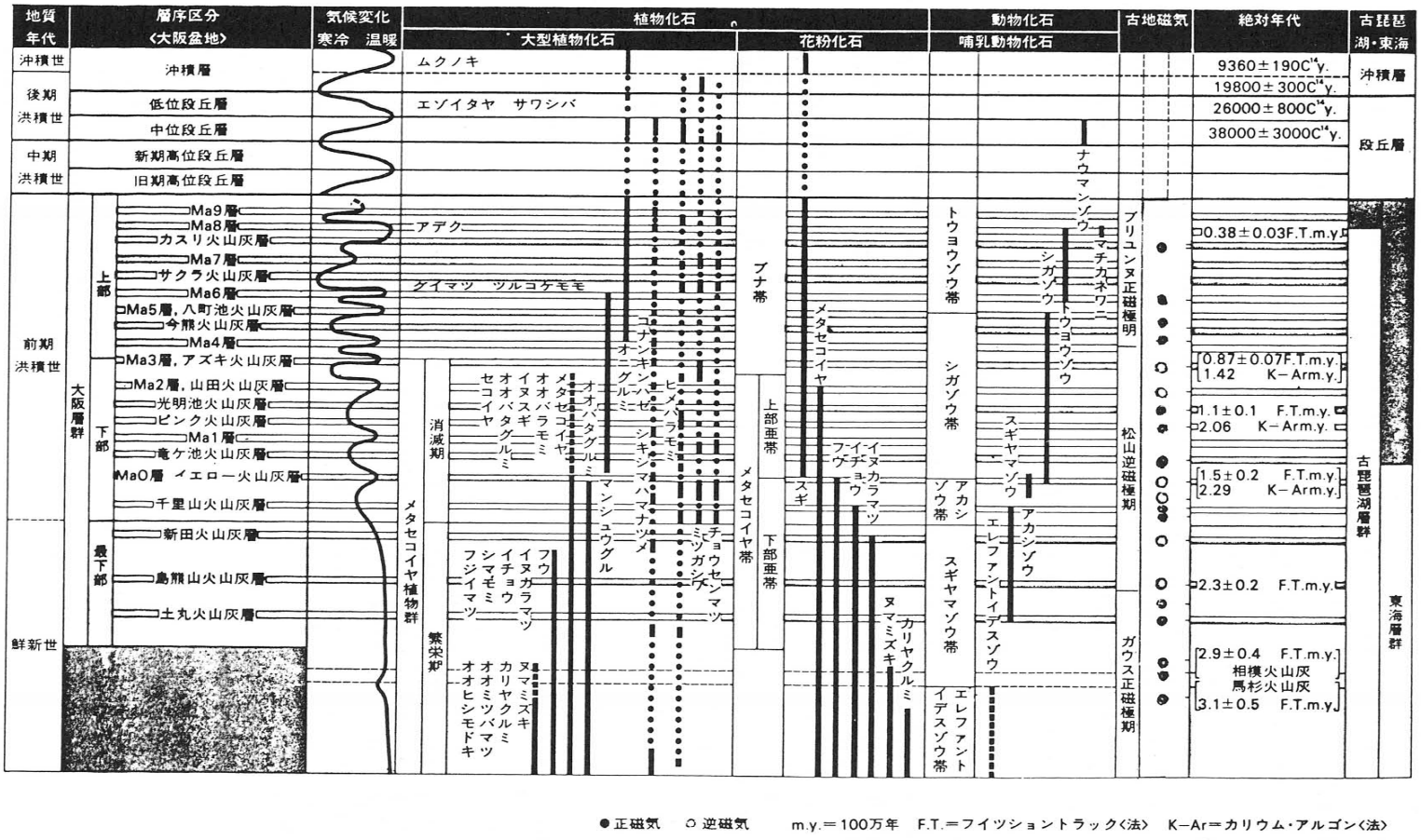
第71図　大阪市長居地下鉄工事現地の上町層の柱状図

又それより以前に筆者の1人梶山が、この地点より北方 1.2kmの地下鉄西田辺駅および、大阪城桜門付近出土の貝化石について、同じ学習院大学に測定を依頼した結果は、次のとおりである。（大阪西田辺 Gak 164　>30,000）（大阪桜門　Gak 165　>30,000)。

そして測定に当った木越氏は、“これらは^{14}C年代測定の限界である”と付記されている。それが3万年以上とある限り、実年代は5万年とも、10万年ともわからないということとなり、“^{14}C測定値の3万年以上のものは±の値が大きくなり、あまり信用することができない。”ということを、暗に示しているかのようである。尚その貝化石層は、前記した市原氏が木材試料を採集された泥炭層よりは、下位の地層であると推定される。以上のとおり^{14}Cによる実年代の測定は、前記の測定年代までくらいがその限界と考えられ、それより古い層序の測定は、フィッション、トラック法等によらねばならない。ところがこれによる前期洪積世最上部付近の年代は38万年となり(第72図)、この間に測定より上の前期洪積世最上部、高位段丘層および、前記泥炭層より下の中位段丘層が、堆積したこととなる。故に今回発見された大和川・今池の貝化石層は、38,000年と測定された前記泥炭層よりは古い年代の地層であり、層序としては中位段丘の一員として存在する。しかし古さの限界は38万年前の前期大阪層群堆積期から、高位段丘等前記した層の堆積期間を取去った年代という、甚だ漠然とした年代しか推定し得ないこととなる。

3．貝化石の構成

本貝化石層の貝は、現在までに淡水貝は発見されておらず、汽水産の(カワアイ)等の他は、全部海水産貝類であり、内湾性の泥地のものが多く、近世の堺市の海岸のように、直接大阪湾



● 正磁気　○ 逆磁気　　m.y.＝100万年　F.T.＝フイツショントラック〈法〉　K−Ar＝カリウム・アルゴン〈法〉

第72図　大阪層群の鮮新世—更新世編年表　文献5)による

の波が打寄せるといった状態とは異り、前面に沿岸州が形成され、その後背湿地といった環境を好む種が多く、特に芦の繁る潮干帯といった所に好んで棲む、ヘナタリやカワアイそれに続く水域に繁殖するウミニナ・イボウミニナ等が圧倒的に多い。このことはかつて発見された、この地点より以北、以西の上町層貝化石に比し、特殊な状態を物語っている。尚上町層の現在までに調査された貝化石層では、発見されていないカモノアシガキが多産することは、特に本化石層の特異性を語るものである。尚大阪、堺市域を構成する地盤の、地質学、古生物学の通俗的な説明書としては、前出文献以外に文献7）8）9）10）等をあげることができる。尚本稿を書くに当り、市原実氏の業績より、有益な示唆を受けた。又大山桂氏からも貴重な教示を受けた。両氏に対し心から感謝の意を表したい。

文献目録

1.	梶山彦太郎	大阪市地下の貝化石	Nature study 4-11	1958. 11	自然科学博物館（自然史博物館）
2.	金子寿衛男 梶山彦太郎	大阪平野の貝化石・その他	大阪の化石	昭37. 8	大阪自然科学研究会（自然史博物館内）
3.	千地　万造	大阪の地質	大阪の化石	昭37. 8	大阪自然科学研究会（自然史博物館内）
4.	金子寿衛男 ほか	大阪市内地下の貝類化石		昭41. 10	大阪自然科学研究会（自然史博物館内）
5.	市原　実	大阪層群と大阪平野	URBAN KUBOTA 11	1975. 3	久保田鉄工㈱
6.	湊　正雄	日本の第四系		1974. 5	築地書館
7.	千地　万造	段丘とその地層	大阪の自然	昭41. 4	六月社
8.	金子寿衛男	工事場の貝	大阪の自然	昭41. 4	六月社
9.	横山　卓雄	大阪府史第1巻1章1－4節		昭53. 3	大阪府
10.	市原実ほか	日本の平野	日本の自然	1977. 9	平凡社
11.	市原　実 木越　邦彦	大阪附近の沖積層段丘堆積層から産出した泥炭木材の絶対年代	地球科学58号	1962. 1	地学団体研究会
12.	木越　邦彦	年代を測る(放射性炭素法)		昭53. 2	中央公論社（中公新書 496）
13.	市原実監修	大阪神戸の自然を歩く		1979. 6	創元社

大和川・今池貝層産　貝類

二枚貝類

※カモノアシガキ……顆多
ナミマガシワ…… 〃
ハイガイ…… 多
サルボウ……普通
※ササゲミミエガイ…… 少
マガキ…… 〃
ウメノハナガイ…… 〃
イチョウシラトリ…… 〃
ヒメシラトリ…… 〃
イタボガキ…… 稀
ウネナシトヤマガイ…… 〃
ヒメエガイ…… 〃
ビヨウブガイ…… 〃
ヨコヤマミミエガイ…… 〃
オオノガイ…… 〃
ハマグリ…… 〃
アサリ…… 〃
マルミミエガイ…… 〃
カガミガイ…… 〃
キクザル…… 〃
オキナノエガオ…… 〃

ツノガイ類

ヤカドツノガイ…… 稀

巻貝類

イボウミニナ……顆多
ウミニナ…… 多
ヘナタリ…… 〃
※ホソコウロギ……普通
カワアイ…… 〃
スガイ…… 少
アラムシロ…… 〃
ヒメカノコガイ…… 〃
ヨコヤマカセンチドリ…… 〃
マルテンスマツムシ…… 〃
カゴメイトカケギリ…… 〃
マメウラシマ…… 〃
※トクナガツボ…… 〃
シラギク…… 稀
シマモツボ…… 〃
ハナツメタ…… 〃
ホソヤツメタ…… 〃
カゴメガイ…… 〃
アカニシ…… 〃
ムシロガイ…… 〃
オリイレボラ…… 〃
ノミニナ…… 〃
ツボミ…… 〃
ホウシユノタマ…… 〃
シドロ…… 〃
ヒロオビヨウバイ…… 〃
カイコガイダマシ…… 〃
キサゴ…… 〃
オオヘビガイ…… 〃
ウネナシイトカケ…… 〃

※印は今回上町層として初めて記録されるもの。

別表５２種中、従来現生が全く知られていないもの（絶滅種）や現生の分布が大変狭くなって来ている種等二、三について簡単に記述しておく。

カモノアシガキ

殻は大さ５×５cm位。左殻は不規則な断続する放射肋を具え多少ふくらむが、右殻はほぼ扁平で小さく左殻に抱かれる。鏑線の両端の前後縁に弱い刻目がある。

化石は従来、和歌山県（南部町堺貝層）、能登（和倉駅・赤浦・八幡の諸貝層）等の更新統上部から報告されている。上町層としては今回初めての記録である。多量に出る。神奈川県下縄縄文時代の貝塚からも出土し、最近、高知県浦戸湾の沖積層から採取されている。現生九州有明海に知られ、主分布地は台湾以南。

ビョウブガイ

殻長８cm、殻高 3.5cm、長方形で後部は稍巾広い、腹縁のほぼ中央で強くねじれている奇形の二枚貝、殻表には細い放射肋が全面にある。フネガイ科。

北九州（福岡―伊万里）、知多半島師崎付近等に現生が知られ、死殻は山口県青海島、瀬戸内海（周防灘・備後灘）等から採集記録がある。化石は完新統（長崎・大阪）、更新統（豊橋近郊小坂井、渥美半島、能登平床貝層、富山県氷見市朝日山）等から報告されている。大阪では地下鉄西田辺駅の工事中、合弁のものが多数出たが、今回は極めて少い。

ハイガイ

殻長４cm、殻高 4.5cm位のフネガイ科の二枚貝。殻は厚く、表面にイボ状小突起をもつ強い放射肋が20条ほどある。

本種は関東各地の更新統―完新統中に広く知られ、時には多量に包含されている（有楽町貝層）。また各地の先史時代の貝塚から豊富に出土し、当時相当広く分布していたと考えられるにかかわらず、現在有明海や瀬戸内海の一部（小野田・児島湾）や三河湾などに生息するだけで、東京湾や大阪湾では生貝は全く採集されたことがない。恐らく、既に絶滅したものであろう。

ササゲミミエガイ

殻長13mm、殻高８mm、横長の卵形のフネガイ科に属する二枚貝。殻表面には弱い放射肋があり、成長脈と交って細かい布目となっている。

東京湾・瀬戸内海・有明海等内湾に棲んでいる種。今回、我国では化石として初の記録であ

る。

ヨコヤマカセンチドリ

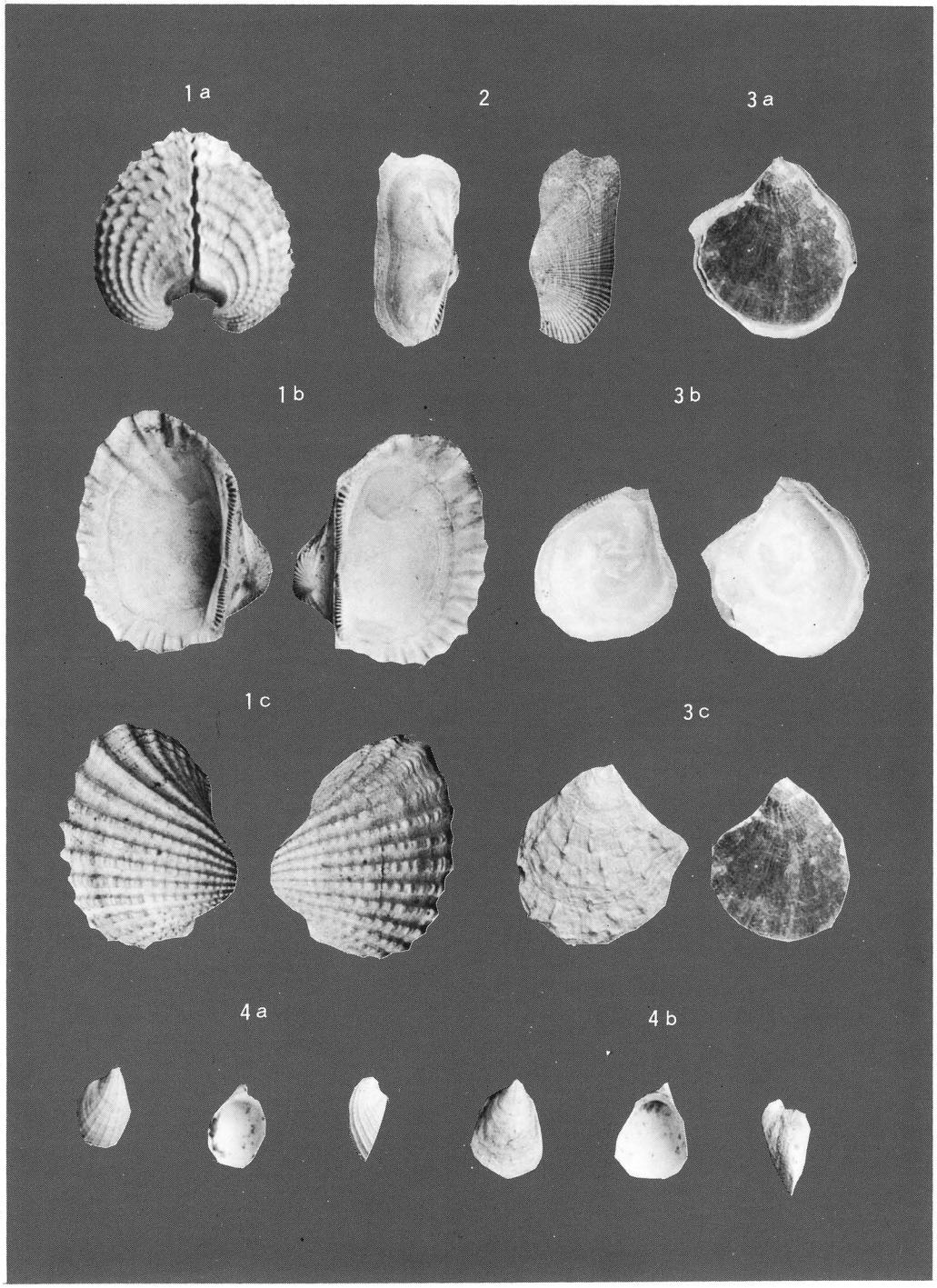
殻長10㎜、殻高 4.5㎜位の小形、一見笠貝状の巻貝。殻表面には細く弱い放射肋がまばらにあり、殻の口は着生生活のため不規則な卵円形をしている。

化石としては千葉、神奈川、福島、石川各県下の更新統からの報告がある。大阪城桜門内地下の本層（粘土層）から沢山出たが、砂の多かった地下鉄西田辺では稀産。絶滅種。

トクナガツボ

殻高4㎜、殻巾2㎜の小さなナタネツボ科の巻貝。螺層は螺肋と縦肋で粗いカゴ目状になっている。

東京層(田端)、能登八幡貝層や京都府下の更新統上部からの報告がある。絶滅種。



第73図　大和川・今池遺跡の貝化石

1．ハイガイ×1　　3．カモノアシガキ×1
2．ビョウブガイ×1　　4．ヨコヤマカセンチドリ×4

第2節　大阪府所在土師遺跡27—1街区、大和川・今池遺跡、高師浜遺跡出土鉄滓の調査

大　澤　正　己

新日本製鉄株式会社八幡製鉄所勤務・たたら研究会会員

1．はじめに

堺市百舌鳥陵南町3丁14番地に所在する土師遺跡27—1街区〈百舌鳥・陵南廃寺〉の発掘調査時に検出された5世紀後半代に比定される鉄滓、及び、松原市天美西町に位置する大和川・今池遺跡第3地区出土の鉄滓・小鉄塊・鉄片で5世紀前半期にあてられるもの、並びに高石市の高師浜遺跡より表面採取された室町時代に推定される鉄滓等の調査依頼を堺市教育委員会より受けたので、それらの鉱物組成及び化学組成を調査し、若干の考察を加えたので報告する。

2．調査方法

1）供試材

表—1に3遺跡出土供試材の履歴を示す。土師遺跡27—1街区より出土した鉄滓は、2地区暗灰黄褐色土より出土した鉄滓1点と、1地区土坑(P)—4より出土した鉄滓7点である。

大和川・今池遺跡出土品は、3地区出土3点（但し1点は高師小僧）及び、1地区出土の鉄滓1点、小鉄塊1点、鉄片2点の計7点である。

高師浜遺跡採取の鉄滓は1点のみである。

2）調査項目

ⓐ　肉眼観察

ⓑ　光学顕微鏡組織

鉄滓、小鉄塊、鉄片らは水道水で充分に洗滌して乾燥後、二分割して片方の中核部を検鏡試料とした。(残余部分は分析試料とする)。検鏡試料はベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研摩紙（コランダム：$A\ell_2O_3$に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の結晶の粉末砥粒を膠質の接着剤で塗布している）の#150、#320、#600、#1,000を使って荒研摩し、次にアルミナ（$A\ell_2O_3$）粉末

水溶液（アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粉末の水溶懸濁液）をバフ布に注ぎながら、被検面を鏡面に仕上げて構成鉱物の同定を行なった。

ⓒ 化学組成

供試試料は検鏡試料の片割れをあてた。二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム($A\ell_2O_3$)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、硫黄(S)、五酸化燐(P_2O_5) については蛍光×線法、他成分である全鉄分(Total Fe)、酸化第一鉄(FeO)、酸化第二鉄(Fe_2O_3：計算値)、金属鉄(Metall:c Fe)、酸化クロム(Cr_2O_3)、バナジウム(V)、銅(Cu)等については湿式法による定量化学分析法を実施している。

ⓓ 発光分光分析

試料は適当に粉砕して粉末状にした後、補助電極を使用して発光させ、得られるスペクトル線の波長の位置から、その構成元素の存在を知ることができ、無機元素はすべて検出できる。

この分析は、試料中の元素が単体あるいは化合物の状態で存在してもスペクトル線は、原子スペクトルでは元素の状態である。したがって未知の試料を発光させて得られるスペクトル線を標準波長、多くの場合鉄（Fe）の標準スペクトル線を比較して、その位置を確かめ、その構成元素の存在を確認することができる。

スペクトル線の強度は、写真撮影により波長を測定し、被検試料の全成分元素を決定する。検出感度は、大体の目安として1～10P.P.m存在すれば検出可能である。

ⓔ マイクロ・ビッカース断面硬度

小鉄塊の金属鉄残留部分については、マイクロ・ビッカース断面硬度計（Micro-Vickers Hardness Tester）による硬さの測定を行なった。試験は鏡面琢摩した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積を以って、その荷重を除した商を硬度値としている。荷重は1,000gをかけた。

3．調査結果

3－1　土師遺跡27－1街区の概要及び鉄滓出土状況

土師遺跡は大阪湾にそそぎこむ百済川の支流である美濃川と盆田川に広がる数万㎡におよぶが、27－1街区はこの一角で洪積台地中位の南斜面に位置している。鉄滓は2地区出土が1個と、1地区の土坑－4より検出された7個である。

土坑－4は、掘り方上面には古墳時代の堆積層である④層：黄褐粘質土が確認され、最大幅155cm、深さ42cmを測り、埋土内より多数の鉄滓、土師器、高杯、甕、椀が木炭片と共に最下層より併出した①。

1）土師遺跡27—1街区2地区出土鉄滓（S—91）

肉眼観察：表裏及び破面共に大部分は黄褐色を呈し、全体にしまりのない滓であり、断面底部に金属鉄が酸化した状態で3～10mmの層位をなしている。形状は長さ130mm、幅85mmの楕円をなし、厚みは30mmで端は薄く、中央部は厚い。重量は425gである。

この鉄滓は俗にいう鍛冶椀形滓で、火窪の底面に堆積した滓である。検鏡試料は、黄褐色部分のサンプルでは研摩中に剝落するので酸化鉄部分から採取している。なお分析試料も検鏡試料と隣合せて採っている。

顕微鏡組織：サンプリング位置が金属鉄の酸化した個所であり、鉱物組成はゲーサイト（Goethite;$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）[②]である。第74図参照。

化学組成：全鉄分（Total Fe）は42.73%含有され、そのうち酸化第1鉄（FeO）は少なく13.22%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は逆に多くて46.08%である。分析試料も検鏡試料の近くからサンプリングしているので、酸化第2鉄の多いのも、検鏡結果を考慮すれば矛盾のないところである。

造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は、やや多くて38.41%含有され、二酸化チタン（TiO_2）は0.18%、バナジウム（V）は0.012%と少なく、金属鉄の酸化物が主体であるためか銅（Cu）は高目の0.02%であった。酸化マンガン（MnO）0.26%、酸化クロム（Cr_2O_3）Trace：痕跡、硫黄（S）0.011%、五酸化燐（P_2O_5）は0.202%と微量元素らは左程高い数字ではなかった。

2）土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓（T—91）

肉眼観察：長さ110×幅75×厚み20mmで重量165gを有する偏平状の鍛錬鍛冶椀形滓である。（ただし一部を欠く）表裏の大部分は黄褐色を呈するが鉄滓の縁部に石英（石灰？）粒子が付着し、かつ濃緑色を示す個所が見受けられる。鉄滓表面は小気孔が散見され、裏面は滴下前の凸部が多数みられる。

破面はサンドイッチ状の3層に分かれ、両端部分の⅔は黄褐色を呈し光沢を失するが、中央部は鉄滓本来の光沢を有し、茶褐色を呈している。これには金属鉄の酸化物も一部に含有されている。鉄滓破面全体に気孔は少ない。

顕微鏡組織：鉱物組成は、白色多角形状と小粒子樹枝状のマグネタイト（Magnetite;Fe_3O_4）[③]と、灰色木ずり状のファイヤライト（Fayalite;$2FeO \cdot SiO_2$）[④]、それに暗灰色の地であるがガラス質から構成されている。

マグネタイトの晶出からみて、加熱温度は高温度に上昇しているが、結晶がおしなべて小型であるところからみて、作業を短時間で打切っている様である。鉄滓外観からも偏平状の20mm程度の厚みからみても、火窪内で連続鍛冶を行なったものではない。

表1　供試材の履歴及び調査項目

符号	遺跡名	履歴		サンプル		区分	調査項目				推定年代
		出土地区	発掘年月	大きさ(mm)	重量(g)		顕微鏡組織	化学組成	発光分光分析	断面硬度	
S—91	土師(27—1)	2地区　暗灰黄褐色土	790526	130×85×35	425	鍛錬鍛冶椀形滓	○	○			5C後半
T—91	〃	1地区　P4　暗灰黄色土	790523	110×75×20	165	〃	○	○			〃
92	〃	〃	〃	(¼破片) 70×40×20	70	〃	○				〃
93	〃	〃	〃	(¼破片) 40×40×15	60	〃	○				〃
U—91	〃	〃	790526	(½破片) 70×60×15	110	〃	○	○			〃
92	〃	〃	〃	40×50×10	42	鍛錬鍛冶滓	○	○			〃
93	〃	〃	〃	30×40×20	35	〃	○				〃
94	〃	〃	〃	25×15×10	35	〃	○				〃
V—91	大和川・今池	3地区 D-Ⅱ-13	790123	45×60×15	95	〃	○	○	○		5C前半
92	〃	YI-3 C-Ⅱ-91		25×25×10	20	〃	○				〃
93	〃	1地区 D — 6 黒褐色粘質土	780518	20×30×12	10	〃	○				〃
94	〃	1地区 D — 6　〃	〃	37×20×15	20	小鉄塊	○		○	○	〃
95	〃	1地区 C — 5 黒褐色粘質土	780512	60×30×25	30	鉄片(重ね鍛え)	○		○		〃
96	〃	1地区 B — 5 黒褐色粘質土	780508	30×30×4	8	鉄片	○		○		〃
97	〃	YI-3 P — 8 黒褐色粘質土 (礫まじり)	790222	70×30×25	85	高師小僧	○				〃
2E-9	高師浜	表面採取	791128	30×55×20	55	鍛錬鍛冶滓	○				

表２　鉄滓の化学分析結果

符号	Sample		全鉄	全属鉄	酸化第１鉄	酸化第２鉄	二酸化硅素	酸化アルミニウム	酸化カルシウム	酸化マグネシウム	酸化マンガン	二酸化チタン	酸化クロム	硫黄	五酸化燐	炭素	バナジウム	銅	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
	遺跡名	区分	(Total Fe)	(Metallic Fe)	(FeO)	(Fe_2O_3)	(SiO_2)	($A\ell_2O_3$)	(CaO)	(MgO)	(MnO)	(TiO_2)	(Cr_2O_3)	(S)	(P_2O_5)	(C)	(V)	(Cu)			
S−91	土師(27−1街区)	鍛錬鍛冶椀形滓	42.73	0.22	13.22	46.08	30.57	5.10	1.88	0.86	0.26	0.18	Trace	0.011	0.202	0.150	0.012	0.020	38.41	0.899	0.004
T−91	〃	〃	31.97	0.16	9.56	34.56	40.45	8.50	3.61	0.86	0.32	0.34	0.006	0.010	0.338	0.113	0.010	0.012	53.42	1.671	0.010
T−92	〃	〃	34.77	0.26	10.42	37.76	36.33	9.25	2.45	0.90	0.37	0.31	0.006	0.010	0.280	0.152	0.005	0.020	48.93	1.407	0.009
U−91	〃	〃	27.79	0.14	8.40	30.20	45.44	9.41	3.75	0.69	0.22	0.37	Trace	0.010	0.228	0.082	0.006	0.015	59.29	2.134	0.013
V−91	大和川・今池	鍛錬鍛冶滓	47.25	0.10	21.20	43.86	24.03	7.95	1.14	0.79	0.13	0.84	0.020	0.009	0.112	0.261	0.040	0.005	33.91	0.718	0.018
参考資料	陵南北	鉄滓	55.22	0.29	42.70	26.79	20.4	3.3	0.59	0.30	0.08	2.1	0.005	0.029	0.114	0.147	0.005	0.043	24.59	0.445	0.038
	土師	水酸化鉄	11.66	0.14	1.06	15.30	57.1	12.4	0.26	0.53	0.14	0.34	0.018	0.020	P 0.055	0.053	0.014	0.038	—	—	—
	陵南北(公団)	鉄滓	45.8	0.28	47.4	12.4	24.5	2.3	2.0	0.79	0.34	0.23	0.12	0.142	0.607	0.250	0.00	0.019	29.59	0.646	5.02
	〃	〃	54.6	0.39	44.0	28.6	20.1	2.9	0.98	0.51	0.34	0.27	0.10	0.532	0.326	0.121	0.00	0.028	24.49	0.449	4.95
	土師(新日鉄研修センター)	〃	47.3	0.00	47.4	14.9	27.7	5.1	1.9	0.46	0.09	0.26	0.06	0.054	0.332	0.127	0.00	0.010	35.16	0.743	5.50
	土師(新日鉄セクション)	鉄器酸化物	43.9	0.14	6.1	55.8	24.0	3.5	0.28	0.20	0.06	0.19	0.06	0.135	0.155	0.356	0.01	0.009	—	—	—
	平城京	鉄滓	57.52	0.72	55.81	18.90	15.70	3.6	0.98	0.33	0.11	3.9	0.013	0.022	0.080	0.035	0.020	0.012	20.61	0.358	0.068

表３　発光分光分析結果

	Sample		銀	アルミニウム	比素	ほう素	バリウム	ビスマス	カルシウム	コバルト	クロム	銅	鉄	ゲルマニウム	カリウム	リチウム	マグネシウム	マンガン	モリブデン	ナトリウム	ニオブ	ニッケル	鉛	アンチモン	けい素	すず	テルル	チタン	バナジウム	タングステン	亜鉛	ジルコン	燐
	遺跡	区分	(Ag)	(Al)	(As)	(B)	(Ba)	(Bi)	(Ca)	(Co)	(Cr)	(Cu)	(Fe)	(Ge)	(K)	(Li)	(Mg)	(Mn)	(Mo)	(Na)	(Nb)	(Ni)	(Pb)	(Sb)	(Si)	(Sn)	(Te)	(Ti)	(V)	(W)	(Zn)	(Zr)	(P)
V−91	大和川・今池	鉄滓	0	3	0	0	0	0	3	0	2	3	3	0	0	0	2	1	0	3	0	0	0	0	3	1	0	2	2	0	0	0	0
V−94	〃	小鉄塊	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3	2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0
V−95	〃	鉄片	0	3	0	0	0	0	4	0	2	3	3	0	0	0	3	2	0	3	0	0	0	0	3	1	0	2	2	0	0	0	0
V−96	〃	鉄片(酸化)	0	2	0	0	0	0	3	0	1	3	3	0	0	0	3	2	0	0	0	1	0	0	2	1	0	0	2	0	0	0	0
参考資料	陵南北(公団)	鉄滓	0	4	0	0	0	0	4	0	0	3	5	0	0	0	2	2	1	2	0	1	1	0	4	0	0	2	1	0	0	1	—
	土師(70街区)	鉄器酸化物	0	5	0	0	0	0	4	2	0	2	5	0	0	0	2	1	1	2	0	1	0	0	4	0	0	2	1	0	0	1	—
	湯の山古墳	鉄鎌	1	5	0	0	0	0	4	2	1	3	5	0	0	0	2	1	2	0	0	1	1	0	4	0	0	2	1	0	0	1	—
	陵南北	羽口先端溶着鉄滓	0	3	0	0	0	0	5	0	0	3	4	0	4	0	3	1	0	2	0	0	0	0	4	0	0	1	2	0	0	0	0

0：認められない　　1：辛じて認められる　　2：明瞭　　3：強い　　4：可成り強い　　5：非常に強い

化学組成：鍛錬鍛冶としては、全鉄分(Total Fe) は低目の31.97％あり、このうち酸化第1鉄(FeO)は極端に少なく9.56％、酸化第2鉄(Fe_2O_3)は34.56％含有されている。造滓成分($SiO_2+A\ell_2O_3+CaO+MgO$) は逆に高目で53.42％あり、このうち酸化カルシウム(CaO)が3.61％と多いのが特徴的である。外観観察における表面付着の石英(石灰)粒子が影響しているのであろうか。二酸化チタン(TiO_2) は0.34％、バナジウム(V)0.01％等からみて製錬滓⑤ではなく、鍛冶滓⑥成分である。

微量元素の酸化クロム(Cr_2O_3)0.006％、五酸化燐(P_2O_5)0.338％、酸化マンガン(MnO)0.32％、硫黄(S) 0.010 ％、等は皆低目であるが、銅 (Cu) は若干高目で0.012 ％であった。鍛錬鍛冶滓としては、構成成分が特異であり、他地域ではあまり見られない傾向である。

3） 土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓(T—92)

肉眼観察：現存サイズは、長さ70×幅40×厚み20㎜で重量は70ｇ を計る¼破片の鍛錬鍛冶椀形滓である。復原すると長さ120 ×幅80×厚み20㎜程度になろう。表裏ともに赤褐色を呈し、表面の一部には石英(石灰)粒子を付着し、破断面もサンドイッチ状をなすところはT—91鉄滓と類似している。破断面の外皮上側は淡茶色で気孔なく無光沢であり、下側は赤褐色で微小気孔が無数に見受けられる。外皮と中核部の境界は、鉄錆が1㎜程度に縁どり状に存在する。中核部になると草色から黒褐色を呈する鉄滓質でやや多孔質である。T—91とは色調をやや異にするが、同系タイプの鉄滓である。

顕微鏡組織：鉱物組成はスラグ溶液中から晶出しかかったマグネタイト(Magnetite:Fe_3O_4)が充分に結晶化しきらずに白色微粒のまま樹枝状の状態で存在する。これに短柱状に発達したファイヤライト(Fayalite; $2FeO\cdot SiO_2$) とガラス質で構成されている。ファイヤライトの形状からみて、こちらは徐冷を受けており、T—91鉄滓よりやや低温域での排出滓であろう。

化学組成：全鉄分(Total Fe)は34.77％あり、当鉄滓も酸化第1鉄(FeO)が低目の10.42 ％で酸化第2鉄(Fe_2O_3)は37.76 ％であった。造滓成分($SiO_2+A\ell_2O_3+CaO+MgO$) は多目で48.93％あり、二酸化チタン(TiO_2) は0.31％、バナジウム(V) 0.005 ％であった。

微量元素の酸化マンガン(MnO)、酸化クロム(Cr_2O_3)、硫黄(S)、五酸化燐(P_2O_5)、銅(Cu)らは、S—91、T—91鉄滓とほぼ近似した数値であり、同質素材の鍛錬鍛冶加工時に排出された滓であろう。

4） 土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓(T—93)

肉眼観察：一部に黒色ガラス質に石英(石灰)粒子を混じたスラグが付着しているが、全体には赤褐色外皮に包まれた鍛錬鍛冶滓である。表皮は滑らかな凹凸があり、局部に気孔を有して

いる。裏面は滴下状まで進行しない凹凸があり、凸部は黒色を露出する。

現存サイズは、長さ40×幅40×厚み15mmで重量は60g である。¼の破片で、これを復原すると長さ110 ×幅80×厚み20mm程度になろう。

破面は表皮の1 ～3 mmの無光沢赤褐色部分を除いては黒褐色の鉄滓質であり、前述した3個の鉄滓に比べて、均質緻密で比重の大きいものであった。

顕微鏡組織：白色粒状で整然と晶出したヴスタイト(Wüstite;FeO)⑦ と灰色長柱状のファイヤライト(Fayalite; 2 FeO・SiO_2)、地の暗灰色のガラス質から構成されている。T—91、T—92鉄滓に比べると低温域の生成物である。

当鉄滓の化学分析は行なっていないが、酸化第1鉄(FeO)は多くて、逆に酸化第2鉄は少な目の組成となっていると考えられる。

5） 土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓(u—91)(以下第75図)

肉眼観察：外皮表面側には、黒色ガラス質に石英(石灰)粒子が混入した膜があり、裏面は赤褐色を呈し、多孔質な鍛錬鍛冶椀形滓である。破面は赤褐色と黒褐色部分、それに局部的にガラス質が混入し、5 mmφ前後の気孔と小気孔を有している。

比重は軽い鉄滓で、現存サイズは長さ70×幅60×厚み15mmで重量は110gを計る。鍛錬鍛冶椀形滓として復元すれば長さ120 ×幅80×厚み20mm前後になろう。

顕微鏡組織：鉱物組成は、白色多角形状の小型マグネタイト(Magnetite;Fe_3O_4)が樹枝状に晶出しかかり、これにファイヤライト(Fayalite; 2 FeO・SiO_2)と多量のガラス質の存在する鉄滓である。かなりの高温域の排出滓であり、残留鉄分はきわめて少ない。

化学組成：全鉄分(Total Fe) は鍛冶滓にしては非常に少なく27.79 %であり、このうち酸化第1鉄(FeO)は8.40%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)は30.20 %である。造滓成分(SiO_2+$A\ell_2O_3$ + CaO+MgO) は逆に多くて59.29 %であり、そのうちの酸化カルシウム(CaO)も高目の3.75%であった。

二酸化チタン(TiO_2) は0.37%、バナジウム(V) 0.006 %で、これも鍛冶滓成分であり、微量元素も酸化マンガン(MnO) 0.22%、酸化クロム(Cr_2O_3) Trace：痕跡、硫黄(S) 0.010 %、五酸化燐(P_2O_5)0.228%、銅(Cu) 0.015%と低目であり、今までに列記したS—91、T—91、T—92、u—91らは、いずれも同一成分系の鉄滓と見なして差しさわりないものと考える。

6） 土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓(u—92)

肉眼観察：表皮はガラス質スラグに石英(石灰)粒子が多量に混入しており、滑らかさはあまり無く風化の痕跡がみられる。裏面は赤褐色で局所に炉材粘土が青灰色に変色付着しているの

が、僅かながら認められる。破断面の中核部は、鉄滓の赤褐色を呈し、若干の気孔は有するが比重は大きい方に属する。鍛錬鍛冶椀形滓の破片であろうが、現存サイズは長さ40×幅50×厚み10㎜で重量は42ｇであった。

顕微鏡組織：鉱物組成は、白色粒状のやや成長したヴスタイト(Wüstite;FeO) と淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite; 2 FeO・SiO_2)、それに地の暗灰色のガラス質から構成されている。

当鉄滓は化学組成の調査はなされていないが、酸化第1鉄(FeO) が酸化第2鉄(Fe_2O_3) より高目のものと推定される。

7）土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓(u—93)

肉眼観察：黒色ガラス質スラグに白色を呈する鉄滓部分が露出する表皮をもち、裏面は赤褐色と茶褐色の斑模様を示し、石英粒子を付着する鉄滓である。破面は黒褐色の中核部と、赤褐色と白色の外皮部分に分れており、気孔は後者に多い。長さ30×幅40×厚み20㎜で重量は35ｇを計る。鍛錬鍛冶椀形滓の破片であろう。

顕微鏡組織：鉱物組成は暗灰色ガラス質部分のみで鉄酸化物は認められなかった。

8）土師遺跡27—1街区1地区P4暗灰黄色土出土鉄滓(u—94)

肉眼観察：表裏ともに赤褐色外皮につつまれた鉄滓で、現存サイズは長さ25×幅15×厚み10㎜、重量が35ｇの小片である。破面は黒褐色を呈し、多孔質である。

顕微鏡組織：鉱物組成は白色微粒の未発達マグネタイト(Magnetite;Fe_3O_4)が樹枝状に晶出し、これに灰色短柱状結晶のファイヤライト(Fayalite; 2 FeO・SiO_2) が連らなる。暗灰色ガラス質の地の占める割合も大きい。この鉄滓も高温域での生成物であり、T—91、T—92鉄滓と同程度の熱履歴を経た鉄滓であろう。全般に鉄分の残留が少なく、酸化第1鉄(FeO)に比べて酸化第2鉄(Fe_2O_3)の多い鉄滓である。

3—2　大和川・今池遺跡の概要及び鉄滓・小鉄塊・鉄片出土状況

この遺跡は、大阪府堺市北東部(常盤町)から松原市北西部にかけての広範囲にわたるが、鉄滓や小鉄塊･鉄片の出土した第3地区と、第1地区は松原市天美西町に所在する部分である。この地域は、上町台地に続く中位洪積台地の東端に位置し、これより東は西除川旧河道の氾濫平野が北野に向って広がっている。

鉄滓の出土した第3地区は、棟持柱を設した掘立柱建物—1棟：溝状遺構3本、土師器、鉄滓などを伴なうものを含めた不明の落ち込み—6ヶ所を検出しており、古墳時代に属する遺構である。[8]

また、第1地区は、古墳時代の建物、溝・井戸状遺構、不明ピットと後世の井戸、杭列を多数検出しており、今回調査に供した遺物(鉄滓、小鉄塊、鉄片)は、耕作土の下の遺物包含層で黒褐色粘質土層からの出土である。⑨

9) 大和川・今池遺跡3地区D—Ⅱ—13出土鉄滓(V—91)(以下第76図)

肉眼観察：黒色表皮が主体をなすが、局部的に黄褐色皮膜が付着しており、裏面ではその傾向が著しい。木炭痕も認められる。破面は、コークス状の黒色多孔質を示しており、鍛冶滓特有の破面といえる。大きさは、長さ45×幅60×厚み15mmで重量95g を計った。

顕微鏡組織：鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト(Wüstite;FeO) と、淡灰色の盤状結晶であるファイヤライト(Fayalite;2 FeO·SiO_2) と、ガラス質から構成されている。ヴスタイトは量が少なく、ファイヤライトが大半を占めていた。ファイヤライトの成長具合からみて徐冷滓であろう。

化学組成：全鉄分(Total Fe) は、47.25%であり、そのうち酸化第1鉄(FeO)は21.20%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)は43.86%であった。又、造滓成分(SiO_2+$A\ell_2O_3$+CaO+MgO)は、33.91%あり、二酸化チタン(TiO_2) は0.84%、バナジウム(V)は0.040%である。

土師遺跡27—1街区出土鉄滓と比較すると、全鉄分は大和川・今池遺跡出土鉄滓の方が多目であり、造滓成分は逆に少ない。また、二酸化チタンやバナジウムも多い目であった。

微量元素は、酸化マンガン(MnO)が0.13%、五酸化燐(P_2O_5)0.112%、銅(Cu)0.005%で土師遺跡27—1街区鉄滓より低目であり、硫黄(S)は0.009%で同レベル、酸化クロム(Cr_2O_3)は0.020%で高目であった。

大和川・今池遺跡出土鉄滓は、鍛錬鍛冶成分であるが、土師遺跡27—1街区出土鉄滓とは構成成分が異なるところから鍛冶加工に用いられた原料素材の違いが指摘できる。

発光分光分析：大和川・今池遺跡からは、小鉄塊や鉄片が拌出しているので、成分系を比較検討する資料として、鉄滓についても発光分光分析を行なった。造滓成分であるアルミニウム(Aℓ)、カルシウム(Ca)、けい素(Si)らは3：強い、マグネシウム(Mg) は2：明瞭、と検出された。他元素としては、鉄(Fe)、銅(Cu)、ナトリウム(Na) らは3：強い、クロム(Cr)、チタン(Ti)、バナジウム(V)らは2：明瞭、マンガン(Mn)、すず(Sn) は1：辛じて認められる、という結果がでており、先に述べた定量分析による化学組成の傾向に、ほぼ準ずるものとみてよさそうである。

10) 大和川・今池遺跡3地区C—Ⅱ—91出土鉄滓(V—92)

肉眼観察：赤褐色を呈する表皮に包まれた鉄滓で、大きさ25×25×10mmのもので重量は20g

を計る小鉄滓である。表面の一部には石英粒子と木炭片を付着している。破面は黒色を示し、気孔は少なく緻密である。局部に鉄錆をにじませているが比重は大であり、鍛錬鍛冶滓である。

顕微鏡組織：鉱物組成は白色粒状で成長したヴスタイト(Wüstite;FeO) と金属鉄の酸化したゲーサイト(Goethite;$Fe_2O_3 \cdot H_2O$) ファイヤライト(Fayalite; 2 FeO・SiO_2)、それに顕微鏡組織写真には示していないが、一部に白色四面体のマグネタイト(Magnetite;Fe_3O_4)、暗灰色の地であるガラス質から構成されている。試料が小さくて定量分析を実施するには試料不足となるので化学組成の調査を行なっていないが、この試料は全鉄分(Total Fe) は50%以上で酸化第1鉄(FeO) が酸化第2鉄(Fe_2O_3)より大幅に大きいことが推定される。

11) 大和川・今池遺跡1地区D－6黒褐色粘質土出土鉄滓(V－93)

肉眼観察：外皮は赤褐色を示すが凸起部は黒褐色を呈し、裏面側には炉材粘土が高熱を受けて青灰色に変色して付着している。破面は黒褐色であるが気孔に鉄錆が溜まっており、中核部に3×8㎜程度の楕円空隙が存在するが比重は大きい方に属する。大きさは20×30×12㎜で重量は10g である。

顕微鏡組織：鉱物組成は白色粒状のヴスタイト(Wüstite;FeO) が中量程度晶出し、これに木ずり状のファイヤライト(Fayalite; 2 FeO・SiO_2)の小さい結晶と暗灰色の地であるガラス質が存在する。この鉄滓も全鉄分(Total Fe) は高目であると考えられる。

12) 大和川・今池遺跡1地区D－6黒褐色粘質土出土小鉄塊(V－94)

肉眼観察：表皮は赤褐色を呈するが亀裂が深く走っており、この部分より黒褐色のシミを滲ませ、強磁性を有するので鉄塊であることが判かる。破面は黒褐色を示し、気孔はなく部分的に光沢反射のある点が認められる。大きさは37×20×15㎜の塊で重量は20g を計った。

顕微鏡組織：この小鉄塊は、まだ酸化を受けてなくて金属鉄の残留が認められる。第76図に研摩そのままで、まだ腐食(etching) しない場合の金属鉄の組織を示した。続いて第77図には、5%ナイタル(Nital：硝酸アルコール溶液) で腐食した組織を掲載した。

現われた組織は、炭素含有量が2～4.3%含有された時にみられる鋳鉄(cast iron) 組織である。それも10㎜程度の間隔をおいて端部に白銑鉄組織が、中央部にねずみ鋳鉄組織が認められた。この両組織は、鋳鉄の凝固冷却速度の相違によって生ずるもので、端部の白銑組織は冷却速度が速かったため、セメンタイト(Cementite;Fe_3C)[10]がが多く晶出しているのであり、中央部の冷却速度の遅い方は黒鉛(Graphite)を晶出している。

白銑鉄は別名白鋳鉄(White cast iron) ともいい、破面が銀白色を呈することからこの様に呼ばれる。第77図のa、bは過共晶組成の白鋳鉄であり、炭素含有量は4.3%前後になろう。

腐食を受けていない白色部は初晶のセメンタイトで地はオーステナイト(Austenite)[11]〈常温ではパーライト(Pearlite)[12]になる〉とセメンタイトの共晶であるレデブライト(Ledeblite)[13]である。

第77図c・dは、小鉄塊の中央部で冷却速度の遅い方であるが、こちらの組織はねずみ鋳鉄(Gray cast iron)といい、炭素の大部分は片状黒鉛[14]となって晶出または析出している。通常破面には黒鉛がみられ、ねずみ色を呈するためねずみ鋳鉄といわれている。組織は過共晶組織にみられる鋳放し組織で粗大片状黒鉛、地にはパーライト、白色板状結晶はセメンタイトである。

この様に、小鉄塊は断面10×15㎜程度のなかから2種の鋳鉄組織が確認され、鍛治滓と共拌していた事に注目したい。小鉄塊が鉄素材として扱かわれたとすれば、脱炭処理[15]をしながら錬鉄にもっていく、いわゆる左下法の技術が考えられる訳で大鍛治的火窪の検討も必要となってくる。もし鍛錬鍛冶のみであれば鋳鉄の存在理由の意味あいの追及が必要となるであろう。

ヴィカース断面硬度：白銑鉄組織とねずみ鋳鉄組織及びその境界部について、硬度の測定を行なった。その結果を表4に示す。白銑部は硬度値が最も高く$\bar{\times}$＝572を示し、ねずみ銑部で$\bar{\times}$＝321、両者の差異は251であった。また、白銑部とねずみ銑部の境界は$\bar{\times}$＝383であり、これら硬度値は第77図の顕微鏡組織の実証裏付資料にもなるものと考える。

表4　小鉄塊の断面硬度測定結果

測定回数 / 測定個所	1	2	3	4	平均値
①白銑部	533	565	648	542	572
②ねずみ鋳鉄部	321	290	343	330	321
①②の境界部	426	339	—	—	383

(HV1000g)

発光分光分析：表3に分析結果を示す。この小鉄塊は、全体的にみて不純物の含有の少ないものである。分析強度の最も強く検出された元素は、銅(Cu)で3：強い　次に鉄(Fe)、バナジウム(V)の2：明瞭　である。非金属介在物を形成すると考えられるアルミニウム(Aℓ)、マグネシウム(Mg)、けい素(Si)らは1：辛じて認められる　であり、カルシウム(Ca)にいたっては0：認められない　と非常に少ない。

また、随伴微量元素としてはクロム(Cr)、ニッケル(Ni)、すず(Sn)らが1：辛じて認められる　であり、分析対象品が鍛造物ではなくて鋳物鉄であったにしても、非常にきれいな素材といえる。

13) 大和川・今池遺跡１地区Ｃ－５黒褐色粘質土出土鉄片(Ｖ－95)(以下第78図)

肉眼観察：表皮は赤褐色におおわれ、外観は一見塊状をなしている様にみえるが、破面は薄鉄板の重なりが層状に認められ、重ね鍛えした鉄片であることが判る。長さ60×幅30×厚み25㎜で重量は30ｇを計った。こちらは鍛造品であるが、用途器種は不明である。

顕微鏡組織：完全に酸化が進化していて鍛接部が剝離した状態で膨脹しているため、金属鉄の残留はなく、ゲーサイト(Goethite;$Fe_2O_3 \cdot H_2O$)化しているため、熱処理に関する情報は得ることができなかった。第78図参照のこと。

発光分光分析：この鉄片は不純物をかなり含んでいる。鉄(Fe)、銅(Cu)が３：強い　と現われている以外に非金属介在物としてはカルシウム(Ca)が最も高目で４：可成り強い　アルミニウム(Aℓ)、マグネシウム(Mg)、けい素(Si)らは３：強い　と出ている。また、随伴微量元素のうち、チタン(Ti)、バナジウム(Ｖ)が２：明瞭と検出され、砂鉄原料の鉄素材であったことがうかがわれる。他にクロム(Cr)、マンガン(Mn)が２：明瞭であり、ナトリウム(Na)が３：強い　と分析されている。

Ｖ－91の鉄滓でも、Ｖ－95鉄片と同様にナトリウム、チタン、バナジウム、クロム等が検出され、強度もほぼ近似していることから両者が鉄滓と鉄片との相違があるにしても、注目しておきたい元素検出であるといえるであろう。

14) 大和川・今池遺跡１地区Ｂ－５黒褐色粘質土出土鉄片(Ｖ－96)

肉眼観察：赤褐色につつまれた板状鉄片であり、サイズは30×30×厚み４㎜で８ｇを測る。鉄片の表面は滑めらかで軽く孤を描き、破面は中心部の腐食が進んでいるが層状個所は認められないので鋳鉄板の可能性が考えられる。

顕微鏡組織：金属鉄が酸化してゲーサイト(Goethite；$Fe_2O_3 \cdot H_2O$)のみである。

発光分光分析：非金属介在物を形成するカルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)は３：強いアルミニウム(Aℓ)、けい素(Si)２：明瞭　が高目であるが、鉄(Fe)、銅(Cu)が３：強い　をはじめとして他の随伴微量元素は、Ｖ－94の小鉄塊鋳鉄と、マンガン(Mn)を異にする以外、同成分系であるといえる。すなわち、バナジウム(Ｖ)が２：明瞭とあり、他にクロム(Cr)、ニッケル(Ni)、すず(Sn)らは１：辛じて認められる　と検出されている。

Ｖ－94小鉄塊と同一素材であれば、非金属介在物の増加原因は、左下による加熱脱炭鍛造過程のもので両者のつながりは充分考えられることである。

15) 大和川・今池遺跡ＹＩ－３、Ｐ－８黒褐色粘質土(礫まじり)出土高師小僧(Ｖ－97)

肉眼観察：黄褐色の外皮で、なめらかな肌につつまれている。破面は層状をなし、黄褐色外

皮の内側に1㎜程度の黒褐色の硬い層があり、その内側に黒褐色ポーラス層が5㎜程度形成され、中心部に黄褐色粉末がつまっていた。加熱状態で溶融した鉄滓とは若干趣を異にする。

顕微鏡組織：組織は、スラグ溶液中から晶出した結晶質の鉱物組成は全く認められず、褐鉄鉱の網状組織がみられるだけである。この組織は、鉄滓とは異なるもので、そもそもこの物質の生成基因は鉄分が地中の植物体のまわりで集積してできた高師小僧である。

鉄滓とまぎらわしい外観をしているので、今後の間違いのないように、あえて記載した訳である。

3－3　高石市高師浜遺跡の概要及び鉄滓出土状況

詳細不明

16）高師浜遺跡出土鉄滓（2E－9）

肉眼観察：淡黒褐色の表皮につつまれ、やや粗鬆な肌をもつ鉄滓である。裏面は表皮と同系色で滴下初期状の凸起がみられ、局所に鉄錆を滲ませている。破面は干渉色と黒色が混じり、小気孔もあるが緻密で比重の大きい鉄滓である。30×55×20㎜の大きさで重量は55g ある破片塊である。

顕微鏡組織：鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite;FeO）が樹枝状に晶出し、淡灰色の盤状結晶となったファイヤライト（Fayalite; 2 FeO・SiO_2）が多量に晶出し、これに基地の暗灰色ガラス質らが存在して構成されている。

破片で十分な外観観察ができなかったが、鍛冶滓であれば精錬鍛冶椀形滓ではないかと考える。ただし製錬滓であれば炉内残留滓の可能性もあるが、分析値がないので結論は下せない。

4　考察と2・3の問題点

4－1　鍛冶椀形滓と鍛冶遺構について

土師遺跡27－1街区出土の鉄滓は、鍛治加工に際して火窪炉床内に堆積した滓である。この鉄滓は火窪穴の形状にしたがって形成されており、やや楕円気味でお椀を伏せたような形になるので、俗に椀形滓と呼びならされている。直径40～60㎝程度の火窪であり、羽口直下で形成された鉄滓は、鉱物組成で高温時に晶出するマグネタイト（Magnetite; Fe_3O_4）がときたま晶出しているが、通常はヴスタイト（Wüstite;FeO）である。

この鍛冶滓の化学組成は、二次滓であり製錬滓に比べると、本来は造滓成分（SiO_2＋$A\ell_2O_3$＋CaO＋MgO）は低目で、再加熱で全鉄分（Total Fe）が高目になる傾向があり、この場合は酸化第1鉄（FeO）が増加する。製鉄原料のちがいが鉱滓や鍛治滓成分に影響するので、例えば岡山県の古代製鉄遺跡から出土した関係遺物の分析結果[13]と比較すると、表5の様になる。製錬滓

は、砂鉄や鉱石その他の原料から含有金属を抽出し、精製する冶金学的反応操作で排出された滓である。造滓成分は当然高目となる。鉄分は意識的に抽出するので減少し、技術レベルの差となって現われる筈である。それにひきかえ、鍛冶滓は、金属の純度を改善するために溶湯や還元鉄から酸化物、ガスその他不純物を除去する操作で排出した滓でこれを精錬鍛冶滓と呼称する。この精錬鍛冶で製造された錬鉄（庖丁鉄）を加熱して鍛錬を繰返し行ない、工具、農具、各種の日用品に加工成品化する工程を鍛錬鍛冶という。この加熱排出生成物を鍛錬鍛冶滓と呼ぶのであるが、再加熱により全鉄分が増加し、造滓成分は少ない傾向にむかう。

岡山県の製錬滓を数字で具体的に示せば、造滓成分20～40％、全鉄分25～41％である。鍛冶滓は造滓成分７～40％、全鉄分35～56％で、これらを土師遺跡27－１街区出土鉄滓と比較すると、土師遺跡27－１街区鉄滓は造滓成分は多く38～60％、全鉄分は逆に少なく28～48％という他地域ではあまり類例のない成分傾向を示している。二酸化チタン(TiO_2)やバナジウム(V)の数字がないと製錬滓にみまがうばかりである。非金属介在物を多量に含有した素材（精錬原料）を使用したのであろう。しかし、鍛冶椀形滓に鉄分を多く残留させていないのは効率のよい鍛冶作業を行なっているからであり、この５Ｃ後半代で、品質の優れた木炭と、適正な送風量をコントロールした技術は注目に値する。

ともあれ、鍛冶椀形滓は火窪穴の炉底部に溜った滓であり、鍛冶炉の消失で遺構の検出は不可能であっても、鍛冶加工の実施を証明する間接証拠物件となる。

管見での列島内での鍛冶椀形滓の出土例を集積すると80例を越える。それらを表６に示した。年代の最も遡るものは福岡県那珂川町に所在する松ノ木遺跡出土滓で５Ｃ前半代に比定される。ここは祭祀遺構で、数多くの手ずくね土器や陶質土器、土師器の高杯と共に出土しており、大陸側の鍛冶加工に関連した新技術の導入を考えさせる出土状態である。続いて古い出土例は、当調査報告で述べた土師遺跡27－１街区出土滓で５Ｃ後半代である。百舌古墳群近辺に立地した個所で他地区でみられぬ鉄分の少ない鍛冶滓を残し、鉱物組成もマグネタイトを晶出させていて鍛冶加工の技術としても優れたものであったことを思わせる鉄滓であった。

表５　土師遺跡27－１街区出土鍛冶椀形滓と岡山県出土の鉄滓との成分比較

	土師遺跡27－１街区出土鍛冶椀形滓	岡山県出土砂鉄系鉄滓⑯	
		鍛冶滓	製錬滓
造滓成分	38～60％	７～40％	20～40％
全鉄分(Total Fe)	28～43％	35～56％	25～41％
二酸化チタン(TiO_2)	0.18～0.37％	３％以下	５～20％
バナジウム(V)	0.005～0.012％	0.05％前後	0.05～0.3％

大阪府では、この後も引き続いて鍛冶椀形滓の出土はあり、７Ｃ代の白峠山古墳供献の鍛冶椀形滓であり、13Ｃ代の伽羅橋遺跡からの出土例であり、15～16Ｃの堺市環濠都市遺跡であるサンハイム宿院遺跡出土であり、また、元禄二年堺大絵図の南鍛治屋と記された寺地町遺跡出土の鍛治椀形滓である。

他府道県においても大阪府と同じ傾向で日常生活に密着した場所においてその多くの鍛治椀形滓は発掘されている。

これらの鍛冶椀形滓は、40～60cmの直径をもった火窪型の炉のみから出土するのではなくて、陵南北遺跡で調査された長さ１ｍ幅0.3ｍ、深さ0.3ｍのＵ字型に掘り窪めをもつ舟底型炉[17]からも出土する。もっとも陵南北遺跡では鍛冶椀形滓の出土はなかったが同炉タイプは福岡市東区の和白遺跡[18]から検出され、これから鍛錬鍛冶椀形滓が出土している[19]。

また、１ｍ内外の円形土坑型の炉からも鍛冶椀形滓は出土する。福岡県宗像郡津屋崎町の今川遺跡で、７Ｃ後半代に比定される遺構からも多数の鍛冶椀形滓が出土した[20]。この円形土坑型は、他に岡山県の二野遺跡[21]からも鎌倉時代の遺構として調査されており、こちらからも鍛冶椀形滓の検出がなされている。

弥生時代中期以降[22]、列島内に定着していったと考えられる火窪型の鍛冶炉以外に幾度か、鍛冶・鍛造新技術が導入されたと想像され、その現われが舟底型もしくは円形土坑型の鍛冶炉である。これらは列島内の風土に定着しきれずに、造築に労力のかからない火窪型に集約されて近世・現代までに至ったものと考えられる。

現在までのところ、鍛冶椀形滓は、火窪型、舟底型、円形土坑型の３種の鍛冶炉から排出されている様であるが舟底型と円型土坑型が火窪の外部施設として存在していたのか、他に何か機能していたのか追及する必要がある。

４－２　製鉄遺跡出土の鋳鉄鉄塊について

大和川・今池遺跡から白銑組織とねずみ鋳鉄組織を合せもった小鉄塊が採取された。発光分光分析によると、銑中の不純物は少なく非常に清浄な鉄塊である。また、同遺跡で板状に延ばされた半製品素材も採取されているが、こちらは酸化が進行していて、正確な金属組織の決定は難しいものの、外観観察および酸化物の検鏡より銑鉄と判定している。この板状鉄片の発光分光分析の結果は、造滓成分を構成するアルミニウム(Aℓ)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、けい素(Si)らは小鉄塊より増加しているが、これは鍛造過程での酸化物の噛み込みで特別矛盾はない。他の随伴微量元素は、ほぼ近似しており、(Mnのみ差あり)両者は同一素材の流れをくむ材料と考えられる。

この様に大和川・今池遺跡出土の小鉄塊と板状鉄片は、５Ｃ前半代において銑鉄の脱炭処理

及び鍛造技術も伴せて行なったであろうことを語りかける資料となった。

近年製鉄遺跡より鉄塊の検出がわずかながら進んでいる。表7には、管見で集めた出土例を記載した。今回の調査対象となった大和川・今池遺跡を初めとして陵南北遺跡の5C後半代の鉄塊、また平安、中世、近世に亘る鉄塊がみられ、鍛冶炉を伴なった遺跡から、炭素含有量が2.0%以上の銑がみつかっている。これらが左下の対象品として扱われたのか、銑だから逆に素材から外されたのか検討が必要であろう。しかし、今回の大和川・今池遺跡出土のV—94の小鉄塊とV—96の板状鉄片の2点の検出から、鍛冶炉を伴なった遺跡から採取される銑鉄は脱炭処理用の素材の可能性が強いと考えるにいたった。又、傍証資料としては、先に挙げた福岡県春日市赤井手遺跡の工房跡的要素の強い5号土坑からも棒状の鋳鉄品が出土しており弥生中期末頃の時期で挙げられている。(鋳鉄の確認は筆者の検鏡結果にもとずく) 大陸に近い春日市において弥生中期の鍛造技術で脱炭処理まで手がけていたのであれば、5C前半代の大和川・今池遺跡での鉄滓を伴なった銑及び半製品の板状鉄片は充分実用段階まで加工されたとみなされよう。

なお、これらの鉄素材は何処で生産されたか今後の研究課題になるであろうが、恐らく列島外からの搬入品と考えている。その根拠は、6C以前の古墳に鉄鋌や鍛冶具が多く副葬され、かつ同時期の古墳に羽口や鍛冶滓が奉献されている。古墳供献鉄滓のなかから製錬滓が確認されるのは6C中頃以降である。現在までに製錬炉で6C中頃より以前のものは確認されておらず、これらの点を考慮すると列島内での製錬開始は6Cを遡るとは考えられない。

なお、熊本県の下前原、諏訪原遺跡出土鉄滓は、一部では製錬滓として扱われているが、これは鍛冶滓と考えるものである。これらの点については後日別途言及したと考える。

5 まとめ

百舌鳥古墳群の周辺に立地する土師遺跡27—1街区や大和川・今池遺跡出土の5C代の鉄滓と小鉄塊、鉄片を調査して当時の古代製鉄の究明を試みた。

① 土師遺跡27—1街区出土鉄滓は、鍛錬鍛冶椀形滓であるが、肉眼観察からも、顕微鏡組織上からも、また化学組成らを合せてみても鉄分の非常に少ない鉄滓であった。過去に調査した陵南北遺跡、陵南北(公団)、土師新日鉄研修センター出土鉄滓らの組成とも、また今回調査の大和川・今池遺跡出土鉄滓とも大きく異なっていた。

よく吟味された良質木炭とコントロールのきいた送風量でムダな鉄分を残さない高度の鍛冶技術をもつた集団の仕事と考えられる。5C後半代の鍛冶技術にもかかわらず、中世・近世のものに比較しても、そんしょくのない最高水準の技術であったであろう。

② 大和川・今池遺跡では、鋳鉄の小塊が検出され、これと同系素材と推定される板状鉄片の

半製品が発掘されたことから、脱炭処理により鋳鉄から錬鉄に加工する技術が存在すると考えるに至った。

素材搬入元の究明が必要であり、５Ｃ前半代に列島内で製錬が行なわれていたか否かの問題の検討も必要となってくる。資料の集積をはかって後日に期したいと考える。

謝辞

本稿作成に当って分析結果や他のデータは清水峯男教授（旧新日本製鉄株式会社生産技術研究所部長、現在九州大学工学部治金学教室）や吉田誠氏（新日鉄、生産技術研究所勤務）の御尽力の賜でそろったこと明記して感謝の意を表しておきます。

注

① 森村健一「土師遺跡27—街区—百舌鳥陵南寺発掘調査報告書」『堺市文化財調査報告第６集』所収 堺市教育委員会 1980

同報告書によると、土坑—７（長さ88cm×幅82cm×深さ10cm）より羽口が２本出土している。以下同報告書による

①径4.8cm、穿孔径2.2cmを計る破片で、先端部はガラス質が付着している。指圧調整仕上げで土坑—７の東側より出土した。胎土—0.5～2mmの粗砂含む、焼成—良好、色調—灰白色（7.5ＹＲ$^{8}/_{2}$）

②口径7.1cm、穿孔部径4.1cmに推定されることから、入口部に近くの破片で外面の一部に酸化鉄が付着している。胎土—礫含むが密、焼成—良好、色調—外面……オリーブ灰色（2.5ＧＹ$^{6}/_{1}$）・内面……浅黄色（2.5Ｙ$^{7}/_{4}$）

② ゲーサイト（Goethite;$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）褐鉄鉱の構成物質の一つで、Fe_2O_3＝89.86％、H_2O＝10.14％。一般に黄褐色、赤褐色をし、条痕は黄色で、結晶質のものから土状の非晶質のものまである。硬さ5～5.5。比重4.28～3.3。熱することにより脱水し、赤鉄鉱に変化する。

③ マグネタイト（Magnetite;Fe_3O_4）。$FeO \cdot Fe_2O_3$でも表わされ、FeOの２価の鉄は、MgまたはNiで置換され、また別にTiO_2を含むこともある。立方晶で普通正八面体。

鉱物特性

光学的性質：マグネタイトは等軸晶系に属し、屈折率はＮ＝2.42で、わずかに黄色を含む灰白色を呈し、反射光度は弱い。反射偏光を示さず、このことは屈折率の低いことと共にヘマタイトと明瞭に識別できる。マグネタイトは不規則塊状の大きい結晶を生成し、また往々にして樹枝状、四面体、八面体などで観察される晶癖の面からヘマタイトとは異なる。透過光では不透明である。

腐食性：マグネタイトは王水により黄変するが、ヘマタイトは変化せず、ヘマタイトと識別される。また$SnC\ell_2$飽和溶液※によって浸されず、ヴスタイトは１～２minで暗灰色を呈するので、ヴスタイトと識別される。

微小硬度：500～600Hvでヘマタイトとは相当の差異を有する。

※　腐食液の$SnC\ell_2$飽和アルコール溶液の代用として$SnC\ell_2$ 1 %$HC\ell$飽和溶液を代用してもよい。

④　ファイヤライト（Fayalite; 2 FeO・SiO_2）。斜方晶系に結晶する鉄ケイ化物のこと。溶融点990℃、比重4～4.2。2 FeO＋SiO_2→2 FeO・SiO_2の反応による生成物。

鉱物特性

光学的性質：ファイヤライトは斜方晶系に属し、反射偏光を示す。屈折率（Ng=1.886）は酸化鉄鉱物に比べれば低く、マトリックスのけい酸塩の中では比較的高い。ファイヤライトは焼結鉱中に現われる場合スラグ中に、よく木ずり状となって晶出するため、この場合その特徴ある組織から他鉱物との識別は容易である。透過光では、開ニコルで無色であり、交差ニコルで淡黄色、黄緑色、黄燈色などを呈する。

微小硬度：微小硬度は600～700Hv程度である。

⑤　製錬滓。鉱石や砂鉄その他の原料から含有金属を抽出し精製する冶金学的反応操作で排出された滓をさす。

⑥　鍛冶滓。金属の純度を改善するために溶湯や還元鉄から酸化物、ガス、その他不純物を除去する操作を精錬といい、この時出来た滓を古代製鉄では精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）といい、製品加工時の鍛打加熱時に生成した滓を鍛錬鍛冶滓と呼ぶ。

もう少し詳しく鍛錬鍛冶滓について述べれば、精錬鍛冶で出来た錬鉄(庖丁鉄)を加熱して鍛錬を繰返し行ない、工具、農具各種の日常鉄器に加工成品化する工程を鍛錬鍛冶という。この加熱排出生成物の滓を鍛錬鍛冶滓という。

⑦　ヴスタイト（Wüstite; FeO）。Fe—O_2系2元状態図における$FeとO_2$との固溶体のこと。FeO(O_2 22%）はαFeとヴスタイトとの混合物であることが知られる。またヴスタイトを冷却してゆくと、570℃で分解し、この温度でFe_3O_4とα鉄に分かれる共析反応(eutectoidreaction）をおこす。

すなわち

Wüstite $\underset{\longleftarrow}{\overset{570℃}{\longrightarrow}}$ Fe_3O_4＋α鉄となる。

鉱物特性

光学的性質：マグネタイトと同様に等軸晶系に属し、反射偏光を示さない。屈折率もマグネタイトよりわずかに低く、色調もマグネタイトより灰色を帯びているが、その差はあまり大きくない。形状は一般に球状、樹枝状およびマグネタイトとの共晶の形で観察されるが、光学的性質だけではマグネタイトと識別しがたい。透過光ではマグネタイトと同様不透明である。

腐食性：ヴスタイトの明確な識別は、エッチ・テストによるがよく、$SnC\ell_2$飽和溶液により1～2 minで完全か、それに近い程度まで腐食されるのでマグネタイトと識別される。

微小硬度：焼結鉱中のヴスタイトは一般にマグネタイトと共晶をなしており、微小硬度は450～500 Hv程度でマグネタイトより、いくぶん低い値を示す。

⑧　森村健一他『大和川・今池遺跡（発掘資料その2、—第3地区及び試掘地点—)』大和川・今池遺

跡調査会　1979.3

⑨　森村健一他『大和川・今池遺跡―第1地区発掘調査報告―』大和川・今池遺跡調査会　1979.3

⑩　セメンタイト（Cementite）。鉄と炭素の化合物Fe_3C（C 6.97%）をいう。白色の固くもろい結晶（斜方晶系）、パーライト組織の1成分をなし、過共析鋼ではAcm温度以下で初析セメンタイトとしてオーステナイト結晶粒の周囲に網目状に析出する。

⑪　オーステナイト（Austenite、大洲田）炭素を固溶しているγ鉄、すなわち固溶体（侵入型）をオーステナイトという。

⑫　パーライト（Pearlite）フェライトとセメンタイトの共析晶（eutectoid）をパーライトという。

⑬　レデブライト（Ledeblite）。溶体からセメンタイトとオーステナイトが同時に晶出する共晶反応で生成した共晶組織をレデブライトとよんでいる。この組織は、多量のセメンタイトが主体になっているため、きわめて硬い。白鋳鉄は、このレデブライトとパーライトの混合組織である。

⑭　片状黒鉛（Graphite flake）。ねずみ鋳鉄中に生ずる片状の黒鉛。ばら状黒鉛（graphite rosette）、共晶黒鉛（eutectic graphite）もこれに含まれる。

⑮　脱炭処理。鋳鉄を空気、水蒸気、炭酸ガス中などで高温に加熱すると脱炭が起る。

$2Fe+O_2 \longrightarrow 2FeO$ ……(1)

$FeO+C \longrightarrow Fe+CO$……(2)

鋳鉄が酸化を受ければ、まず(1)式により、その表面に酸化物（FeO）ができ、つぎに(2)式により脱炭が起る。850℃以下では、(2)式の進行速度が遅いので、(1)式により酸化膜がつきやすいが、900℃以上になると(2)式の進行速度が大となり、鋼材内部の炭素は拡散により表面に移動し、COガスとなって脱出する。

⑯　大澤正己「岡山県下の古代製鉄研究」『稼山遺跡群Ⅱ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)）久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

⑰　大澤正己「新日本製鉄研修センター内出土鉄滓、鉄製品の科学的分析調査」『土師遺跡発掘調査報告書その1』堺市教育委員会　1976.7

⑱　福岡市教育委員会『和白遺跡群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集）　1971

⑲　穴澤義功「鉄生産のあり方」『和白遺跡群』福岡市教育委員会　1971

⑳　大澤正己「今川遺跡出土椀形鍛冶滓の調査とその考察」『今川遺跡』津屋崎町教育委員会　1981

㉑　高畑知功「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(15)』岡山県教育委員会　1977

㉒　春日市教育委員会『赤井手遺跡』（春日市文化財調査報告　第6集）　1980

弥生時代中期後葉～末に比定できる33号住居跡より隅丸方形（一辺70cm、深さ20cm）のピットが掘られ、鍛冶炉と推定されている。鉄滓の出土はないが、焼痕が甚しく鉄素材・鉄器未製品が検出されている。

㉓　大澤正己「真木山遺跡出土の鉱滓・鉄塊の調査」『真木山遺跡』新潟県教育委員会　1981発行予定

㉔　大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』（埼玉県遺跡発掘

調査報告書　第23集）埼玉県教育委員会　1979

㉕　千葉市文化課より調査依頼を受けている住居址出土試料（萩36切合住、フクド一括カマド右）76.11.21

㉖　大澤正己「大賀茂　金山遺跡出土の鉱滓・鉄塊の分析調査」『大賀茂　金山遺跡』下田市教育委員会　1980

㉗　福岡県文化課森田勉氏からの調査依頼を受けた試料。6 AYE—C、AJ89 暗褐色　76.8 .25　末報告

㉘　大澤正己「香月地区遺跡出土の鉄滓について」『辻田遺跡』（北九州市文化財調査報告　第35集）北九州市教育委員会　北九州市教育文化事業団　1980

㉙　後藤宗俊 他『臼杵石仏群地域遺跡Ⅲ』（昭和53年度発掘調査概報）臼杵市教育委員会　1978

㉚　宗像郡宗像町在住　斉藤達稔氏採取品

㉛　遠賀郡中間市在住　中山光夫氏採取品

㉜　大澤正己「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』沖縄県渡名喜村教育委員会　1979

※

専門用語の解説は、鉄鋼新聞社『鉄鋼辞典』工学図書出版社と、川口寛之編『金属材料辞典』及び日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』S43等を主として使用しており、一部については筆者の加筆があることをおことわりしておく。

表6　椀形滓出土地名表

No.	遺跡名	所在地	椀形滓形状		椀形滓出土数	鍛冶炉	区分	羽口出土有無			推定年代	分析
			サイズ(mm)	重量(g)				数量	内径	長さ		
1	土師遺跡	大阪府堺市百舌鳥陵南町3丁14番地	130×85×35	425	5		鍛錬鍛冶	2	22 41	破片	5C後半	◎
2	白峠山古墳	〃　岬町淡輪									7C	
3	伽羅橋遺跡	〃　高石市									13C	
4	寺地町遺跡	〃　堺市寺地町東1－9－1	85×75×25 150×130×40				鍛錬鍛冶				17C	◎
5	サンハイム宿院遺跡	〃　堺市甲斐町西178,21番地	100×60×30	245	1		〃				15～16C	
6	東大寺西面大垣跡	奈良県奈良市今小路町						1			近世	
7	芝ケ原遺跡	京都府城陽市大字久世小字芝ケ原77－1	77×49×32 35×22×14		11						7C	
8	垣内古墳近傍	〃　船井郡園部町垣内					鍛錬鍛冶				12～13C	
9	方広寺跡	〃　京都市東山区大和大路正面									17C	
10	宗金遺跡	岡山県新見市西方宗金									6C中頃～7C	○
11	草戸千軒	広島県草戸千軒町										
12	防府国府跡	山口県防府市多々良町二丁目国府跡	100×70×40								8～10C	
13	下右田遺跡	〃　防府市下右田	150×115×55	810			精錬鍛冶 鍛錬鍛冶				15C	◎
14	白須山たたら	〃　阿武郡阿武町惣郷	80×70×25 （破片）	370			精錬鍛冶				19C	◎
15	松木遺跡群A地区	福岡県那珂川町大字松木字新町	90×70×25 50×40(破片)×20	245 50	2	（祭祀遺構より）					5C前半	
16	金武古墳群吉武L群4号	〃　福岡市西区吉武字塚原	100×70×30	285			鍛錬鍛冶				6C前半～中葉	◎
17	〃　5号	〃　〃	70×60×20	150			〃				6C中葉	◎
18	〃　6号	〃　〃	110×110×60	900			精錬鍛冶				〃	◎
19	観音山古墳群13号墳	〃　筑紫郡那珂川町大字中原字深原	110×90×30	530							6C後半 7C前半	◎
20	今川遺跡	〃　宗像郡津屋崎町今川	166×110×40	945	20以上	円形土坑型	精錬鍛冶	3	25	破片	7C後半	◎
21	平蔵遺跡	〃　筑紫郡那珂川町上梶原	100×95×40 （破片）	340	3		鍛錬鍛冶	1	30~36	破片	8C前半	◎
22	上和白遺跡	〃　福岡市東区大字和白宮前				舟底型		4以上	13~19	160	8C	
23	塚田遺跡	〃　糸島郡二丈町大字深江字万蔵の下									奈良時代後半	◎
24	浜口（月軒）廃寺	〃　遠賀郡芦屋町	104×90×37	420			鍛錬鍛冶	なし			8C	◎
25	波多江遺跡	〃　糸島郡前原町波多江				火窪型					9C末	◎
26	竹中遺跡	〃　〃　二丈町吉井字竹戸									9C終末 10C初頭	
27	多々良遺跡	〃　福岡市東区大字多々良宗原	100×100×20	335			精錬鍛冶	6	12~21	不明	13C	◎
28	茶臼山遺跡	〃　久留米市山川町									13～14C	
29	芦屋旧小学校遺跡	〃　遠賀郡芦屋町	80×94×34	310			鍛錬鍛冶	なし			中世	◎
30	馬場山遺跡	〃　北九州市八幡西区大字香月馬場山	100×80×35	245			鍛錬鍛冶	なし			〃	◎
31	辻田遺跡	〃　〃　〃　字辻田	70×45×20 （破片）	115			鍛錬鍛冶	なし			〃	◎
32	水町池遺跡	〃　直方市上境水町池	100×75×20	300			鍛錬鍛冶	なし			不明	◎
33	原田遺跡	〃　甘木市上秋月字原田						1	21	不明	不明	◎
34	板取遺跡	福岡県宗像郡津屋崎町在自	80×68×44	220								
35	野原9号墳	熊本県荒尾市野原字山中										
36	沈目立山遺跡	〃　下益城郡城南町大字沈目立山	55×55×10	106		火窪型	鍛錬鍛冶	破片	破片	不明	12～13C	◎
37	蓮花寺跡	〃　球磨郡多良木町大字黒肥地字蓮花寺	75×120×25 70×60×46	470 185			精錬鍛冶	4	26	不明	12～14C	◎
38	頼景館跡	〃　〃	80×70×30	230			〃	2	24	256	12～14C	◎
39	六段製鉄跡	〃　玉名市三つ川西原六段					不明	1			12～14C	
40	浜の館遺跡	〃　上益城郡矢部町浜町	130×80×30	595							16C	◎
41	多比良遺跡	長崎県南高来部国見町多比良	108×95×37	585								

No.	遺跡名	所在地	椀形滓形状		椀形滓出土数	鍛冶炉	区分	羽口出土有無			推定年代	分析
			サイズ(mm)	重量(g)				数量	内径	長さ		
42	金武グスク	沖縄県金武村字金武	70×120×35 (¼の破片)	130			精錬鍛冶	不明			14～15C	◎
43	伊原遺跡	〃 糸満市伊原	110×130×55 (¼の破片)	250			〃	〃			15～16C	◎
44	与那覇元島	〃 宮古下地町字与那覇	60× 75 ×35	240			鍛錬鍛冶	〃			15～16C	◎
45	松田遺跡	〃 宣野座村字松田	90×120×35	355			精錬鍛冶	〃			16C	◎
46	埋田遺跡	愛知県津島埋田					精錬鍛冶				中世	
47	大賀茂遺跡	静岡県賀茂郡伊豆大賀茂						1	40	130	不明	○
48	寺家遺跡	石川県羽咋市寺家	50× 40 ×30 (¼の破片)	140							奈良～平安	
49	隅谷刀匠工房	石川県松任市					鍛錬鍛冶				現代	
50	蔵尾遺跡	神奈川県厚木市上萩野	90× 60 ×40 (破片)	365				有			9C	◎
51	向原遺跡	〃 平塚市上吉沢字向原1682他	110× 80 ×30	400			鍛錬鍛冶	有			9C末	◎
52	上浜田遺跡	〃 海老名市大谷字上打越	110× 80 ×30	700				無			11C	
53	酒匂鍛冶遺跡	〃 小田原市酒匂									19C	○
54	一つ橋高校遺跡	東京都千代田区東神田1－12－13					鍛錬鍛冶	6以上	17~25	不明	18C	◎
55	戸張作遺跡(4号)	千葉県千葉市東寺山									6C	
56	〃 (1号)	〃									8～9C	
57	上の台遺跡	千葉県千葉市幕張町二丁目									6～7C	○
58	横山遺跡	〃 夷隅郡大多喜町横山字綱谷									7C	
59	千草山遺跡	〃 市原市山田橋字千草山	80× 70 ×25	175		火床 (390×330×105)	鍛錬鍛冶				8C	◎
60	扶食古墳	〃 香取郡東庄町羽計字扶食									7～8C	
61	萩ノ原遺跡	〃 市原市上高根字萩ノ原1611									8C後半	
62	鴻ノ栄遺跡(24号)	〃 柏市鴻ノ巣									8C後半～9C	
63	〃 (25号)	〃 〃									〃	
64	駒形遺跡	〃 千葉市作草部駒形	90× 80 ×40	265			鍛錬鍛冶				9C末	◎
65	谷津遺跡	〃 千葉市花輪町谷津									平安	
66	水砂遺跡	〃 柏市大青田1551									〃	
67	桜井2A－16号	〃 香取郡干潟町桜井									〃	
68	〃 20－16号	〃 〃									〃	
69	平蔵台遺跡	〃 東金市松之郷金谷									〃	
70	外原遺跡	〃 船橋市田喜野井外原524									11C	
71	荻生道遺跡	〃 千葉市小食土町荻生道					鍛錬鍛冶				12C	◎
72	芳賀輪遺跡	〃 〃 野呂町554～4他									平安	◎
73	蛇谷遺跡	〃 市原市西広字蛇谷									平安	
74	稲荷台遺跡	〃 市原市山田橋字稲荷台									近世	
75	稲城台遺跡	〃 三輪台									?	
76	天辺鍛冶遺跡	〃 佐倉市天辺					鍛錬鍛冶				近世	
77	鹿ノ子遺跡C	茨城県石岡市鹿ノ子									8～9C	
78	空沢遺跡	群馬県渋川市行幸田空沢					鍛錬鍛冶	4	21~22	12以~128	10C後半	◎
79	野山貝塚	宮城県宮城郡七ケ浜町					精錬鍛冶				9C	○
80	がんげつ遺跡	〃 栗原郡瀬峰町大字岩石					精錬鍛冶				9C	○
81	多賀城跡	〃 多賀城市川字五万崎					鍛錬鍛冶	2	16~20	不明	9～16C	○
82	西浦北遺跡	埼玉県大黒郡岡部町榛沢	80(粉)×85×30	395							平安末期	◎
83	後榛沢遺跡	〃 〃	90×65×20	240	2							◎
84		〃 〃	45(粉)×70×20	150	1							

表7　鉄塊の出土例

No.	遺跡名	所在地	鉄塊 サイズ(mm)	鉄塊 重量(g)	炭素含有量(%)	ヴィカース断面硬度	遺構の性格	推定年代	註
1	大和川・今池	大阪府松原市天美西町	37×20×15	20	4.3%前後	※1 290～648	遺構未確認（鍛冶炉）	5C前半	
2	陵南北	大阪府堺市深井北町	40×50×30	45	1.5%	—	舟底型鍛冶炉	5C後半	⑰
3	真木山B地点	新潟県北蒲原郡豊浦町	90×100×80	10kg	1.5%前後	258～333	堅型製錬炉	平安	㉓
4	大山	埼玉県北足立郡伊奈町	38×60×24	42	0.9～1.7 分析値2.0%	189	〃	平安中期	㉔
5	萩生道	千葉県千葉市小食土町	23×18×12	13	0.05～0.08	107	鍛冶関連	12C	㉕
6	大賀茂金山	静岡県下田市大賀茂	60×60×30	255	0.1～0.86	77～201	製錬炉（箱型？）	平安時期	㉖
7	大宰府	福岡県筑紫郡大字観世音寺	36×28×20	42		266～406	鍛冶炉	平安？	㉗
8	辻田	福岡県北九州市八幡西区馬場山	30×30×20	36	0.8～0.86	※2 252(706)	鍛冶炉関連	平安	㉘
9	臼杵石仏群地域	大分県臼杵市大字深田	45×30×12	25	酸化物	——	鍛冶炉	室町時代	㉙
10	許斐山	福岡県宗像市	40×26×20	35	3～4%		不明	中世	㉚
11	名呑	福岡県宗像市津屋崎町在自	64×30×30	190	3～4%		不明	中世？	㉛
12	里	沖縄県渡名喜村	15×15×15	10	2.0～3.0	166～189	不明	15～16C	㉜

※1　290（ねずみ鋳鉄）～648（白銑鉄）　　※2　(706)はマルテンサイド部分

椀形滓出土地名表に関する文献(No.は対応する)

1　森村健一他「百舌鳥・陵南廃寺発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第6集　堺市教育委員会　1980

2—①　山本博『古代の製鉄』学生社38頁

②　堅田直「白峠山古墳」『帝塚山考古学』4　1968

③　森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第1巻　古代編1　1978

3　森浩一　同掲書　2—③

4　椀形滓は堺市教育委員会文化財保護係森村健一氏の提供。元禄二年堺大絵図に南鍛冶屋と記され、十軒の鍛冶屋が軒を並べていたと伝えられた場所からの発掘品である。分析結果は未発表。

5　森村健一氏の御教示　堺市環濠都市遺跡

6　寺澤薫・菅原正明他「東大寺西面大垣跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概要』奈良県立橿原考古学研究所　1977

7　山田良三『芝ケ原遺跡』芝ケ原遺跡調査会　1980

8　窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣　1972　194頁

9　穴澤義功氏御教示

10　井上弘他「宗金遺跡」『中国縦貫自動車建設に伴う発掘調査(13)』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2)岡山県教育委員会　1978

11　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『河底に埋れた中世の町草戸千軒』1979.4　43頁　椀形滓外観写真あり

12　椀形滓は10号Pitより出土

13　山口県教育委員会『下右田遺跡』〈第1・2次調査概報〉(山口県埋蔵文化財調査報告第43集)1978

大澤正己「下右田遺跡出土の鉄滓の調査」『下右田遺跡』〈第4次調査概報・総括〉(山口県埋蔵文化財調査報告第53集)山口県教育委員会　1980

14　中村徹也・末永博憲・柿本春次「白須山タタラ製鉄遺跡」『月刊文化財』194号第1法規出版株式会社　1979．11　出土椀形滓の分析結果は報告書発行に際して発表予定

15　那珂川町教育委員会「那珂川町の歴史を掘る(Ⅳ)」(松木遺跡群現地説明会資料)ガリ刷　1981．2．21

16～18　大澤正己「金武古墳群吉武L群1～8号墳、乙石H群1号墳出土鉄滓の調査」『夫婦塚』〈四箇周辺遺跡調査報告書(3)〉(福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集)福岡市教育委員会　1980

19　大澤正己「鉱滓の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集』福岡県教育委員会1978

20　大澤正己「今川遺跡出土椀形鍛冶滓の調査とその考察」『今川遺跡』津屋崎町教育委員会　1981

21　澤田康夫他『平蔵遺跡』(那珂川町文化財調査報告書第5集) 那珂川町教育委員会　1980
出土椀形滓の分析結果は未発表

22　穴澤義功「鉄生産のあり方」『和白遺跡群』福岡市教育委員会　1971

23　福岡県文化課橋口達也氏よりの提供品　分析結果は未発表

24　石松好雄・高橋章他『浜口(月軒)廃寺』芦屋町教育委員会　1979　分析結果は未発表

25　福岡県文化課・橋口達也氏よりの提供品　今宿バイパス波多江遺跡1号竪穴住居跡出土

26—①　佐々木隆彦編『竹戸遺跡』(二丈町文化財調査報告書第1集) 二丈町教育委員会　1979

②　馬田弘稔「竹戸遺跡」『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会　1980

27　福岡市教育委員会『多々良遺跡調査報告書』1972　椀形滓の分析結果は次の報告書に収録
大澤正己「福岡平野を中心に出土した鉱滓の分析」『広石古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集) 福岡市教育委員会　1977

28　久留米市教育委員会『茶臼山・東光寺遺跡』1974

29　波多野晥三「芦屋石畳遺構」『筑紫史論』第3集　1975．10　椀形滓の分析結果は未発表

30　栗山伸司編『馬場山遺跡』(北九州市文化財調査報告書第36集) 北九州市埋蔵文化財調査室　1980

31　大澤正己「香月地区遺跡出土の鉄滓について」『辻田遺跡』(北九州市文化財調査報告書第35集) 北九州市教育文化事業団　1980　馬場山遺跡出土椀形滓の分析結果もこの報告書に収録

32　轟次雄氏採取品

33　福岡県甘木市教育委員会・内田俊和氏よりの提供品

34　大澤正己「8号墳出土鉄滓の調査結果」『清田ケ浦古墳群』津屋崎町教育委員会　1977

35　坂本經堯「荒尾野原古墳」『肥後上代文化の研究』所収肥後考古学会　肥後上代文化研究所　1980

36　緒方勉編『沈目立山遺跡』(熊本県文化財調査報告第26集) 熊本県教育委員会　1977
出土椀形滓は福岡市教育委員会文化課山崎純男氏経由で入手、分析調査を行なっている

37　大澤正己「蓮花寺跡出土鉄滓の調査」

38　大澤正己「相良頼景館跡出土鉄滓の調査」37・38共に『蓮花寺跡・相良頼景館跡』(熊本県文化財調査報告第22集) 熊本県教育委員会　1977
杉村彰一「相良頼景館跡の発掘調査」『ふるさとの自然と歴史』第65号　1976

39　玉名市教育委員会『玉名の文化財』第4集　18頁

40　大澤正己「浜の館遺跡出土の鉄滓分析」『浜の館—阿蘇大宮司館跡—』熊本県文化財調査報告第21集) 熊本教育委員会　1977
桑原憲彰「伝承のなかに生きていた幻の“浜の館”」『ふるさとの自然と歴史』第32号　1974
桑原憲彰「伝承のなかに生きていた浜の館」『日本談義』299号　1974
桑原憲彰「浜の館第二次調査、巨大柱をもつ神殿」『広報やべまち』233号　1976

41　松尾貞明「多比良町郷土史」1950
古田正隆『製鉄遺構を伴なった小原下遺跡調査報告』(百人委員会埋蔵文化財報告第9集) 1979
椀形滓の提供は竹中岩夫氏より受けている。検鏡ずみ　分析まち
42　大澤正己「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』沖縄県渡名喜村教育委員会　1979
43　大澤正己同掲書42　当真嗣一「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題について」『琉大史学』第2号　1971
44　大澤正己同掲書42
45　大澤正己同掲書42　当真嗣一同掲書43
46　窪田蔵郎前掲書8
47　芹澤正雄「南伊豆における製鉄跡」『たたら研究』第16号　1972
48　穴澤義功氏より椀形滓の提供をうける
49　窪田蔵郎前掲書8
50　神奈川県教育委員会『鳶尾遺跡』(神奈川県埋蔵文化財調査報告7) 1975
51　神奈川県教育委員会で整理中 (81～82年) 報告書刊行予定　報告告刊行予定
52　神奈川県教育委員会『上浜田遺跡』(神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告15) 1979.3
53　窪田蔵郎前掲書8
54—①　加藤普平・古泉弘「千代田区一ツ橋高校内遺跡の調査」
②　大澤正己「鉄滓・ルツボ・羽口等の科学的分析及び結果の考察」1976.5　原稿提出　発刊未定
55　千葉県文化財センター『千葉市東寺山戸張作遺跡』1977
56　〃
57　大澤正己「上ノ台遺跡出土の鉄滓・羽口先端溶着スラグの調査」『千葉市上ノ台遺跡報告書』Ⅰ～Ⅲ
58　『大多喜横山遺跡』78
59　大澤正己「千草山鍛冶遺構出土の鉄滓・スケール・鉄釘の調査」『千草山遺跡』千草山遺跡発掘調査団　1979
60　渋谷興平『千葉県香取郡扶喰古墳の研究』東京文化史学会　1972
61　日本文化財研究所『千葉萩ノ原遺跡発掘調査報告』(日本文化財研究所文化財調査報告5) 1977
62　『柏市鴻ノ巣遺跡』74
63　〃

64　大澤正己「駒形遺跡鍛冶滓の調査」『駒形遺跡』(第1次・第2次発掘調査報告書) 駒形遺跡発掘調査団　1978

65　千葉市教育委員会『古代のムラ谷津遺跡』ガリ刷

66　穴澤義功氏御教示

67—①　倉田芳郎『千葉・干潟桜井遺跡第1次調査概報』干潟桜井遺跡調査団　1975

②　倉田芳郎『千葉・干潟桜井遺跡調査概要2』干潟桜井遺跡調査団　1976

68　同　上

69　立正大学博物館『東金平蔵台遺跡』(立正大学博物館学講座研究小報6) 1970

70　船橋市教育委員会『外原』1972

71　千葉市文化課薬師寺崇氏より分析依頼を受けている。近日報告書発行予定

72　千葉市教育委員会『千葉市文化財調査報告第1集』1976
椀形滓については分析依頼を受けている。近日報告予定

73　報告あり　1976

74　『国分東台遺跡調査報告』

75　穴澤義功氏御教示

76　窪田蔵郎前掲書8

77　穴澤義功氏御教示

78　群馬県渋川市教育委員会『空沢遺跡』(渋川市発掘調査報告書Ⅲ) 1978　椀形滓の分析結果は未発表

79　鴇田勝彦「宮城県七ケ浜町野山貝塚出土鉄滓に関する中間報告」昭和52年度たたら研究会発表資料　1977. 11. 19

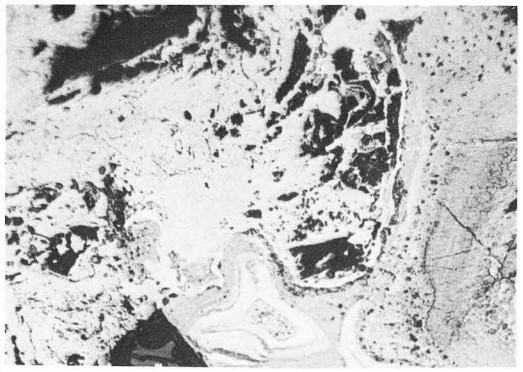
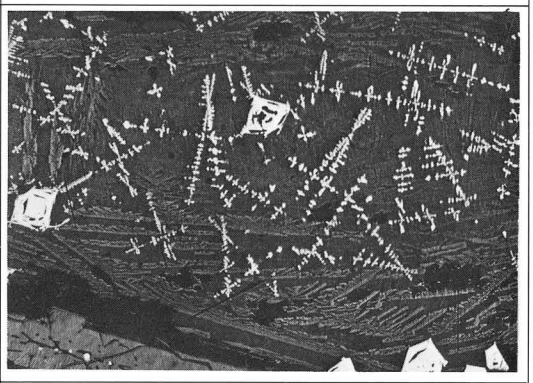
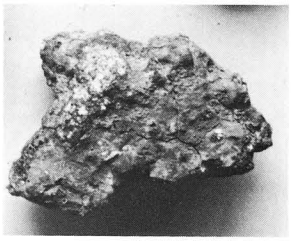
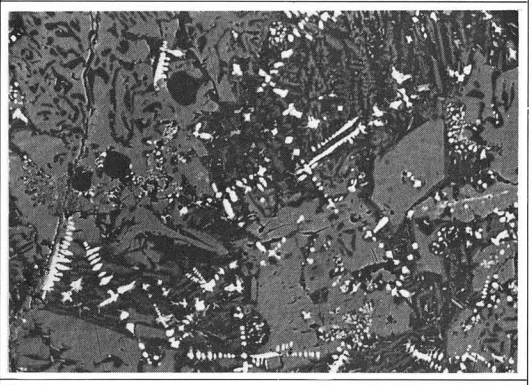
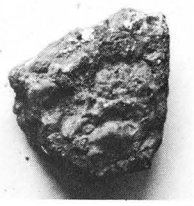
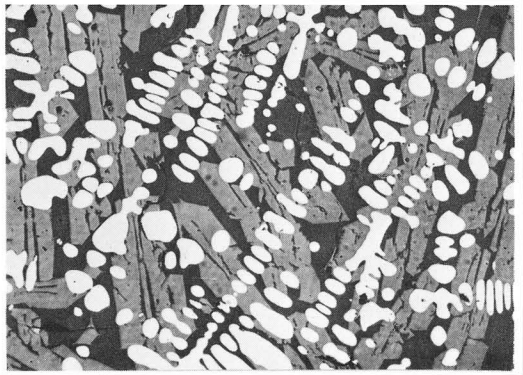
80　鴇田勝彦「鉄器・鉄滓の科学的検討にあたって」『がんけつ遺跡』(宮城県瀬峰町文化財調査報告書第1集) 瀬峰町教育委員会　1976

81　窪田蔵郎「多賀城鍛冶工房遺構と出土鉄滓」『宮城県多賀城跡調査研究年報1976』宮城県教育委員会　1977

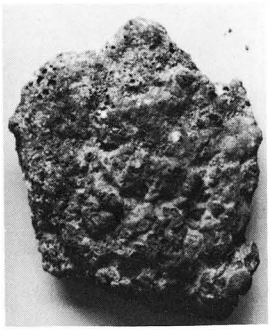
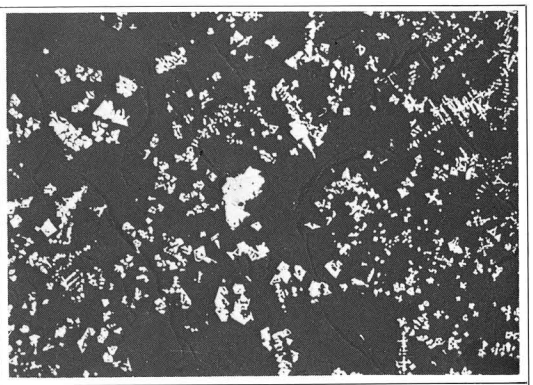
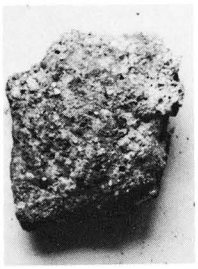
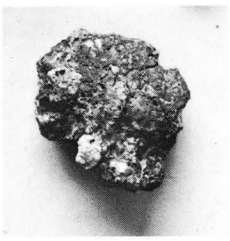
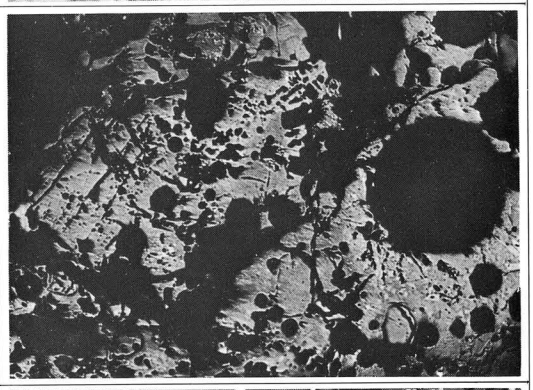
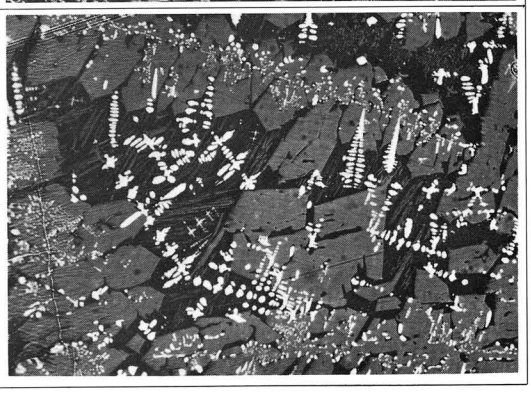
82　佐藤忠雄「西浦北遺跡」『大寄B遺跡・西浦北遺跡』埼玉県大里郡岡部町教育委員会　1980

81　椀形滓は佐藤忠雄氏からの提供品

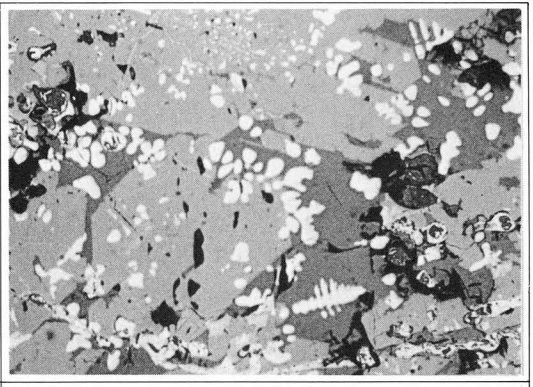
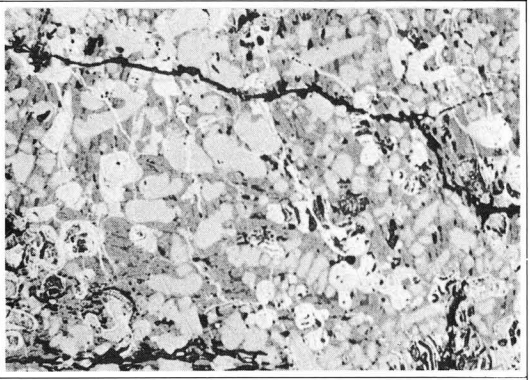
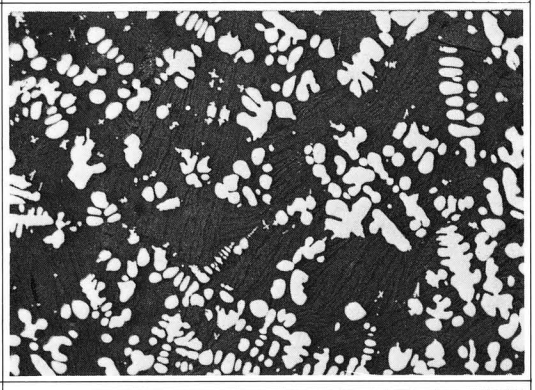
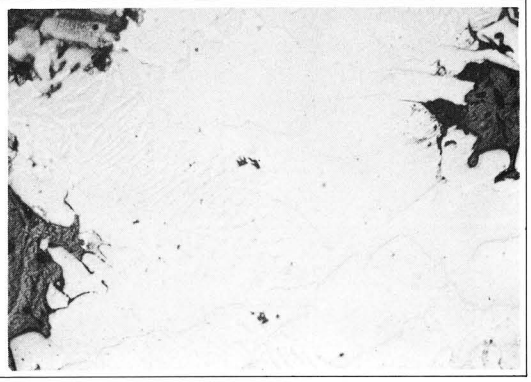
82　埼玉県教育委員会高橋一夫氏からの提供品

S－91 土師(27－1)遺跡 椀形滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真⅓		
T－91 土師(27－1)遺跡 椀形滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		
T－92 土師(27－1)遺跡 椀形滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		
T－93 土師(27－1)遺跡 椀形滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		

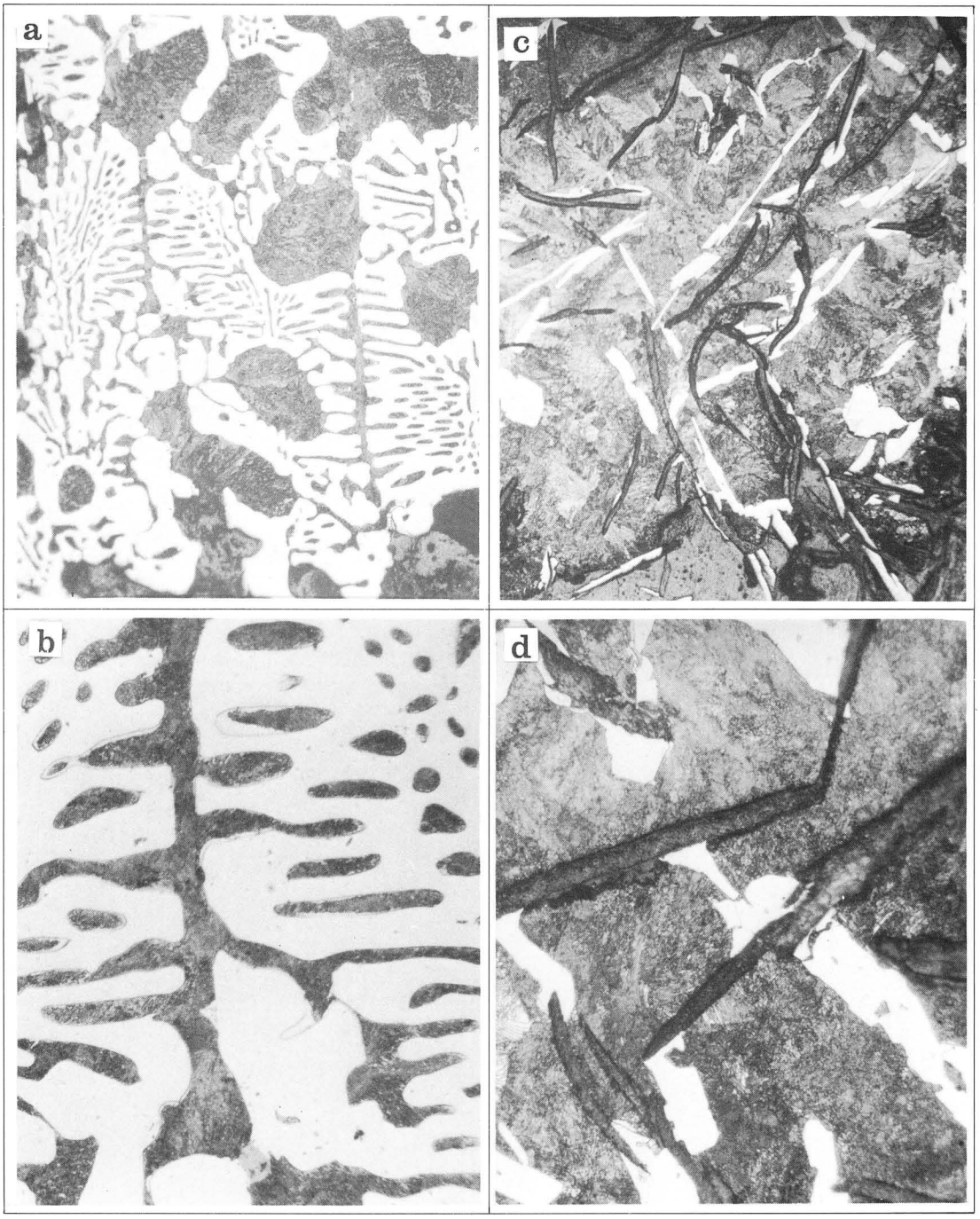
第74図　土師遺跡27－1街区出土鉄滓の顕微鏡組織

U－91 土師(27－1)遺跡 椀形滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		
U－92 土師(27－1)遺跡 鍛冶滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		
U－93 土師(27－1)遺跡 鍛冶滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		
U－94 土師(27－1)遺跡 鍛冶滓 (鍛錬鍛冶) ×100 外観写真½		

第75図　土師遺跡27－1街区出土鉄滓の顕微鏡組織

V－91 大和川・今池遺跡 鍛冶滓 （鍛錬鍛冶） ×100 外観写真½		
V－92 大和川・今池遺跡 鍛冶滓 （鍛錬鍛冶） ×100 外観写真½		
V－93 大和川・今池遺跡 鍛冶滓 ×100 外観写真½		
V－94 大和川・今池遺跡 小鉄塊 （銑） ×100 外観写真½		

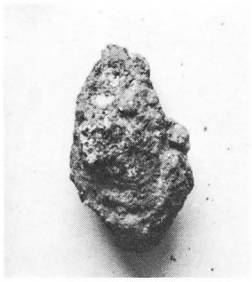
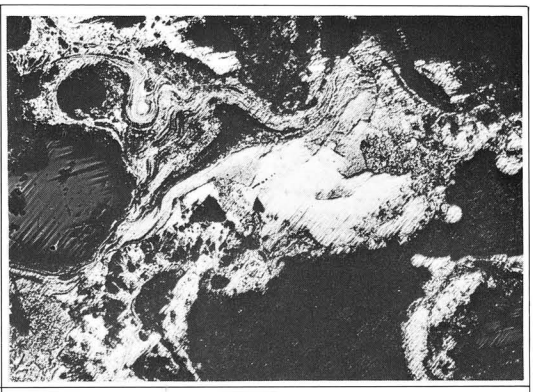
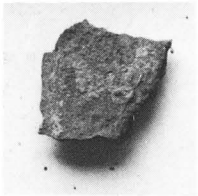
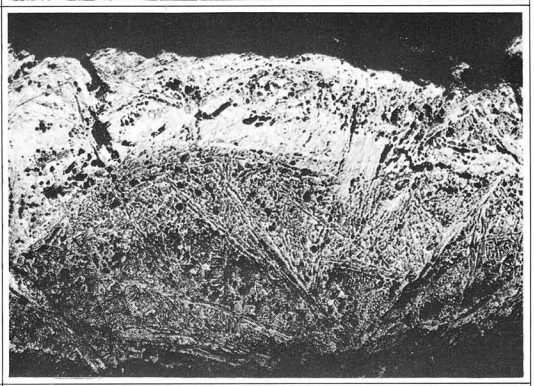
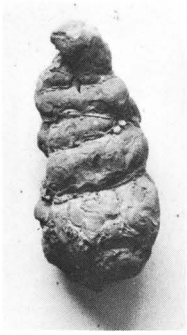
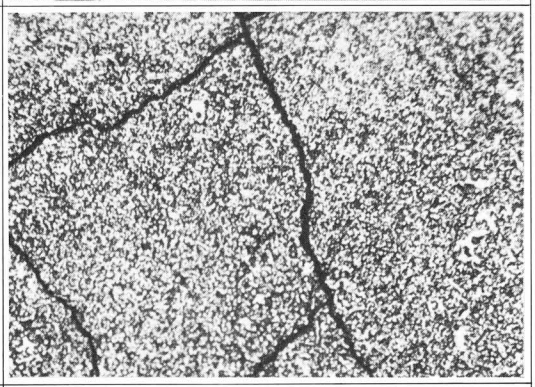
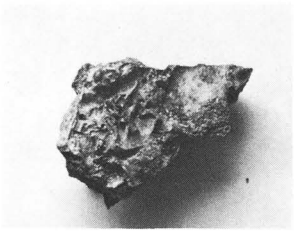
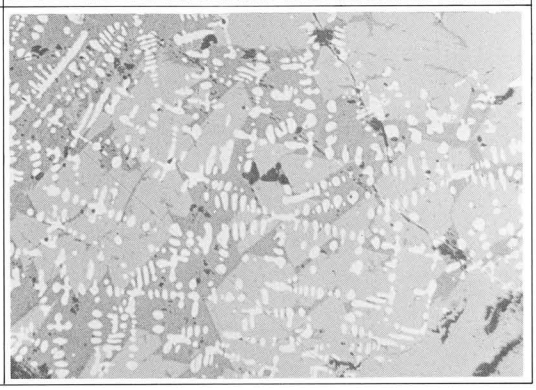
第76図　大和川・今池遺跡出土鉄滓・小鉄塊の顕微鏡組織



a：端部×100
b：端部×400
} 5％ Nital腐食
白銑鉄組織(冷却速度が速い)

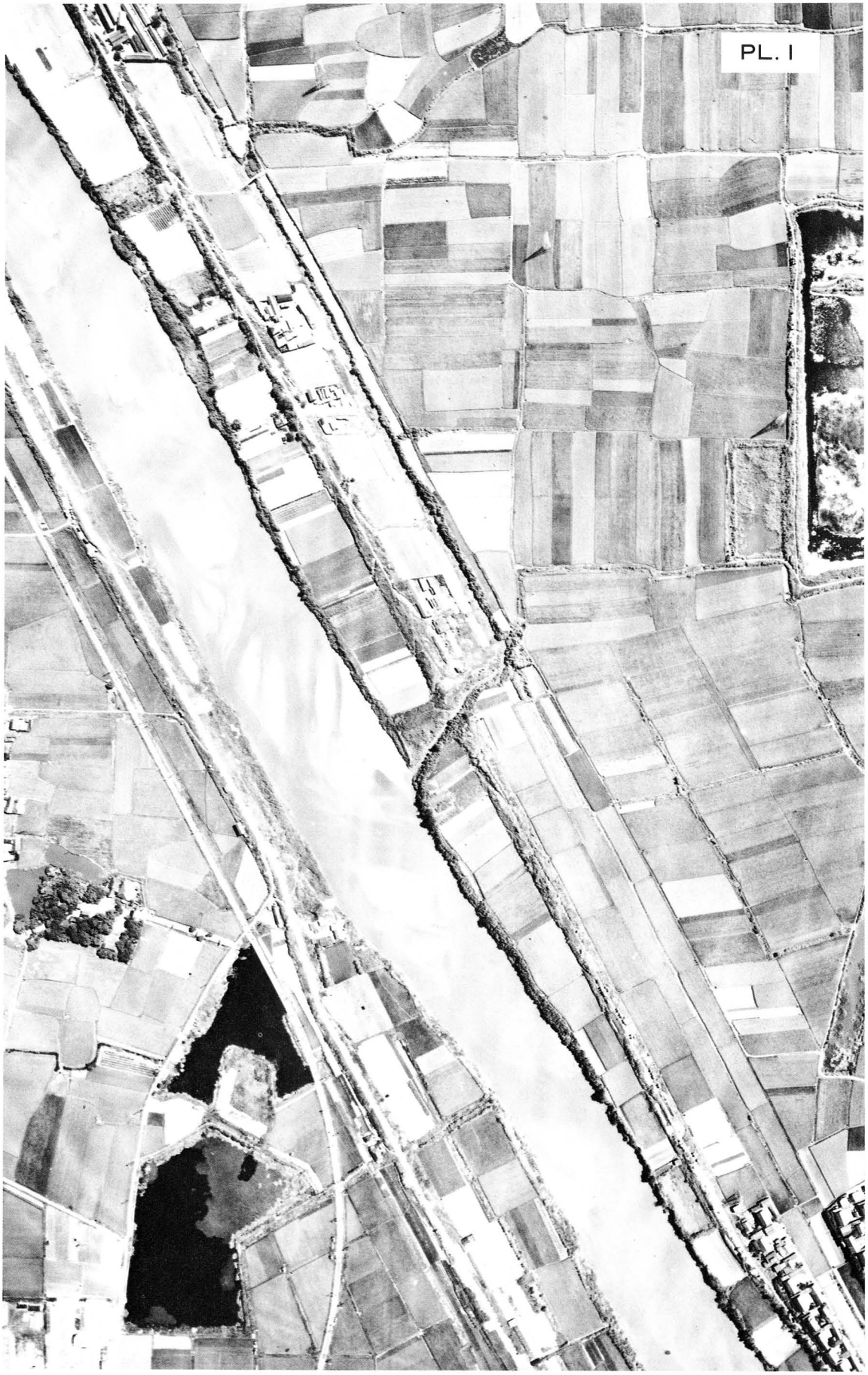
c：中央部×100
d：中央部×400
} 5％ Natal 腐食
ねずみ鋳鉄組織(徐冷)

第77図　大和川・今池遺跡出土小鉄塊の顕微鏡組織

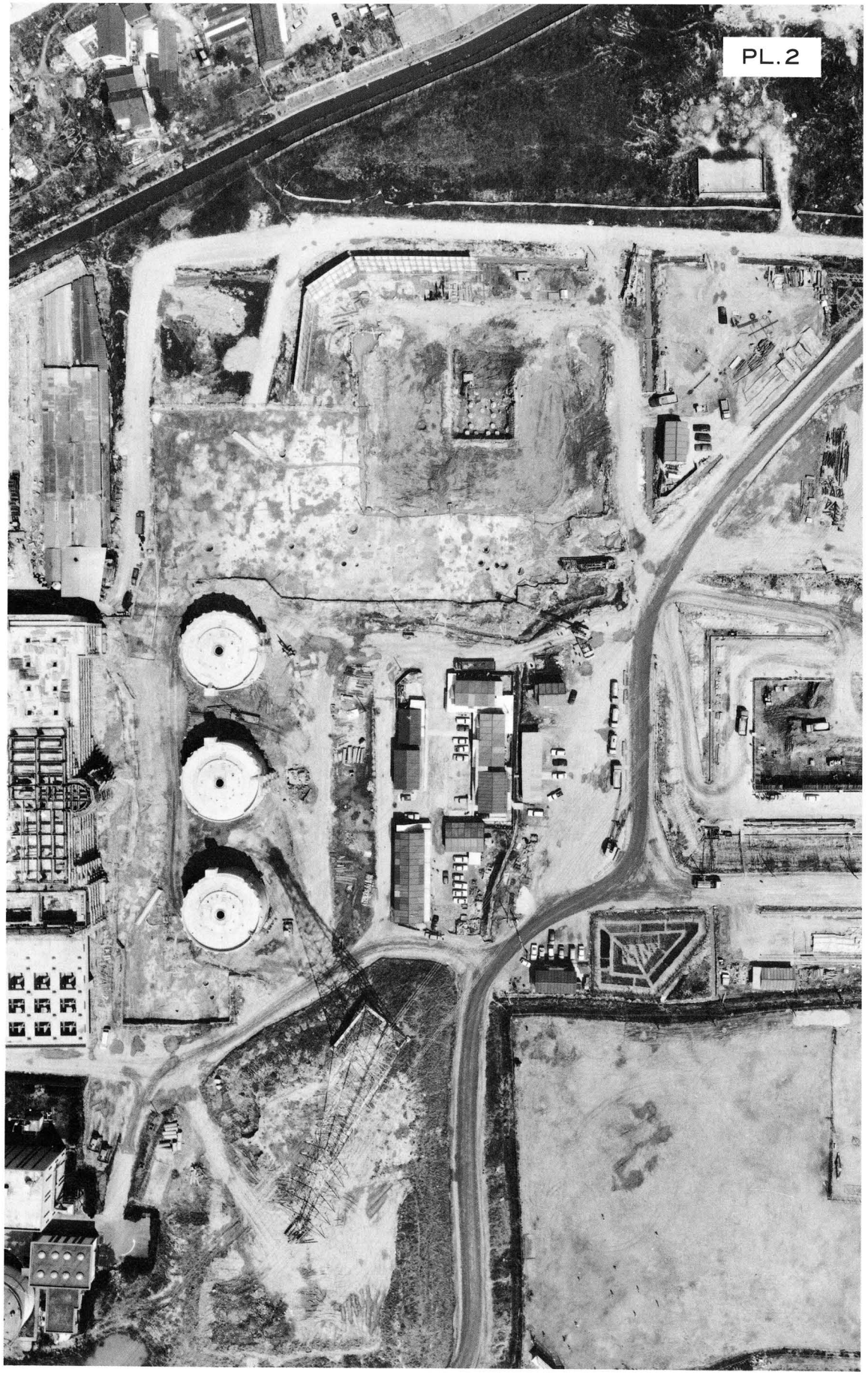
V－95 大和川・今池遺跡 鉄　片 （重ね鍛え） ×100 外観写真½		
V－96 大和川・今池遺跡 鉄　片 ×100 外観写真½		
V－97 大和川・今池遺跡 タカシ小僧 ×100 外観写真½		
2 E－9 高師浜遺跡 鍛冶滓 （鍛錬鍛冶） ×100 外観写真½		

第78図　大和川・今池遺跡出土鉄塊及び高師浜遺跡出土の顕微鏡組織

図　　版



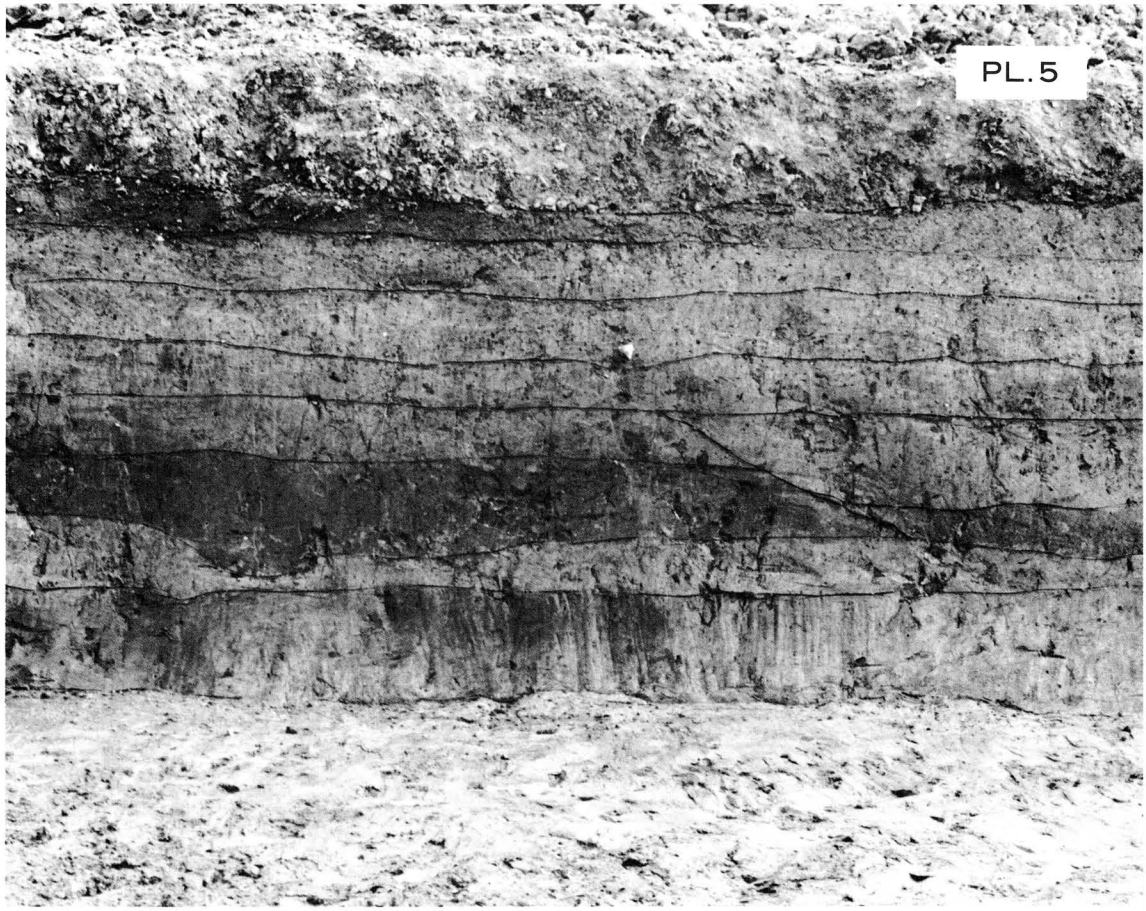
大和川・今池遺跡とその周辺垂直写真



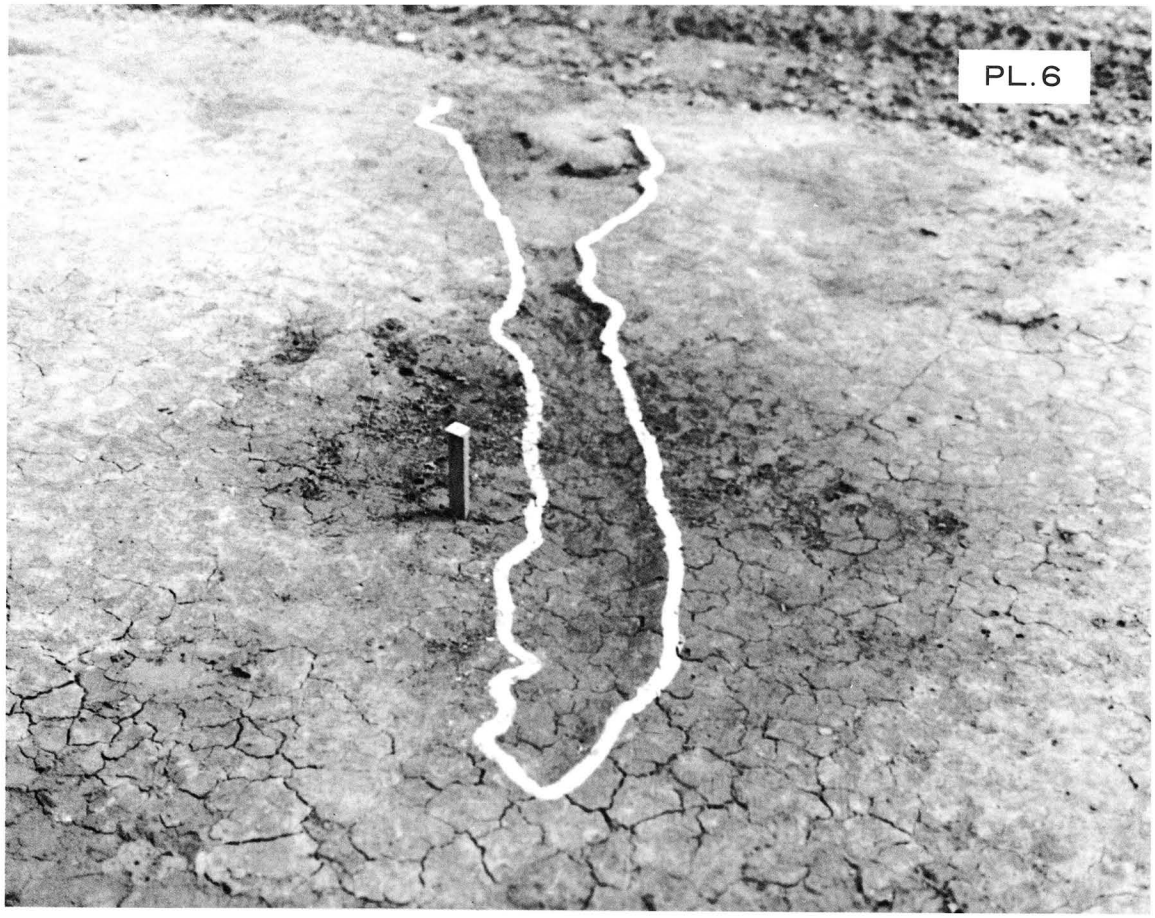
第 6 地区　垂直写真

南側　垂直写真

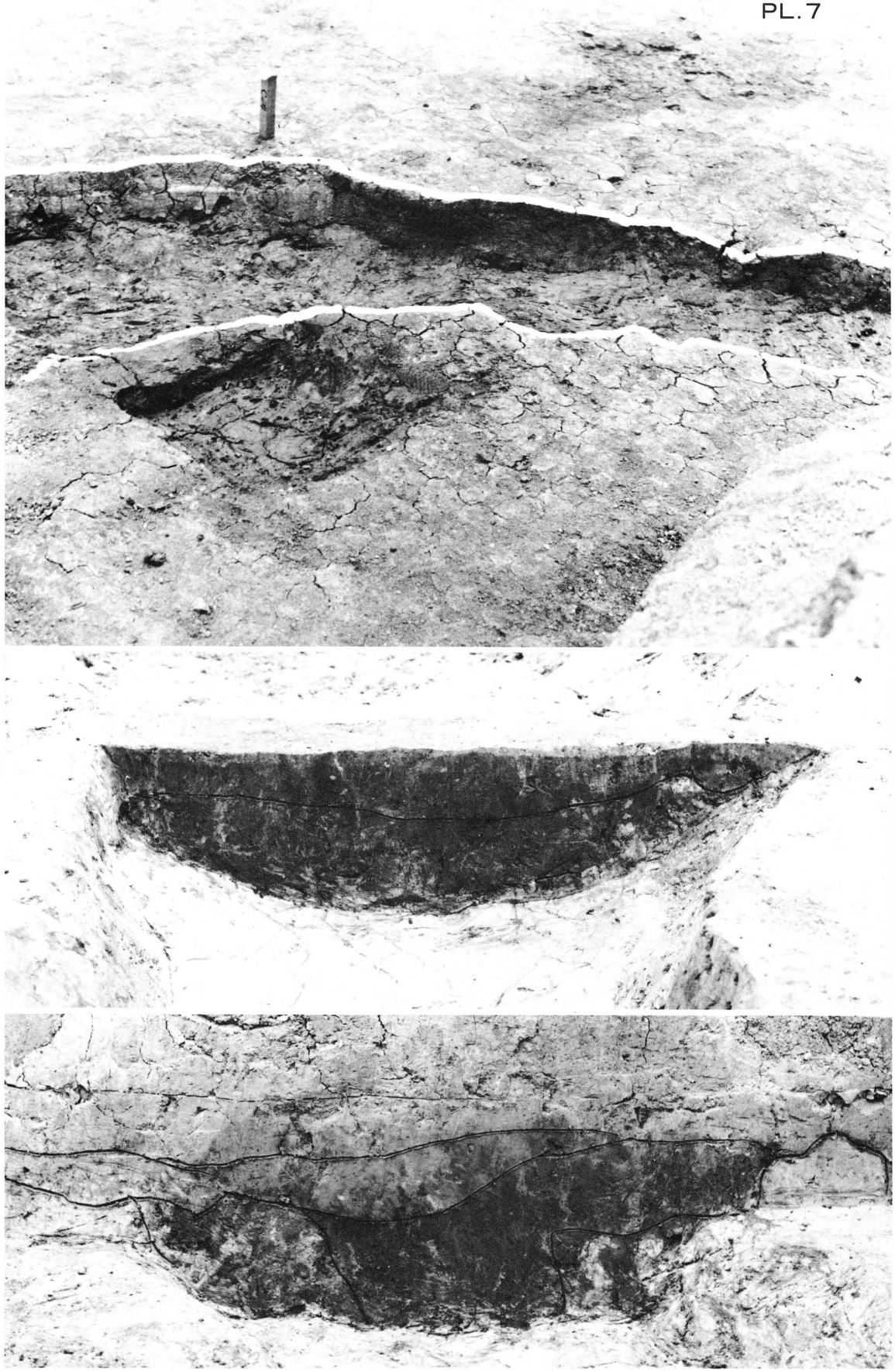
北側　垂直写真



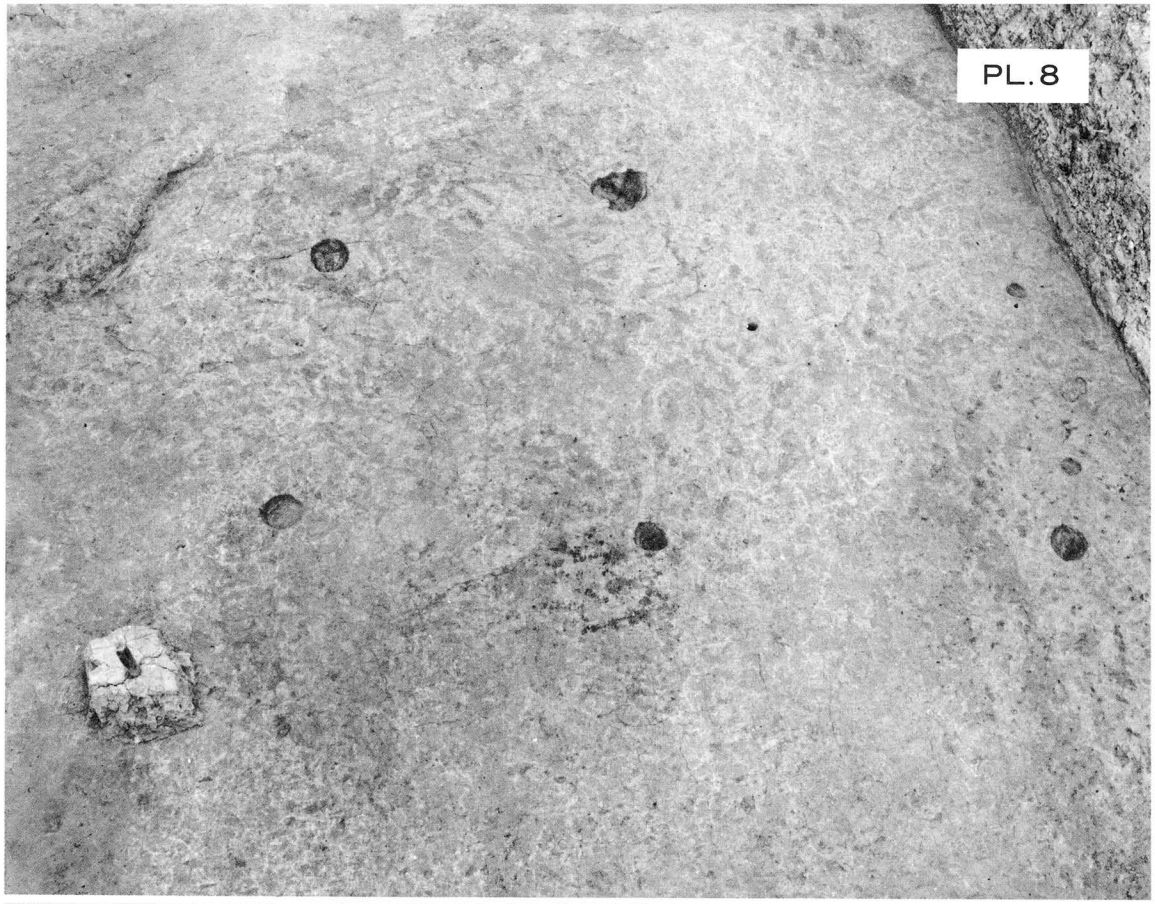
(上)条里制遺構畦畔断面南壁　　(下)同西壁面

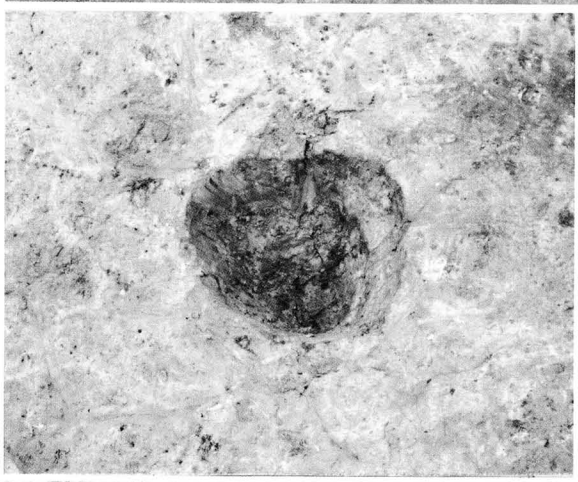


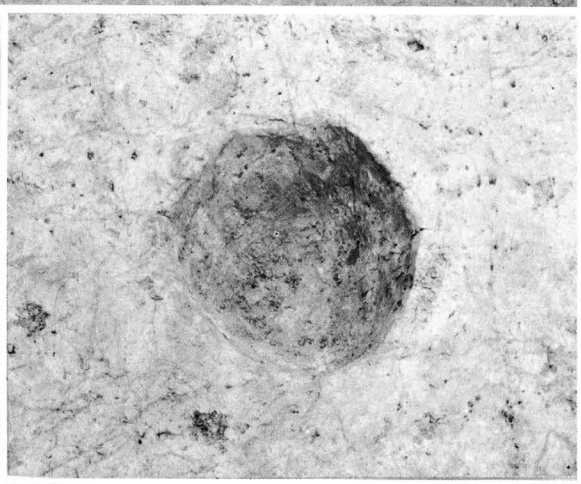
(上) S D 04　　(下) S D 06



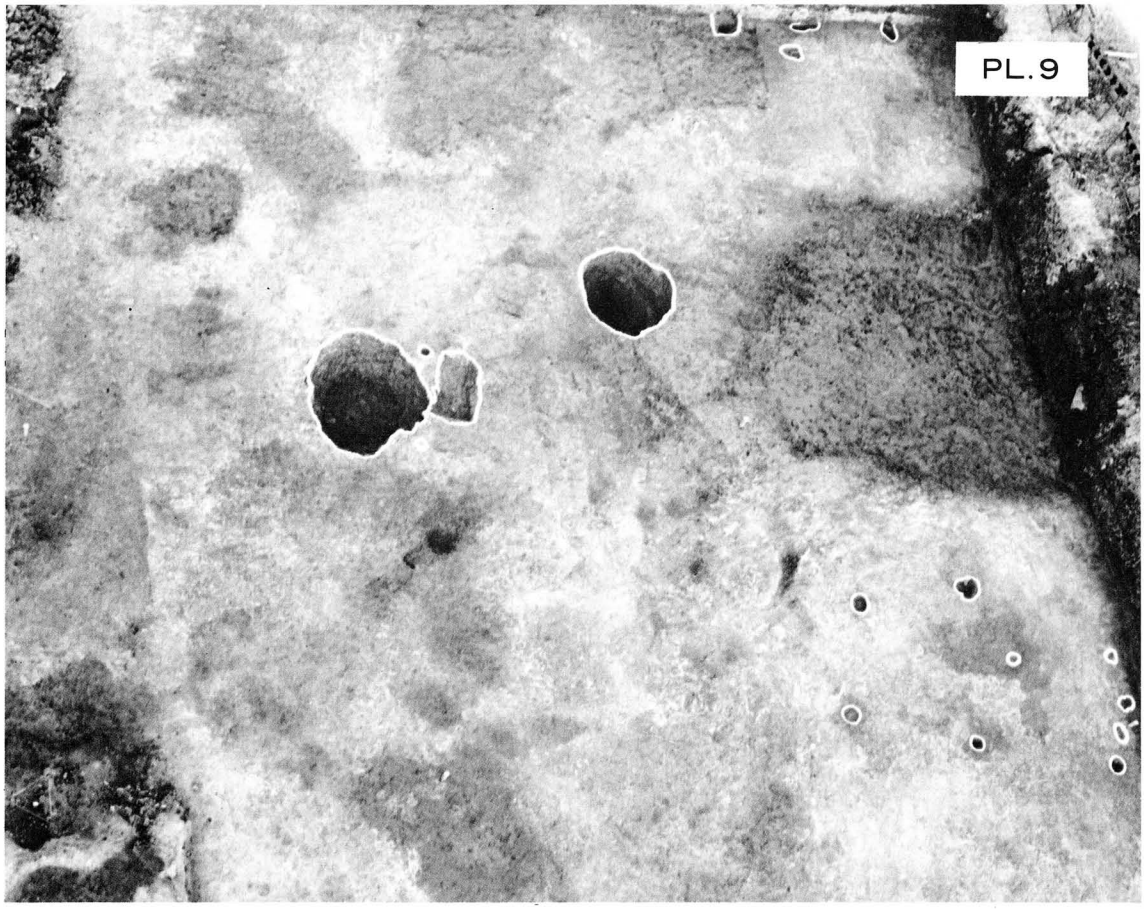
(上) S D05　　(中・下) S D05 断面

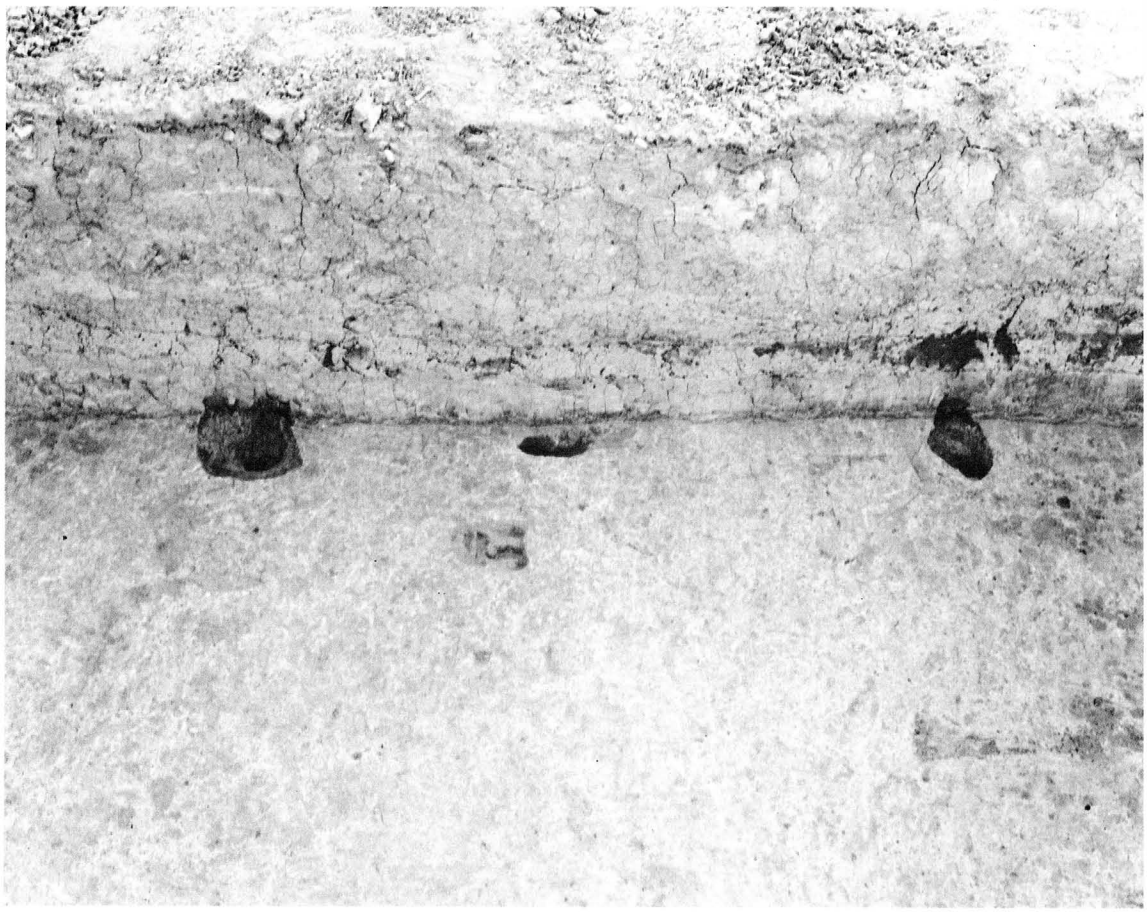




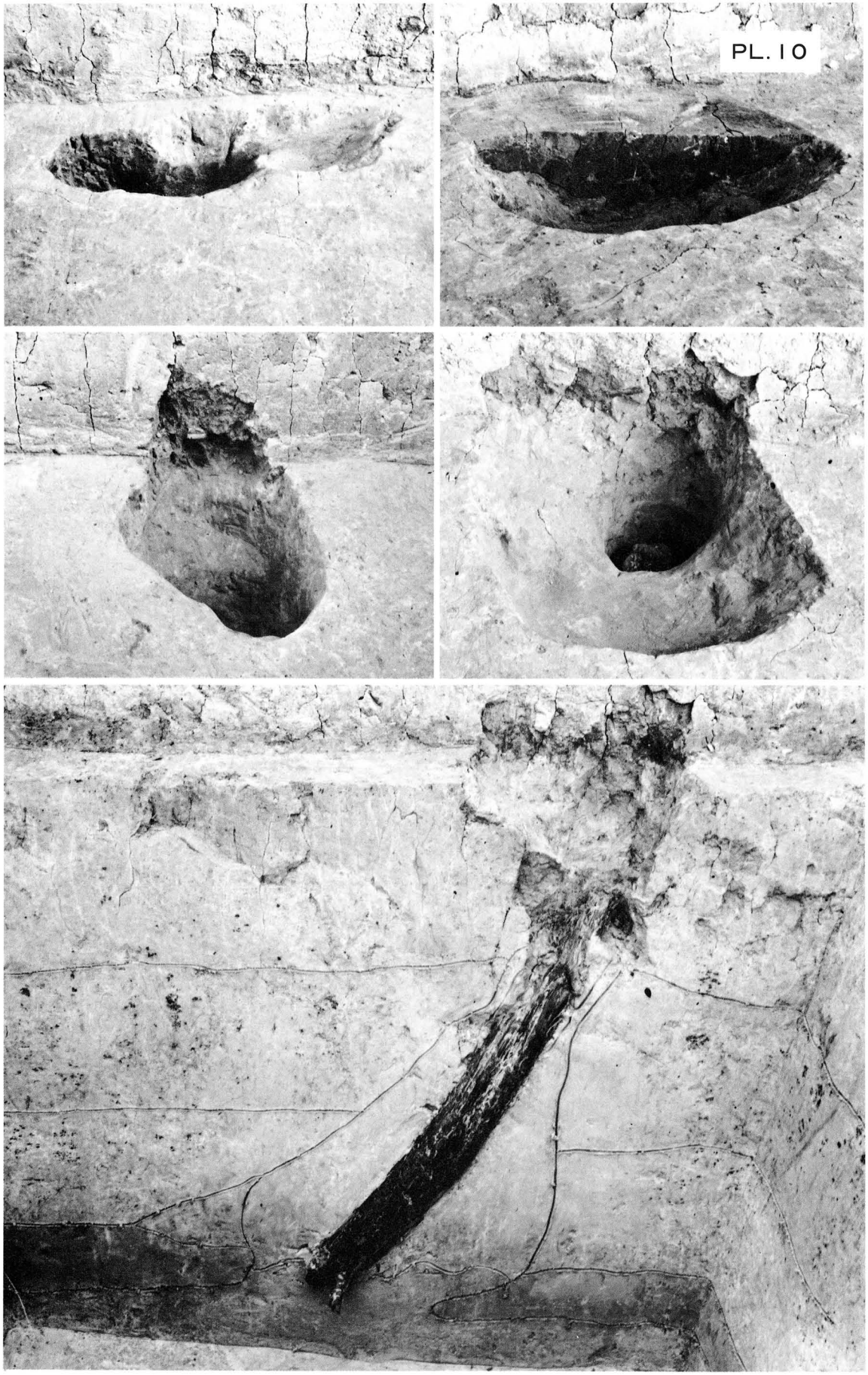


(上) S B 01・西から　　(中) P－2・P－3　　(下) P－4・P－5

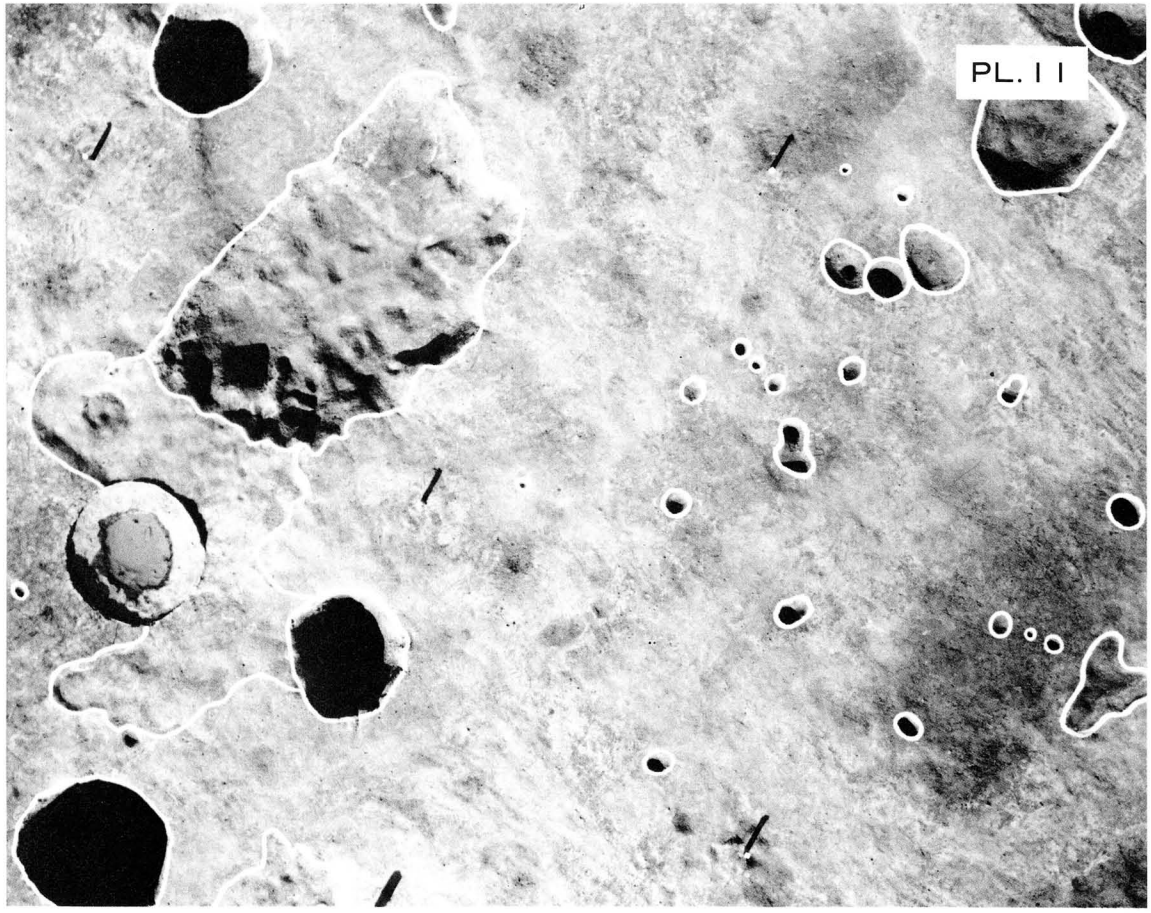


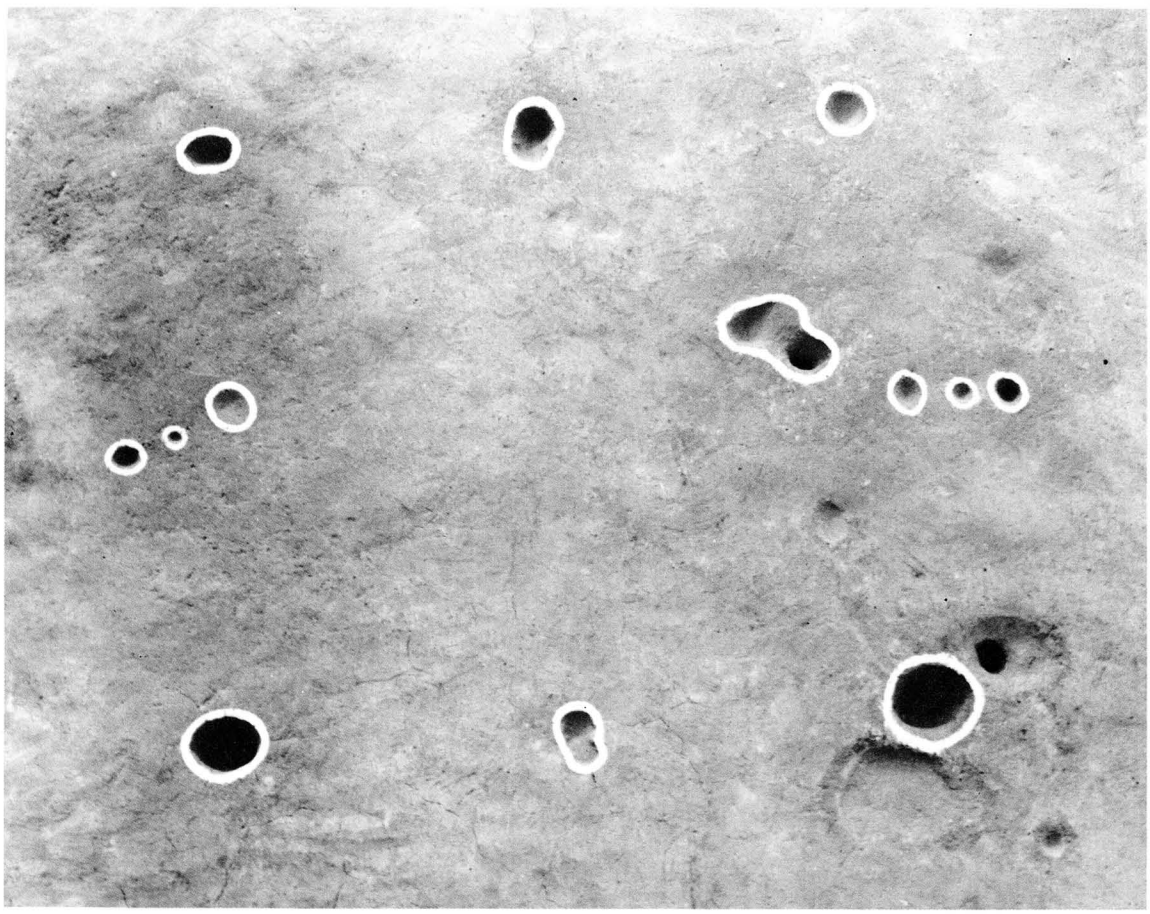


(上)ＳＢ01・02、ＳＥ17　　(下)ＳＢ02・西から

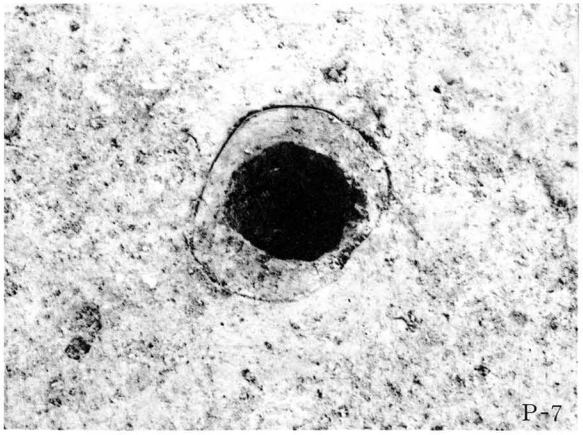


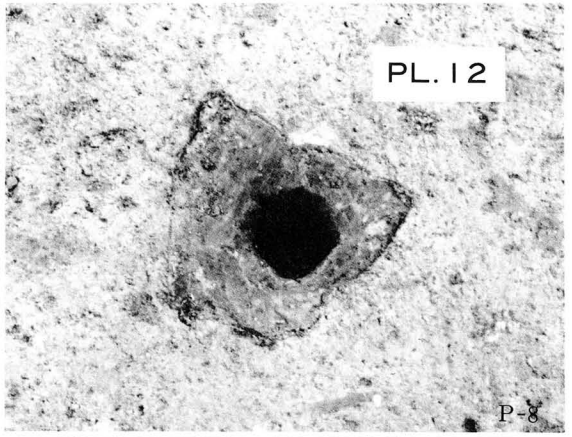
(上)左 SB02・P-2、右 P-1　　(中)P-4、P-1　　(下)P-1 柱痕検出状態

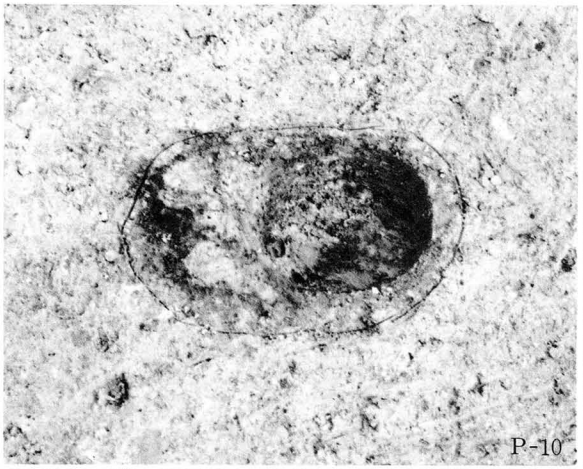


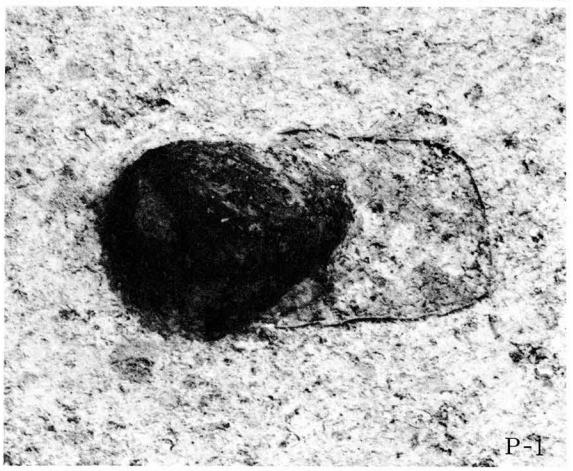


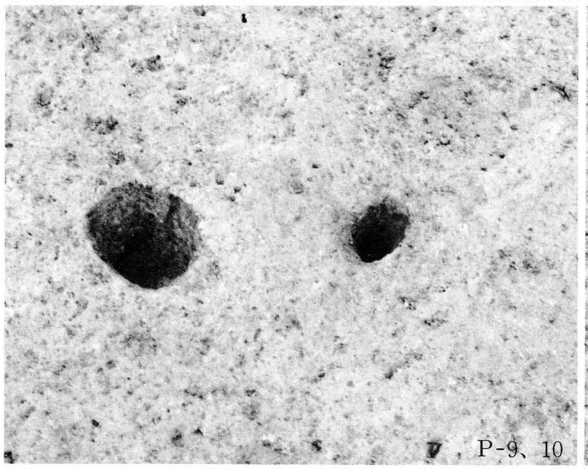
(上) SB03と付近　　(下) SB03

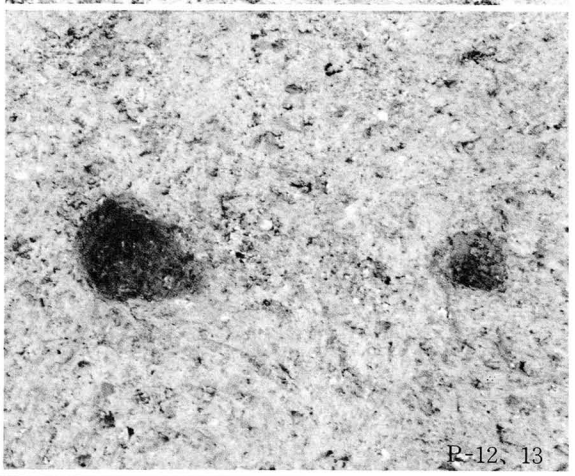

P-7

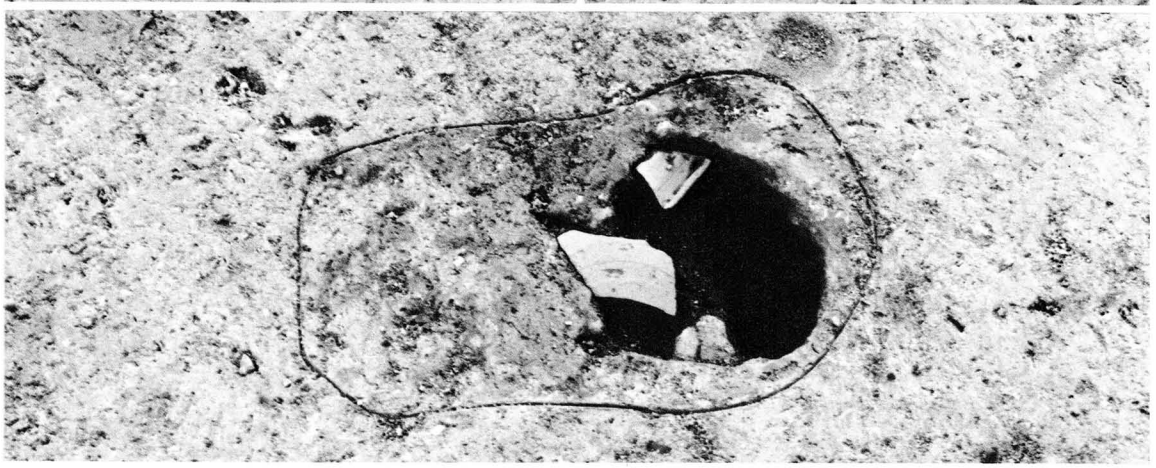

P-8


P-10

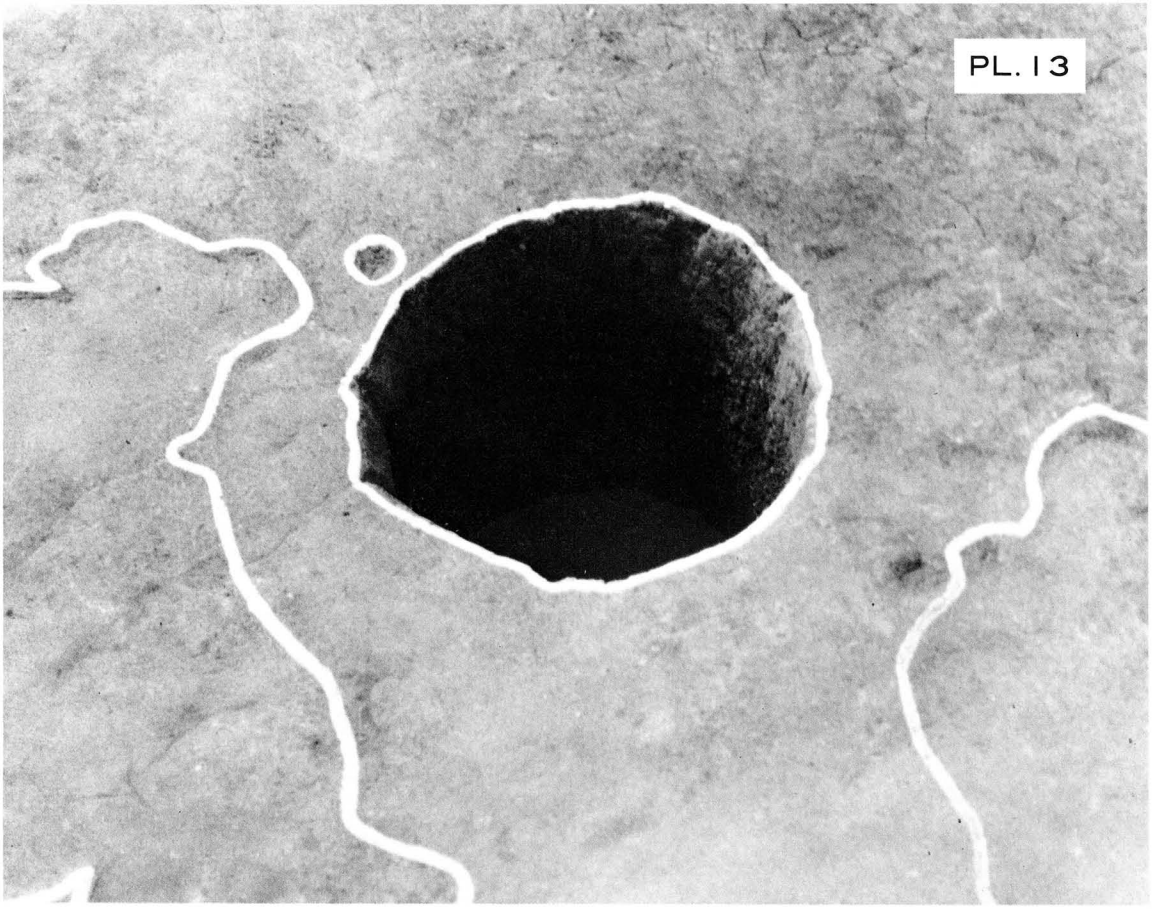

P-1


P-9、10

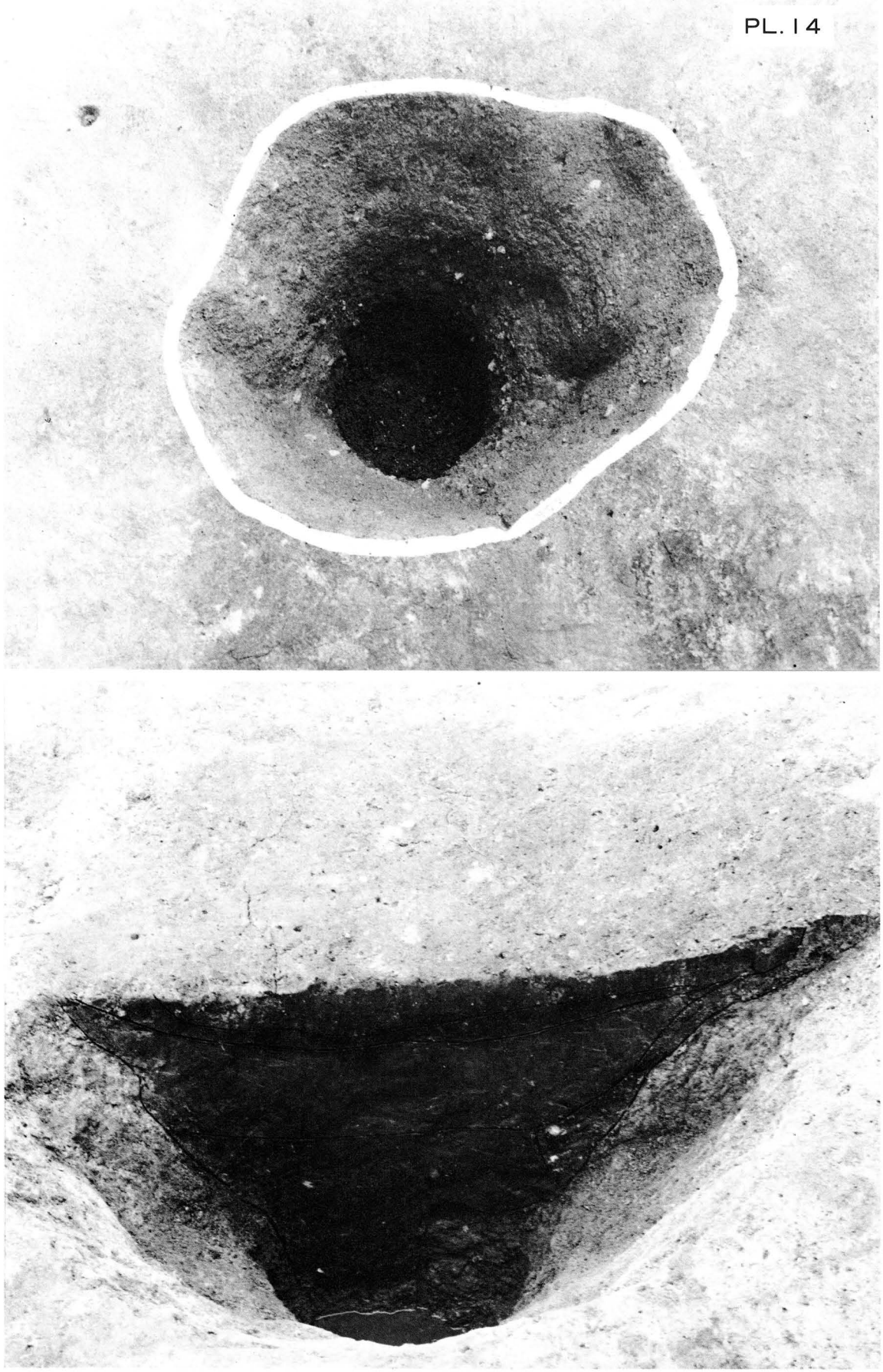

P-12、13



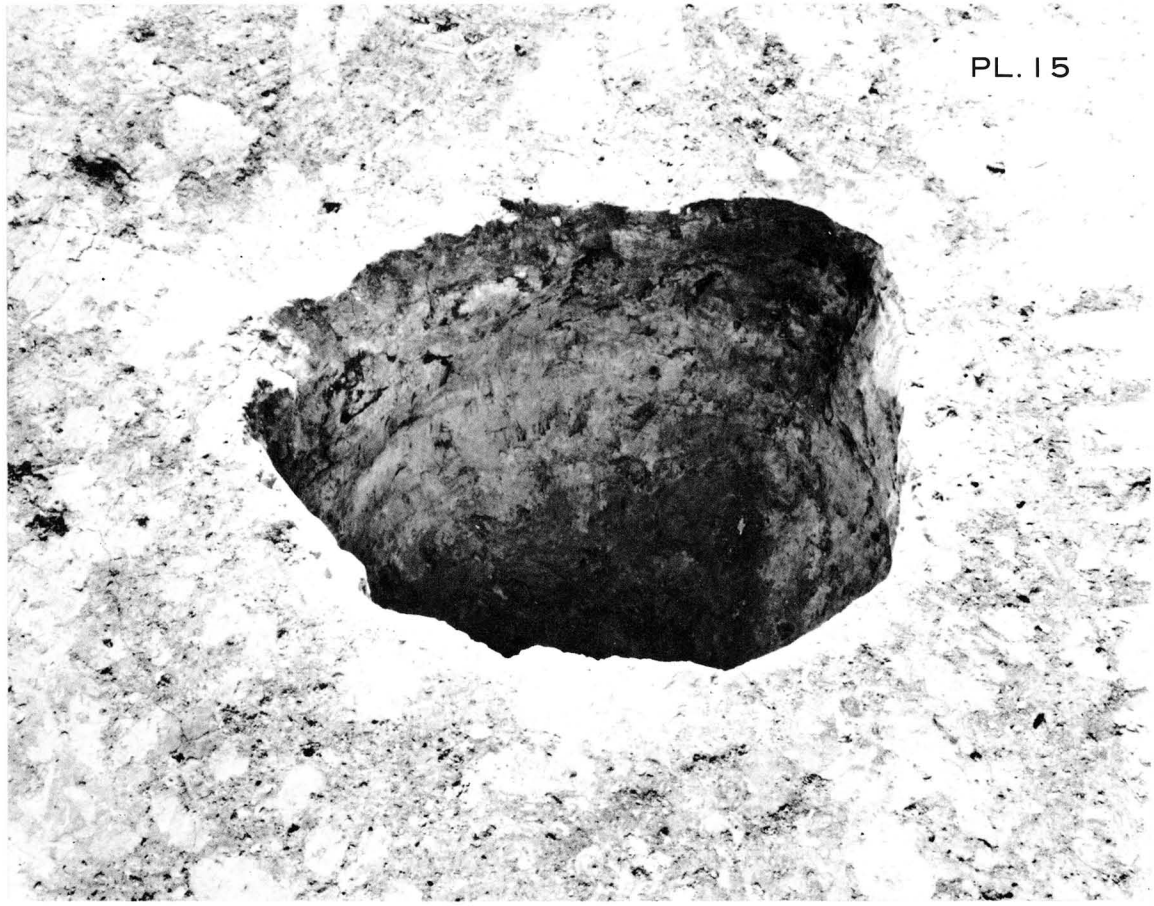
(上) S B03 各柱穴　　(下) P - 8　柱穴内遺物出土状態

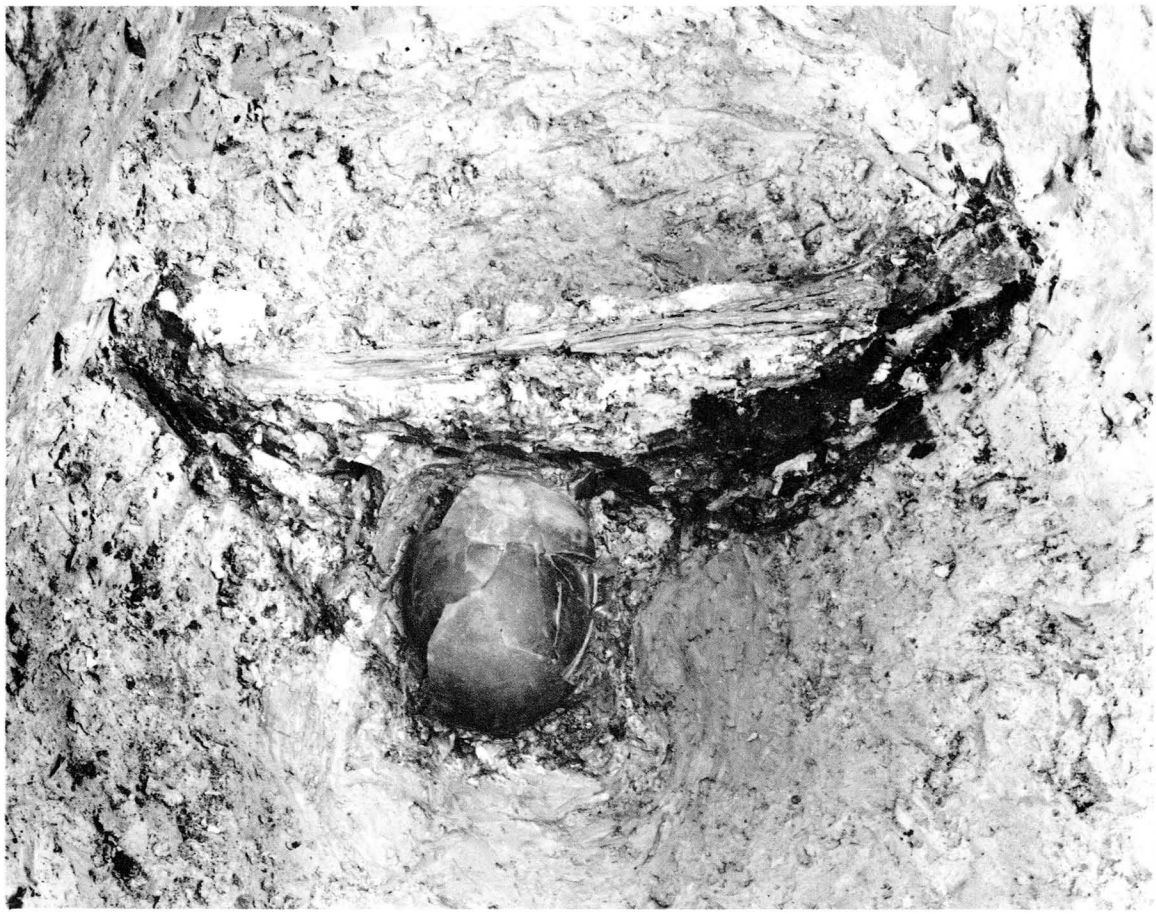


(上) S E 08 上面　　(下) S E 08 断面

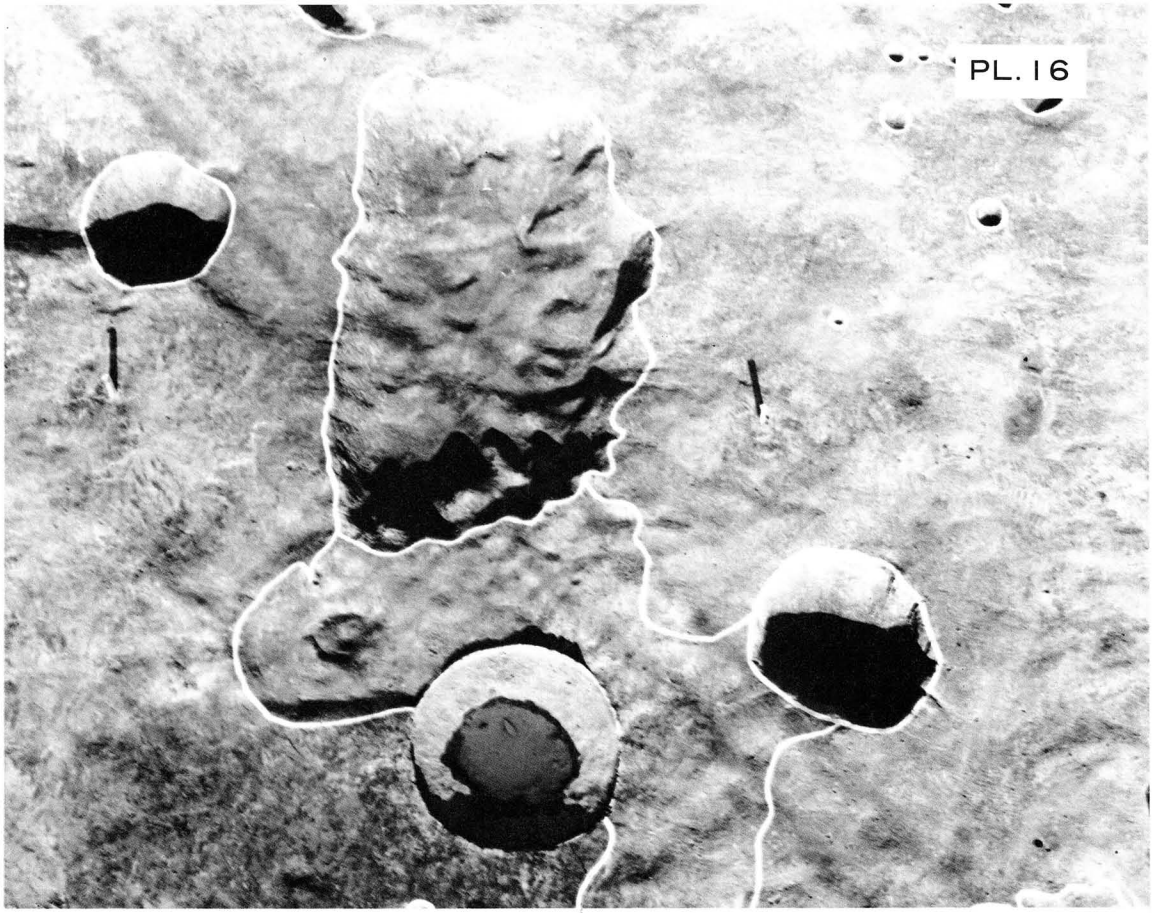


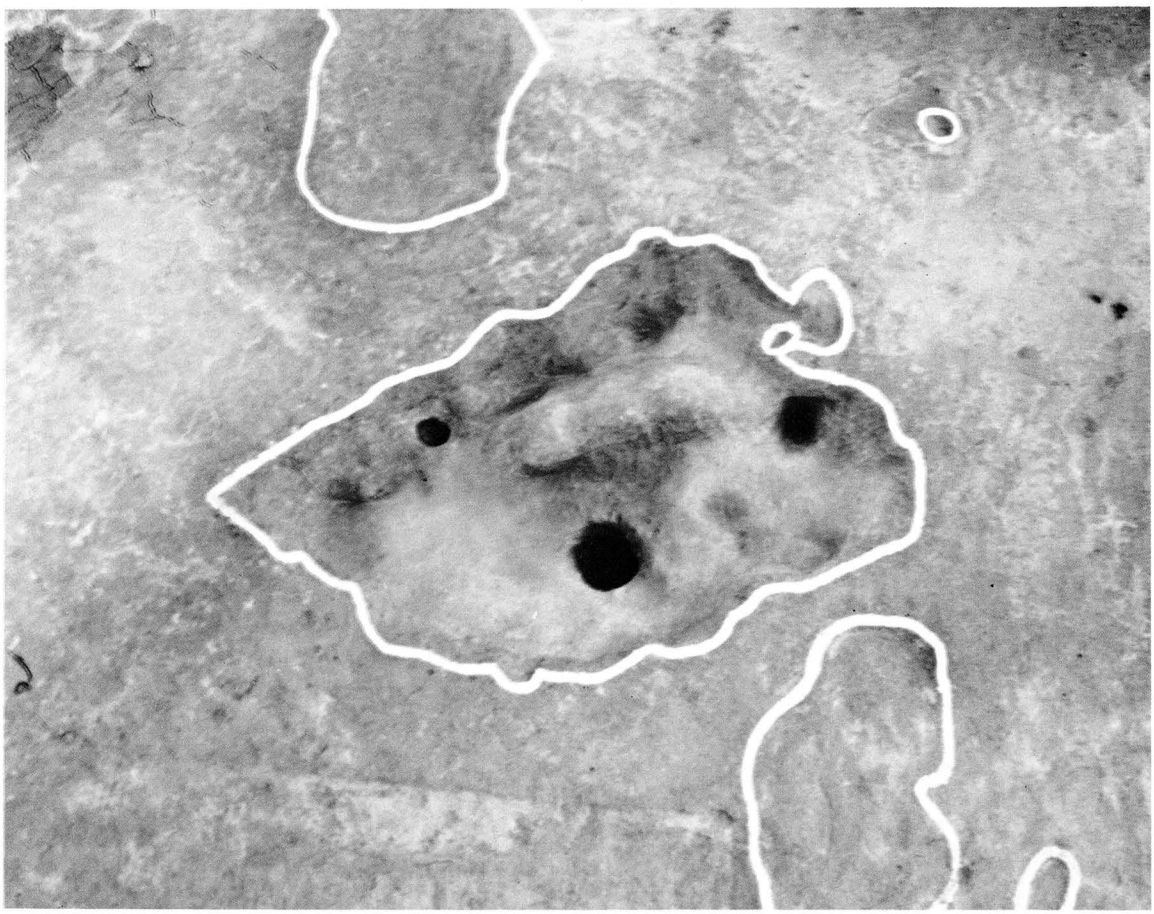
(上) S E09 上面　　(下) S E 09 断面



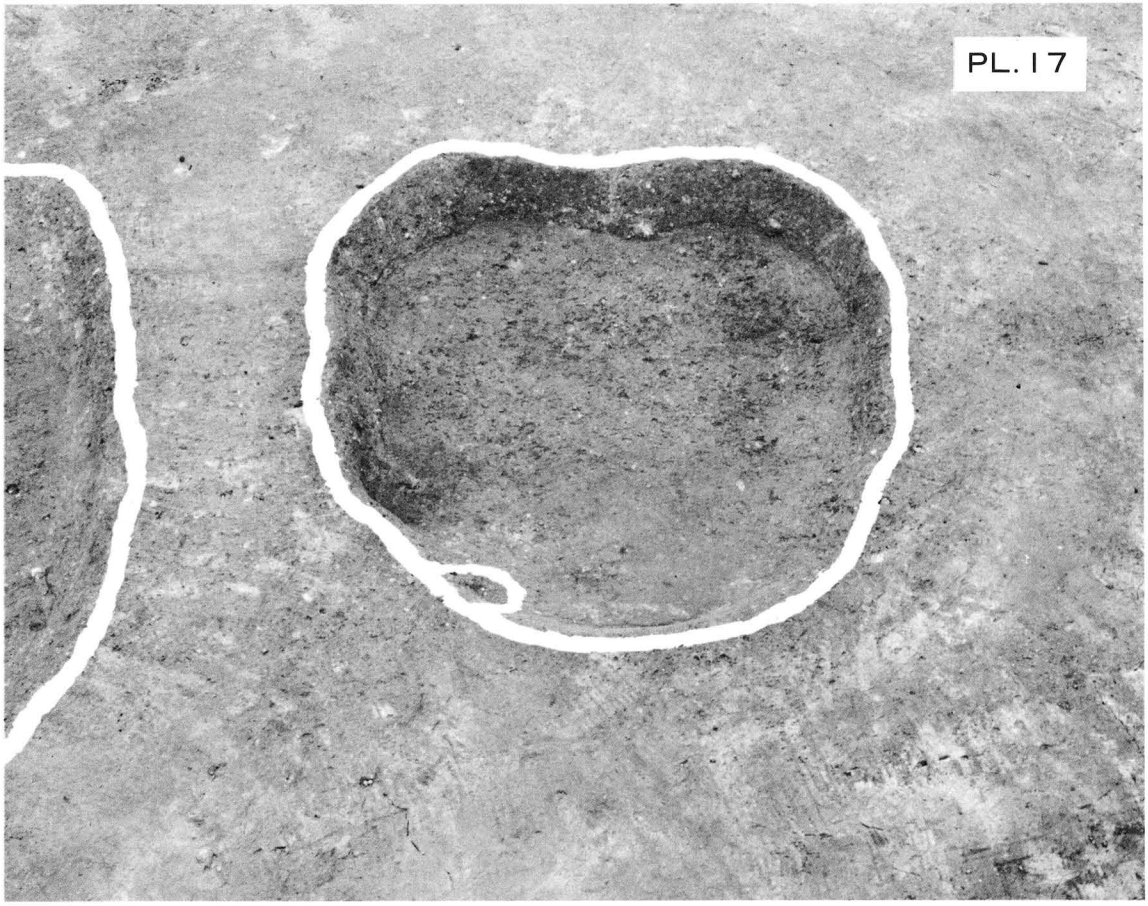


(上) S E17 上面　　(下) S E17 遺物出土状態

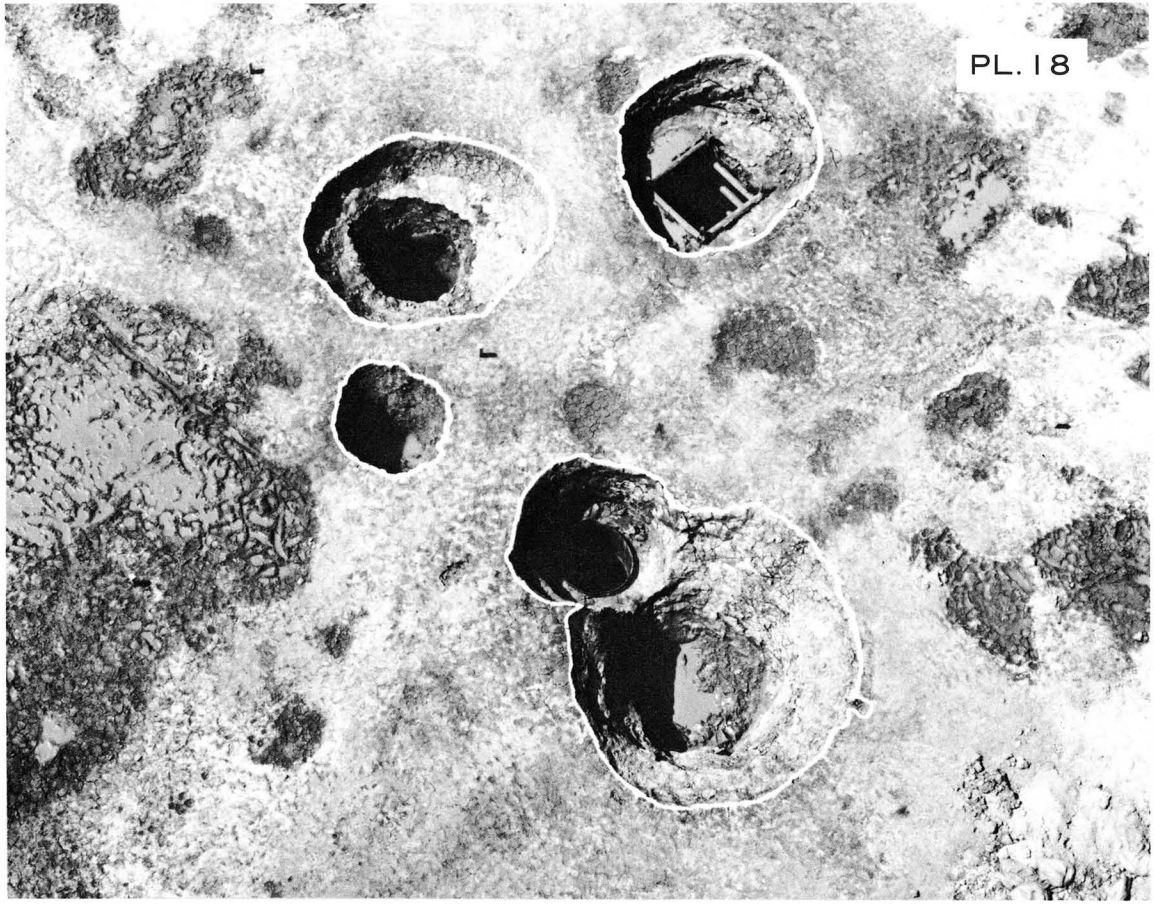




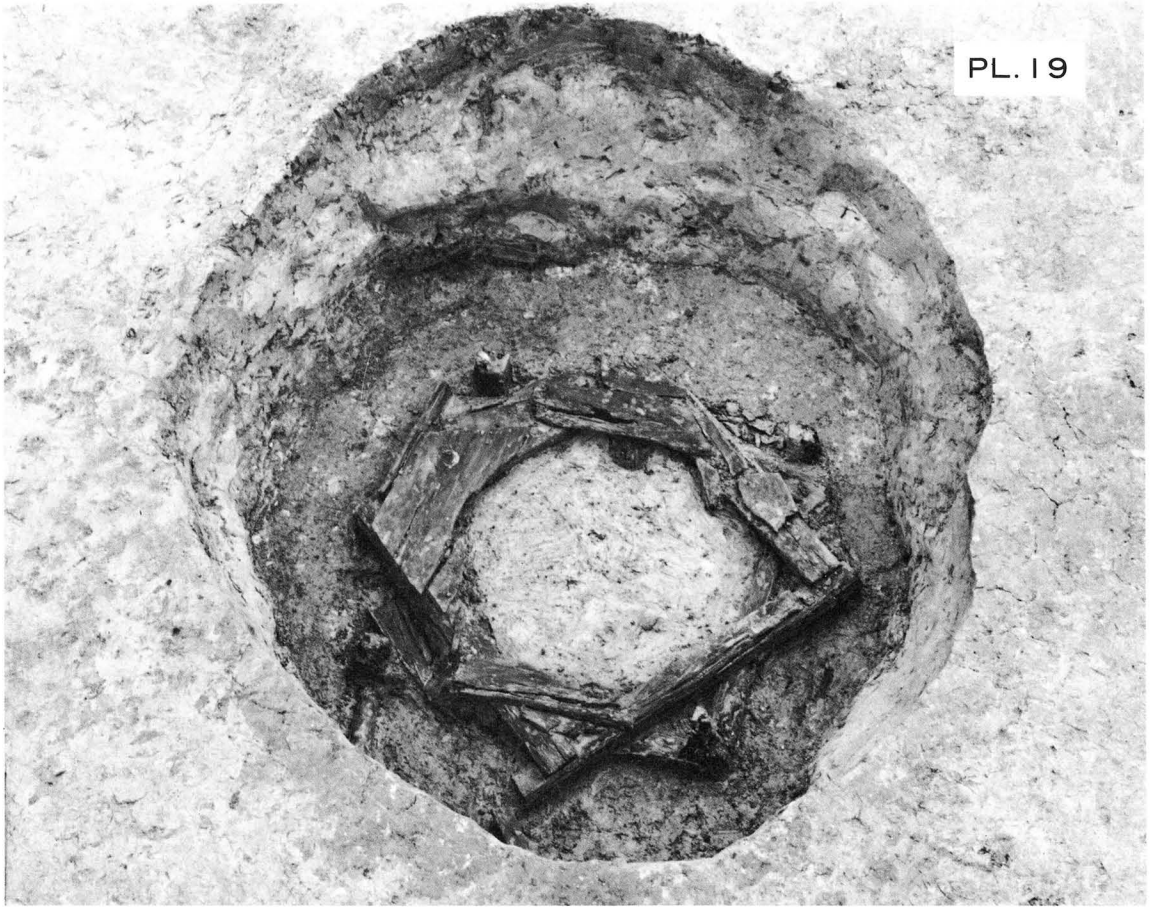
(上) S K53・S E08・09　　(下) S K73



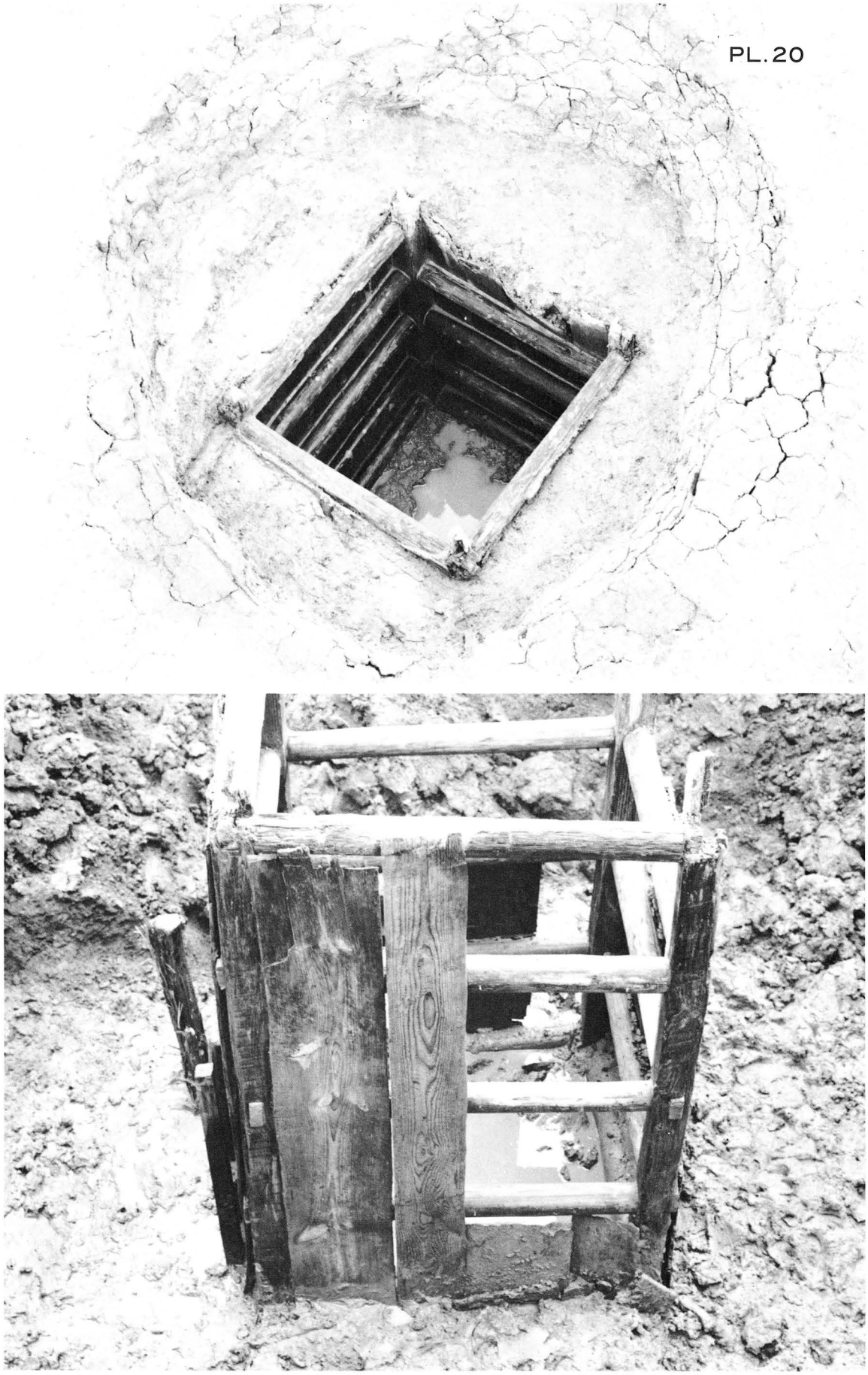
(上) S K 38 · 39　　(下) S K 40 · 41



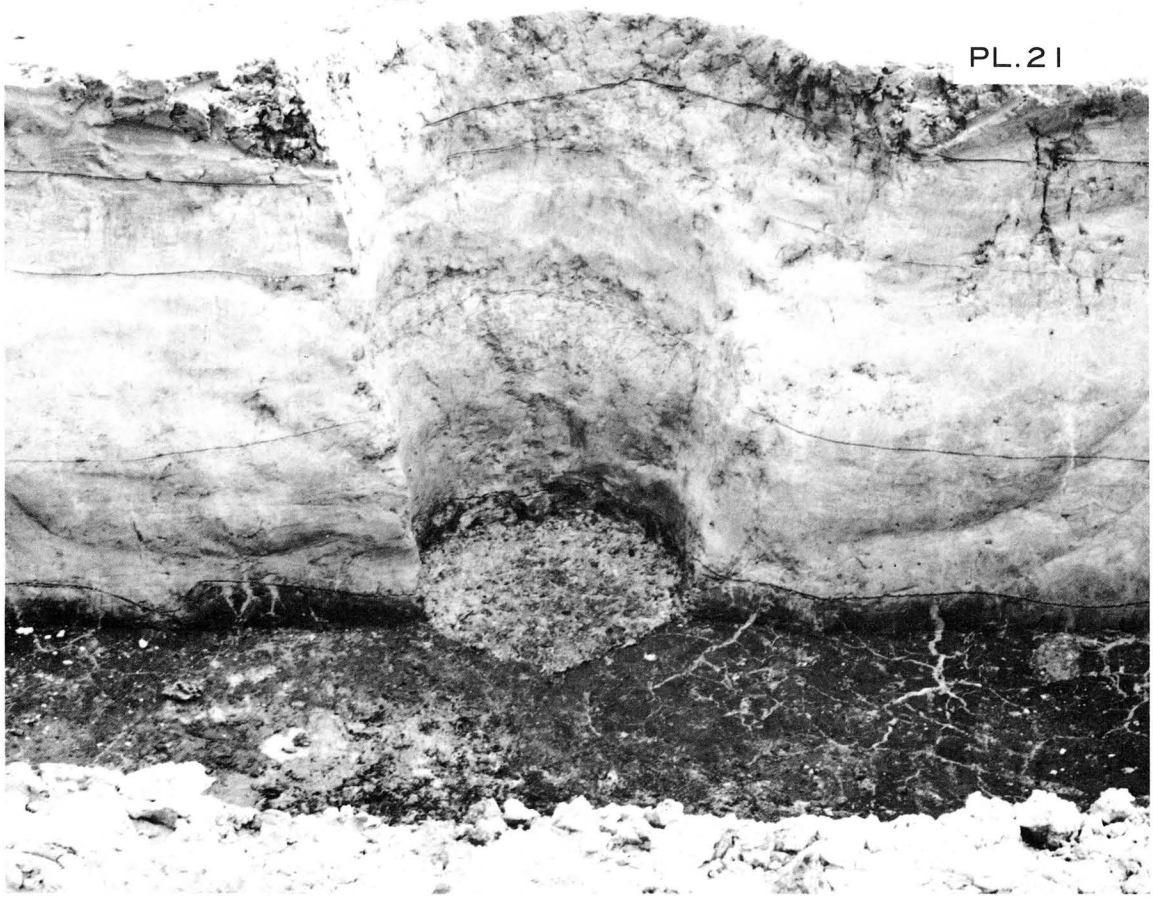
(上) S E 10・11・12・13・14　　(下) S E 13・14

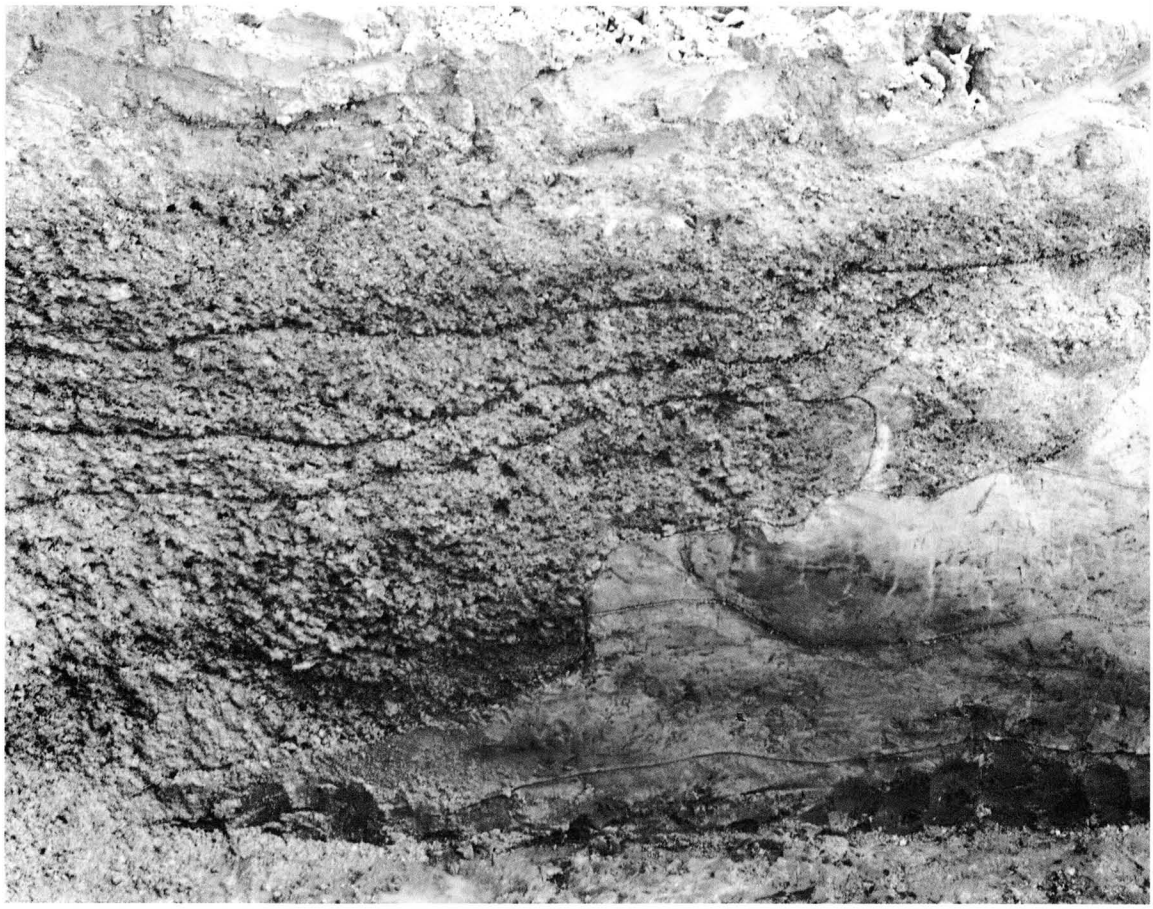


(上)ＳＥ11 上面写真　　(下)ＳＥ11 井戸枠

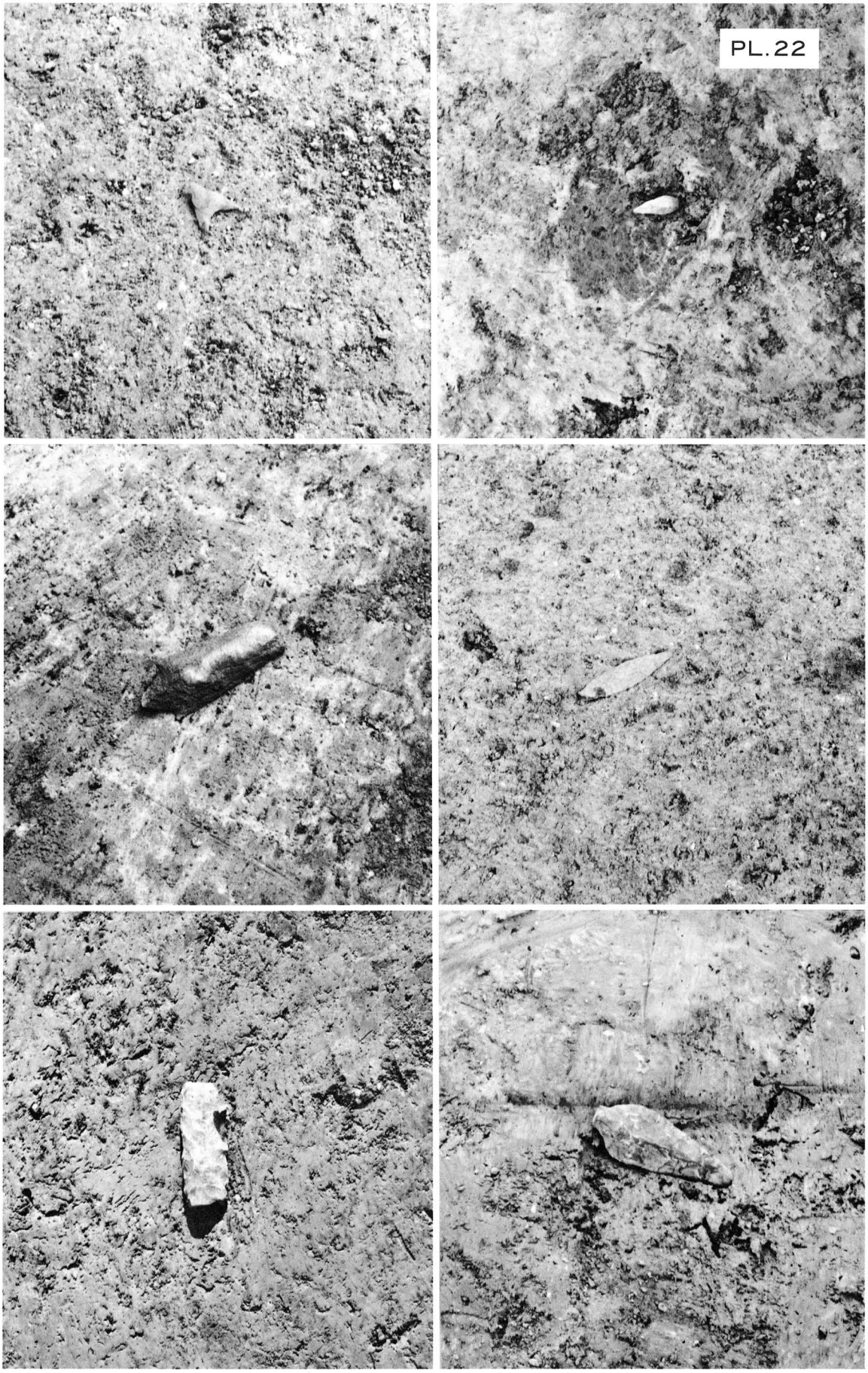


(上) ＳＥ11 井戸枠　　(下) ＳＥ11 井戸枠側板



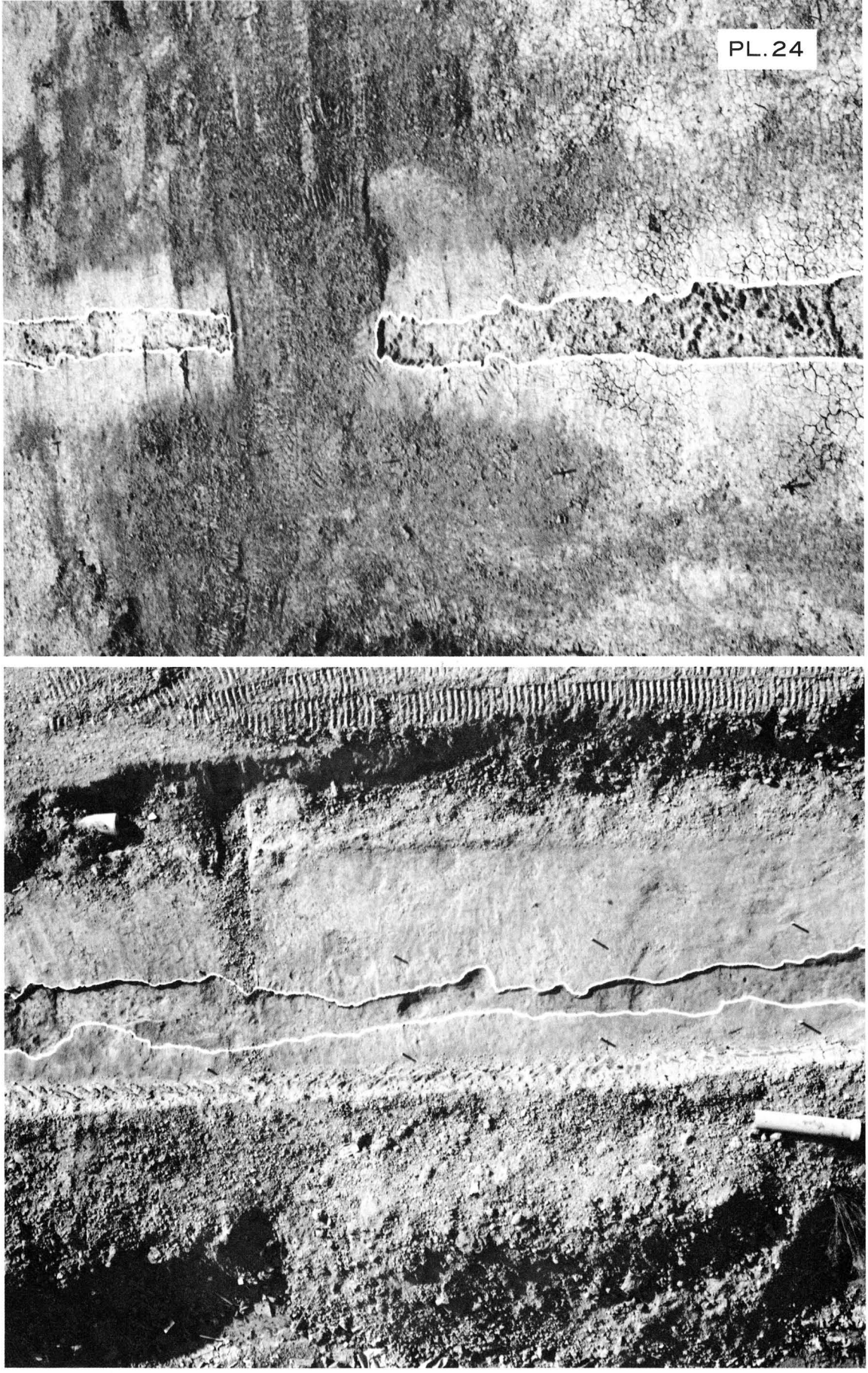


(上)ＳＥ06 立割　　(下)ＳＥ06 南側・地質

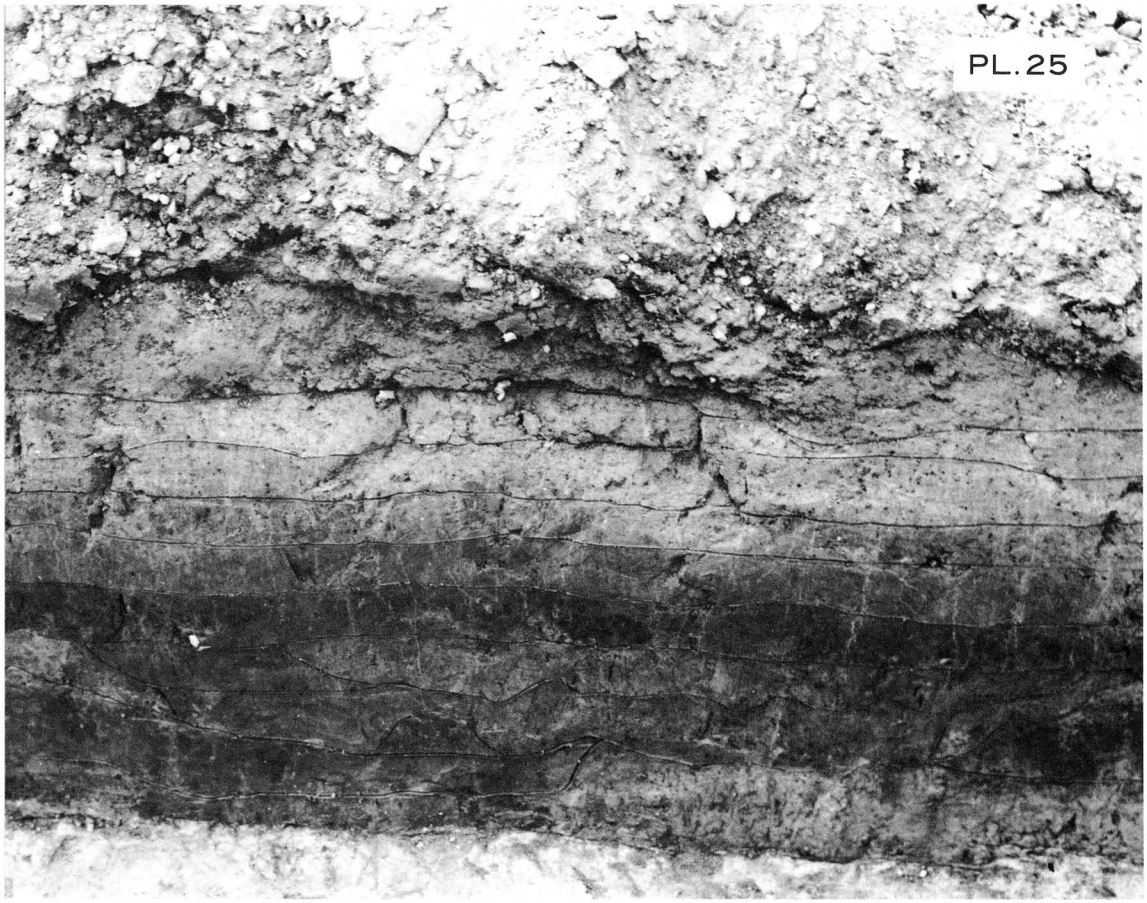


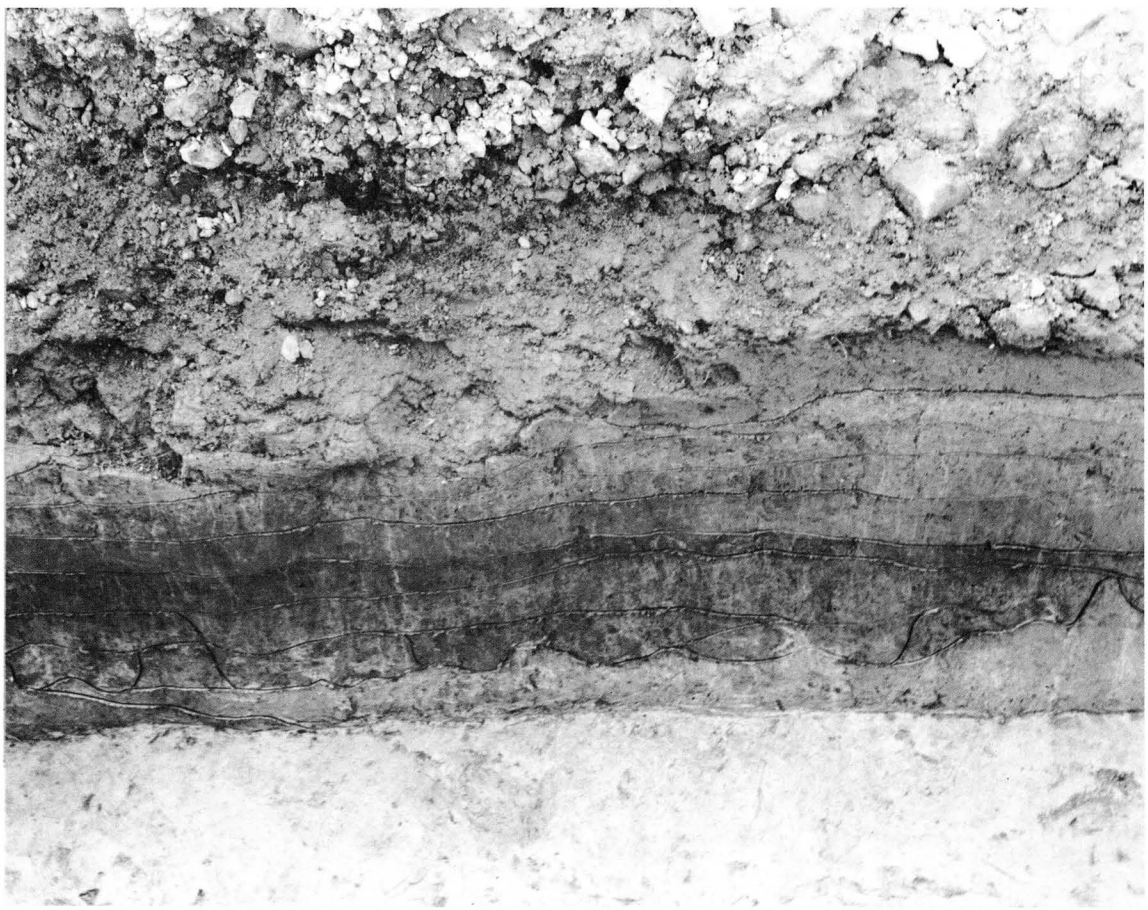
石製品遺物出土状態

難波大道検出状態（北から）

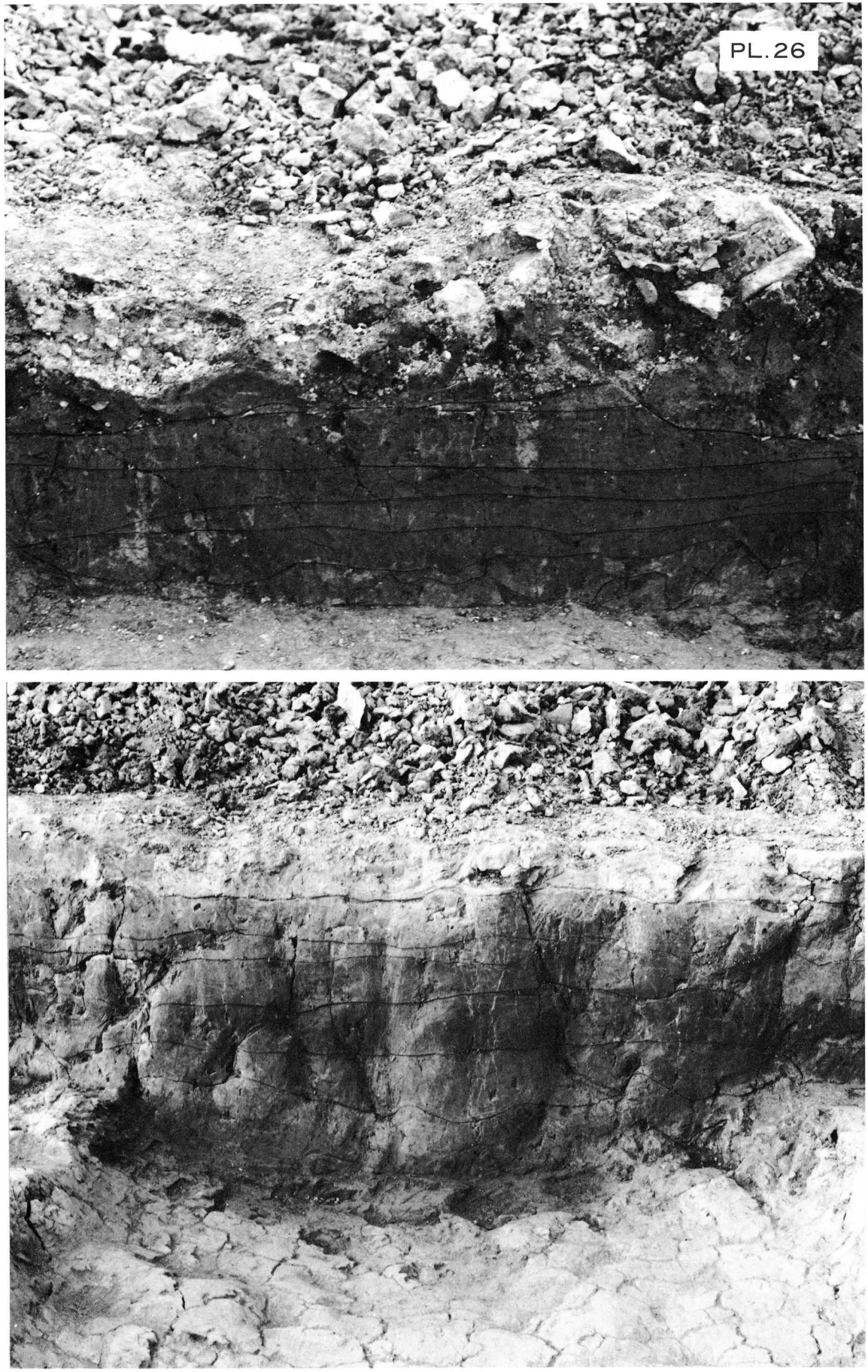


(上)難波大道西側溝　　(下)同東側溝



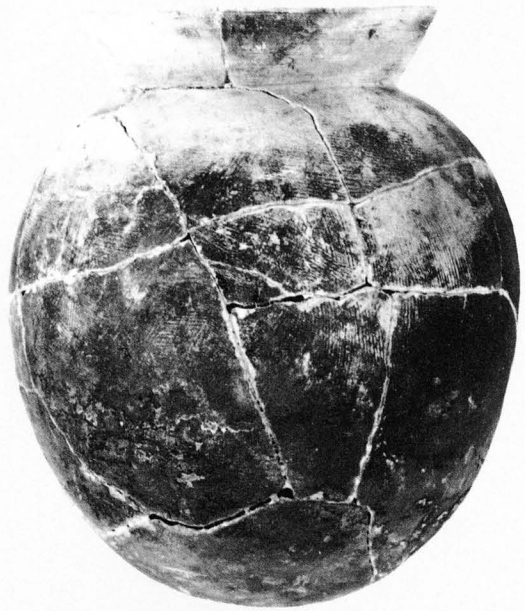


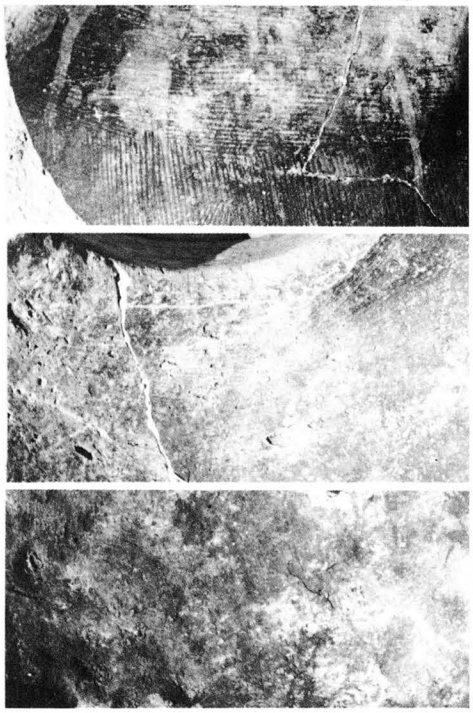
(上)難波大道東側溝・第3セクション　　(下)同第2セクション

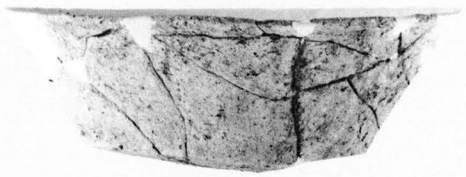


(上)難波大道西側溝南側断面　　(下)同北側断面

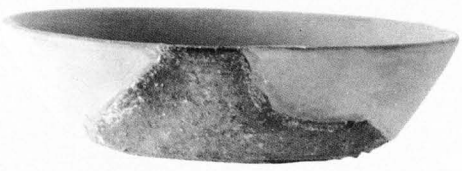
(上)難波大道東側溝出土須恵器　　(下)同東側溝付近出土石器



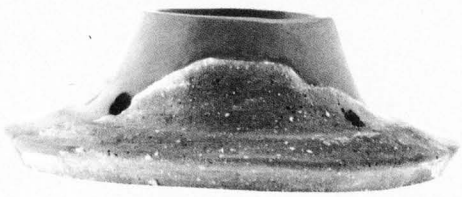




2



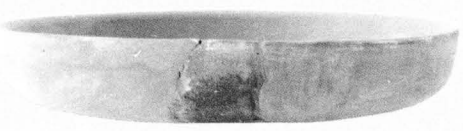
3



4

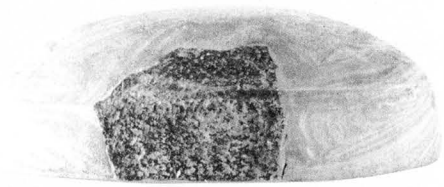
5

6

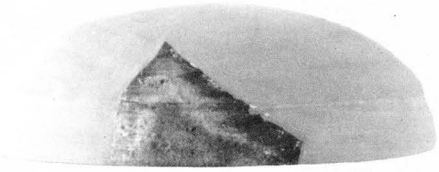


7

1・2-SE17　3-難波大道東側溝　4-SB03・P-8　5-陶磁器・10　6・7-土師器4・5



6

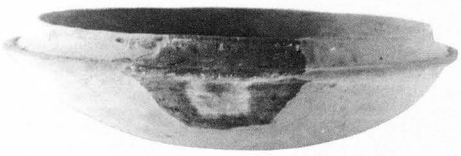


8

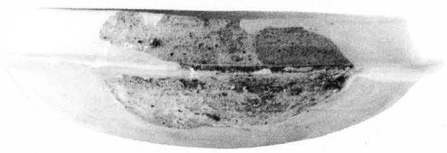
2

9

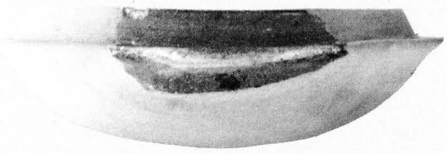
10



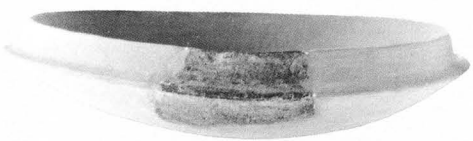
12



13



14



15

16

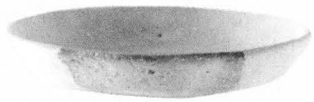
17

3

須恵器

1

2



3

4

5

6

8

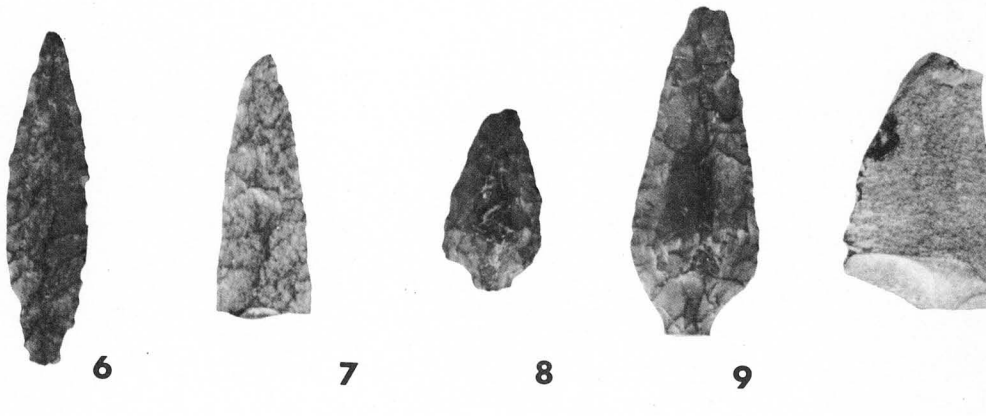
9

10

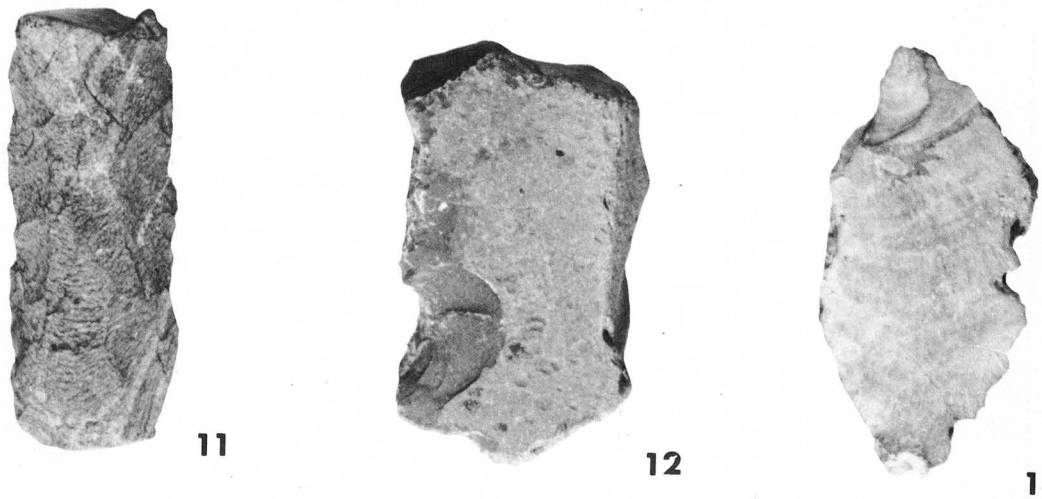
15

瓦器

1 2 3 4 5

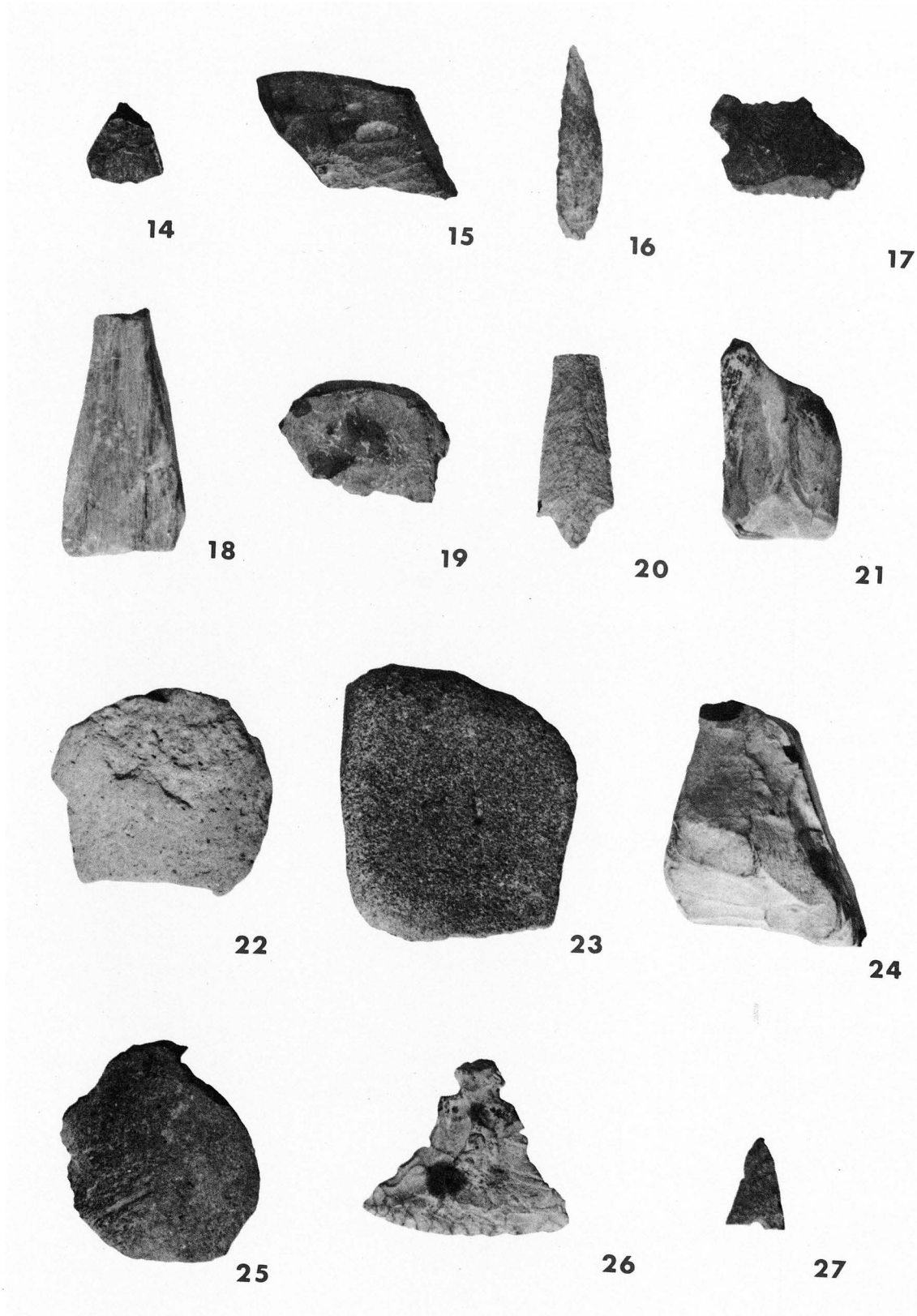


6 7 8 9 10



11 12 13

石製品（包含層出土）



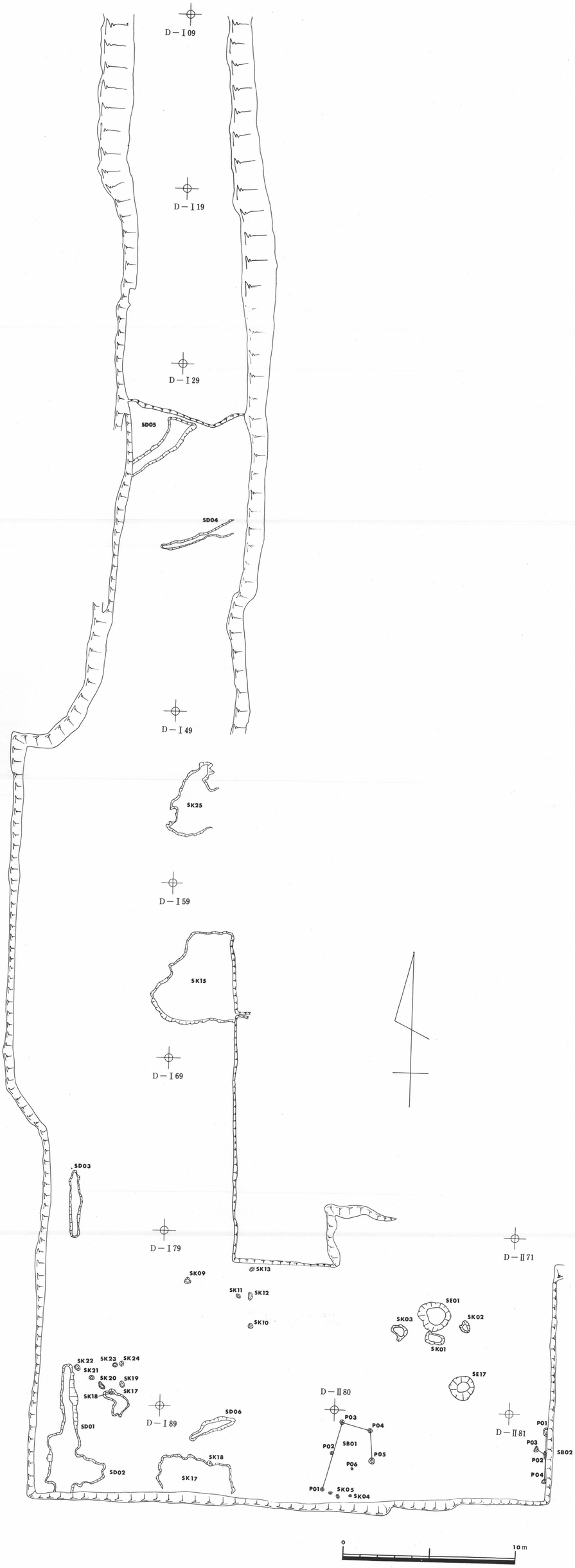
石製品（1～25包含層出土、26・27難波大道出土）

大和川・今池遺跡Ⅲ

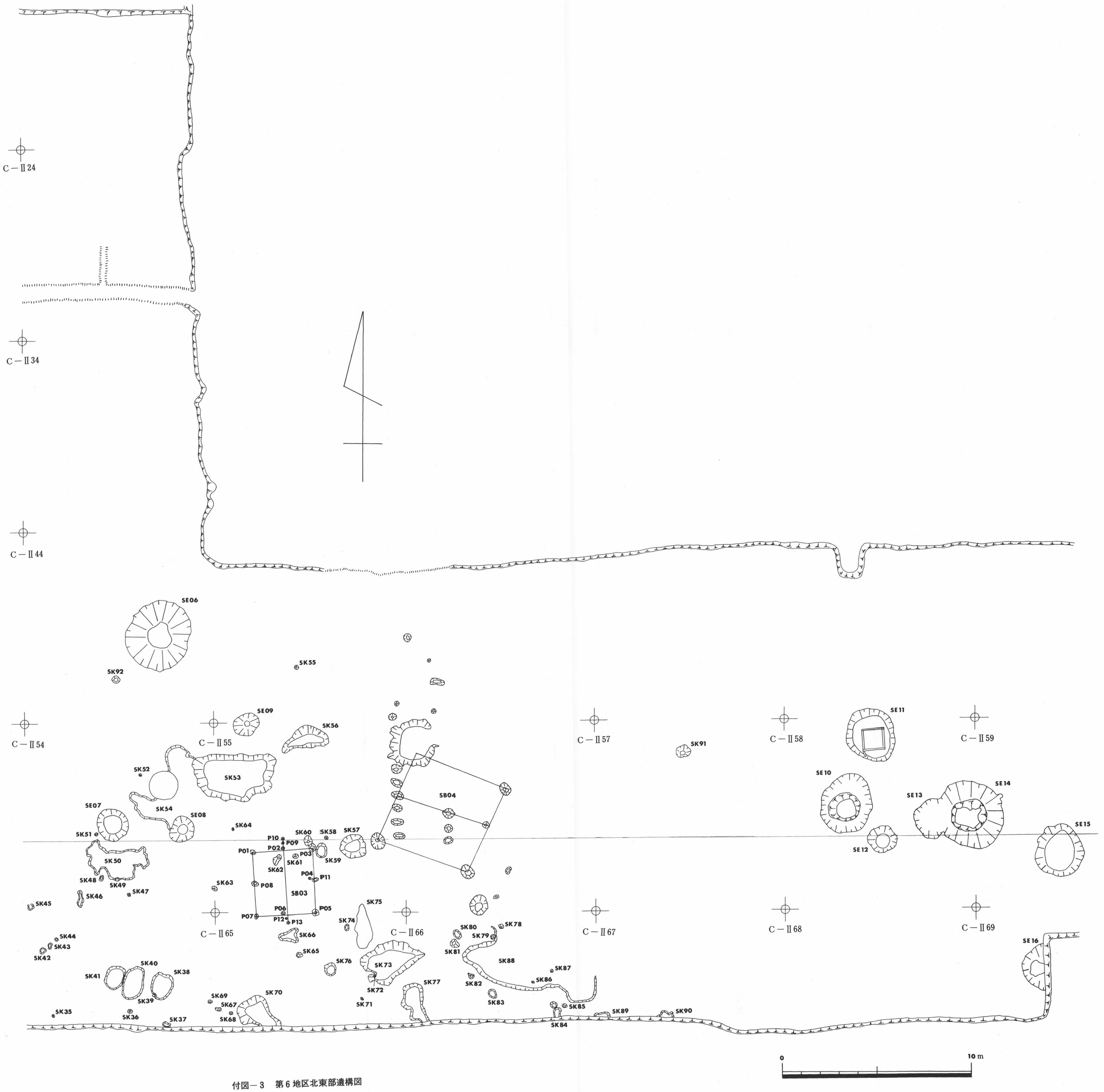
発掘調査報告書

発行日　昭和56年3月31日
発　行　大和川・今池遺跡調査会
住　所　松原市天美西町7丁目263の1
〒580 TEL 0723－36－9993
印　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所

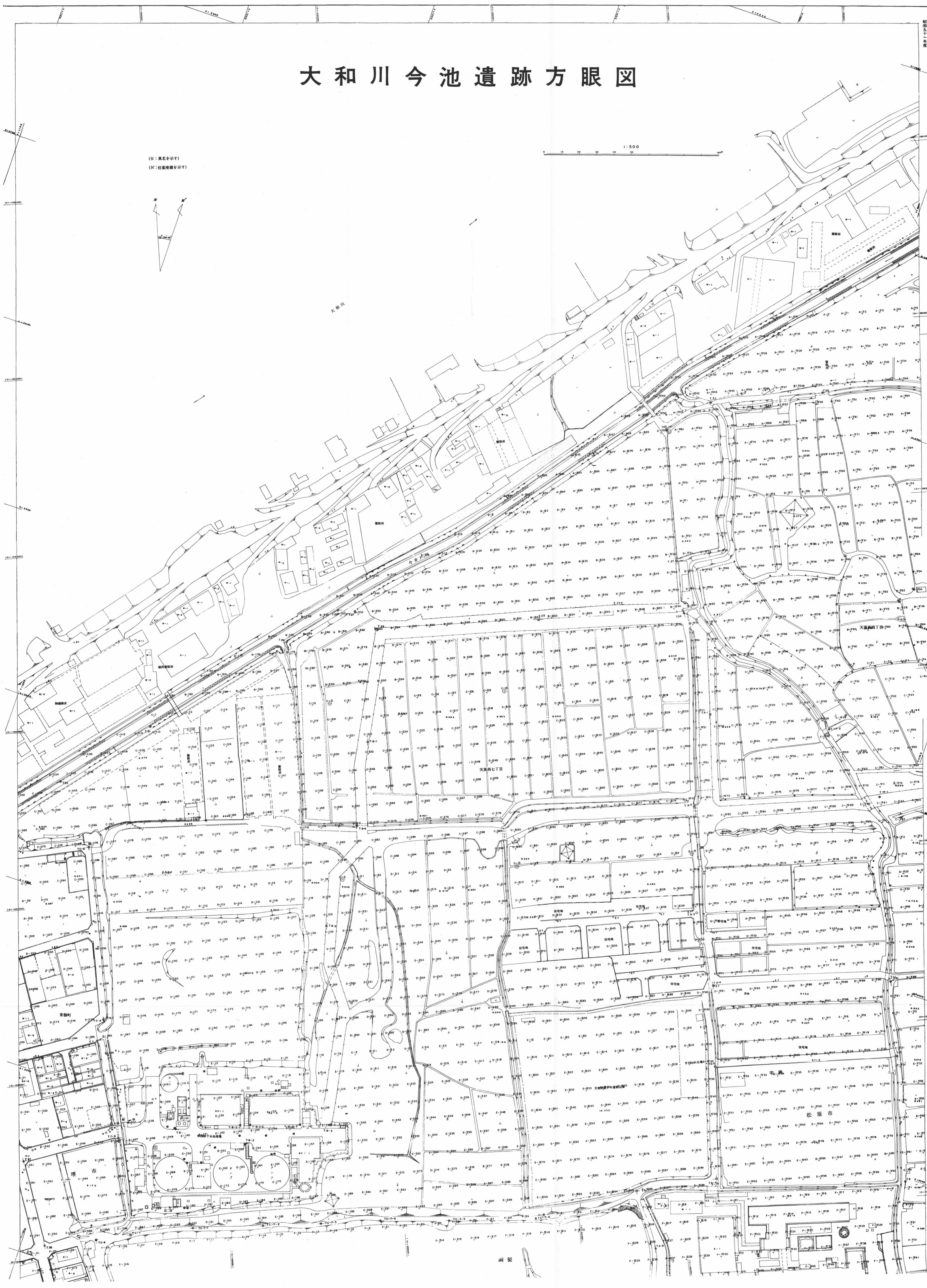
付図－1　Y1－6 北西部遺構配置図



付図－2　調査区遺構全体図



付図－3　第6地区北東部遺構図



付図―4　大和川・今池遺跡、地区設定基準図